

平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

前 中 西 遺 跡 II

2 0 0 2

埼玉県熊谷市教育委員会

平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

^{まえ}前 ^{なか}中 ^{にし}西 ^い遺 ^{せき}跡 II

2002

埼玉県熊谷市教育委員会



第3号住居跡出土遺物



第9号住居跡出土遺物



第2号土器棺墓・出土遺物



第3号土器棺墓・出土遺物

序

私たちの郷土熊谷には、原始・古代の集落や中世の館跡等の埋蔵文化財が、数多く分布しております。

こうした埋蔵文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならないと考えております。

熊谷市では、市民が暮らしやすく、生活環境の豊かさを実感できる土地利用を図ることを目的に土地区画整理事業を進めております。上之土地区画整理事業もその一つであります。事業地内には事前の試掘調査により、原始・古代から中世に至るおびただしい遺跡が確認されており、遺跡の重要性に鑑みて関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりました。しかし、土地区画整理事業上やむを得ず計画等の変更ができない街路築造工事、調節池造成箇所等に関しては、記録保存の方策を講ずることとなりました。

本書は、平成8年度から平成9年度に実施された街路築造工事に伴う発掘調査の成果をまとめたものです。

今回報告いたします前中西遺跡の発掘調査では、弥生時代中期の土器棺墓や方形周溝墓等の墓跡、古墳時代中期の集落の様相、奈良時代の大型掘立柱建物跡など、当地域における集落の変遷、墓制の様相を考える上で貴重な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重されご理解、ご協力を賜りました熊谷市都市整備部都市計画課、土地区画整理上之事務所、並びに地元関係者には厚くお礼申し上げます。

平成14年2月

熊谷市教育委員会
教育長 飯塚誠一郎

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市中西四丁目2515番地1他に所在する前中西遺跡（埼玉県遺跡番号59-107）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、熊谷市都市計画事業上之土地地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。
- 3 本事業の組織は、I章のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、平成8年9月17日～平成9年3月31日及び、平成9年11月4日～平成10年3月31日である。
整理・報告書作成期間は、平成13年4月6日～平成14年1月31日である。
- 5 発掘調査の担当は、熊谷市教育委員会権田宣行（現熊谷市文化創造館さくらめいと）が、整理報告書作成事業は、吉野 健が担当した。
- 6 本書の執筆は、吉野が担当し、小野寺弘光の補助を得た。また、石器の実測・トレースについては加藤隆則の補助を得た。
- 7 写真撮影は、発掘調査を権田が、遺物を吉野が主に行い小野寺の補助を得た。
- 8 出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。
- 9 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。

（敬称略）

磯崎 一、柿沼幹夫、小出輝雄、関 義則、吉田 稔、大里郡市文化財担当者会

凡 例

- 1 本文中、遺構の表記記号は、次のとおりである。

S A・・・掘立柱列、S B・・・掘立柱建物跡、S D・・・溝跡、S E・・・井戸跡、
S J・・・住居跡、S K・・・土坑、S R・・・方形周溝墓、S X・・・土器棺墓、P・・・ピット

- 2 各遺構の番号は、整理作業の段階で変更した。

- 3 遺構平面図・土層断面図中の表記記号は、次のとおりである。

P・・・土器、S・・・川原石、T・・・瓦

- 4 遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。

遺構全測図・・・1/800、住居跡・住居跡遺物分布図・掘立柱建物跡・掘立柱列・井戸跡・土坑・ピット・溝跡土層断面図・・・1/60、住居跡カマド土層断面図・・・1/40、方形周溝墓・溝跡平面図・・・1/120、土器棺墓・・・1/20、その他、遺跡位置図、周辺遺跡分布図等は、その都度スケール脇に縮尺率を示した。

- 5 遺構平面図中の遺物番号は、遺物挿図中の遺物番号に一致する。

- 6 遺構土層断面図及びエレベーション図のポイントの標高は、その都度、ポイント脇に示した。また、原則として、同一図版・同一遺構の標高はAポイントに表記した。

- 7 遺物実測図の縮尺は、弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・土錘は1／4、瓦は1／5、弥生土器（拓影図・底部）・土偶・石器（石斧・磨石）・砥石は1／3、石鏃・玉類・紡錘車・刀子、その他特殊遺物は1／2とした。

- 8 遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。また、断面表現は、須恵器は黒塗り、灰釉陶器は 、それ以外の土師器、瓦等の遺物はすべて白抜きで示した。

スクリーントーン指示は、油煙は  で示し、その他についてはその都度示した。また、墨書は黒塗り、赤彩は赤塗りで示した。

- 9 遺物観察表の凡例は、次のとおりである。

法量の単位は、cm、gである。また、推定値は括弧付けで示した。

胎土は、土器に含まれる含有鉱物を以下の記号で示した。A・・・白色粒子、B・・・黒色粒子、C・・・赤色粒子、D・・・褐色粒子、E・・・赤褐色粒子、F・・・白色針状物質、G・・・長石、H・・・石英、I・・・白雲母、J・・・黒雲母、K・・・角閃石、L・・・片岩、M・・・砂粒、N・・・礫

色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1997年版）に照らし最も近似した色相を示した。

焼成は、次のように区分した。A・・・良好、B・・・やや良好、C・・・やや不良、D・・・不良

目 次

口 絵

序

例 言

凡 例

目 次

I 発掘調査の概要	1
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	1
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2
II 遺跡の立地と環境	4
III 遺跡の概要	12
1 調査の方法	12
2 検出された遺構と遺物	12

IV 遺構と遺物	12
1 竪穴住居跡	12
2 掘立柱建物跡	59
3 掘立柱列	70
4 方形周溝墓	71
5 土器棺墓	76
6 土坑	80
7 ピット	92
8 井戸跡	96
9 溝跡	96
10 遺構外出土遺物	111
V 調査のまとめ	118

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形	3	第19図 第9号住居跡	29
第2図 周辺遺跡分布図	6	第20図 第9号住居跡炭化材・焼土分布状況図	29
第3図 上之土地区画整理事業地内遺跡グリッド図	9	第21図 第9号住居跡遺物分布図	30
第4図 前中西遺跡位置図	9	第22図 第9号住居跡出土遺物(1)	31
第5図 前中西遺跡全測図	10	第23図 第9号住居跡出土遺物(2)	32
第6図 第1号住居跡	13	第24図 第10号住居跡	33
第7図 第1号住居跡出土遺物	14	第25図 第10号住居跡出土遺物(1)	34
第8図 第2号住居跡	15	第26図 第10号住居跡出土遺物(2)	35
第9図 第2号住居跡出土遺物	16	第27図 第11号住居跡・出土遺物	36
第10図 第3号住居跡・出土遺物(1)	17	第28図 第12号住居跡	37
第11図 第3号住居跡出土遺物(2)	18	第29図 第12号住居跡出土遺物(1)	38
第12図 第4号住居跡・出土遺物	20	第30図 第12号住居跡出土遺物(2)	39
第13図 第5号住居跡・出土遺物(1)	20	第31図 第13号住居跡・出土遺物	41
第14図 第5号住居跡出土遺物(2)	21	第32図 第14号住居跡・出土遺物	41
第15図 第6号住居跡・出土遺物	23	第33図 第15号住居跡・出土遺物	43
第16図 第7号住居跡・出土遺物	24	第34図 第16号住居跡	43
第17図 第8号住居跡・出土遺物(1)	26	第35図 第16号住居跡出土遺物	44
第18図 第8号住居跡出土遺物(2)	27	第36図 第17号住居跡	45

第37図	第17号住居跡出土遺物	46	第64図	第3号方形周溝墓出土遺物	75
第38図	第18号住居跡	47	第65図	第1号土器棺墓・出土遺物	77
第39図	第18号住居跡出土遺物	48	第66図	第2号土器棺墓・出土遺物	78
第40図	第19号住居跡・出土遺物	49	第67図	第3号土器棺墓・出土遺物	79
第41図	第20号住居跡	50	第68図	第1～11号土坑	81
第42図	第20号住居跡出土遺物	51	第69図	第12～22号土坑	82
第43図	第21号住居跡	52	第70図	第23～32号土坑	83
第44図	第21号住居跡出土遺物	53	第71図	第33～37号土坑	84
第45図	第22号住居跡・出土遺物	55	第72図	第3号土坑出土遺物(1)	86
第46図	第23号住居跡・出土遺物	56	第73図	第3号土坑出土遺物(2)	87
第47図	第24号住居跡・出土遺物	58	第74図	第3号土坑出土遺物(3)	88
第48図	第1号掘立柱建物跡	60	第75図	第4・8・14号土坑出土遺物	90
第49図	第2号掘立柱建物跡	60	第76図	第16・17・20・30・36号土坑出土遺物	91
第50図	第3号掘立柱建物跡	61	第77図	第1～29号ピット	93
第51図	第4号掘立柱建物跡	61	第78図	第30～55号ピット、 第30号ピット出土遺物	94
第52図	第5～8号掘立柱建物跡重複関係図・ 土層断面図(1)	63	第79図	第1号井戸跡	96
第53図	第5～8号掘立柱建物跡 土層断面図(2)	64	第80図	第1号溝跡	97
第54図	第5号掘立柱建物跡	65	第81図	第1号溝跡出土遺物(1)	98
第55図	第6号掘立柱建物跡	66	第82図	第1号溝跡出土遺物(2)	99
第56図	第7号掘立柱建物跡	67	第83図	第1号溝跡出土遺物(3)	100
第57図	第8号掘立柱建物跡	68	第84図	第2～9号溝跡	103
第58図	第7・8号掘立柱建物跡出土遺物	69	第85図	第10～19号溝跡	104
第59図	第1号掘立柱列	70	第86図	第20～32号溝跡	108
第60図	第2号掘立柱列	70	第87図	第11・12・13・15・22号溝跡出土遺物	110
第61図	第1号方形周溝墓・出土遺物	72	第88図	遺構外出土遺物(1)	112
第62図	第2号方形周溝墓・出土遺物	73	第89図	遺構外出土遺物(2)	113
第63図	第3号方形周溝墓	74	第90図	遺構外出土遺物(3)	114
			第91図	遺構外出土遺物(4)	115

目 次

第1表	第1号住居跡出土遺物観察表	14	第5表	第5号住居跡出土遺物観察表	21
第2表	第2号住居跡出土遺物観察表	15	第6表	第6号住居跡出土遺物観察表	22
第3表	第3号住居跡出土遺物観察表	19	第7表	第7号住居跡出土遺物観察表	25
第4表	第4号住居跡出土遺物観察表	20	第8表	第8号住居跡出土遺物観察表	27

第9表	第9号住居跡出土遺物觀察表	32	第26表	第1号方形周溝墓出土遺物觀察表	72
第10表	第10号住居跡出土遺物觀察表	35	第27表	第2号方形周溝墓出土遺物觀察表	74
第11表	第11号住居跡出土遺物觀察表	37	第28表	第3号方形周溝墓出土遺物觀察表	75
第12表	第12号住居跡出土遺物觀察表	39	第29表	第1号土器棺墓出土遺物觀察表	76
第13表	第13号住居跡出土遺物觀察表	40	第30表	第2号土器棺墓出土遺物觀察表	78
第14表	第14号住居跡出土遺物觀察表	42	第31表	第3号土器棺墓出土遺物觀察表	80
第15表	第15号住居跡出土遺物觀察表	42	第32表	土坑一覽表	85
第16表	第16号住居跡出土遺物觀察表	44	第33表	第3号土坑出土遺物觀察表	88
第17表	第17号住居跡出土遺物觀察表	46	第34表	第4・8・14号土坑出土遺物觀察表	92
第18表	第18号住居跡出土遺物觀察表	48	第35表	第16・17・20・30・36号土坑出土遺物 觀察表	92
第19表	第19号住居跡出土遺物觀察表	50	第36表	第30号ピット出土遺物觀察表	94
第20表	第20号住居跡出土遺物觀察表	51	第37表	ピット一覽表	95
第21表	第21号住居跡出土遺物觀察表	54	第38表	第1号溝跡出土遺物觀察表	100
第22表	第22号住居跡出土遺物觀察表	55	第39表	第11・12・13・15・22号溝跡出土遺物 觀察表	111
第23表	第23号住居跡出土遺物觀察表	57	第40表	遺構外出土遺物觀察表	116
第24表	第24号住居跡出土遺物觀察表	58			
第25表	第7・8号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	70			

図 版 目 次

図版 1	前中西遺跡全景（第2～5区） 前中西遺跡全景（第4・6～8区）	図版 4	第11・17号住居跡 第12号住居跡 第12号住居跡土器出土状況 第13号住居跡 第15号住居跡 第16号住居跡
図版 2	第1号住居跡、第3号溝跡 第2・21号住居跡 第3・4号住居跡 第5号住居跡 第6号住居跡 第7号住居跡	図版 5	第19号住居跡、第9号土坑 第20号住居跡 第22号住居跡 第23号住居跡、第18号土坑 第24号住居跡 第1号掘立柱建物跡 第2・3号掘立柱建物跡、第5号土坑 第4号掘立柱建物跡
図版 3	第8号住居跡 第9号住居跡 第9号住居跡遺物・炭化材出土状況 第9号住居跡土器出土状況 第10・18号住居跡 第10号住居跡高坏出土状況 第10号住居跡剣形滑石製模造品出土状況	図版 6	第4号掘立柱建物跡ピット1柱痕

・栗石出土状況	図版10	第1号井戸跡
第5～8号掘立柱建物跡		第1号溝跡（北）
第7号掘立柱建物跡ピット1柱痕出土状況		第1号溝跡（南）
第7号掘立柱建物跡ピット2柱痕出土状況		第1号溝跡墨書土器出土状況
第7号掘立柱建物跡ピット3、第8号掘立柱建物跡ピット4柱痕出土状況	図版11	第1号溝跡土器出土状況
第7号掘立柱建物跡ピット10柱痕出土状況		第4・5号溝跡
第7号掘立柱建物跡ピット4柱痕、第8号掘立柱建物跡ピット6土器・瓦出土状況	図版12	第2号溝跡
図版7 第1号掘立柱列		第6号溝跡
第2号掘立柱列		第8・9号溝跡
第1号方形周溝墓（手前）、第2号方形周溝墓（奥）		第10号溝跡
第3号方形周溝墓	図版13	第11号溝跡
第1号土器棺墓土器出土状況		第12・13号溝跡
第2号土器棺墓土器出土状況		第14号溝跡
図版8 第3号土器棺墓土器（上）出土状況		第15号溝跡
第3号土器棺墓土器（下）出土状況	図版14	第17号溝跡
第3号土坑土器出土状況		第18号溝跡
第4号土坑		第20号溝跡、第31号土坑
第6号土坑	図版15	第21・22号溝跡
第8・12号土坑		第23～26号溝跡
第8号土坑土器出土状況	図版16	第28～32号溝跡
第15号土坑	図版17	第3・5号住居跡、第3号方形周溝墓出土土器
図版9 第16号土坑		図版18 第1・3号住居跡、第1・2・3号土器棺墓出土土器
第22号土坑	図版19	第3・5・8・9号住居跡出土土器
第25号土坑		図版20 第9・10号住居跡、第1号土器棺墓、第22号溝跡、遺構外出土土器
第32号土坑	図版21	第2・3号土器棺墓、第1・3号住居跡出土土器
第33号土坑	図版22	第5・6・7・8・9号住居跡、第1号溝跡出土土器
第35号土坑	図版23	第1・2号住居跡出土土器
第36・37号土坑		図版24 第3・6号住居跡出土土器
第36号土坑土器出土状況		図版25 第7・8号住居跡出土土器
		図版26 第8号住居跡、第1・2・3号方形周溝墓出土土器

- 図版24 第1号溝跡出土土器
- 図版25 第10・11・12号住居跡出土土器
- 図版26 第12・13号住居跡、第36号土坑、遺構外出土土器
- 図版27 第12号住居跡、第8・16・36号土坑、第1号溝跡出土土器
- 図版28 第8号土坑、第15号溝跡、遺構外出土土器
- 図版29 第17・18・19・20号住居跡、第3号土坑出土土器
- 図版30 第18・19・23号住居跡、第3号土坑、第1号溝跡、遺構外出土土器
- 図版31 第19・21号住居跡、第3号土坑、第1号溝跡、遺構外出土土器
- 図版32 第14・19号住居跡、第3号土坑、遺構外出土土器
- 図版33 第20・21・22・24号住居跡、第15号溝跡、遺構外出土土器
- 図版34 第3号土坑、第1号溝跡、遺構外出土土器
- 図版35 第8号掘立柱建物跡、第3・17号土坑、遺構外出土土器
- 図版36 第1号溝跡、遺構外出土土器
第18号住居跡出土土錘
遺構外出土土製支脚
- 図版37 第21号住居跡、第7号掘立柱建物跡、第1・13号溝跡出土土錘
第3・9・23号住居跡、第1号溝跡出土紡錘車
第13号住居跡出土刀子
第10・12・17・18・21号住居跡出土玉類
- 図版38 第4号土坑、第11号溝跡、遺構外出土管玉
第10号住居跡出土滑石製模造品
第3・7号住居跡、遺構外出土石器
- 図版39 第1・3・5号住居跡、遺構外出土石器
遺構外出土砥石
- 図版40 遺構外出土ミニチュア土器
第14号土坑、第7・8号掘立柱建物跡出土瓦
- 図版41 遺構外出土瓦
- 図版42 遺構外出土瓦、土偶
- 図版43 第1・7・8号掘立柱建物跡出土柱痕

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

昭和61年6月6日付け61熊都発第148号で、熊谷市長より上之第一地区土地区画整理事業（現上之土地区画整理事業）地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いに関する照会が出された。事業地内には、全域に弥生時代から平安時代の遺跡が所在する地域であり、工事に先立って発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、熊谷市教育委員会は、平成7年11月13日から平成8年1月19日にかけて、遺跡の所在確認調査を実施した結果、弥生時代から近世の集落跡及び墓跡が広範囲に分布することを確認した。

この結果を踏まえて平成8年2月9日付け熊教社発第865号で、熊谷市教育委員会教育長から熊谷市都市計画事業上之土地区画整理事業代表者熊谷市長あてに次のように通知した。

事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（前中西遺跡、藤の宮遺跡及び諏訪木遺跡）が所在する。当該地は現状保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること、なお、発掘調査の実施については教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知は代表者熊谷市長より平成8年6月17日及び平成9年10月14日付けで提出された。発掘調査は、平成8年度、平成9年度に熊谷市教育委員会により実施された。

発掘調査に関わる熊谷市教育委員会の通知、報告及び埼玉県教育委員会からの通知は以下のとおりである。

平成8年度

平成8年6月20日付け熊教社発第310号（通知）

平成8年7月2日付け教文第3-181号

平成9年度

平成9年10月27日付け熊教社発第634号（報告）

平成9年11月10日付け教文第3-510号

2 発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

今回報告する前中西遺跡の発掘調査は、平成8年9月17日から平成9年3月31日及び平成9年11月4日から平成10年3月31日にかけて行われた。調査面積は、遺跡面積約290,000㎡のうち街路築造工事によって破壊をうける4,441.5㎡（平成8年度3,255㎡、平成9年度1,186.5㎡）であった。

平成8年度は上之区画整理事務所北側の街路工事部分を、平成9年度は東、西及び南の街路工事部分の調査を実施した。

それぞれの調査区で遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行い、作業員による遺構確認のための精査

を行った。順次遺構掘削作業を行い、遺構・遺物の実測、写真撮影を行った。空中写真は、平成9年3月、平成10年3月に撮影した。

平成9年3月31日及び平成10年3月31日には現地における調査のすべてを終了した。

(2) 整理・報告書作成作業

本書の整理作業は、平成13年4月から平成14年1月にかけて実施した。

遺物の洗浄・注記を実施し、土器の接合・復元作業を行い、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、遺構の図面整理も実施した。

次に、土器等の遺物のトレース・拓本を採り図版組を行い、遺構のトレース・図版組を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影をして、写真図版の割付をした。また、それと並行して原稿執筆を行い、業者の選定を行い、本報告書の刊行をした。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主 体 者 熊谷市教育委員会

(1) 発掘調査

平成8年度

教育長	岡嶋 一夫
教育次長	田島 三雄
社会教育課長	大島 常雄
社会教育課長補佐	翠田 晴夫
社会教育課文化財保護係長	金子 正之
主任	権田 宣行
主任	渡邊 操
主任	吉野 健

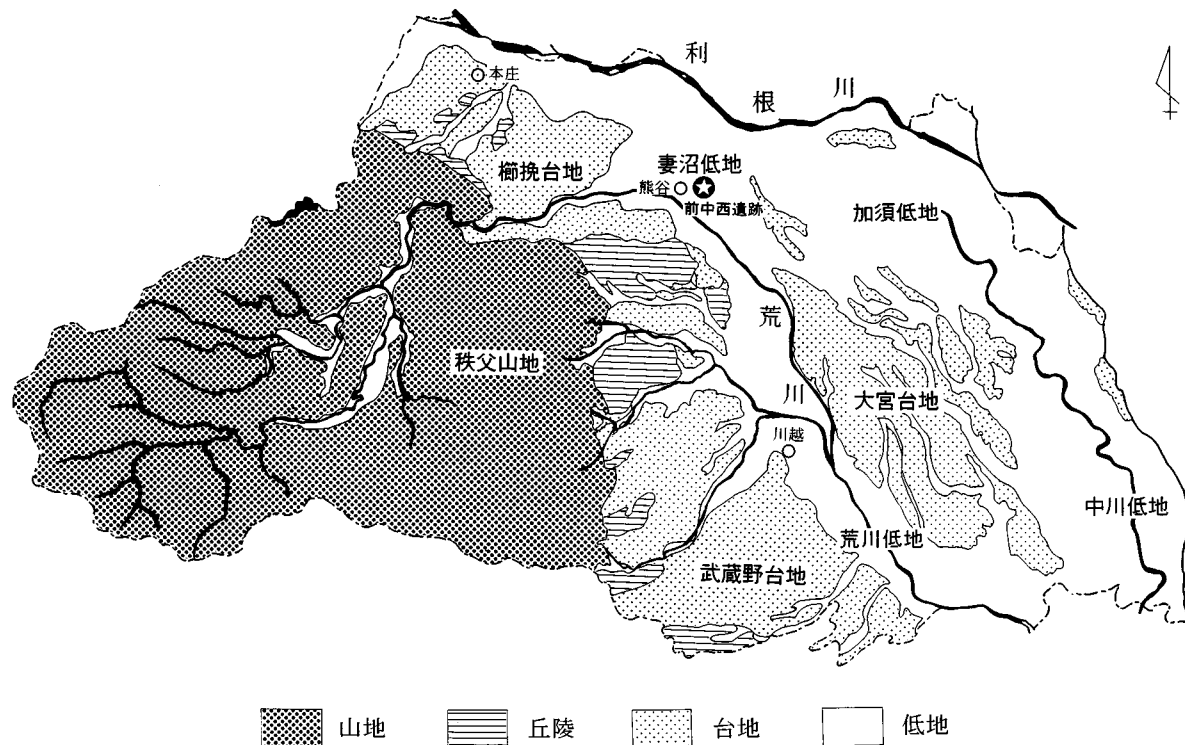
平成9年度

教育長	岡嶋 一夫
教育次長	田島 三雄
社会教育課長	大島 常雄
社会教育課副参事	鈴木 敏昭
社会教育課長補佐	翠田 晴夫
社会教育課文化財保護係長	金子 正之
主任	権田 宣行
主任	渡邊 操
主任	吉野 健

(2) 整理・報告書作成事業

平成13年度

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	小林 武夫
社会教育課長	岩田 隆
社会教育課副参事	浅野 晴樹
社会教育課長補佐	北 俊明
社会教育課文化財保護係主幹兼係長	金子 正之
主査	寺社下 博
主査	浅見 敦夫
主任	吉野 健
主事	松田 哲
発掘調査員	小野寺弘光
発掘調査員	藏持 俊輔
発掘調査員	加藤 隆則



第1図 埼玉県の地形

Ⅱ 遺跡の立地と環境

前中西遺跡は、熊谷市中西四丁目2515番地1他に所在し、J R高崎線熊谷駅の北東約1.2km、荒川から北へ約2.0～2.5km、利根川から南へ約7.0～9.0kmに位置する。

前中西遺跡の所在する中西・末広地区は、熊谷市の中央部付近東にあたり、櫛挽台地の北端及びその北と北東に展開する妻沼低地にある。櫛挽台地は、寄居町末野付近を扇頂に荒川の両岸に広がる洪積扇状地である荒川扇状地の荒川左岸側の一帯が、浸食されてできたものである。そして、本遺跡が立地する妻沼低地は、利根川及びその支流により形成された沖積地であり、熊谷市の大半を覆っている沖積扇状地の新荒川扇状地（熊谷扇状地）と自然堤防が広がる地区に分けられる。本遺跡は、その新荒川扇状地の縁辺部上、標高24.5m前後に立地し水田となっていた。現地表から遺構確認面まではおよそ1.5mの厚さをもっていた。

次に、本遺跡を中心に主に妻沼低地における歴史的環境の一端を簡単に見ていきたいと思う。

まず、旧石器時代から縄文時代であるが、この時期の遺跡の発見例はきわめて少ない状況である。旧石器時代で知られているのは、平安時代の住居跡の埋土中から出土した櫛挽台地上の籠原裏遺跡の黒曜石製の尖頭器が唯一の例である。縄文時代になると、櫛挽台地上さらには妻沼低地上にも発見例が少々増える。妻沼低地上の寺東遺跡では前期関山式土器が、櫛挽台地上の三ヶ尻遺跡内の林遺跡でも前期黒浜式期の集落が発見されている。そして、同じく三ヶ尻遺跡内の天王遺跡では中期から後期の集落が発見されている。後期に至っては、前述の寺東遺跡で称名寺式期の埋甕を伴う土坑等が発見されている。また、深谷市の自然堤防上でも発掘調査された中期後葉から後期の遺跡が存在し、妻沼低地の自然堤防上に生活の場を展開していったことが窺える。

一方、縄文時代晩期から弥生時代前半にかけての熊谷市内の発見例はほとんどないが、本遺跡の近辺の北島遺跡で縄文時代晩期末から弥生時代中期の土器・石器が出土した。また、縄文時代晩期の深谷市の妻沼低地では、前時期の遺跡を継承した位置に再び集落が営まれたようである。

次に熊谷市内において本格的展開の知られる遺跡は、現段階では弥生時代中期まで待つことになる。須和田式期の再墓が16基発見された横間栗遺跡、同じく須和田式期の壺が発見されている三ヶ尻遺跡内の上古遺跡が知られる。再墓群や土器を伴う土坑が検出されている遺跡は、深谷市上敷免遺跡、妻沼町飯塚遺跡・飯塚南遺跡が知られる。また、上敷免遺跡では包含層から県内初の前期遠賀川式土器が出土している。本遺跡では、中期後半の土器棺墓と方形周溝墓の2タイプの葬送形態が近接して発見されており、特異な様相を示している。また、北島遺跡・平戸遺跡・行田市小敷田遺跡も同時期の遺跡として挙げられ、北島遺跡でも再墓や土坑墓群が、小敷田遺跡では関東地方で最も古い段階の須和田式期の方形周溝墓が検出されている。同時期の集落や住居跡が検出されている遺跡としては、池上遺跡・飯塚南遺跡が存在し、特に池上遺跡は環濠集落として知られている。そして、池上遺跡や小敷田遺跡のような中核的な集落の周辺部に、天神遺跡・平戸遺跡・北島遺跡のような小規模な遺跡が形成されている。後期には妻沼低地の各地に遺跡が見られ始める。妻沼町弥藤吾新田遺跡・中条条里遺跡内の東沢遺跡・行田市池守遺跡が存在する。本遺跡においても引き続き集落が形成されており、中期末から後期初頭にかけての集落が発見されている。東沢遺跡・池守遺跡では吉ヶ谷式土器が、弥藤吾新田遺跡では南

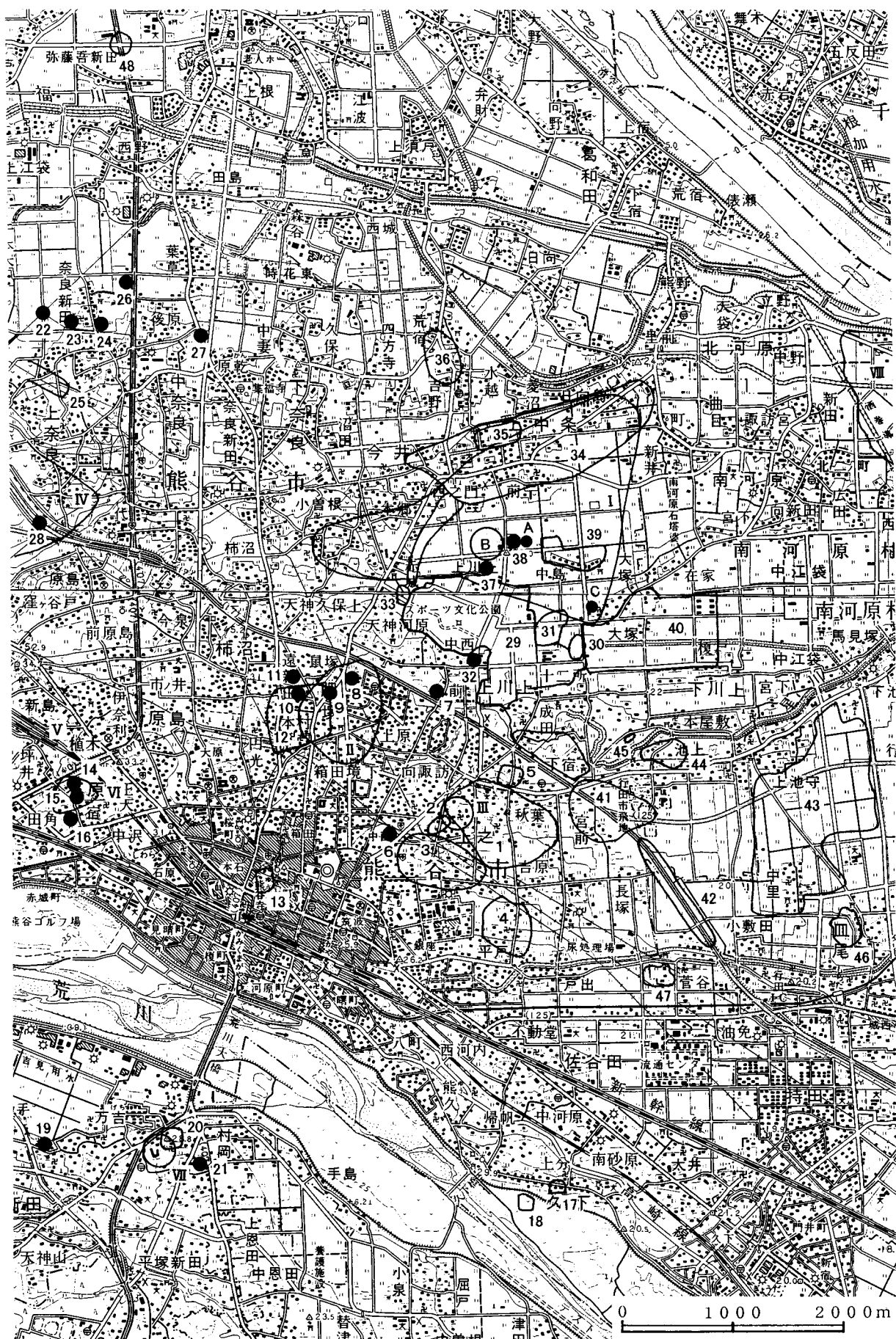
関東系の弥生町式土器が出土している。これら弥生時代の遺跡を概観すると、すでにこの時期には低地を利用した積極的な水田経営が行われていたと推測される。当地域における集落の時期的動向は、池上遺跡から北島遺跡、そして前中西遺跡と続くと考えられる。

古墳時代に入ると、古墳は台地・自然堤防等の微高地に形成され、集落は台地ばかりでなく低地帯の自然堤防上にも営まれるようになり、次第に遺跡数も増加傾向にある。前期では、妻沼低地に大きく遺跡が展開している。池上遺跡・池守遺跡・小敷田遺跡・東沢遺跡・北島遺跡・天神東遺跡・中条遺跡内の雷電塚遺跡・行田市星宮皿尾遺跡・弥藤吾新田遺跡・中耕地遺跡・別府条里遺跡・一本木前遺跡等がある。北島遺跡では住居跡が21軒検出されており、北島遺跡、弥藤吾新田遺跡等は比較的大規模な集落と推定されている。小敷田遺跡では畿内や東海地方等の外来系の土器が多数出土しており、東沢遺跡とあわせて河川跡から鋤・鍬をはじめとした多量の木製農具を出土した遺跡として知られている。また、北島遺跡からも当該期の木製農具が出土している。また、雷電塚遺跡では脚部に穿孔のある高坏・器台・S字状口縁台付甕等が、剣形等の滑石製模造品と伴に出土している。墓域の存在としては、小敷田遺跡・一本木前遺跡・深谷市上敷免遺跡・東川端遺跡等で方形周溝墓群が検出されており、特に東川端遺跡第2号方形周溝墓からはパレススタイルの大型壺が出土している。

中期の様相は、他の時期と比べて不明な点が多いが、集落が大規模に展開していくのは中期後半以降となるようである。北島遺跡・中条遺跡内の権現山遺跡・同遺跡内の常光院東遺跡等で遺構・遺物が検出されている。北島遺跡では住居跡から須恵器の甕を模倣した土師器小型壺が、権現山遺跡では出現期の竈をもつ住居跡が検出され、把手付大型甕等が出土している。そして、本遺跡において中期の住居跡が4軒検出され、高坏を主体にして比較的まとまって土器を出土している。また、古墳に目を転じてみると、数こそ少ないが、妻沼低地の福川の自然堤防上に横塚山古墳が存在する。これは、B種横刷毛の埴輪をもつ前方後円墳（後円部は一部欠損）である。

そして、後期になると遺跡は爆発的な増加をみる。台地ばかりでなく自然堤防上にもさらに積極的に進出を図っていったようである。集落は、古墳時代後期から奈良・平安時代へと継続して展開する大規模なものが市内では目立つようになる。櫛挽台地上及び新荒川扇状地上では、樋の上遺跡で古墳時代後期から平安時代の住居跡が90軒以上検出され、このうち古墳時代後期のものは14軒以上を数える。また、同遺跡内の上辻・下辻遺跡でも後期から平安時代の住居跡が50軒以上検出された。一方、妻沼低地の自然堤防上では、北島遺跡・中島遺跡・光屋敷遺跡・池守遺跡・行田市持田藤の宮遺跡・一本木前遺跡・飯塚南遺跡等が存在する。北島遺跡では6世紀後半以降集落の規模が拡大し、広範囲に展開した状況が確認されている。また、多量の黒色土器が出土しているほか、いわゆる「比企型」の坏等も搬入されている。中島遺跡・光屋敷遺跡・中条遺跡内の常光院東遺跡等は、いずれも遺跡自体の規模が拡大し奈良・平安時代へと長期にわたって集落が継続する特徴を示している。現在調査中の一本木前遺跡でも後期を中心に奈良・平安時代の住居跡が300軒以上検出されており、当該期の祭祀跡も発見されている。

一方、古墳を見てみると群を形成して築造されているのがわかる。櫛挽台地上の別府古墳群・籠原裏古墳群・三ヶ尻古墳群、新荒川扇状地上の玉井古墳群・広瀬古墳群・坪井古墳群・石原古墳群・肥塚古墳群、荒川右岸の段丘堆積層上の村岡古墳群、妻沼低地上の中条古墳群・上之古墳群・行田市酒巻古墳群等が分布する。これらは概ね6世紀から7世紀ないしは8世紀初頭にかけて形成された古墳群である。



第2図 周辺遺跡分布図

本遺跡の北東端に分布する上之古墳群には墳丘の残る古墳が存在し、試掘調査により多量の円筒埴輪が出土する箇所が確認されており、さらなる古墳の存在の可能性を示唆している。本遺跡の北西に分布する肥塚古墳群では川原石乱石積と角閃石安山岩切組積の2種類の胴張型横穴式石室をもつ古墳が確認されており、前者は荒川水系の石材、後者は利根川水系の石材と判断され非常に興味深い様相を呈している。さらに、北には鎧塚古墳・女塚1～6号墳・権現山古墳・大塚古墳等からなる中条古墳群が存在する。鎧塚古墳は全長43.8mの帆立貝式前方後円墳で、須恵器高坏型器台等（県指定文化財）を伴う墓前祭祀跡2ヶ所が確認されており、築造年代は、5世紀末～6世紀初頭に比定されている。大塚古墳は大型の胴張型横穴式石室をもち、側壁に角閃石安山岩、奥壁・天井石に緑泥片岩を使用しており、7世紀前半に比定されている。利根川の右岸に分布する酒巻古墳群の酒巻14号墳では、馬に旗を立てる道具である蛇行状鉄器をつけた馬形埴輪等が出土しており、渡来系の要素が多くみられる。そして、櫛挽台地上の籠原裏古墳群は、川原石乱石積の胴張型横穴式石室を有する古墳群であるが、7世紀末の築造と考えられる八角形の墳形をもつ古墳の存在が知られており、終末期の古墳の様相、さらには幡羅郡の郡寺的な機能を有するとも考えられている8世紀初頭創建の西別府廃寺という初期寺院との関係においても見逃すことのできない発見である。さらには、滑石製模造品を使った水辺の祭祀が行われた西別府祭祀遺跡が所在し、近接する深谷市の幡羅遺跡では最近総柱倉庫群が発見され、幡羅郡衙の正倉と考えられている。

また、広瀬古墳群中の宮塚古墳は、上円下方墳という特異な墳形を今に残し熊谷市唯一の国指定史跡として知られている。

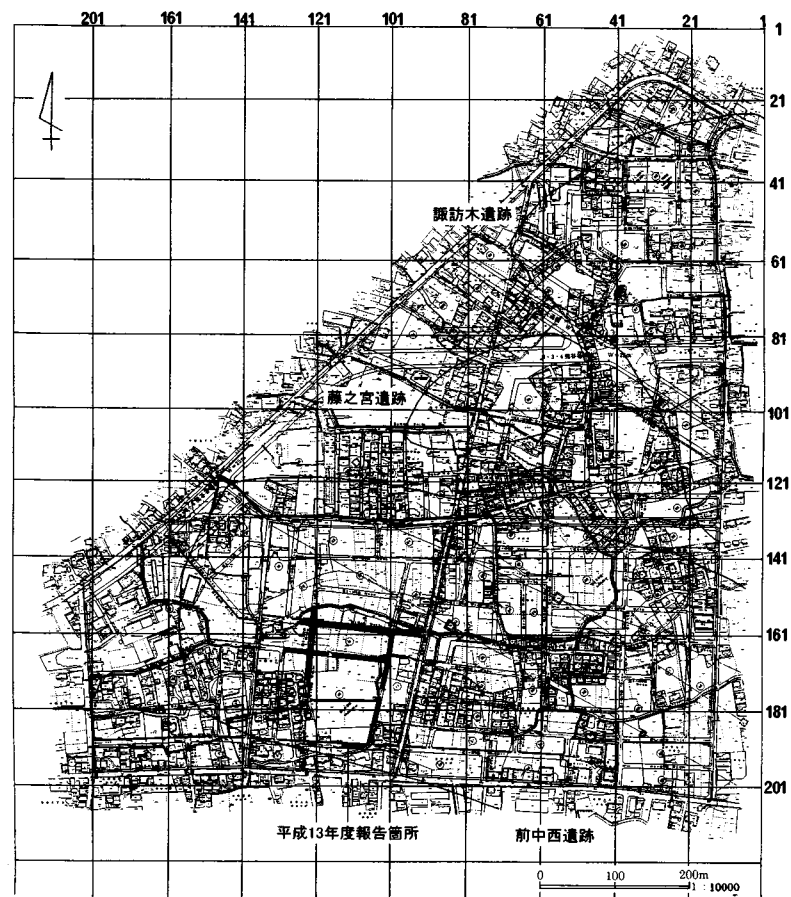
古墳時代後半に自然堤防上の微高地に形成された集落の多くは、増減はするものの奈良・平安時代へと継続されていく。奈良時代には、この地域も律令制体制に組み込まれていき、低湿地一帯では中条条里・小敷田条里・南河原条里等条里制に関わる遺構の痕跡をとどめている。このころの中心的集落遺跡は北島遺跡にみられる。300軒以上もの住居跡が検出されている大規模集落である。7世紀から9世紀を

第2 図掲載遺跡一覧表

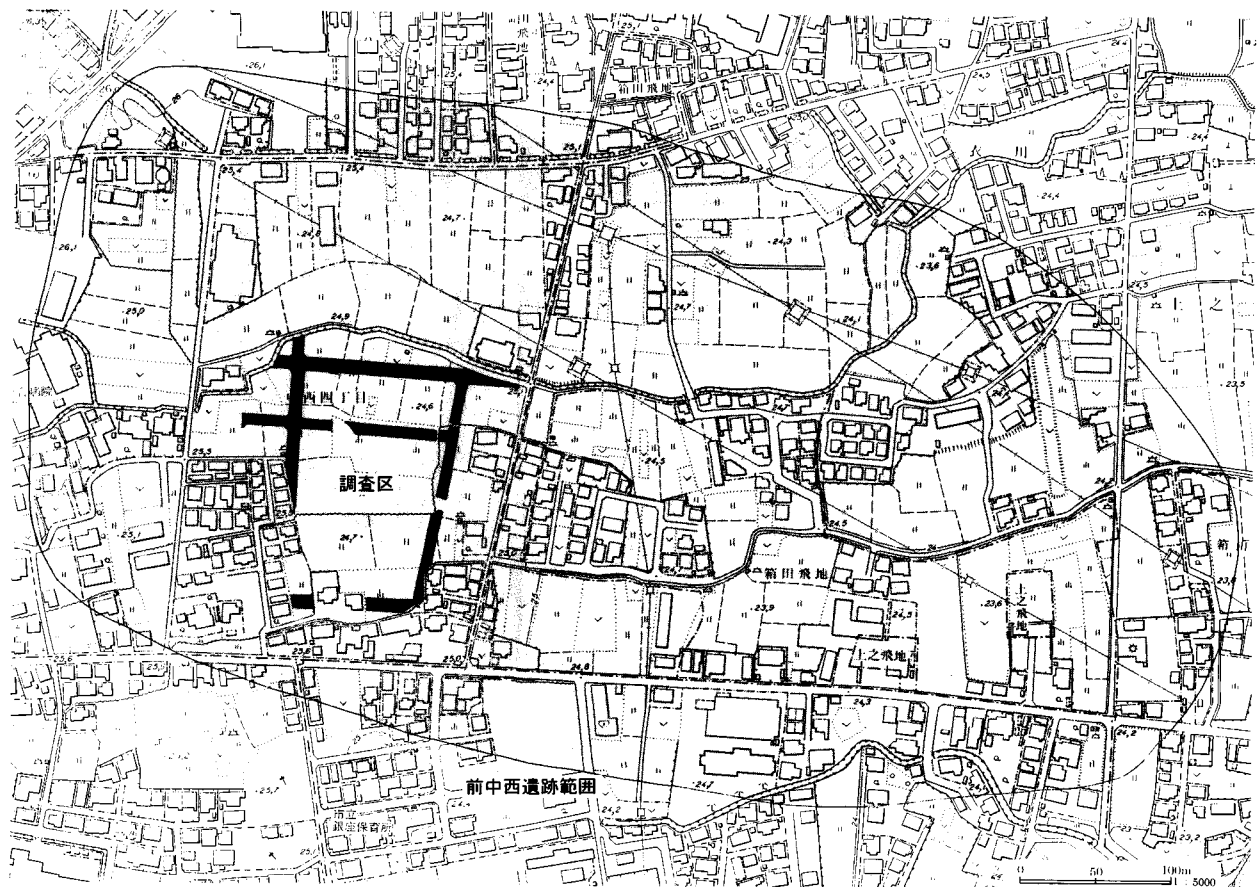
- | | | | | | |
|------------|----------|------------|-----------|------------|------------|
| 1 前中西遺跡 | 2 藤之宮遺跡 | 3 諏訪木遺跡 | 4 平戸遺跡 | 5 成田氏館跡 | 6 箱田氏館跡 |
| 7 河上氏館跡 | 8 八幡上遺跡 | 9 出口上遺跡 | 10 出口下遺跡 | 11 肥塚中島遺跡 | 12 肥塚館跡 |
| 13 熊谷氏館跡 | 14 天神前遺跡 | 15 兵部裏屋敷跡 | 16 御蔵場跡 | 17 市田氏館跡 | 18 久下氏館跡 |
| 19 万吉西浦遺跡 | 20 村岡館跡 | 21 北西原遺跡 | 22 中耕地遺跡 | 23 西通遺跡 | 24 東通遺跡 |
| 25 土用ヶ谷戸遺跡 | 26 横塚山古墳 | 27 奈良東耕地遺跡 | 28 下河原上遺跡 | 29 北島遺跡 | |
| 30 天神東遺跡 | 31 田谷遺跡 | 32 上川上東遺跡 | 33 天神遺跡 | 34 中条遺跡 | 35 中条氏館跡 |
| 36 光屋敷遺跡 | 37 女塚遺跡 | 38 鎧塚遺跡 | 39 中島遺跡 | 40 中条条里遺跡 | 41 池上遺跡 |
| 42 小敷田遺跡 | 43 池守遺跡 | 44 古宮遺跡 | 45 上河原遺跡 | 46 星宮皿尾遺跡 | 47 持田藤の宮遺跡 |
| 48 弥藤吾新田遺跡 | | | | | |
| I 中条古墳群 | A 鎧塚古墳 | B 女塚1～6号墳 | C 大塚古墳 | II 肥塚古墳群 | III 上之古墳群 |
| IV 玉井古墳群 | V 坪井古墳群 | VI 石原古墳群 | VII 村岡古墳群 | VIII 酒巻古墳群 | |

中心に12世紀さらには中世にまで及ぶ集落であり、大規模な掘立柱建物跡・道路状遺構・河川跡等様々な遺構と遺物が検出されている。周辺に前述の条里制地域をひかえ地域の中核となる典型的律令制集落である。また、本遺跡も北島遺跡と同様に掘立柱建物跡をともなう集落を形成しており、地方の豪族居館の様相も看取できる。さらには7世紀末から8世紀初頭頃の出挙木簡を出土した小敷田遺跡、整然と配された9世紀代の掘立柱建物跡群が検出された池上遺跡も存在する。本遺跡の東には古墳時代後期から平安時代にかけての祭祀が行われた河川跡が確認された諏訪木遺跡が存在する。祭祀関連の遺物としては、馬頭骨、管玉・切子玉・勾玉等の玉類、耳環、銅鉤、滑石製の白玉さらには斎串・人形等が土師器・須恵器・農具等の木製品と伴に出土しており、村（地域）の祭祀である民間祭祀から律令体制下の祭祀、すなわち国家祭祀へと祭祀形態が変化していったことが確認された例として注目される。また平安時代の溝に区画された集落跡や大型の掘立柱建物跡群、多数の灰釉陶器や緑釉陶器が検出されるなど特殊な様相を示し、やはり地方豪族居館の様相が看取できる遺跡である。

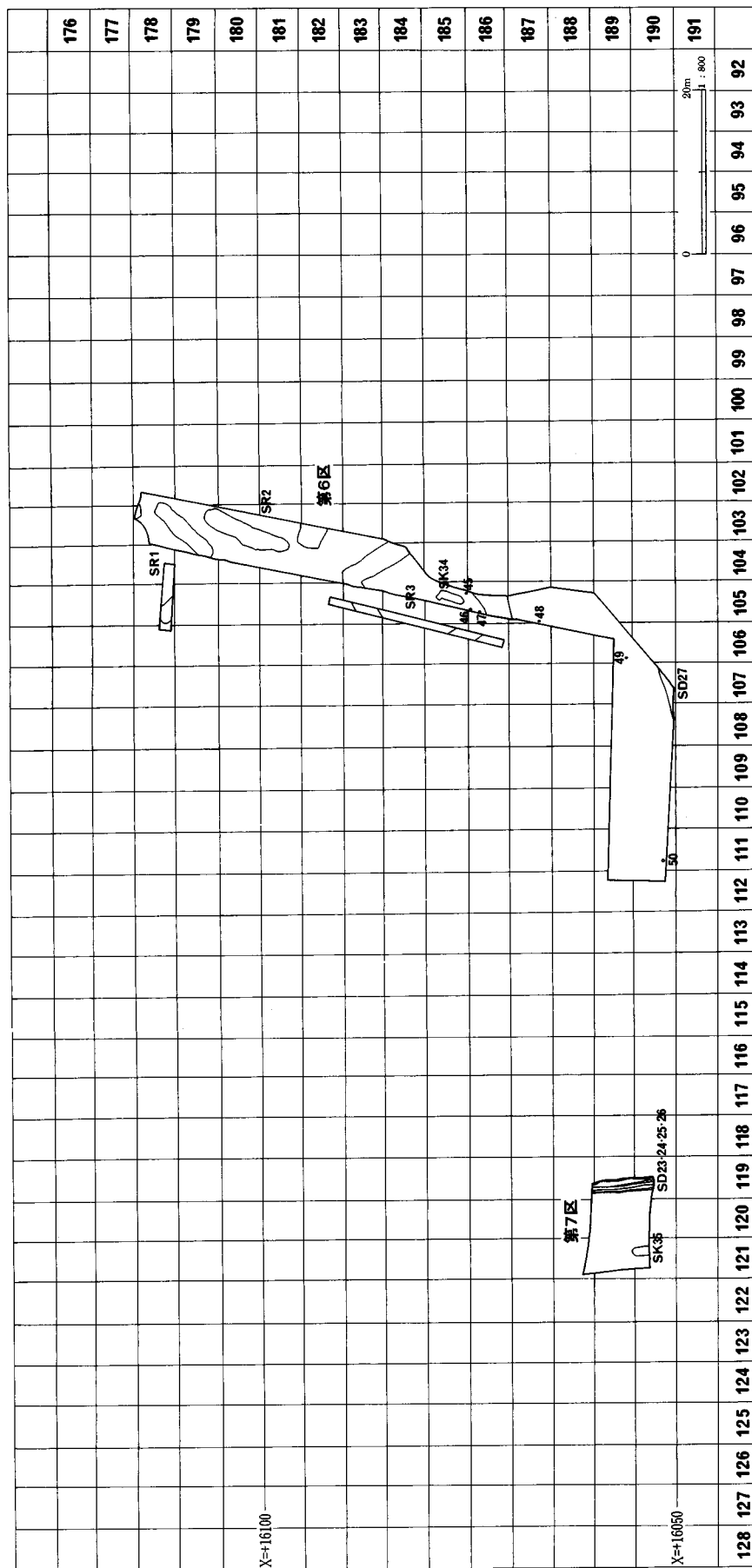
平安時代末から中世になると、武蔵七党やその他の在地武士団の館跡が散在するようになる。中条氏館跡・成田氏館跡・熊谷氏館跡・市田氏館跡・久下氏館跡・皿尾城（星宮皿尾遺跡）等であるが、いずれの居館も実態の判明するものはほとんどない。その中で遺構の残りの良いものの中に、中条氏館跡（県指定史跡）がある。中条家長の居館で常光院及びその周辺が当てられており、常光院の境内に土塁の一部と堀を良く残している。この他中条氏関連の遺跡としては、光屋敷遺跡・常光院東遺跡・権現山遺跡等があり、これらは主に中世前半の館跡と考えられる。光屋敷遺跡は、中条氏の祖・中条常光の館跡と伝えられている。しかし、発掘調査によって館跡の存在は確認されたが、出土遺物から室町時代の館跡が存在したというところまでの確証にとどまっている。中世に関しては、資料がまだまだ不足している状態で、今後の資料の蓄積に期待されるといった状況である。



第3図 上之土地区画整理事業地内遺跡グリッド図



第4図 前中西遺跡位置図



※ 数字のみで表記した遺構名は、ピットを示す。

第5図 前中西遺跡全測図

Ⅲ 遺跡の概要

1 調査の方法

発掘調査の方法は、1辺5mのグリッドを用いて行い、土地区画整理事業施行地域全体を網羅できるように設定した。北東隅を1-1として南・東へと1・2・3・・・とし、東西軸を優先して呼称した。例えば1ラインは北から南へ1-1・1-2・1-3・・・と呼称した。2ライン以東も1ラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。なお、今回報告する前中西遺跡は東西軸1から160、南北軸121から201までのグリッドに収まり、本報告の調査区は北東隅92-154グリッドから南西隅128-190グリッドまでの範囲である。

2 検出された遺構と遺物

今回の発掘調査で検出された遺構は、弥生時代の竪穴住居跡9軒、土器棺墓3基、方形周溝墓3基、土坑6基、古墳時代の竪穴住居跡15軒、掘立柱建物跡1棟、土坑18基、ピット5基、溝跡14条、奈良時代の掘立柱建物跡7棟、平安時代の区画溝跡1条、土坑1基、溝跡1条、中世の井戸跡1基、近世の土坑1基、その他時期不明の掘立柱列2列、溝跡16条、土坑11基、ピット50基である。出土した遺物は、弥生時代中・後期土器・石器・管玉、古墳時代前・中・後期及び奈良・平安時代土師器、須恵器、瓦、土製品、鉄製品、石製品、玉類、中世・近世の陶器などコンテナ約100箱分の出土量であった。

弥生時代の遺物は、竪穴住居跡、土器棺墓、方形周溝墓、土坑の遺物である。

古墳時代の遺物は、竪穴住居跡、土坑、溝跡等の遺物である。

奈良時代の遺物は、掘立柱建物跡の遺物である。

平安時代の遺物は、溝跡、土坑の遺物である。

中・近世の遺物は、井戸跡、土坑の遺物である。

Ⅳ 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

住居跡は、総数24軒検出され、大きく分けて弥生時代中期末から後期、古墳時代中期、後期の時期のものが検出できた。また、住居跡は、調査区中央及び北よりに集中して検出された。

第1号住居跡（第6・7図、第1表）

111-158・159グリッドを中心に位置する。第3号溝跡に本遺構が切られる。

平面形は長軸5.85m、短軸4.82mの長方形のプランで、面積は28.20㎡を測る。主軸方向はおよそN-28°-Wを指す。

床までの深さは約30cm、埋土は自然堆積と思われる。

柱穴はやや不揃いであるが、4つ検出された。規模はそれぞれP1が径58×50cm、深さ30cm、P2が

径50×45cm、深さ60cm、P 3 が径41×38cm、深さ42cm、P 4 が径57×47cm、深さ27cmであった。

その他のピットはそれぞれ深さ、P 5 =42cm、P 6 =30cm、P 7 =66cmを測る。

壁溝は西壁と南壁の一部において、幅約12cm、深さ約6cmの規模で検出された。

炉は検出できなかった。

出土遺物は、弥生土器高坏・壺・甕、磨製石鏃等が出土した。

第2号住居跡（第8・9図、第2表）

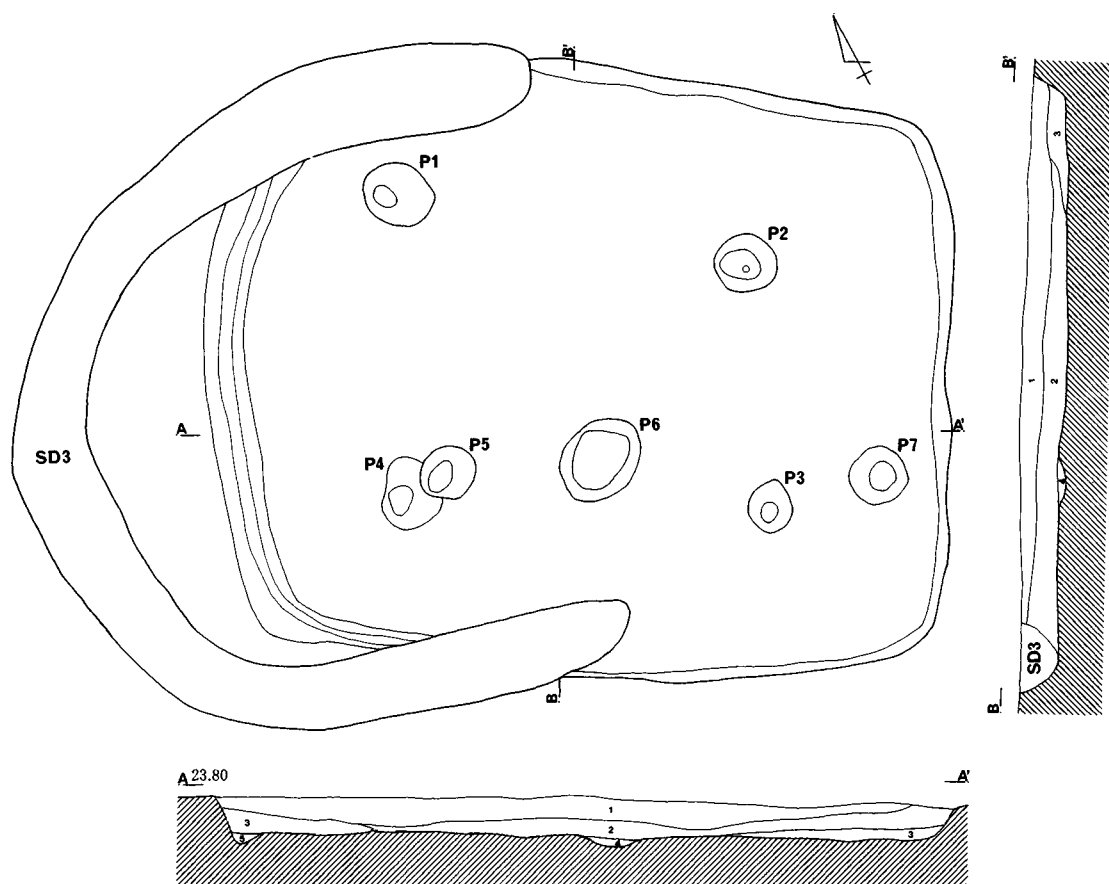
112・113-166グリッドに位置する。第21号住居跡と重複関係にあり、本遺構が切られている。南側の隅が一部調査区域外となっている。

平面形は長軸5.70m、短軸4.90mのやや隅丸の長方形のプランで、面積は27.93㎡を測る。主軸方向はおよそN-57°-Wを指す。

床までの深さは約40cmで、大部分が第21号住居跡によって約26cm削平されている。埋土は自然堆積と思われる。

柱穴、炉、壁溝は検出できなかった。

出土遺物は、ほぼ全体に広がって分布し、弥生土器高坏・壺・甕・鉢等が出土した。



第1号住居跡

1 暗青灰色粘質土（灰オリーブ色土粒子、酸化鉄、炭化物若干含む）

2 灰オリーブ色粘質土（暗青灰色土ブロック・粒子多量、酸化鉄、焼土、炭化物含む）

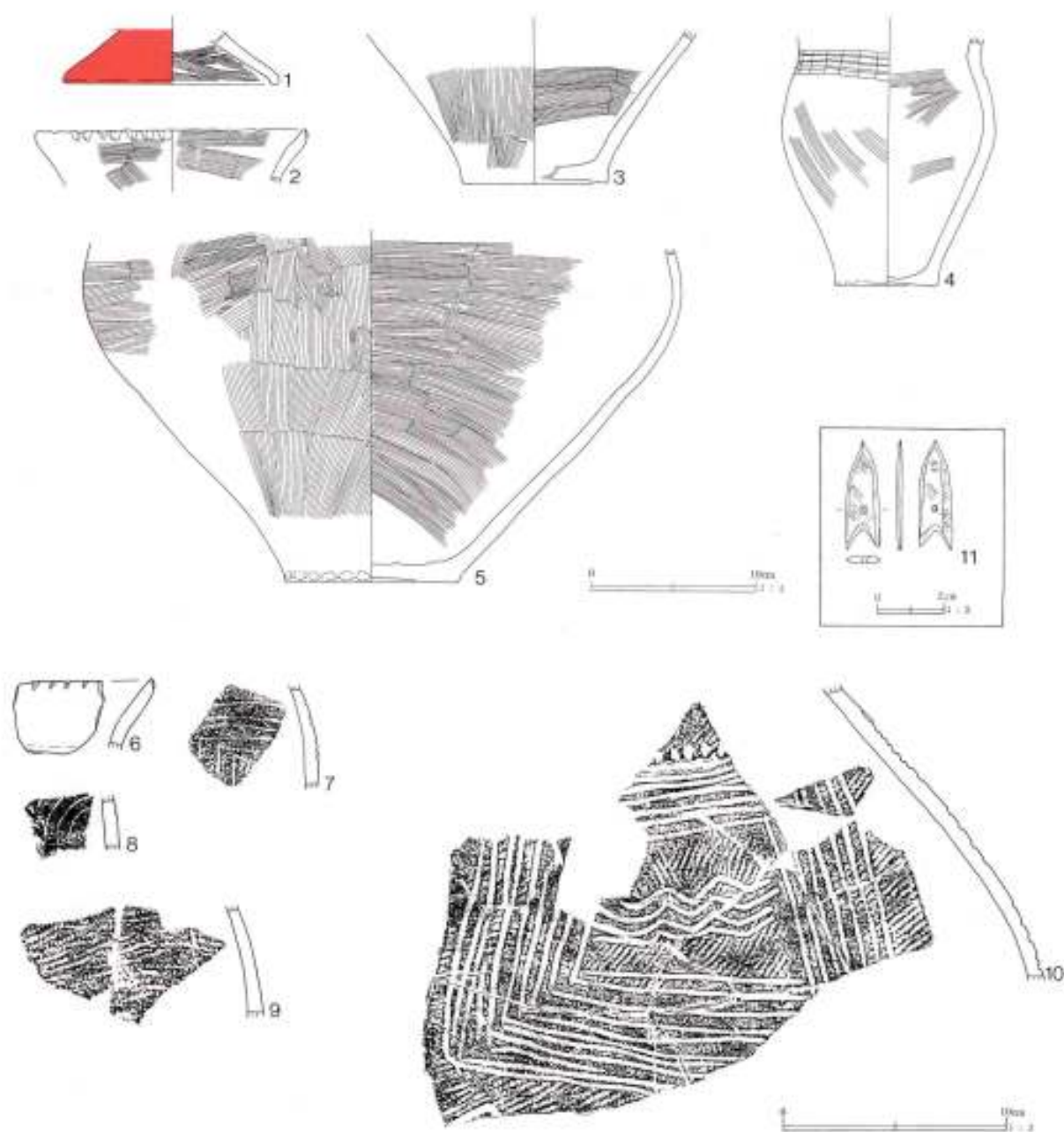
3 灰色粘質土（灰オリーブ色土粒子、酸化鉄、炭化物若干含む）

4 暗青灰色粘質土（灰オリーブ色土粒子、酸化鉄含む）

5 暗灰色粘質土（灰オリーブ色土ブロック・粒子、酸化鉄含む）

0 2 m
1 : 60

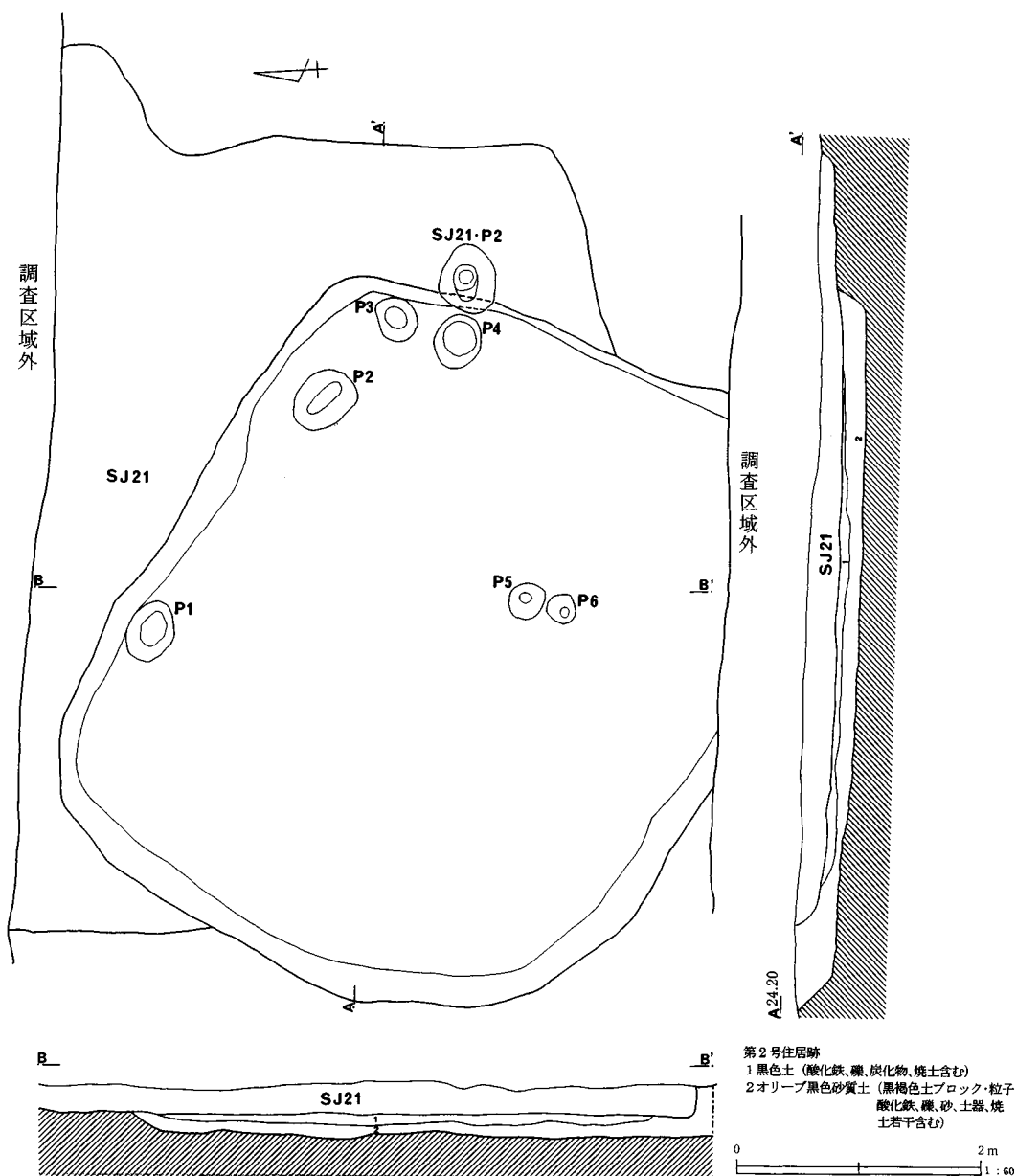
第6図 第1号住居跡



第7図 第1号住居跡出土遺物

第1表 第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器高坏	—	—	(13.0)	AE	灰黄色	A	30%	外面赤彩。
2	弥生土器壁	(16.1)	—	—	AED	褐色	B	10%以下	
3	弥生土器底	—	—	(8.8)	AEDE	にぶい黄褐色	B	20%	
4	弥生土器壁	—	—	6.3	ABE	にぶい赤褐色	D	50%	
5	弥生土器底	—	—	(10.7)	AED	にぶい褐色	B	30%	外面刷毛目後クガキ。
6	弥生土器壁	—	—	—	—	暗褐色	—	—	
7	弥生土器底	—	—	—	—	灰白色	—	—	
8	弥生土器底	—	—	—	—	灰白色	—	—	ヘラ描渦巻文。
9	弥生土器壁	—	—	—	—	褐色	—	—	L.R.縄文。
10	弥生土器底	—	—	—	—	明褐色	—	—	地文L.R.縄文。
11	磨製石網	長さ3.2	幅1.1	厚さ0.2	—	—	—	—	孔径0.3cm。重さ0.9g。材質粘板岩製。

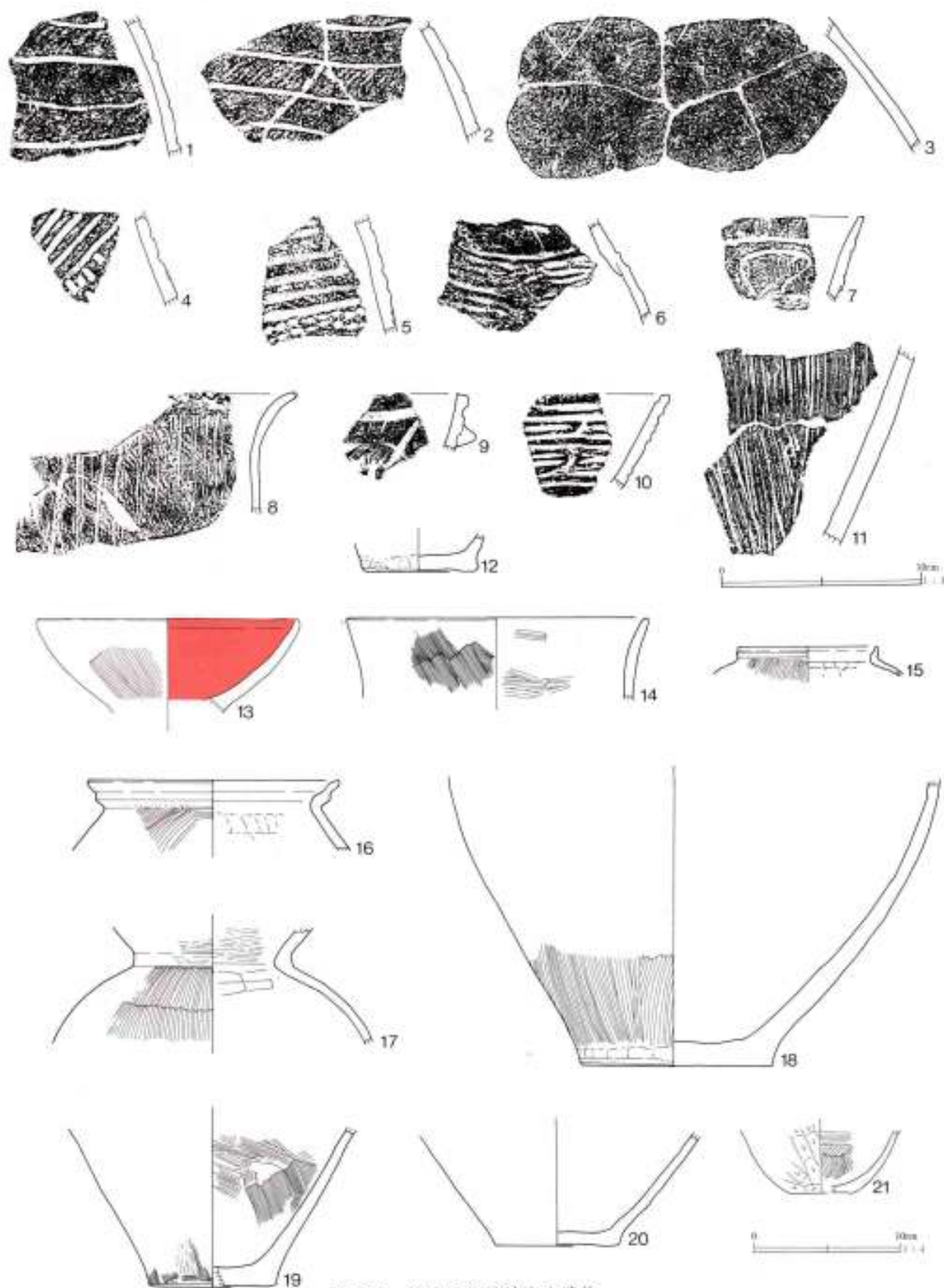


第8図 第2号住居跡

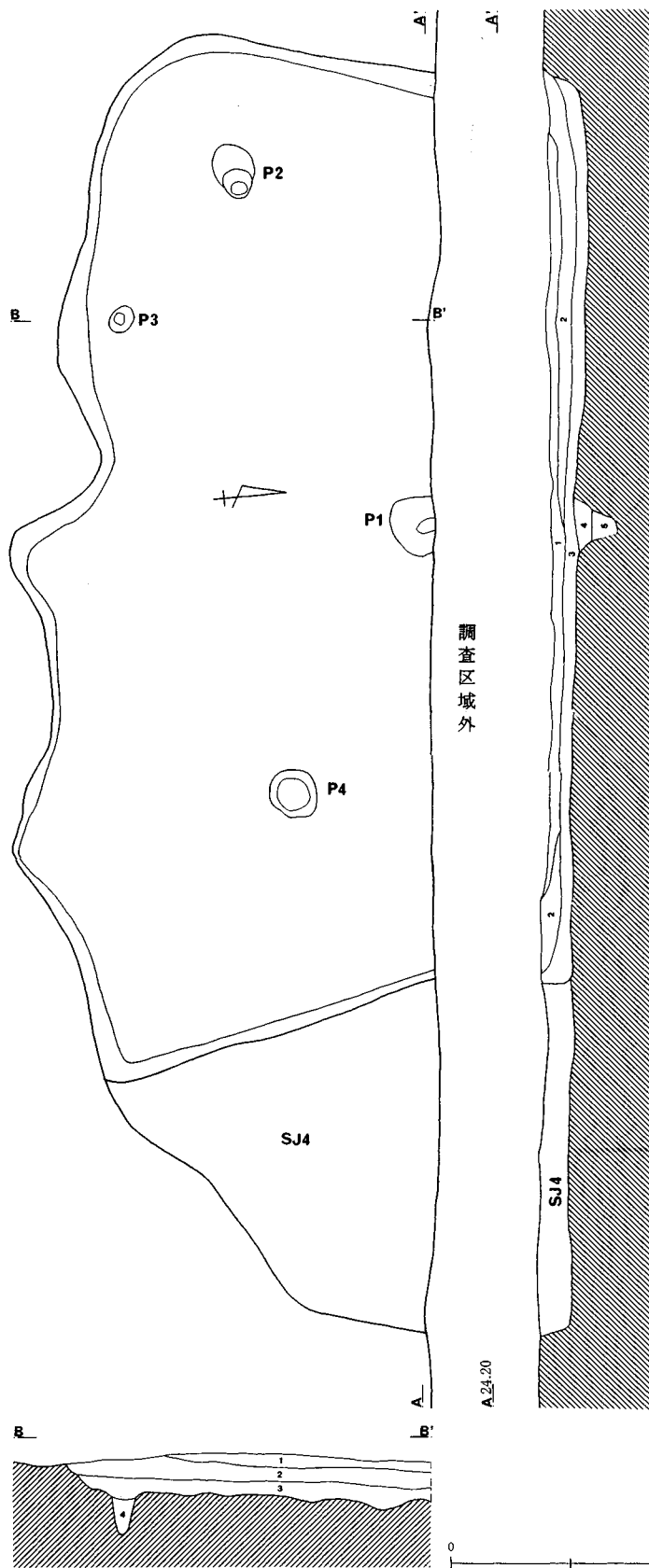
第2表 第2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器甕	—	—	—	—	明褐色	—	胴部	沈線区画内にL R縄文。 ミガキ後ヘラ描鋸歯文。赤彩。
2	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	
3	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	
4	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	頸部	
5	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	沈線文区画内に擬縄文。 波状口縁。条線文施文。
6	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	
7	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	口縁部	
8	弥生土器甕	—	—	—	—	黒褐色	—	口縁部	
9	弥生土器鉢	—	—	—	—	黒褐色	—	口縁部	内面ミガキ。
10	弥生土器鉢	—	—	—	—	橙色	—	口縁部	
11	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	
12	弥生土器壺	—	—	5.6	—	にぶい橙色	—	10%以下	
13	弥生土器高坏	(17.8)	—	—	ABGMN	褐色	B	10%	内面赤彩。
14	土師器甕	(20.6)	—	—	ADHJM	にぶい黄橙色	A	10%以下	
15	土師器台付甕	(9.5)	—	—	AEGMN	黄灰色	A	10%以下	

16	土師器台付甕	(17.1)	—	—	AEHJ	にぶい黄褐色	A	10%以下	
17	土師器壺	—	—	—	AGJMN	にぶい褐色	A	20%	
18	土師器甕	—	—	13.0	ABN	にぶい赤褐色	A	40%	
19	土師器甕	—	—	(8.7)	AEGIN	褐色	A	20%	
20	土師器甕	—	—	8.5	DMN	褐色	A	15%	
21	土師器鉢	—	—	(4.3)	AGJMN	褐灰色	A	15%	

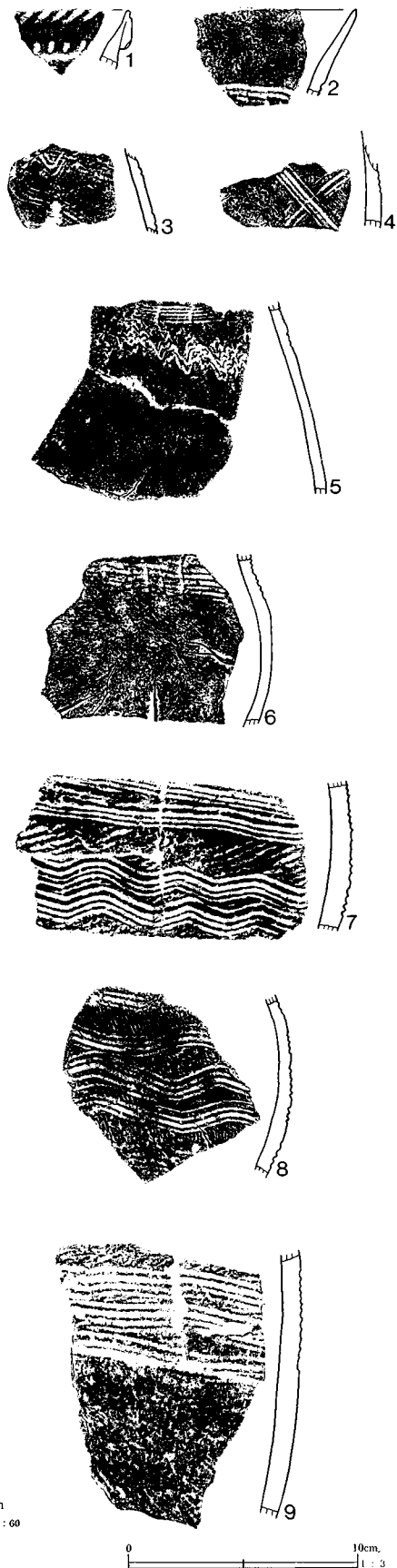


第9図 第2号住居跡出土遺物

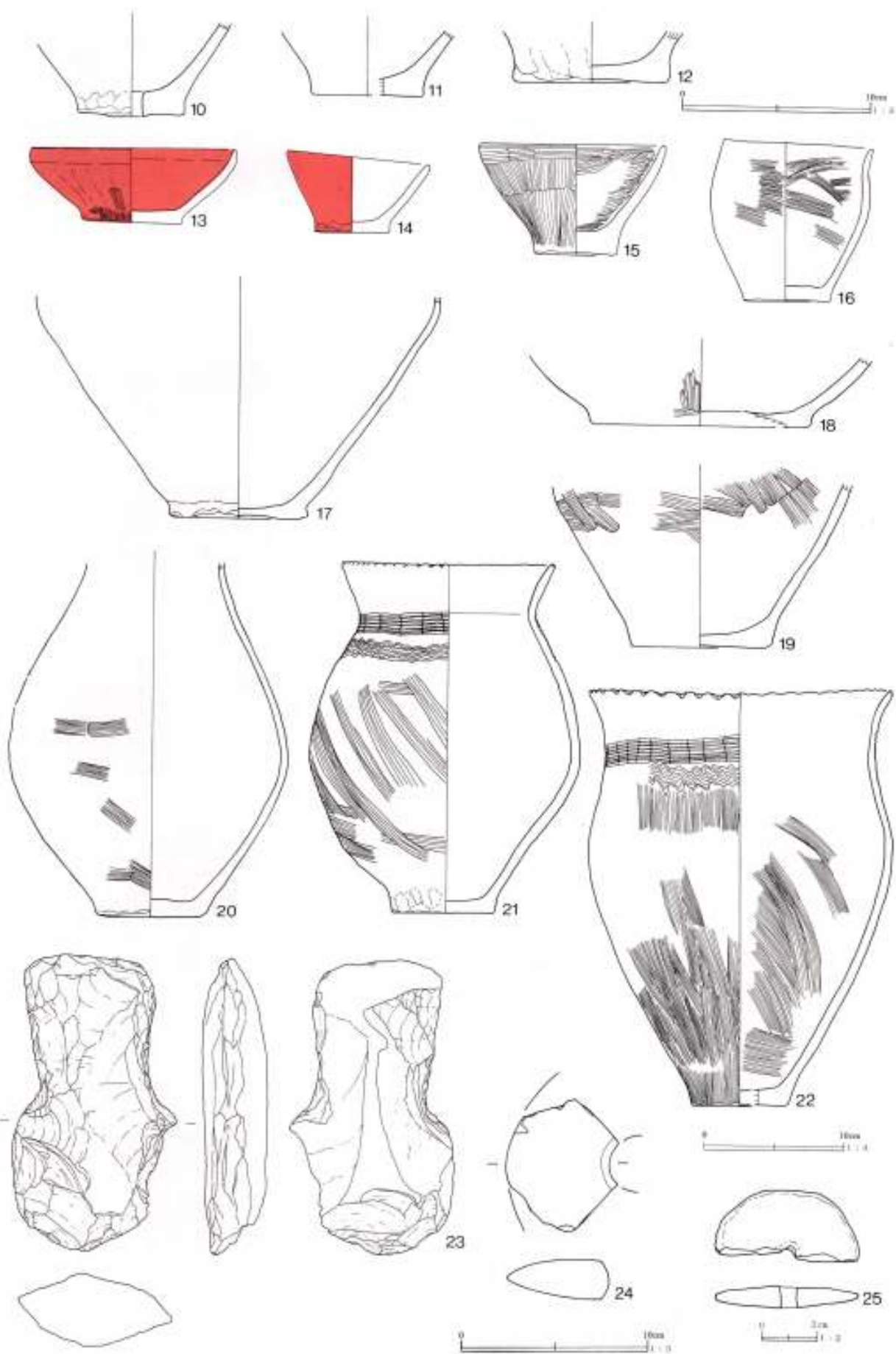


第3号住居跡

- 1 灰色土 (黒褐色土ブロック・粒子、黄褐色土粒子、酸化鉄、マンガン粒子、焼土、炭化物含む)
- 2 灰色土 (酸化鉄、焼土、炭化物含む)
- 3 暗褐色粘質土 (灰オリーブ色土粒子、黄褐色土粒子、酸化鉄、焼土、炭化物含む)
- 4 暗灰色粘質土 (灰オリーブ色土ブロック・粒子、酸化鉄、焼土、炭化物含む)
- 5 暗灰色粘質土 (灰オリーブ色土粒子、酸化鉄含む)



第10図 第3号住居跡・出土遺物(1)



第 11 図 第 3 号住居跡出土遺物(2)

第3表 第3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
1	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	口縁部	櫛描簾状文。 櫛描波状文。 櫛描交差文。 櫛描簾状文、波状文。 櫛描簾状文。 平行沈線と波状沈線間にRL縄文。
2	弥生土器甕	—	—	—	—	灰白色	—	口縁部	
3	弥生土器甕	—	—	—	—	橙色	—	胴部	
4	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	胴部	
5	弥生土器甕	—	—	—	—	橙色	—	頸部～胴部	
6	弥生土器壺	—	—	—	—	黄灰色	—	頸部～胴部	
7	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	
8	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	
9	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	
10	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	底部	
11	弥生土器壺	—	—	—	—	褐灰色	—	底部	
12	弥生土器壺	—	—	—	—	褐灰色	—	底部	
13	弥生土器鉢	14.9	5.3	7.3	ABE	浅黄橙色	A	60%	外面刷毛目後ミガキ赤彩。内面ミガキ後赤彩。 ミガキ。外面赤彩の痕跡。
14	弥生土器鉢	10.5	5.8	5.5	AHN	にぶい黄橙色	A	100%	
15	弥生土器鉢	(13.5)	7.8	6.0	AEHN	黒褐色	A	70%	
16	弥生土器片口鉢	10.8	11.5	6.5	AIN	黒褐色	A	100%	
17	弥生土器壺	—	—	10.1	AEN	にぶい橙色	A	30%	鉢に転用。
18	弥生土器壺	—	—	—	AEN	にぶい赤褐色	A	底部	
19	弥生土器壺	—	—	9.6	AJN	にぶい黄橙色	A	35%	
20	弥生土器壺	—	—	8.0	ACN	にぶい橙色	A	65%	
21	弥生土器甕	15.2	25.3	7.3	ENM	にぶい黄橙色	A	60%	櫛描簾状文、波状文。
22	弥生土器甕	(21.6)	29.8	6.8	ABN	黒褐色	A	70%	
23	打製石斧	長さ16.0	幅8.9	厚さ3.9	—	—	—	100%	重さ629.0g。頁岩製。
24	環状石斧	直径(6.9)	厚さ2.1	重さ120.0	—	—	—	20%	孔径(1.4)cm。安山岩製。
25	紡錘車	直径5.2	厚さ0.8	重さ9.4	—	—	—	50%	土製。

第3号住居跡（第10・11図、第3表）

110・111－166グリッドを中心に位置する。本遺構が、第4号住居跡を切っている。北側は調査区域外となっている。

平面形は、住居跡北側が調査区域外となっているため全体が把握できず、規模を測れるのは一方軸方向のみで、8.02mであった。やや台形に近い長方形のプランと推定される。主軸方向はおおよそN－10°－Eを指す。

床までの深さは約30cmで、埋土は自然堆積と思われる。

ピットは4つ検出されたが、各々柱穴であるかは不明である。深さは、P 1＝36cm、P 2＝54cm、P 3＝28cm、P 4＝57cmである。

炉、壁溝は検出できなかった。

出土遺物は、住居内東側に主に分布し比較的良好な土器が検出できた。弥生土器壺・甕・鉢・片口鉢、打製石斧、環状石斧、土製紡錘車が出土した。土器は多器種に及び、特に鉢が多く見られた。また、大型の壺の上半部を落とし鉢に転用しているものも見られた。

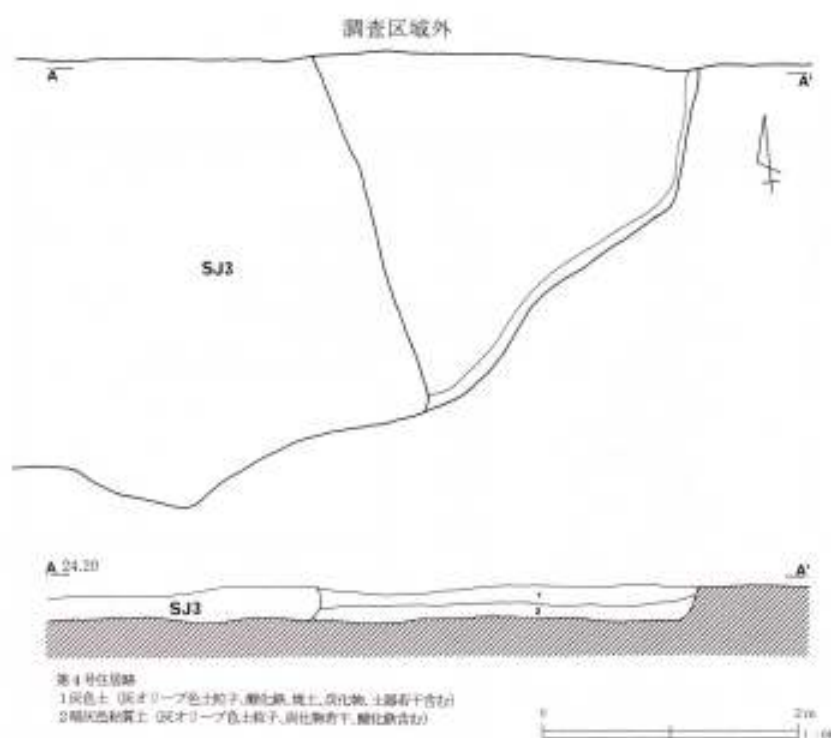
第4号住居跡（第12図、第4表）

109－166グリッドに位置する。本遺構が、大部分第3号住居跡に切られ、北側は調査区域外となっている。

平面形は、明らかにすることができなかった。主軸方向はおおよそN－18°－Wと推定される。

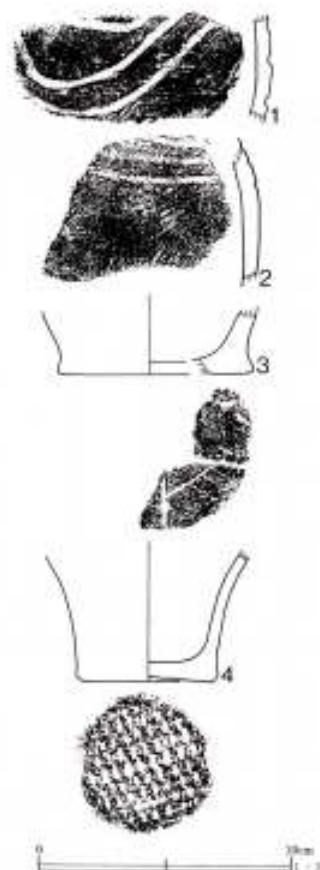
床までの深さは約26cm、埋土は自然堆積と思われる。

柱穴、炉、壁溝は検出できなかった。

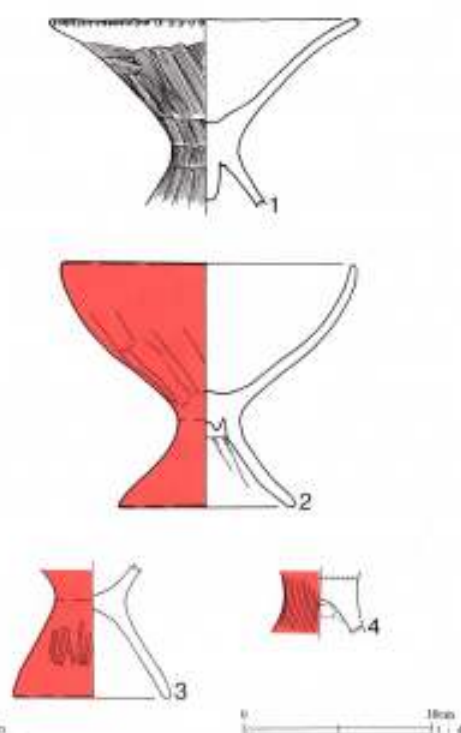
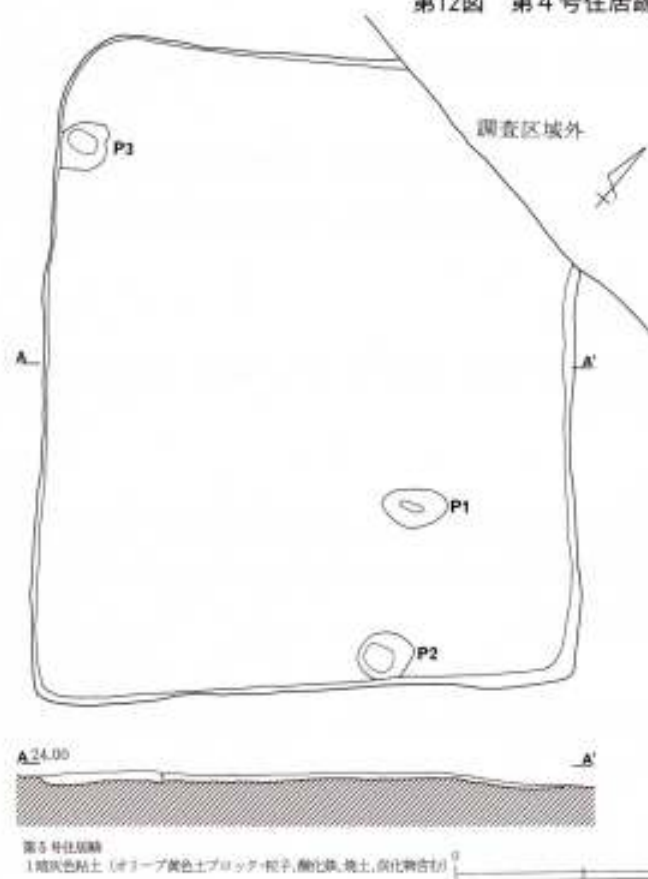


第4表 第4号住居跡出土遺物観察表

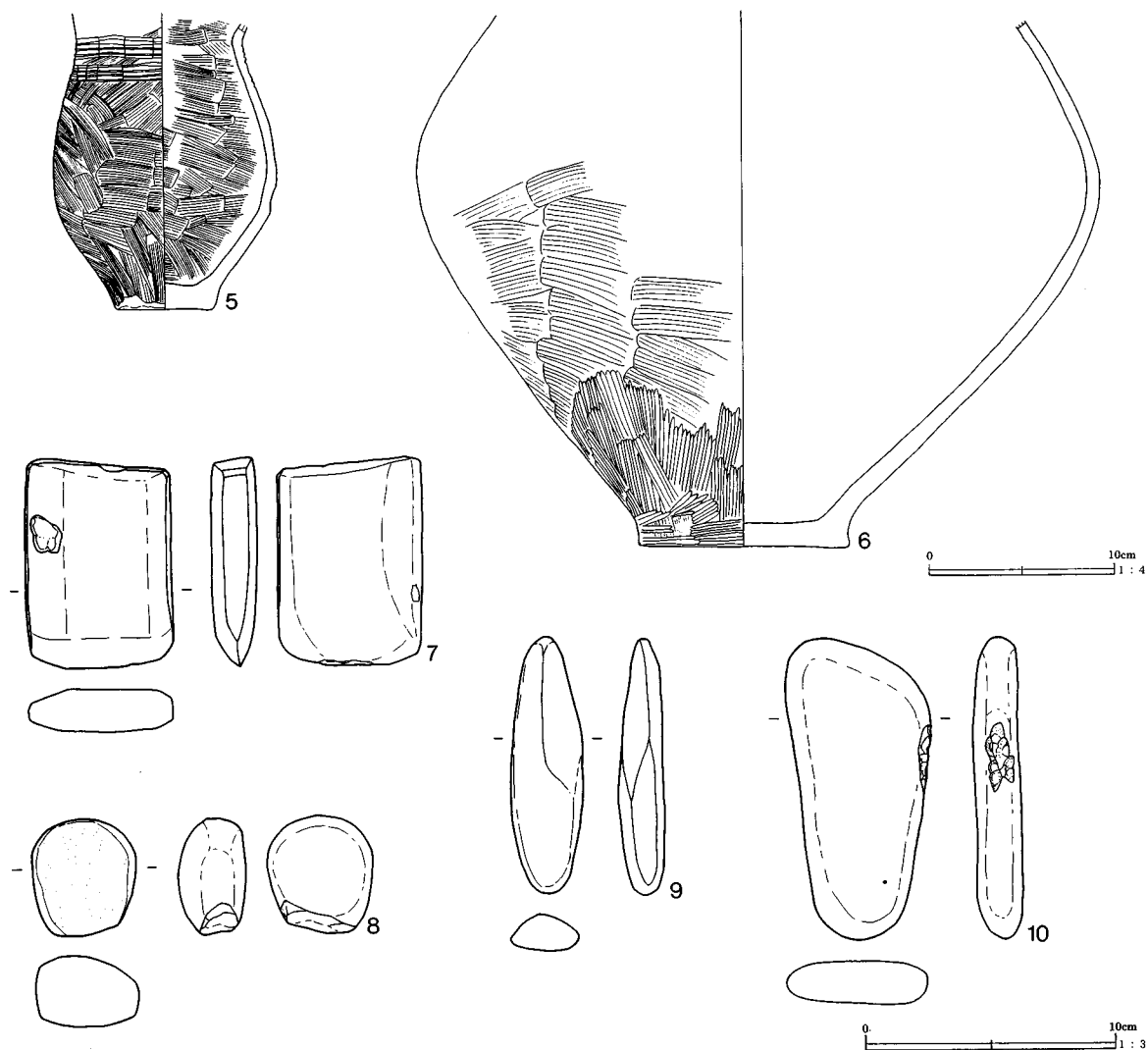
番号	器種	色調	残存率	備考
1	弥生土器蓋	灰白色	胴部	
2	弥生土器蓋	明褐灰色	胴部	
3	弥生土器蓋	にぶい褐色	底部	木葉痕。
4	弥生土器蓋	黒褐色	40%	網代痕。



第12図 第4号住居跡・出土遺物



第13図 第5号住居跡・出土遺物(1)



第14図 第5号住居跡出土遺物(2)

第5表 第5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器高坏	(16.4)	—	—	ABEM	にぶい橙色	B	50%	
2	弥生土器高坏	(15.6)	12.9	9.3	ABE	にぶい橙色	C	70%	外面赤彩。
3	弥生土器高坏	—	—	8.3	AB	明赤褐色	B	40%	外面赤彩。
4	弥生土器高坏	—	—	—	ABHI	赤褐色	B	脚台部	外面ミガキ後赤彩。
5	弥生土器壺	—	—	5.2	ABI	黒褐色	A	50%	櫛描簾状文。
6	弥生土器甕	—	—	(11.5)	ABE	にぶい橙色	C	55%	
7	磨製石斧	長さ8.2	幅5.8	厚さ1.8	—	—	—	—	重さ190.0g。側端部及び基部にタール附着。 扁平片刃石斧。石英斑岩製。
8	磨石	長さ4.5	幅4.2	厚さ2.8	—	—	—	—	重さ91.6g。表面平滑。緑色凝灰岩製。
9	磨石	長さ10.2	幅2.9	厚さ1.9	—	—	—	—	重さ70.8g。表面平滑。緑色凝灰岩製。
10	敲石	長さ12.0	幅5.7	厚さ1.9	—	—	—	—	重さ181.0g。一方端に敲打痕あり。砂岩製。

出土遺物はほとんどなく、弥生土器壺胴部・底部破片等が出土した。

第5号住居跡（第13・14図、第5表）

106・107－166・167グリッドに位置する。北側の隅が一部調査区域外となっている。

平面形は長軸5.00m、短軸4.20mの長方形のプランで、面積は21.00㎡を計る。主軸方向はおよそN－

42°-Wを指す。

床までの深さは約8cmで、埋土は自然堆積と思われる。

ピットは3つ検出されたが、これらが柱穴であるかは不明である。規模は、深さがP 1=33cm、P 2=15cm、P 3=20cmを計る。

炉、壁溝は検出されなかった。

出土遺物は、弥生土器高坏・壺・甕、磨製石斧、磨石、敲石等が出土した。高坏の出土が目立った。

第6号住居跡（第15図、第6表）

104-166・167グリッドに位置する。北及び東側のほとんどの部分が調査区域外となっている。

平面形は、南西角を残すのみで軸長は不明で、方形もしくは長方形のプランと推測される。主軸はおよそN-44°-Eを指す。

床までの深さは約20cmで、埋土は自然堆積と思われる。

柱穴はP 1のみ検出された。規模は径37×32cm、深さ62cmを測る。柱痕の遺存状態は良好で、直径10cm、長さ約47cmの柱材が検出された。

壁溝は住居跡の検出範囲をほぼ巡る形で検出され、西南壁やや北西寄りの位置でいったん途切れている。規模はおおよそ幅7cm、深さ10cmを測る。

炉は検出できなかった。

その他のピットの規模は、深さがP 2=30cm、P 3=33cmを測る。

出土遺物は、弥生土器高坏・壺・甕等が出土した。

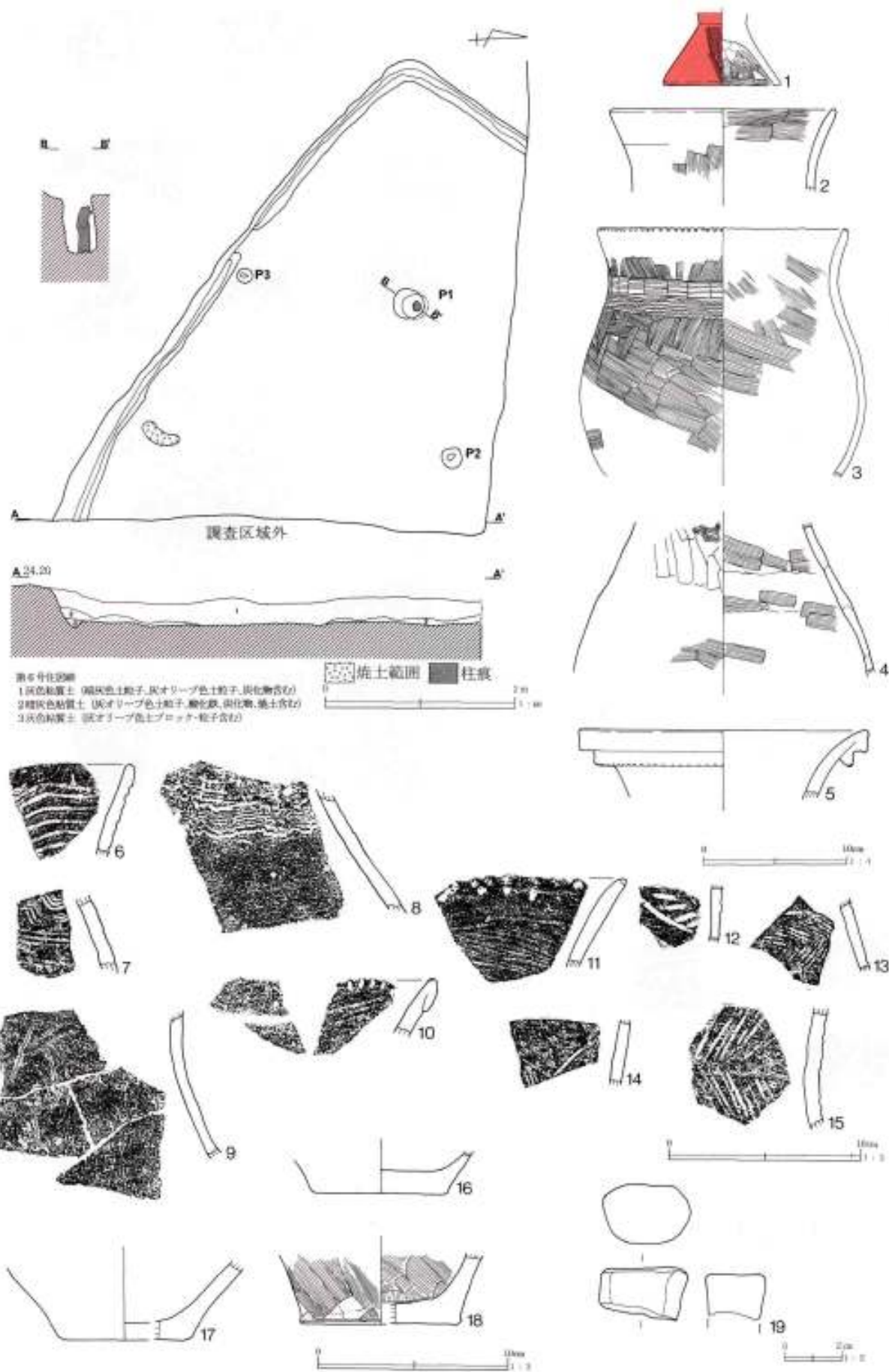
第7号住居跡（第16図、第7表）

121-167・168グリッドに位置する。本遺構が、第24号住居跡、第1号溝跡に切られる。南の隅が一部調査区域外となっている。

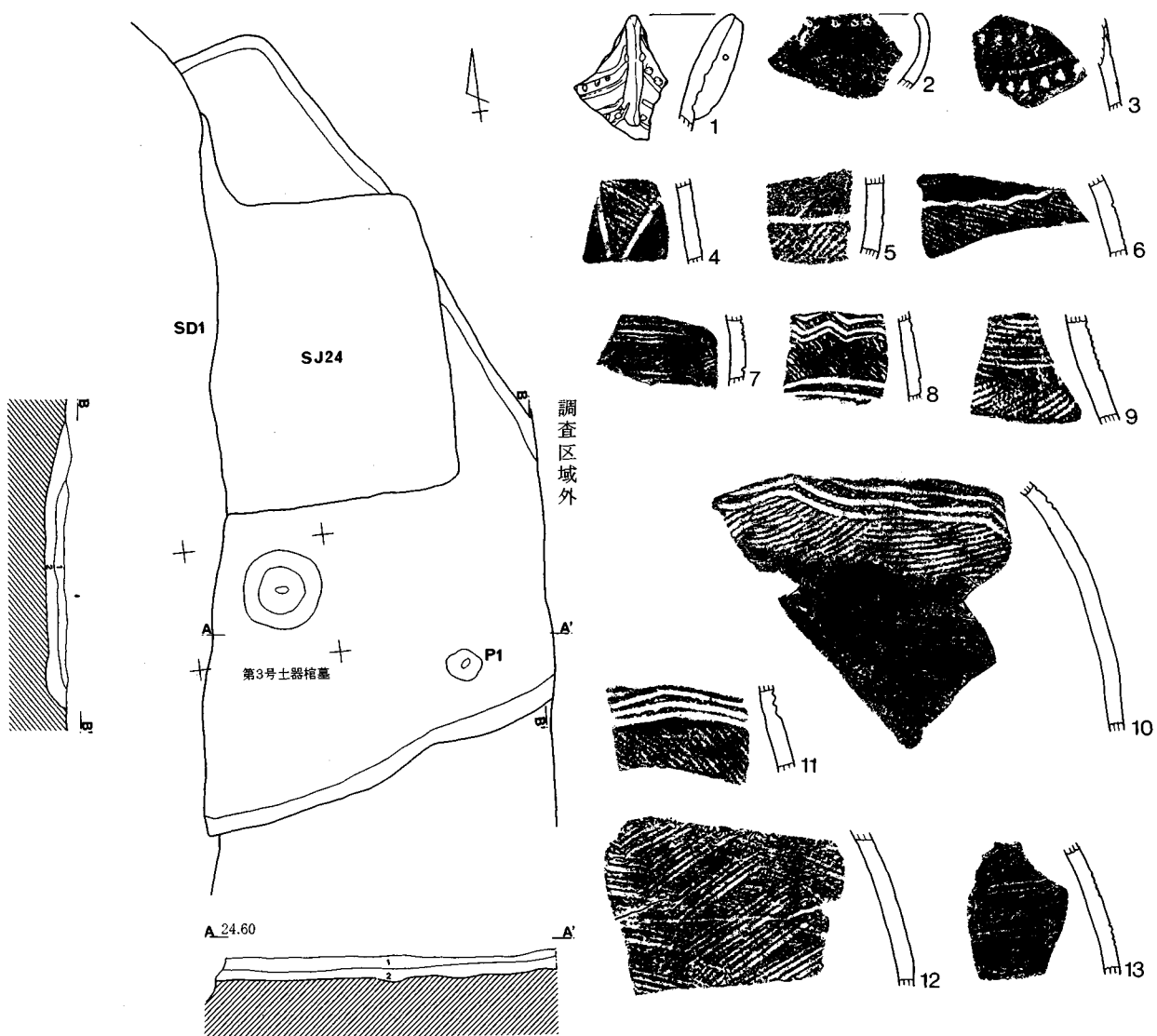
平面形は、軸長を測れる一方向で長さ6.20mを測り、長方形のプランであったと推測される。主軸はおよそN-13°-Wを指す。

第6表 第6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器高坏	—	—	8.2	AEGLM	橙色	A	30%	外面ミガキ後赤彩。
2	弥生土器甕	(16.0)	—	—	AIM	黒褐色	B	10%以下	
3	弥生土器壺	(17.7)	—	—	AEGJN	にぶい橙色	B	30%	櫛描簾状文、波状文。
4	弥生土器壺	—	—	—	AGJMN	にぶい黄褐色	B	20%	櫛描波状文。
5	弥生土器壺	(20.6)	—	—	AILM	橙色	B	10%以下	
6	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	口縁部	縄文。
7	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	胴部	
8	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	頸部～胴部	櫛描簾状文、波状文。
9	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	
10	弥生土器甕	—	—	—	—	褐灰色	—	口縁部	
11	弥生土器甕	—	—	—	—	黒褐色	—	口縁部	内外面ミガキ。
12	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	
13	弥生土器壺	—	—	—	—	浅黄褐色	—	胴部	平行沈線間に羽状RL縄文。
14	弥生土器甕	—	—	—	—	灰白色	—	胴部	沈線区画内にLR縄文。
15	弥生土器甕	—	—	—	—	灰褐色	—	胴部	
16	弥生土器甕	—	—	(7.0)	—	灰褐色	—	底部	
17	弥生土器壺	—	—	(7.2)	—	橙色	—	底部	
18	弥生土器壺	—	—	(8.5)	—	橙色	—	底部	
19	石製品	長さ1.6	幅3.1	厚さ2.1	—	—	—	欠損	重さ9.1g。軽石。

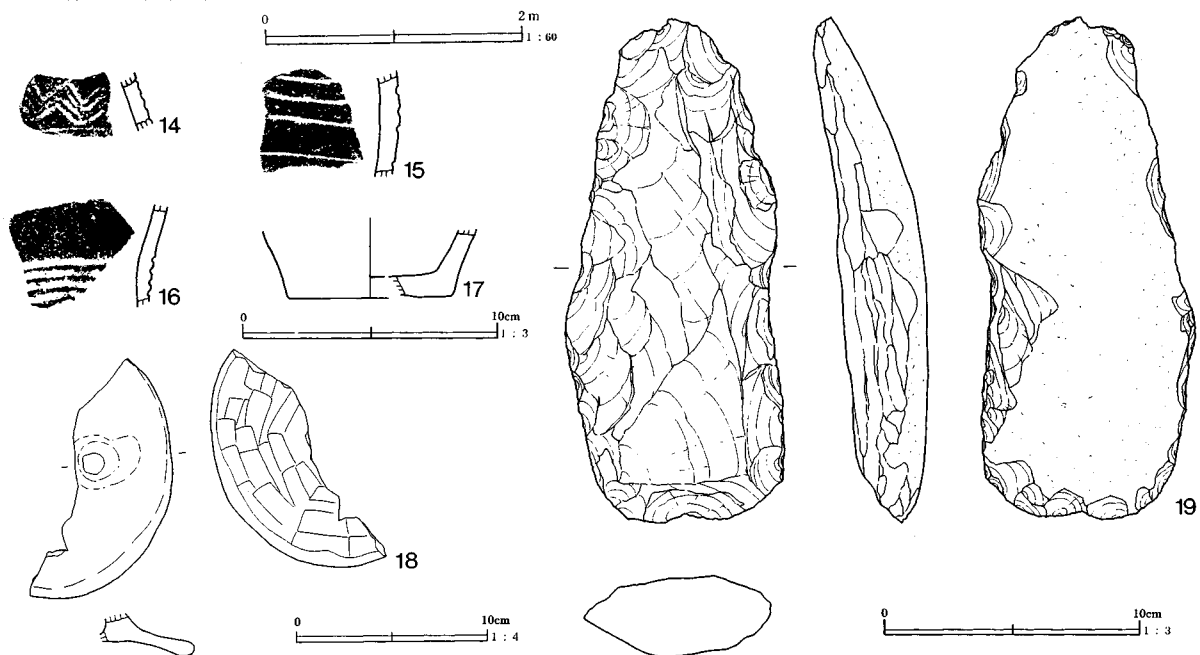


第15図 第6号住居跡・出土遺物



第7号住居跡

- 1 暗灰色土 (黒褐色土ブロック・粒子、酸化鉄、小礫、砂、焼土、土器若干含む)
 2 暗灰色土 (灰色砂、黒褐色土ブロック・粒子、砂多量、酸化鉄、小礫、焼土含む)



第16図 第7号住居跡・出土遺物

床までの深さは約18cmで、埋土は自然堆積と思われる。

ピットは、規模が径30×27cm、深さ20cmのものが検出されたが、これが柱穴にあたるかは不明である。壁溝、炉は検出できなかった。

住居内やや南壁寄りのピットから第3号土器棺が検出された。径67cm、深さ28cmのほぼ円形の掘り込みの中から出土しており、ほぼ住居床面直下から検出したことから、住居に伴うものと推測される。

出土遺物は、東南隅付近に主に分布し、川原石に混じって弥生土器高坏・壺・甕などが検出されたが、いずれも破片資料である。蓋と推測される土製品が出土した。また、打製石斧が1点出土した。

第8号住居跡（第17・18図、第8表）

122-170・171・172グリッドを中心に位置する。第1号溝跡に切られている。西壁側が調査区域外となっている。

平面形は、軸長を測れる一方向で長さ9.90mの長方形のプランと推定される。主軸はおよそN-11°-Wを指す。

床までの深さは約24cmで、埋土は自然堆積と思われる。

柱穴、壁溝、炉は検出されなかった。

その他ピットが6つ検出されたが、これらの規模は、深さがP1=15cm、P2=33cm、P3=21cm、P4=21cm、P5=21cm、P6=42cmを測る。

住居内南寄りに、炭化材が若干焼土と伴に散っていた。

出土遺物は、破片資料ではあるが比較的多く検出され、弥生土器高坏・壺・甕が出土した。

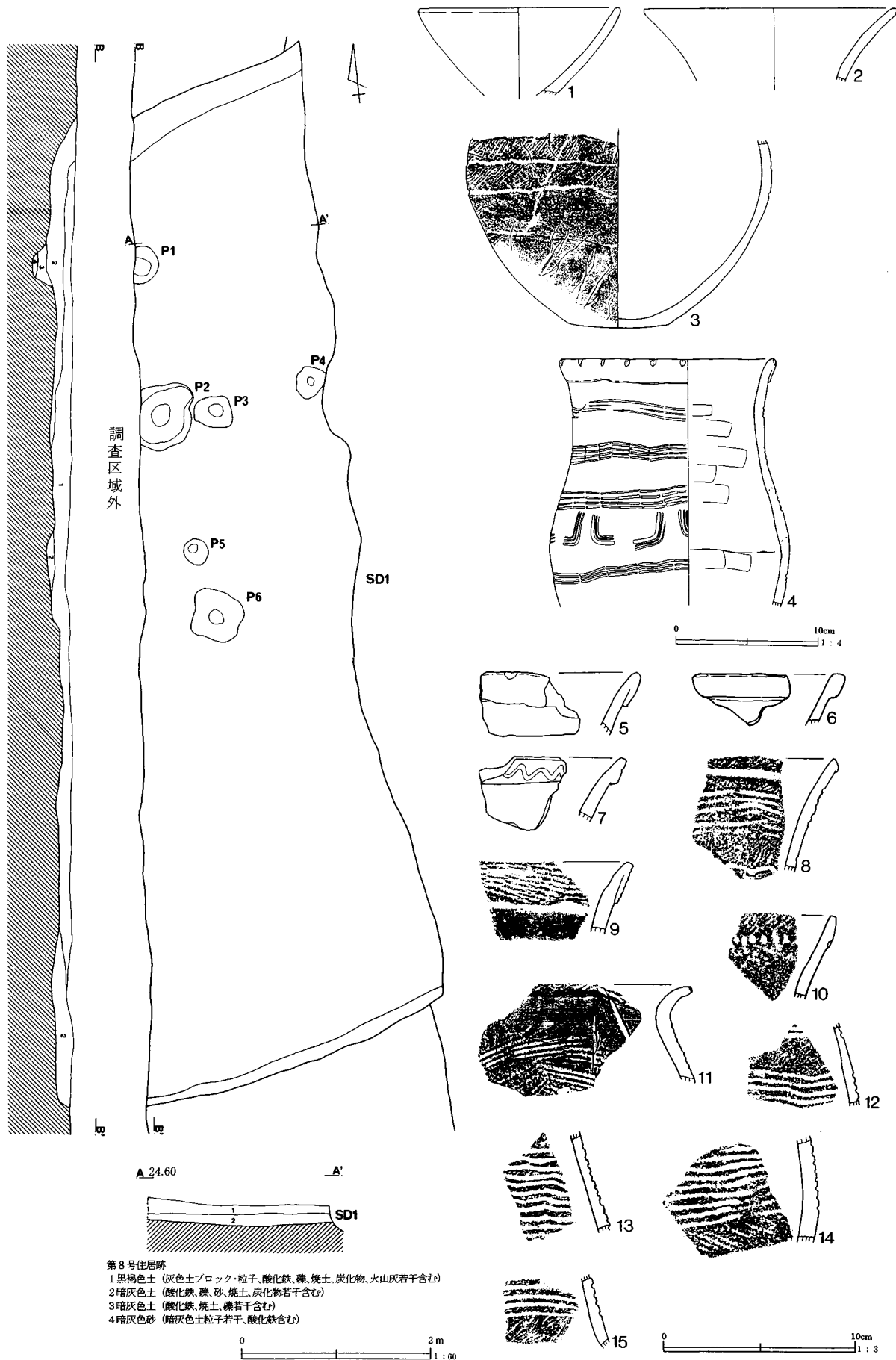
第9号住居跡（第19～23図、第9表）

102-171グリッドを中心に位置する。第1号掘立柱列第1号ピットに南隅を切られる。西側が調査区域外となっている。

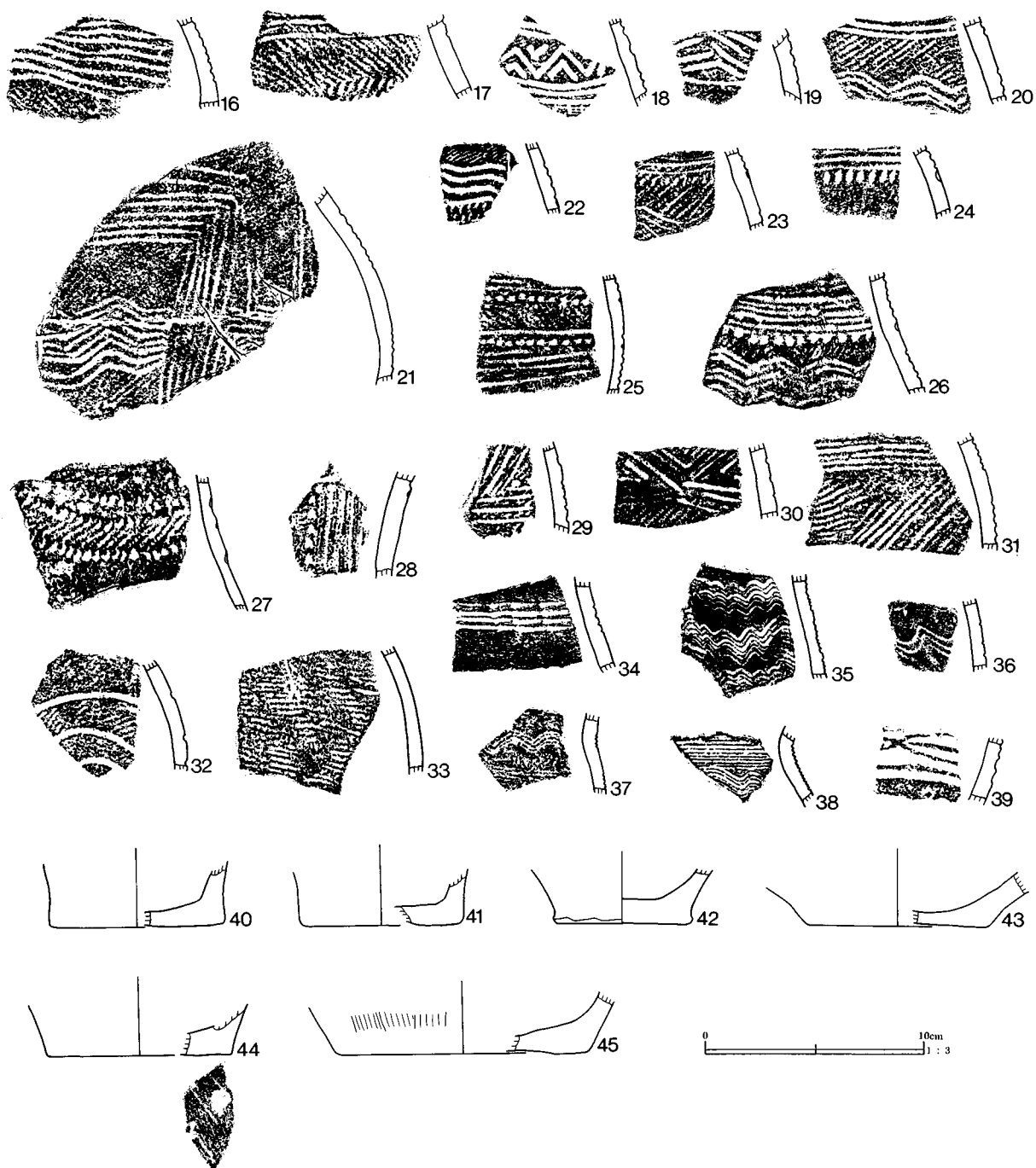
平面形は、軸長が測れる一方向で長さ6.30mで方形もしくは長方形のプランと推測される。主軸はお

第7表 第7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	縄文土器深鉢	—	—	—	—	にぶい褐色	—	口縁部	沈線文区画内にRL縄文、磨消縄文。 LR縄文。 RL縄文。 RL縄文。 地文RL縄文施文。 LR縄文。 地文LR縄文。 LR縄文。 櫛描波状文。 櫛描簾状文。 内面ヘラケズリ 重さ718.0g。頁岩製。
2	弥生土器高坏	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	口縁部	
3	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	
4	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	
5	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	
6	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	
7	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	
8	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	
9	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	頸部	
10	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	
11	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	
12	弥生土器壺	—	—	—	—	灰褐色	—	胴部	
13	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	
14	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	
15	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	
16	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	頸部	
17	弥生土器壺	—	—	(6.5)	—	明赤褐色	—	底部	
18	弥生土器蓋	—	—	—	ABDH	にぶい橙色	B	35%	
19	打製石斧	長さ20.0	幅8.5	厚さ3.2	—	—	—	—	



第17図 第8号住居跡・出土遺物(1)



第 18 図 第 8 号住居跡出土遺物(2)

第 8 表 第 8 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
1	弥生土器高坏	(14.4)	—	—	AIMQ	にぶい黄橙色	C	10%	波状沈線文区画内に L R 縄文。下半ミガキ？ 櫛描簾状文。櫛描八字状文 6 単位。
2	弥生土器壺	(17.9)	—	—	AM	にぶい橙色	B	10%	
3	弥生土器壺	—	—	7.1	AEJ	にぶい褐色	A	25%	
4	弥生土器甕	(15.4)	—	—	AEJ	にぶい橙色	A	20%	
5	弥生土器	—	—	—	—	黒褐色	—	口縁部	

6	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	口縁部	
7	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	口縁部	
8	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	口縁部	
9	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	口縁部	無節LR縄文。
10	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	口縁部	口縁部LR縄文。
11	弥生土器甕	—	—	—	—	灰褐色	—	口縁部	口唇部RL縄文。
12	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	
13	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	頸部	地文LR縄文。
14	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	RL縄文。
15	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	地文RL縄文。
16	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	RL縄文。
17	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	RL縄文。
18	弥生土器壺	—	—	—	—	暗灰黄色	—	頸部	地文LR縄文。
19	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	縄文？
20	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	LR縄文。
21	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	沈線文区画内にLR縄文。
22	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	LR縄文部赤彩。
23	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	LR縄文。
24	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	
25	弥生土器壺	—	—	—	—	黄灰色	—	胴部	
26	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	頸部	
27	弥生土器壺	—	—	—	—	灰褐色	—	頸部	LR縄文。
28	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	
29	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	
30	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	RL縄文。
31	弥生土器壺	—	—	—	—	褐色	—	胴部	LR縄文。
32	弥生土器壺	—	—	—	—	褐灰色	—	胴部	沈線渦巻文区画内にLR縄文。
33	弥生土器壺	—	—	—	—	褐灰色	—	胴部	LR縄文。
34	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄褐色	—	頸部	櫛描簾状文。
35	弥生土器甕	—	—	—	—	黒色	—	胴部	櫛描波状文。
36	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	櫛描波状文。
37	弥生土器甕	—	—	—	—	浅黄色	—	頸部	櫛描波状文、簾状文。
38	弥生土器甕	—	—	—	—	灰褐色	—	頸部	櫛描波状文。
39	弥生土器鉢	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	
40	弥生土器壺	—	—	(8.0)	—	灰黄褐色	—	底部	
41	弥生土器壺	—	—	(7.4)	—	にぶい黄褐色	—	底部	
42	弥生土器壺	—	—	(6.5)	—	にぶい赤褐色	—	底部	
43	弥生土器壺	—	—	(8.3)	—	褐灰色	—	底部	
44	弥生土器壺	—	—	(8.5)	—	浅黄褐色	—	底部	木葉痕。
45	弥生土器甕	—	—	(11.7)	—	にぶい褐色	—	底部	外面刷毛目。底部ヘラケズリ。

よそN-39°-Eを測る。

床までの深さは約45cmで、埋土は自然堆積と思われる。

柱穴はP 1のみ検出された。規模は径52×42cmで、深さおよそ70cmを測る。柱痕の遺存状態は非常に良く、直径15cm、長さ62cm程の柱材が検出された。

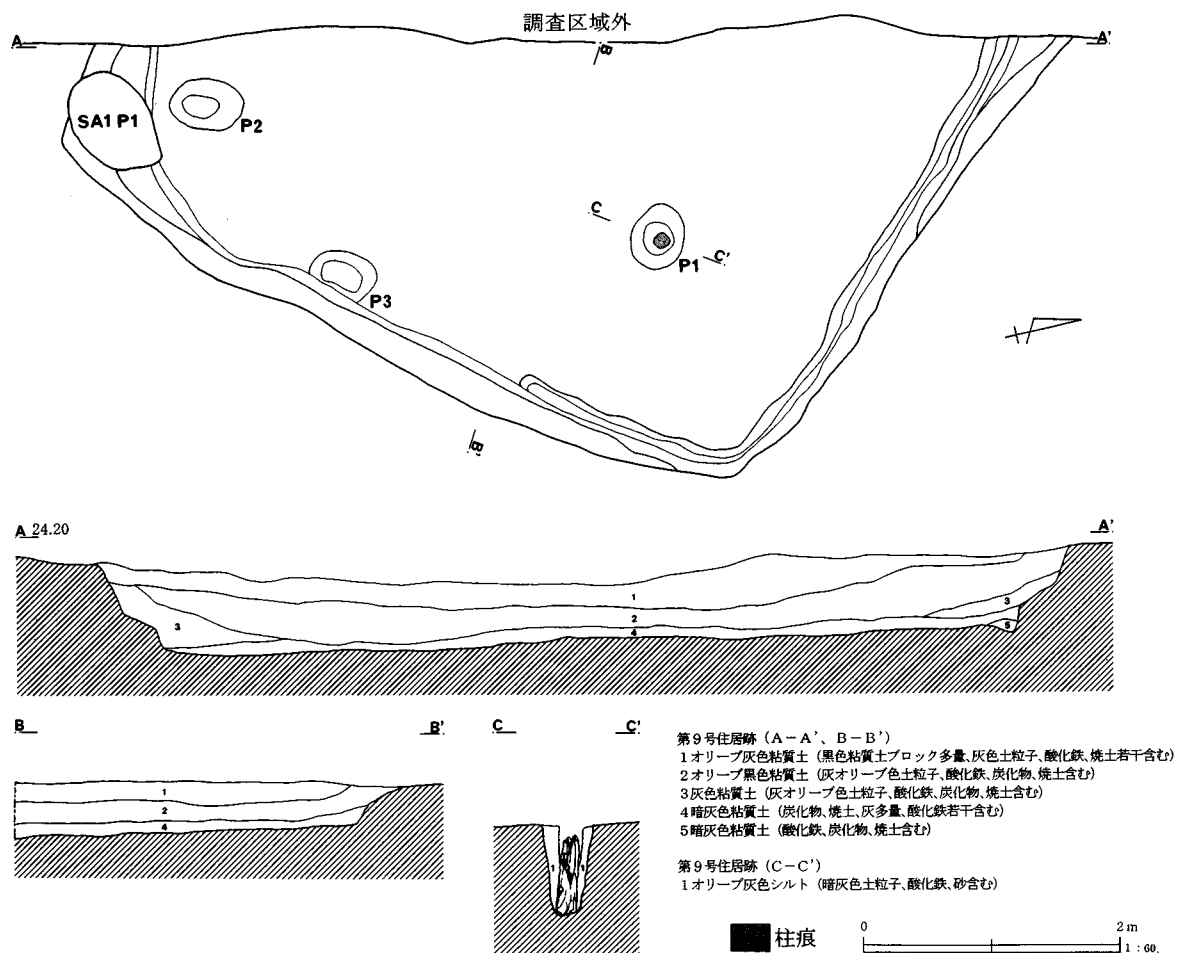
その他のピットは、深さP 2=10cm、P 3=46cmである。P 3からは、弥生土器壺が出土した。

壁溝は、北東壁から南東壁ほぼ中央にかけて検出された。規模はおよそ幅8cm、深さ5cmである。

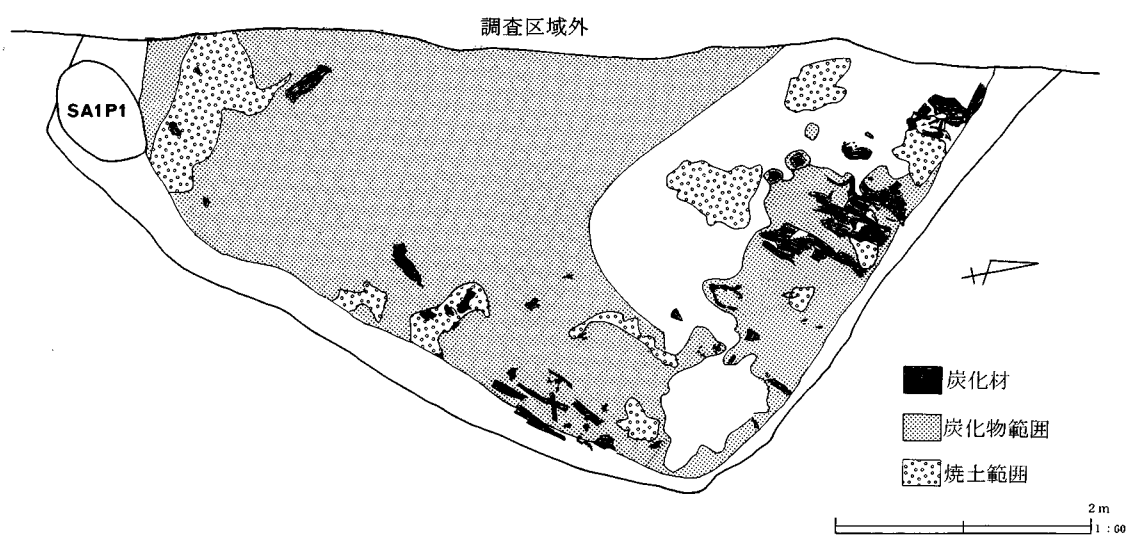
床面はほぼ全面炭化物、焼土で覆われていることから、焼失住居と考えられる。建材の一部（壁の補強材もしくは屋根の材か？）と思われる炭化材も多く出土している。

炉は検出できなかった。

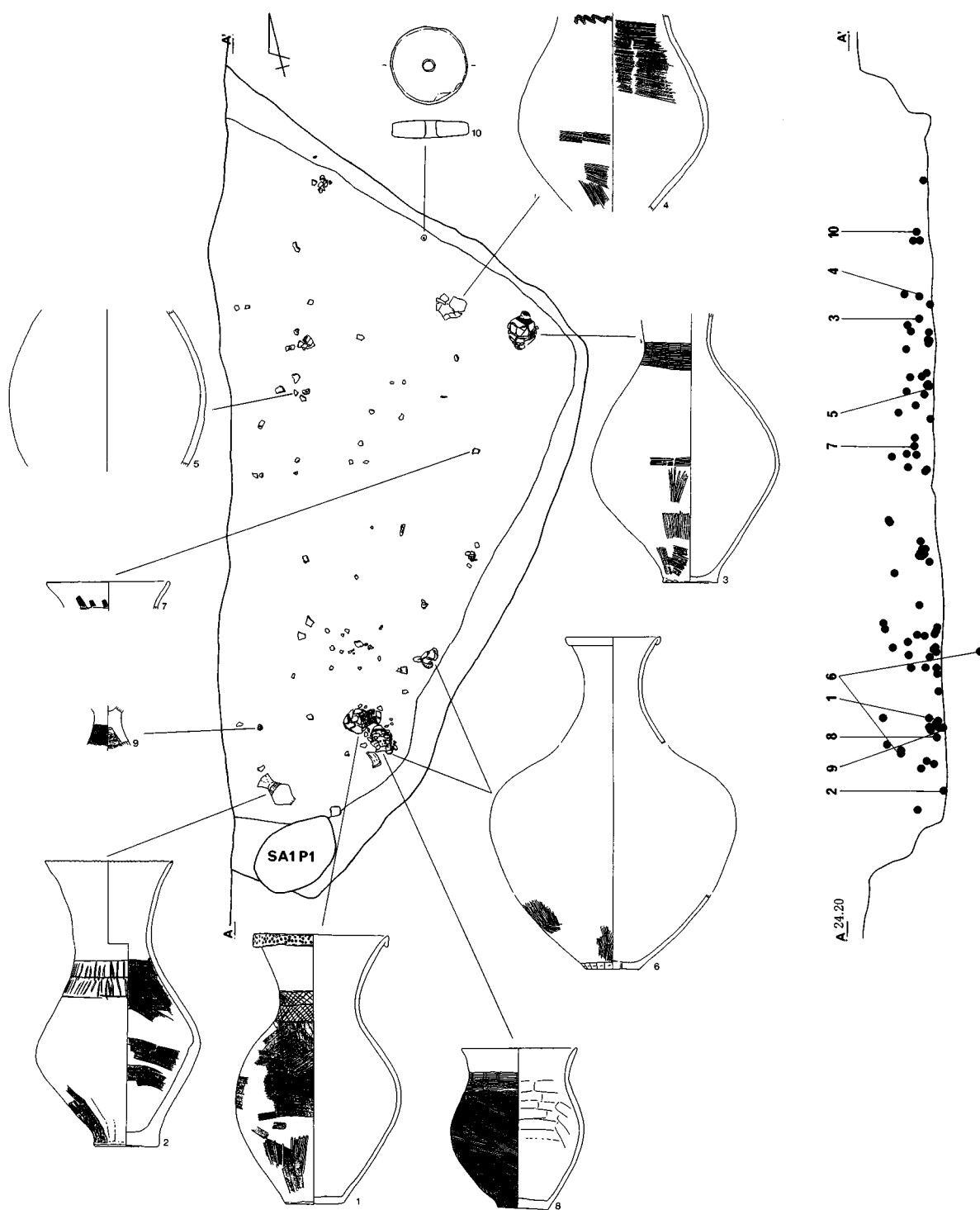
出土遺物は、床面直上の主に壁そばに比較的多くしかも極めて良好な状態で検出された。弥生土器高坏・壺・甕、土製紡錘車などが出土した。なかでも壺はまとまって良好なものである。



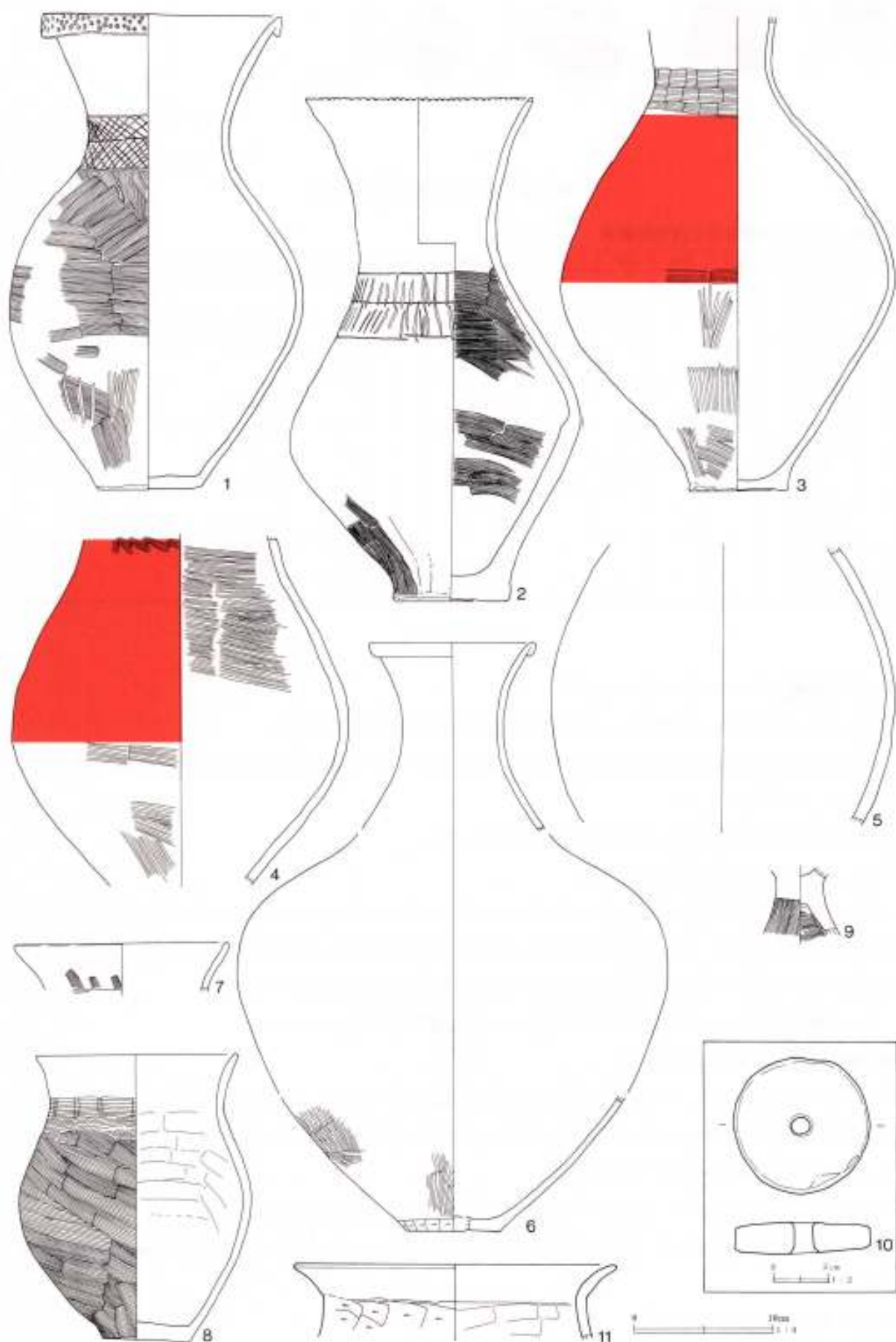
第19図 第9号住居跡



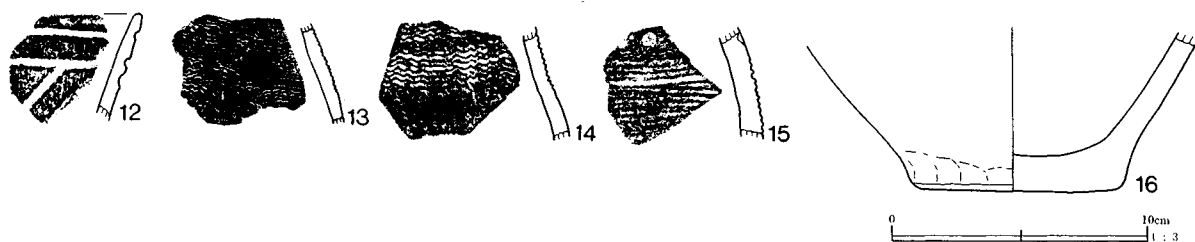
第20図 第9号住居跡炭化材・焼土分布状況図



第21図 第9号住居跡遺物分布図



第22図 第9号住居跡出土遺物(1)



第23図 第9号住居跡出土遺物(2)

第9表 第9号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	17.1	34.4	7.3	GM	にぶい橙色	A	90%	口縁部竹管文。頸部ヘラ描交差文。
2	弥生土器壺	(16.3)	41.5	8.2	JN	浅黄橙色	B	70%	
3	弥生土器壺	—	—	(7.1)	AGM	褐灰色	C	80%	櫛描波状文。胴上半部赤彩。
4	弥生土器壺	—	—	—	ABDKN	灰白色	B	40%	櫛描波状文。胴上半部赤彩の痕跡。
5	弥生土器壺	—	—	—	DM	浅黄橙色	A	40%	
6	弥生土器壺	(16.0)	(57.4)	(9.0)	ABDHGN	にぶい黄橙色	B	40%	
7	弥生土器甕	(15.6)	—	—	AE	赤灰色	B	—	櫛描波状文。
8	弥生土器甕	14.4	20.8	6.2	ABEN	にぶい赤褐色	C	100%	櫛描波状文、波状文。
9	弥生土器高坏	—	—	—	ABEH	暗赤色	A	20%	
10	紡錘車	径4.9	厚さ1.2	重さ29.7	—	—	—	—	土製。
11	土師器甕	(23.4)	—	—	ADHK	橙色	A	10%	混入品。
12	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	—	口縁部	
13	弥生土器甕	—	—	—	—	黒色	—	頸部	櫛描波状文。
14	弥生土器壺	—	—	—	—	橙色	—	胴部	櫛描波状文。
15	弥生土器甕	—	—	—	—	浅黄橙色	—	胴部	
16	弥生土器壺	—	—	(7.9)	—	にぶい橙色	—	底部	

第10号住居跡（第24～26図、第10表）

126-164、127-164・165グリッドに位置する。第18号住居跡に切られる。

平面形は長軸約5.58m、短軸5.15mのほぼ正方形のプランで、面積は28.74m²を測る。主軸方向はおおよそN-88°-Wを指す。

床までの深さは約32cmで、埋土は自然堆積と思われる。

柱穴、壁溝、炉は検出できなかった。

出土遺物は、大部分第18号住居跡に切られていたにもかかわらず大量に検出できた。焼土や炭化物が広がる箇所に土師器器台・高坏・甕等を検出したほか、弥生土器壺等の破片が混じっていた。器台・高坏の出土が目立った。さらに、他時期の遺物として土師器器台付甕も混入していた。

また、特殊遺物としては、滑石製剣形模造品、碧玉製管玉が出土した。

第11号住居跡（第27図、第11表）

124・125-164・165グリッドに位置する。第17号住居跡に切られる。北側は調査区域外となっている。

平面形は、軸長を測れる一方向で、長さ5.77mを測るやや不整形の長方形プランであったと推測される。主軸方向はおおよそN-30°-Wを指す。

床までの深さは約45cmで、床面はかなり起伏が激しい。埋土は自然堆積と思われる。

ピットが1つ検出されたが、それが柱穴にあたるかは不明である。規模は、径57×53cm、深さ約40cmを測る。

壁溝、炉は検出されなかった。

出土遺物は少なく、土師器高坏・甕のほか、弥生土器壺・甕等の破片が混じっていた。さらに、他時期の遺物として土師器台付甕が混入していた。

第12号住居跡（第28～30図、第12表）

120・121－165・166グリッドに位置する。第20号住居跡、第1・12号溝跡、第5号土坑に切られる。東側は調査区域外となっている。

平面形は、軸長が測れる一方向で、長さ7.60mを測る長方形のプランであったと推測される。主軸方向はおおよそN－27°－Eを指す。

床までの深さは約32cmで、埋土は自然堆積と思われる。

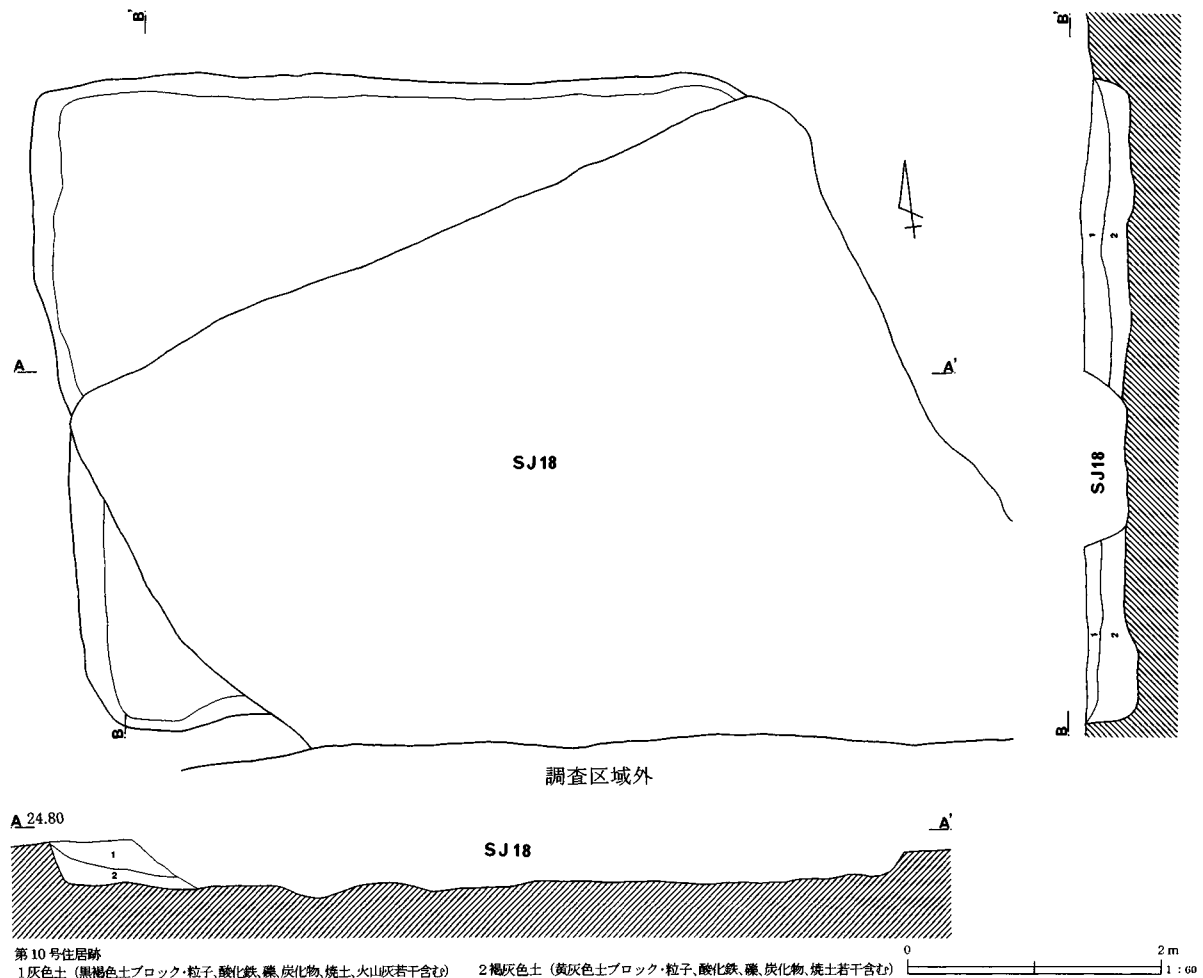
柱穴、壁溝、炉は検出できなかった。

出土遺物は、ほぼ全体に分布し非常に多かった。土師器埴・高坏・甕・壺・甕等の多器種のほか、弥生土器壺等の破片が混じっていた。なかでも高坏の出土が目立った。また、碧玉製管玉、砥石が出土した。

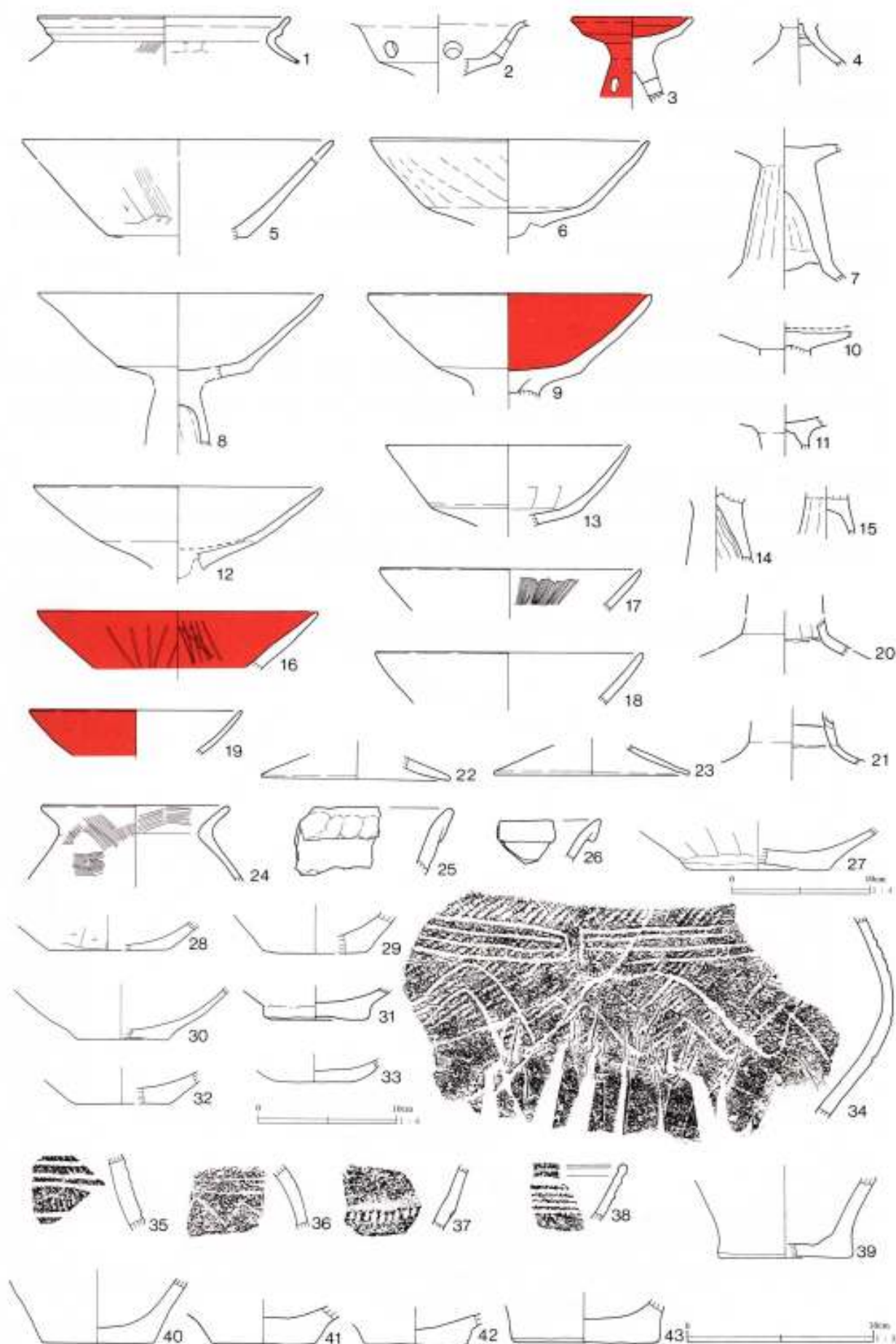
第13号住居跡（第31図、第13表）

122－167・168グリッドに位置する。第1号溝跡に切られる。西側は調査区域外となっている。

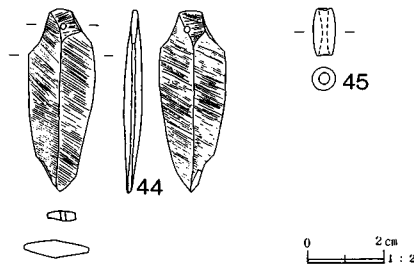
平面形はほとんど明らかにすることができなかったが、軸長の測れる一方向で約4.88mのやや台形に



第24図 第10号住居跡



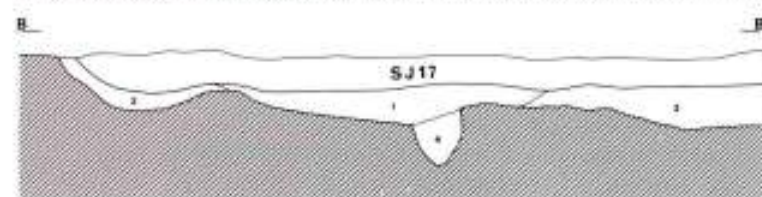
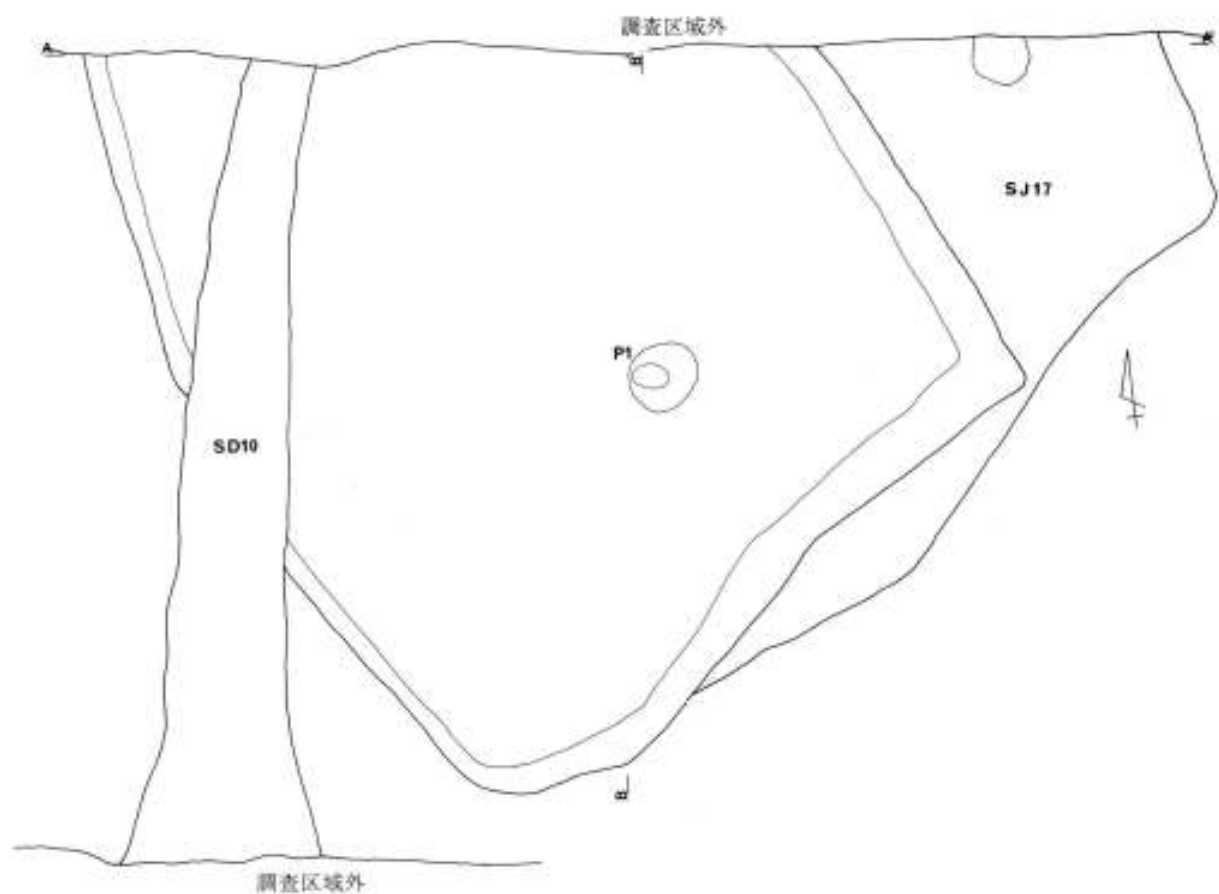
第25図 第10号住居跡出土遺物(1)



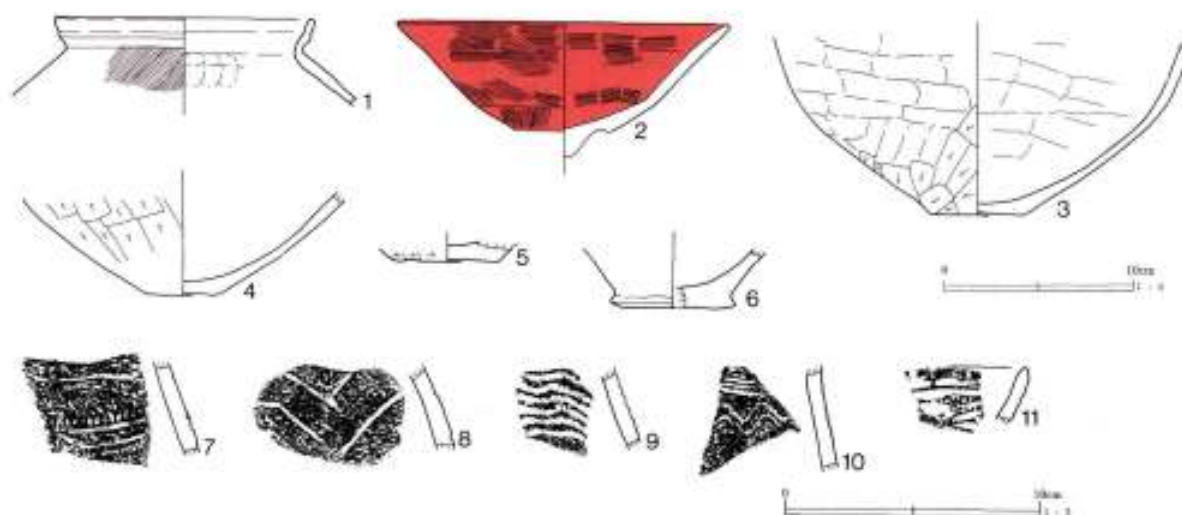
第 26 図 第 10 号住居跡出土遺物(2)

第 10 表 第 10 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
1	土師器台付甕	(18.4)	—	—	AEJ	にぶい橙色	A	10%以下	坏部 5 方向スカシ孔(推定)。3 方向にスカシ孔。内外面赤彩の痕跡。
2	土師器器台	—	—	—	AEHM	橙色	C	20%	
3	土師器器台	(8.9)	—	—	ABEIJ	橙色	B	65%	
4	土師器器台	—	—	—	EMN	浅黄橙色	C	30%	
5	土師器高坏	—	—	—	AEIM	にぶい赤褐色	B	10%	
6	土師器高坏	(20.4)	—	—	AEGHMN	橙色	A	20%	
7	土師器高坏	—	—	—	AEIKMN	橙色	A	30%	
8	土師器高坏	20.7	—	—	AGMN	にぶい黄橙色	C	65%	
9	土師器高坏	20.8	—	—	AHKN	赤褐色	C	70%	
10	土師器高坏	—	—	—	AEHM	橙色	B	10%	
11	土師器高坏	—	—	—	AEM	明黄褐色	B	10%以下	脚部外面ヘラナデ。内面赤彩。内面剥離。
12	土師器高坏	(21.0)	—	—	EIH	明赤褐色	B	10%	
13	土師器高坏	17.8	—	—	AEGM	にぶい橙色	C	60%	
14	土師器高坏	—	—	—	AMN	赤色	B	15%	
15	土師器高坏	—	—	—	AMN	赤褐色	C	10%	
16	土師器高坏	(20.4)	—	—	AJHN	にぶい赤褐色	A	40%	
17	土師器高坏	(19.2)	—	—	AGKMN	明赤褐色	B	20%	
18	土師器高坏	(19.7)	—	—	AJMN	明赤褐色	A	10%	
19	土師器高坏	(15.5)	—	—	AEHJ	明赤褐色	B	10%	
20	土師器高坏	—	—	—	AIJ	明赤褐色	A	10%以下	脚部内面棒状工具による整形。脚部外面ヘラナデ。内外面ミガキ後赤彩。内面ミガキ。外面赤彩。
21	土師器高坏	—	—	—	AEH	橙色	C	10%	
22	土師器高坏	—	—	(13.8)	AM	にぶい黄橙色	C	10%以下	
23	土師器高坏	—	—	(14.3)	AGHMN	にぶい赤褐色	B	10%	
24	土師器甕	(13.7)	—	—	GHMN	にぶい褐色	B	10%以下	
25	土師器甕	—	—	—	AEGJMN	にぶい褐色	A	10%以下	
26	土師器甕	—	—	—	AEG	明黄褐色	C	10%以下	
27	土師器甕	—	—	(10.5)	ABEIJN	にぶい赤褐色	A	底部	
28	土師器甕	—	—	(8.8)	ABEIN	暗赤褐色	A	底部	
29	土師器甕	—	—	(7.5)	ABI	浅黄橙色	C	底部	
30	土師器甕	—	—	(6.6)	ADMN	橙色	D	底部	折り返し口縁部外面指頭圧痕。
31	土師器甕	—	—	7.5	AEJN	にぶい褐色	B	底部	
32	土師器甕	—	—	(7.0)	AMN	明赤褐色	C	底部	
33	土師器甕	—	—	5.6	ABHN	明赤褐色	C	底部	
34	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	
35	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	
36	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	
37	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	
38	弥生土器鉢	—	—	—	—	灰黄褐色	—	口縁部	
39	弥生土器壺	—	—	(7.2)	—	にぶい橙色	—	底部	外面赤彩。
40	弥生土器壺	—	—	(6.0)	—	橙色	—	底部	
41	弥生土器壺	—	—	(5.6)	—	橙色	—	底部	
42	弥生土器壺	—	—	(5.5)	—	にぶい赤褐色	—	底部	
43	弥生土器壺	—	—	(8.0)	—	にぶい褐色	—	底部	
44	剣形模造品	長さ 4.6	幅 1.7	厚さ 0.5	—	—	—	一部欠損	
45	管玉	長さ 1.3	直径 0.6	重さ 0.8	—	—	—	100%	



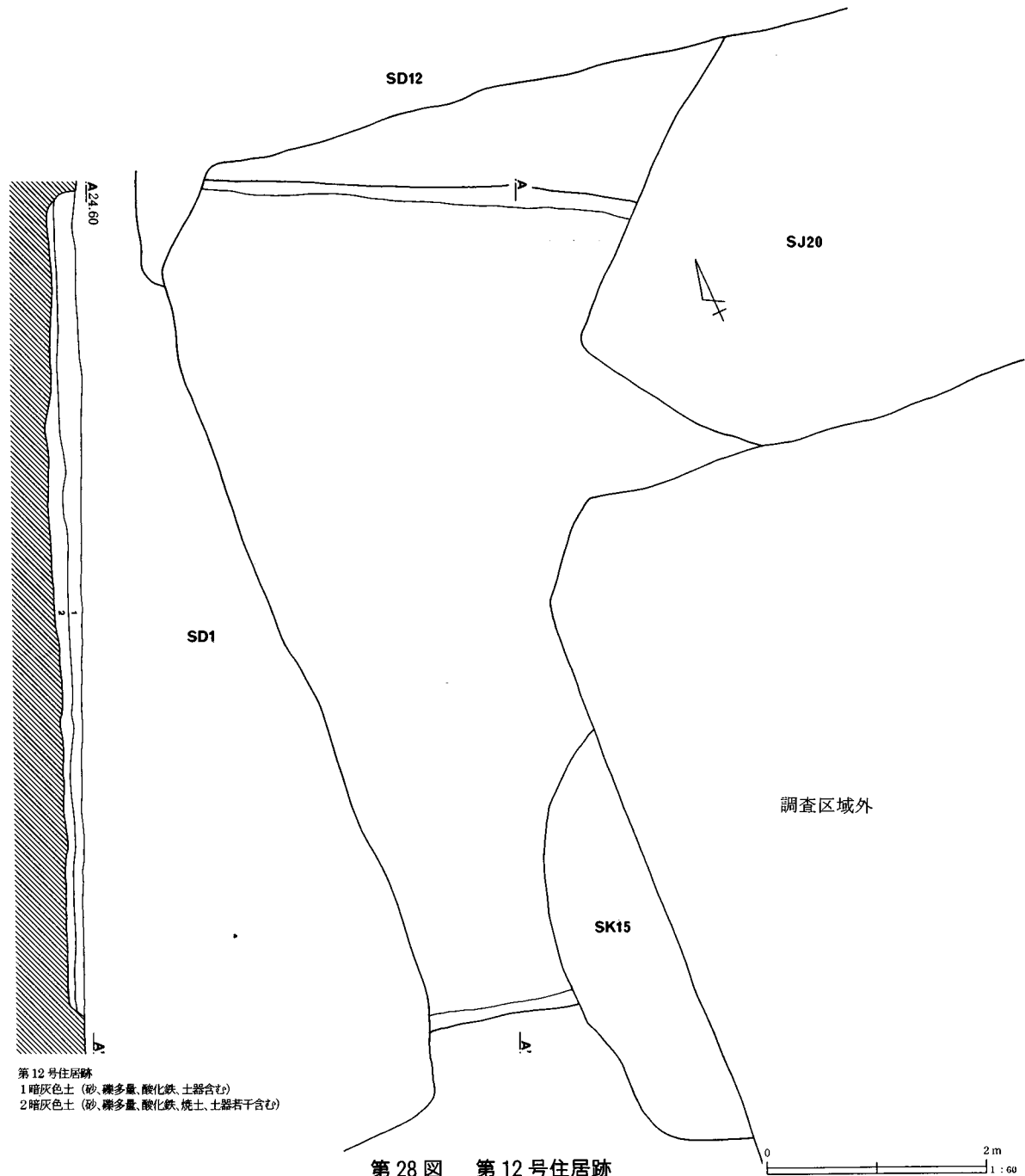
- 第11号住居跡
- 1 黄褐色土 (礫土、砂、礫、粘土、炭化物、土器含む)
 - 2 灰褐色土 (礫土、砂、炭化物、土器含む)
 - 3 暗灰色土 (礫土、砂、粘土、炭化物含む)
 - 4 暗灰色砂質土 (礫土、砂、炭化物含む)

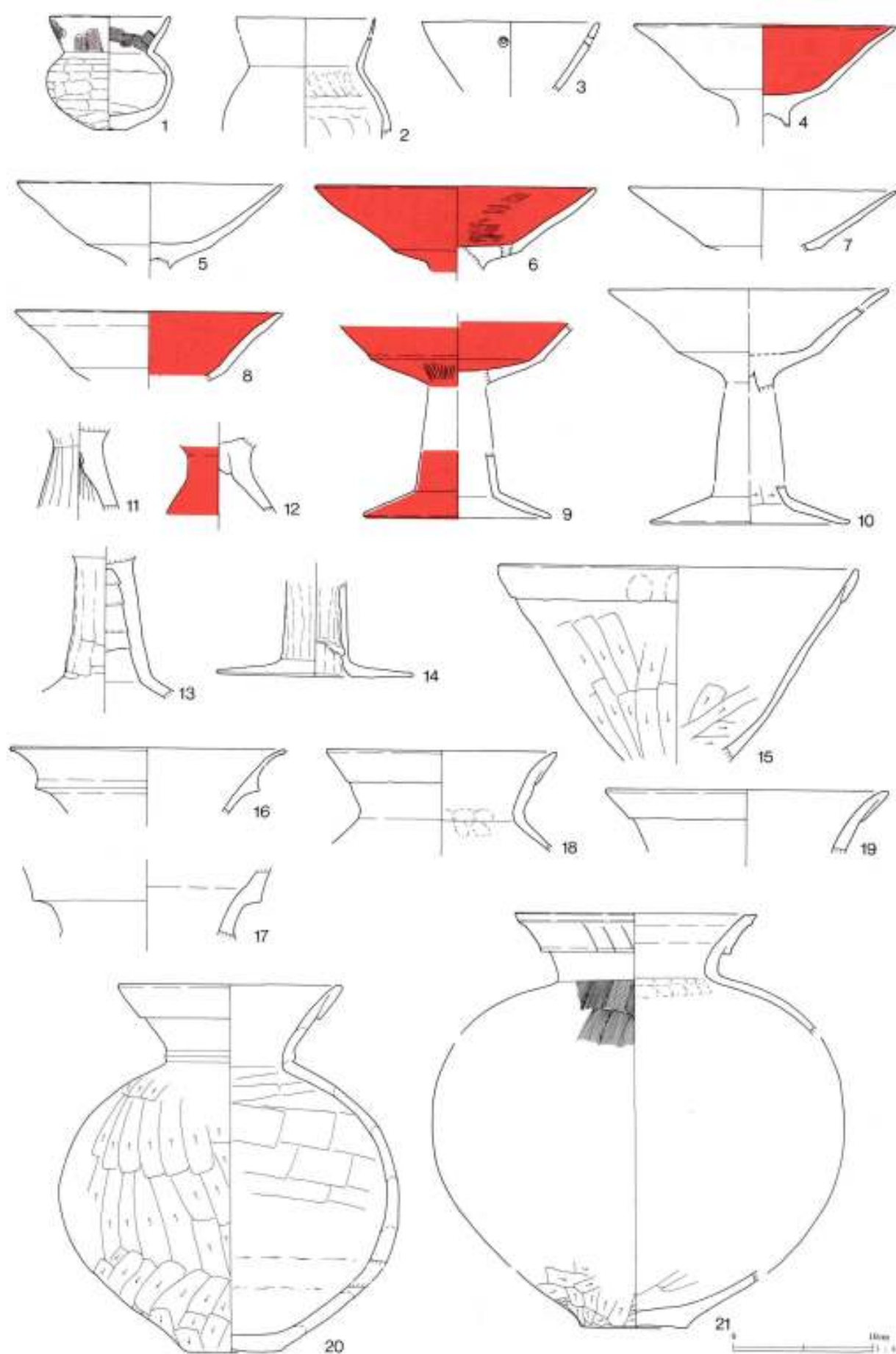


第27図 第11号住居跡・出土遺物

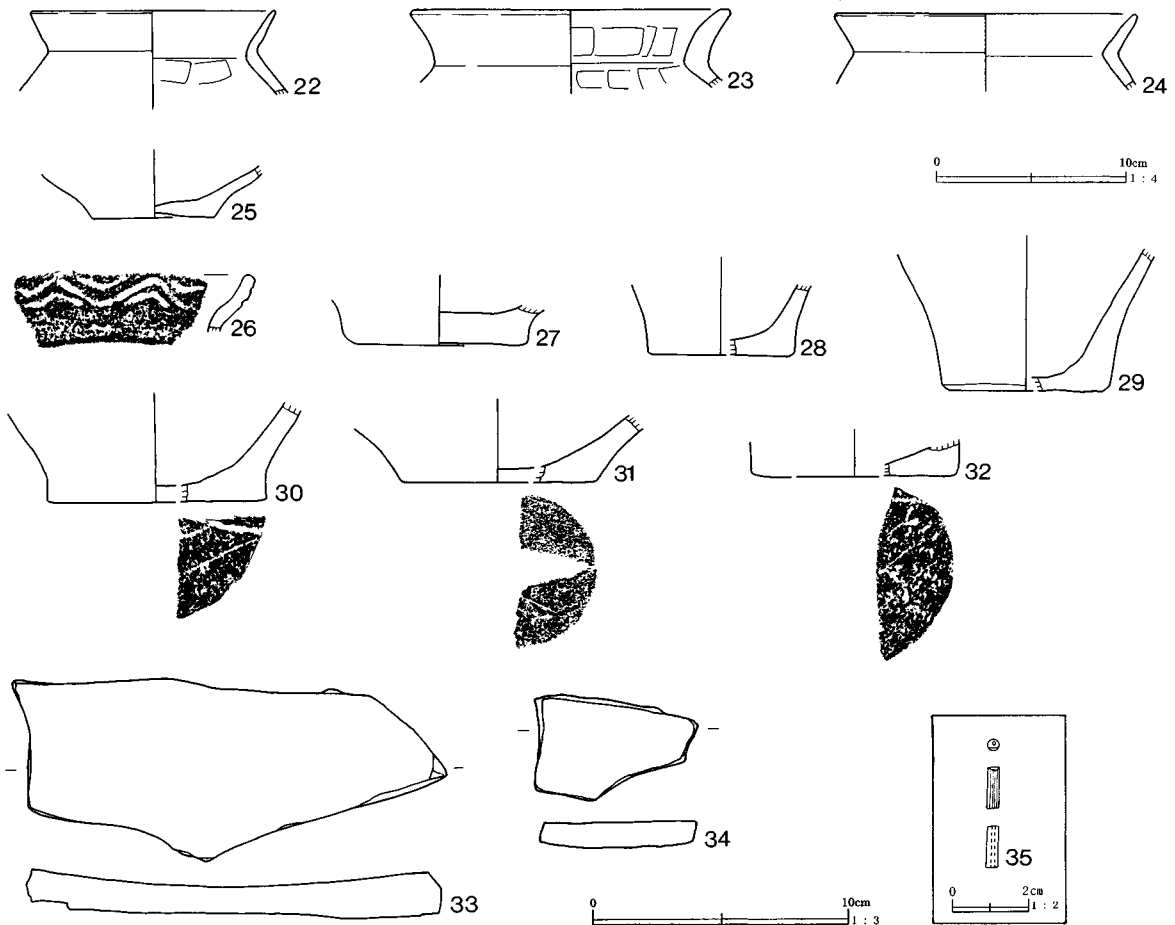
第 11 表 第 11 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
1	土師器台付甕	(13.7)	—	—	AJH	にぶい黄褐色	B	10%以下	内外面赤彩。
2	土師器高坏	(17.7)	—	—	ADH	にぶい赤褐色	B	40%	
3	土師器甕	—	—	(5.1)	AEGN	黒褐色	A	25%	
4	土師器甕	—	—	(3.6)	AEMN	橙色	D	20%	
5	土師器甕	—	—	5.5	AEHJ	明赤褐色	A	10%以下	
6	土師器甕	—	—	(6.1)	AEN	にぶい橙色	C	10%以下	
7	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	波状沈線文。 櫛描簾状文、波状文。 変形工字文。
8	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	
9	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	頸部	
10	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	頸部	
11	弥生土器鉢	—	—	—	—	にぶい橙色	—	口縁部	





第29図 第12号住居跡出土遺物(1)



第30図 第12号住居跡出土遺物(2)

第12表 第12号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器埴	8.7	8.1	2.2	AEH	橙色	A	100%	
2	土師器埴	—	—	—	AELM	橙色	D	30%	
3	土師器埴	(12.8)	—	—	AEH	橙色	C	15%	穿孔あり。
4	土師器高坏	(18.9)	—	—	AEMN	浅黄橙色	C	40%	内面赤彩。
5	土師器高坏	19.1	—	—	AMN	赤褐色	C	40%	
6	土師器高坏	(20.4)	—	—	AM	赤褐色	A	15%	内外面赤彩。内面ミガキ後赤彩。
7	土師器高坏	(19.3)	—	—	AEHM	にぶい橙色	C	20%	内外面ヨコナデ。
8	土師器高坏	(19.2)	—	—	AEHJM	灰白色	B	15%	内面赤彩。
9	土師器高坏	—	—	(13.5)	AEHJ	にぶい黄橙色	B	10%	内外面赤彩。坏下部外面暗文状線刻。
10	土師器高坏	—	—	(14.2)	AEHM	赤橙色	C	30%	
11	土師器高坏	—	—	—	AEHM	赤橙色	C	10%	脚部外面ヘラナデ。
12	土師器高坏	—	—	—	AEM	浅黄橙色	C	15%	外面赤彩。
13	土師器高坏	—	—	—	AEJM	にぶい橙色	C	30%	脚部外面ヘラナデ。
14	土師器高坏	—	—	(14.1)	AEGMN	にぶい黄橙色	D	20%	脚部外面ヘラナデ。
15	土師器甔	(25.9)	—	—	AMN	明赤褐色	C	15%	折り返し口縁部外面指頭圧痕。
16	土師器壺	(19.9)	—	—	AEM	にぶい橙色	C	10%	
17	土師器壺	—	—	—	EGM	にぶい赤褐色	B	10%以下	
18	土師器壺	(16.6)	—	—	AEHMN	にぶい赤褐色	C	10%	
19	土師器壺	(20.4)	—	—	AGLMN	黄灰色	B	10%以下	
20	土師器壺	(16.2)	(26.1)	6.8	AEMN	赤灰色	B	75%	
21	土師器壺	17.4	(29.7)	7.4	AEM	にぶい赤褐色	A	40%	口縁部外面ヘラ状工具によるキザミ。
22	土師器甕	(13.0)	—	—	AEM	橙色	C	10%	
23	土師器甕	(17.1)	—	—	AHJN	橙色	B	10%	
24	土師器甕	(16.1)	—	—	AEM	明赤褐色	C	10%以下	
25	土師器甕	—	—	6.4	AEIN	にぶい橙色	C	10%以下	
26	弥生土器甕	—	—	—	—	灰褐色	—	口縁部	
27	弥生土器甕	—	—	7.0	—	にぶい橙色	—	底部	
28	弥生土器壺	—	—	(5.8)	—	にぶい橙色	—	底部	木葉痕。

29	弥生土器壺	—	—	(6.2)	—	にぶい橙色	—	底部	
30	弥生土器壺	—	—	(8.6)	—	にぶい橙色	—	底部	木葉痕。
31	弥生土器甕	—	—	(7.7)	—	にぶい黄橙色	—	底部	布目痕。
32	弥生土器壺	—	—	(8.1)	—	明褐色	—	底部	木葉痕。
33	砥石	長さ16.3	幅6.9	厚さ1.8	—	—	—	—	重さ195.0g。砂岩製。
34	砥石	長さ6.2	幅4.1	厚さ1.0	—	—	—	—	重さ33.1g。砂岩製。
35	管玉	長さ1.1	直径0.3	重さ0.2	—	—	—	一部欠損。	碧玉製。

近い不整形プランと推測される。主軸はおおよそN-16°-Wを指す。

床までの深さは約30cmで、埋土は自然堆積と思われる。

柱穴、壁溝、炉は検出できなかった。

出土遺物は少なく、土師器埴・高坏・甕のほか弥生土器壺・甕の破片が混じっていた。また、鉄製の刀子の一部が出土した。

第14号住居跡（第32図、第14表）

108・109-158グリッドを中心に位置する。北側のほとんどの部分が調査区域外となっている。

平面形は、プランのほとんどが掘削されてしまったため明らかではないが、軸長7.72mの方形のプランであると推測される。主軸はおおよそN-7°-Eを指すと推測される。

床までの深さは、断面観察の結果約18cmで、埋土は自然堆積と思われる。

壁の立ち上がりはかなり傾斜している。

柱穴、壁溝、カマドは検出できなかった。

出土遺物は、土師器坏・甕等がわずかに検出できた。

第15号住居跡（第33図、第15表）

97・98-159・160グリッドに位置する。第5号溝跡に切られる。北西隅が調査区域外となっている。

平面形は長軸6.20m、短軸3.20mの長方形のプランで、面積19.84m²を測る。主軸はおおよそN-54°-Eを指す。

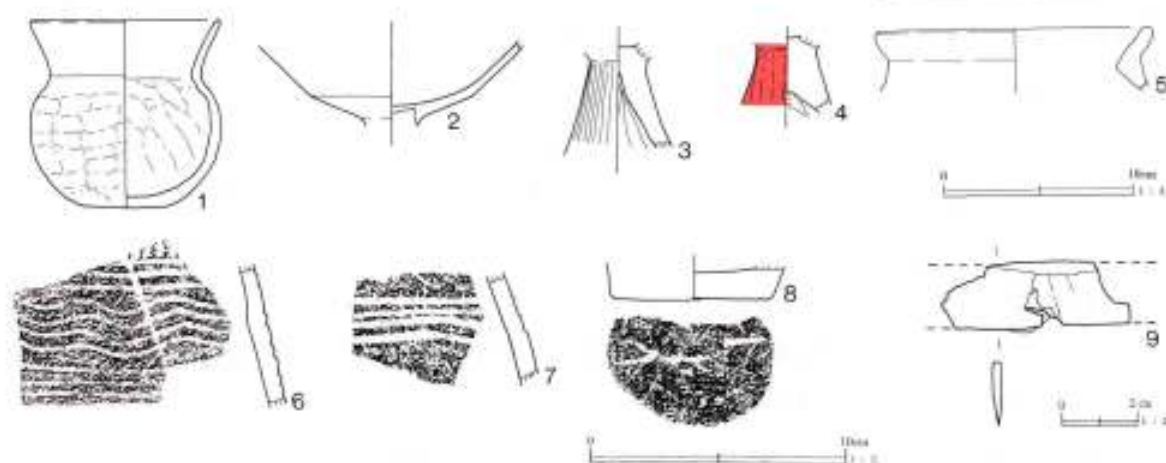
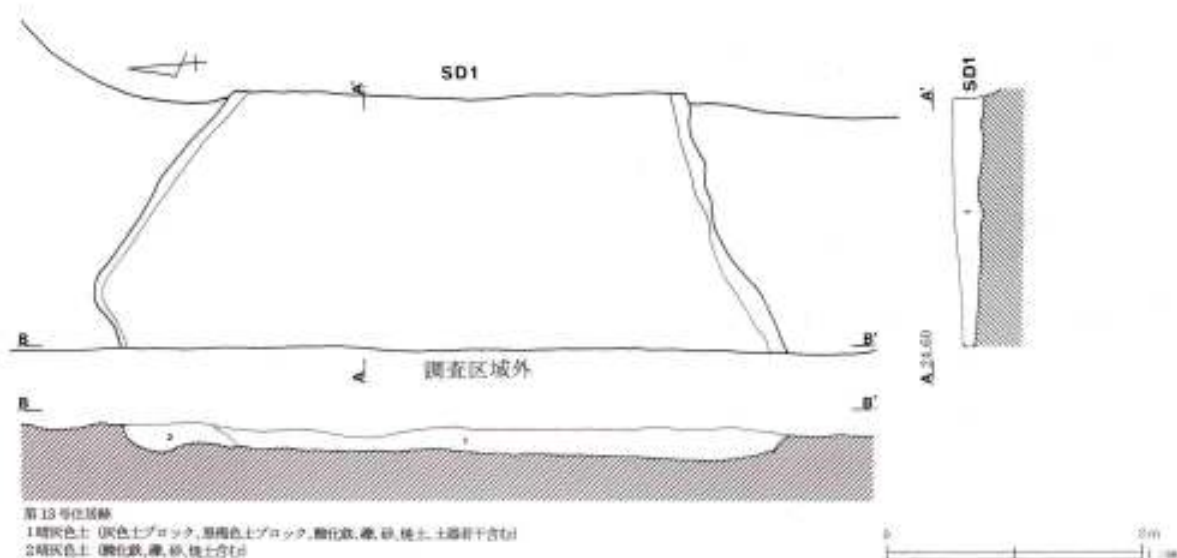
床までの深さは約22cmで、埋土は自然堆積と思われる。

柱穴、壁溝、カマドは検出できなかった。

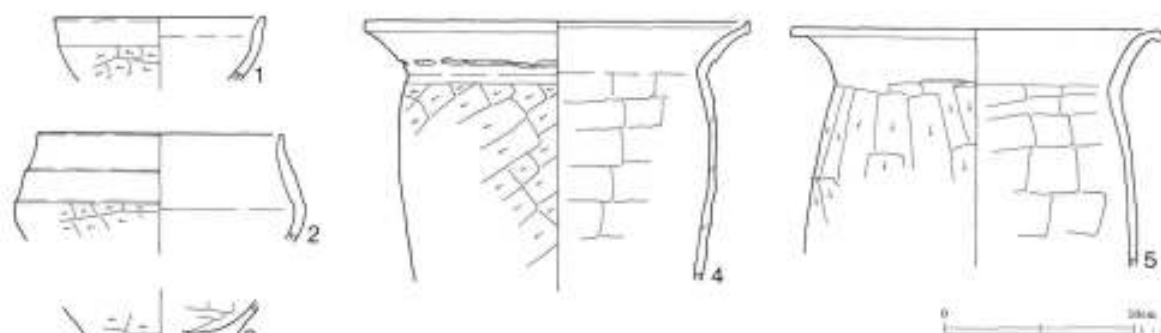
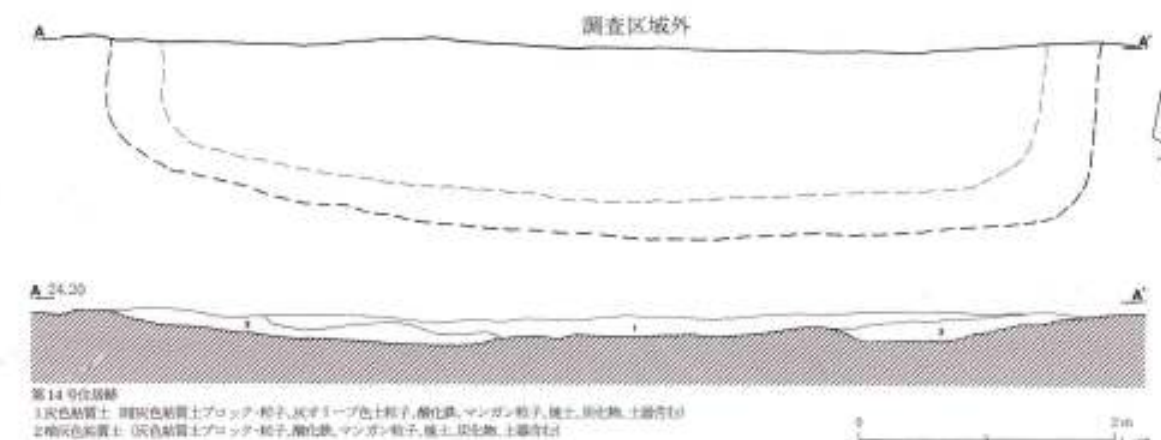
出土遺物は、主に住居北よりに分布し、土師器坏・甕等がわずかに検出できたに止まった。

第13表 第13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器埴	(10.0)	9.8	(4.7)	AEHJM	にぶい橙色	B	40%	内外面ユビナデ。
2	土師器高坏	—	—	—	AEJM	にぶい橙色	C	25%	
3	土師器高坏	—	—	—	ADM	にぶい赤褐色	A	20%	脚部外面ヘラナデ。
4	土師器高坏	—	—	—	AEM	にぶい橙色	A	10%	脚部外面ナデ。外面赤彩。
5	土師器甕	(14.6)	—	—	AEGLM	にぶい褐色	C	10%以下	
6	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	
7	弥生土器壺	—	—	—	—	暗灰黄色	—	胴部	RL縄文。
8	弥生土器壺	—	—	(6.2)	—	橙色	—	底部	木葉痕。
9	刀子	長さ5.0	幅1.6	厚さ0.2	—	—	—	一部残存	鉄製。



第31図 第13号住居跡・出土遺物



第32図 第14号住居跡・出土遺物

第14表 第14号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
1	土師器坏	(11.3)	—	—	AEJ	にぶい褐色	B	15%	
2	土師器坏	(13.0)	—	—	ACJK	明褐色	C	20%	
3	土師器甕	—	—	(7.0)	ABEH	赤褐色	D	10%以下	
4	土師器甕	(20.4)	—	—	ABEN	浅黄褐色	A	15%	
5	土師器甕	(19.8)	—	—	ABDGHN	赤褐色	C	30%	

第16号住居跡（第34・35図、第16表）

121・122—164グリッドを中心に位置する。第1号溝跡、第4号土坑に切られる。

平面形は、東壁が第1号溝跡によって全て切られてしまっているため、軸長を測れたのが一方向のみで、長さ3.80mのほぼ正方形のプランであったと推測される。主軸はおよそN—23°—Eを指す。

床までの深さは約28cmで、埋土は自然堆積と思われる。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられていたと推測される。煙道は幅約40cmで、約56cm北へ延びて第4号土坑に切られている。燃烧部、袖は検出できなかった。

柱穴、壁溝は検出できなかった。

出土遺物は、ほぼ全体に分布し、土師器坏・高坏、須恵器高坏（長脚2段スカシと推定される）等のわずかな土器に混じって、弥生土器壺等の破片が多量に出土した。これらの弥生土器は混入遺物と思われる。

第17号住居跡（第36・37図、第17表）

124・125—164・165グリッドに位置する。第11号住居跡を切っている。また、本遺構の確認面より上部に第10号溝跡が所在する。北側が調査区域外となっている。

平面形は、軸長が測れる一方向で長さ7.86mの不整形な長方形のプランであったと推測される。主軸は北西方向の調査区域外に延びていたと考えられ、およそN—35°—Wを指す。

床までの深さは約28cmで、埋土は自然堆積と思われる。

ピットは1つ検出されたが、それが柱穴であるかは不明で、規模は径50cm、深さ約55cmである。

壁溝、カマドは検出できなかった。

出土遺物は、比較的多く検出され、土師器坏・鉢・甕、須恵器横瓶などの土器のほか、滑石製の白玉が2点検出できた。

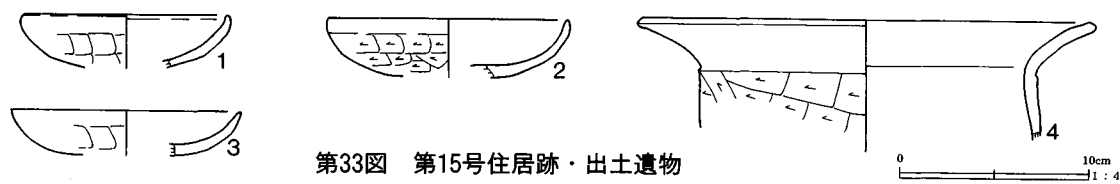
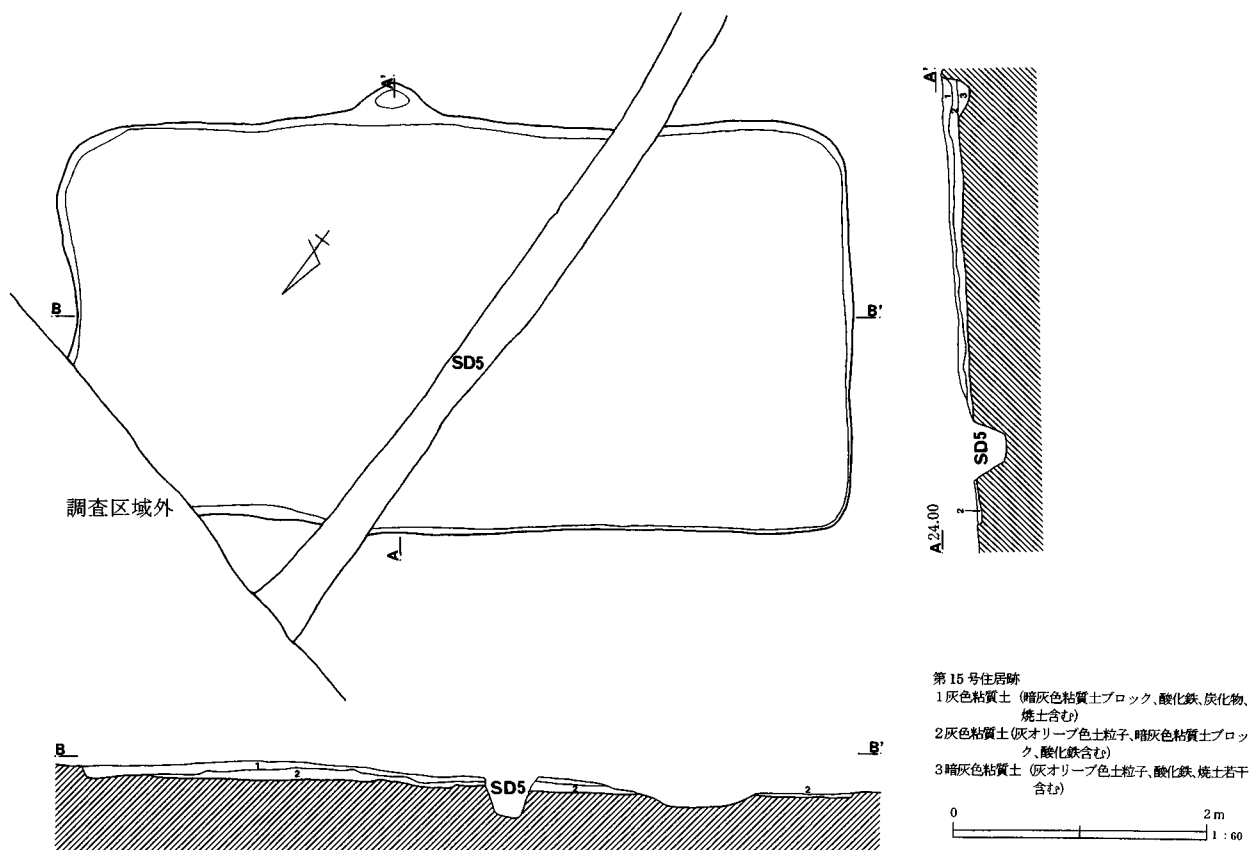
第18号住居跡（第38・39図、第18表）

126・127—164・165グリッドを中心に位置する。第10号住居跡を切っている。南側は調査区域外となっている。

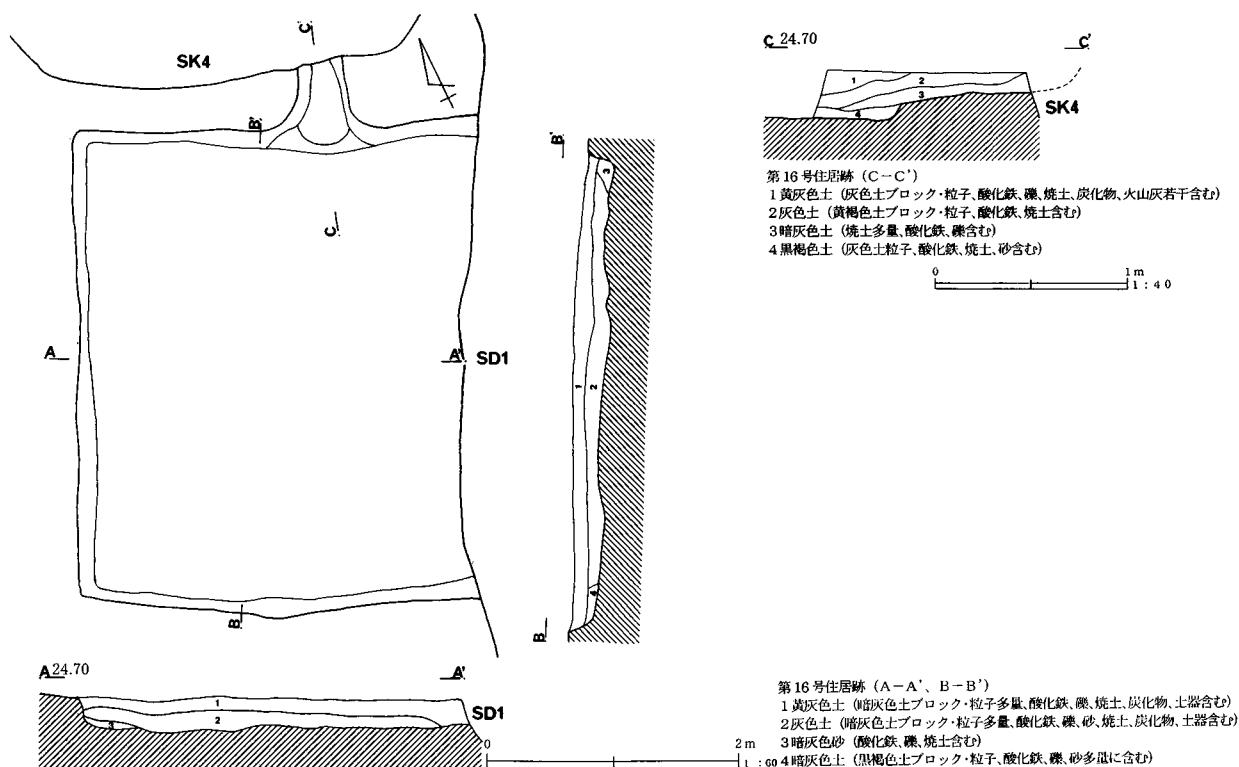
平面形は、軸長を一方向しか測ることができなかったが、長さ6.26mの不整形な長方形のプランであ

第15表 第15号住居跡出土遺物観察表

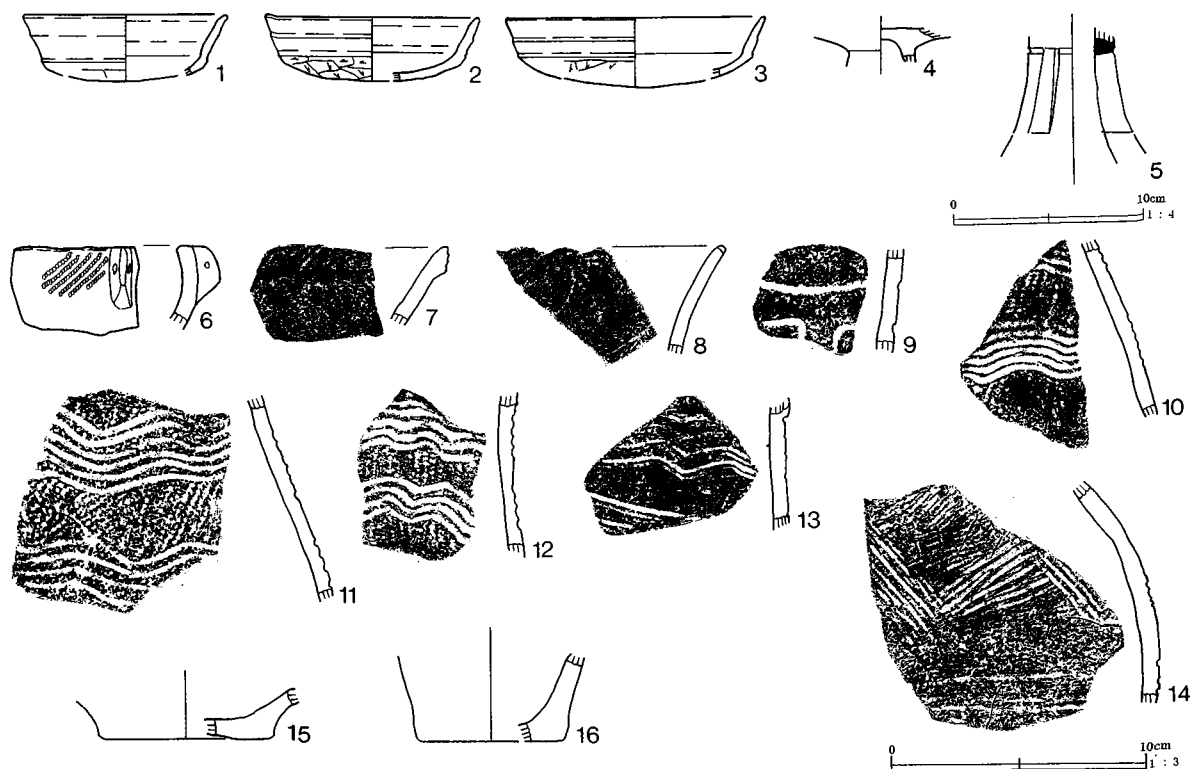
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
1	土師器坏	(11.1)	—	—	ABD	橙色	B	20%	
2	土師器坏	(12.8)	—	—	ABD	にぶい黄褐色	A	25%	
3	土師器坏	(12.3)	—	—	ABD	浅黄褐色	C	20%	
4	土師器甕	(24.5)	—	—	ABEI	にぶい赤褐色	A	20%	



第33図 第15号住居跡・出土遺物



第34図 第16号住居跡



第35図 第16号住居跡出土遺物

第16表 第16号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器坏	(10.8)	—	—	AEHJ	橙色	D	15%	長脚2段スカシ。 LR縄文。 LR縄文。 LR縄文。 条痕文。
2	土師器坏	(10.4)	(3.2)	—	ABEHJ	明赤褐色	B	25%	
3	土師器坏	(13.8)	—	—	AEJ	にぶい橙色	D	10%	
4	土師器高坏	—	—	—	ACN	にぶい橙色	C	10%	
5	須恵器高坏	—	—	—	ABH	灰白色	A	10%以下	
6	弥生土器鉢	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	口縁部	
7	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	口縁部	
8	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄褐色	—	口縁部	
9	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	
10	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	
11	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	
12	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	
13	弥生土器甕	—	—	—	—	橙色	—	胴部	
14	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	
15	弥生土器壺	—	—	(6.0)	—	にぶい黄褐色	—	底部	
16	弥生土器壺	—	—	(5.9)	—	橙色	—	底部	

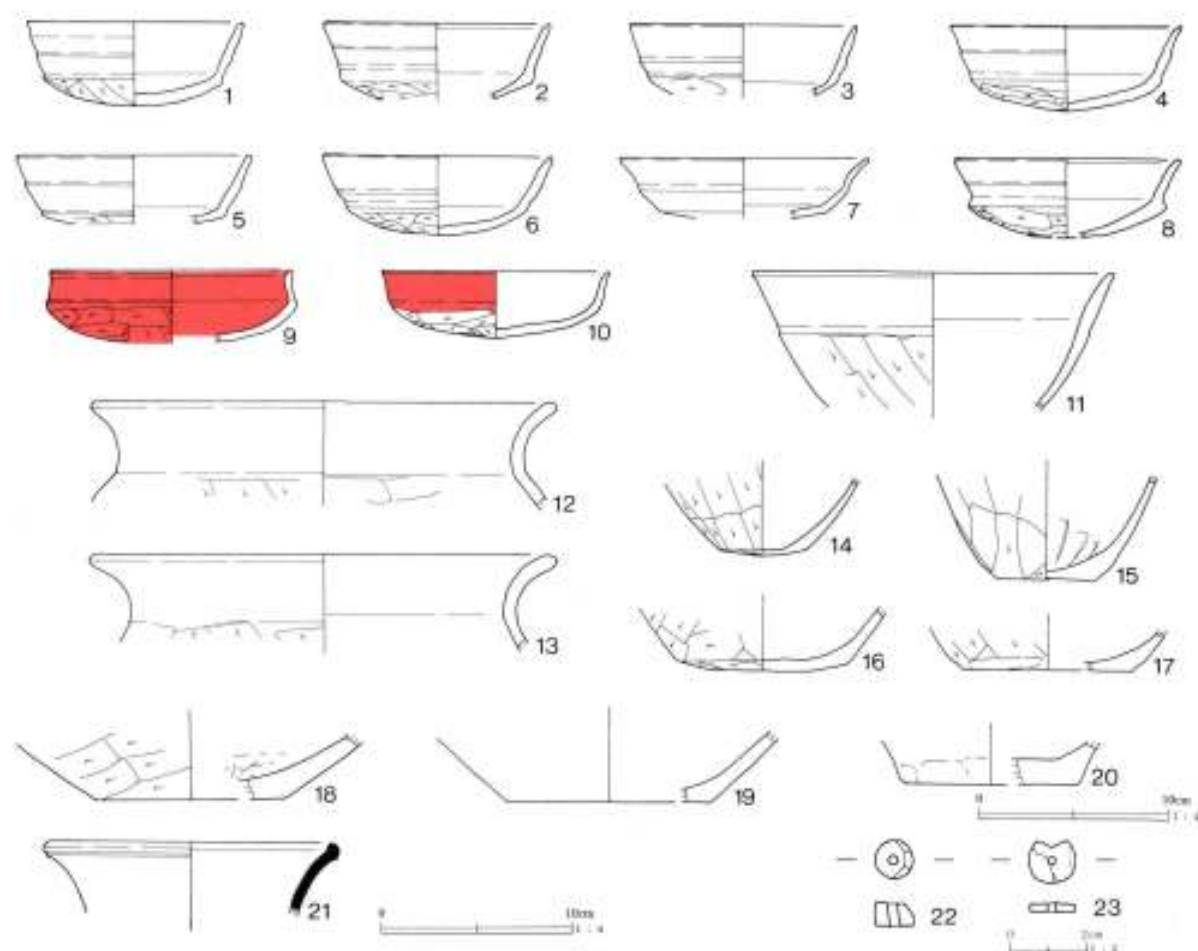
ったと推測される。主軸は短軸で、N-75°-Eを指す。

床までの深さは約36cmで、床面はやや起伏が激しい。埋土は自然堆積と思われる。

規模にして径63×58cm、深さ25cmのピットが1つ東壁のカマドそばから検出されたが、これは位置からみて、燃烧部であった可能性がある。

カマドは東壁のやや南寄りに設けられていたと推測され、煙道は幅約65cmで、長さにして約1.75m東に延びている。袖は検出できなかった。

柱穴、壁溝は検出できなかった。



第37図 第17号住居跡出土遺物

第17表 第17号住居跡出土遺物観察表

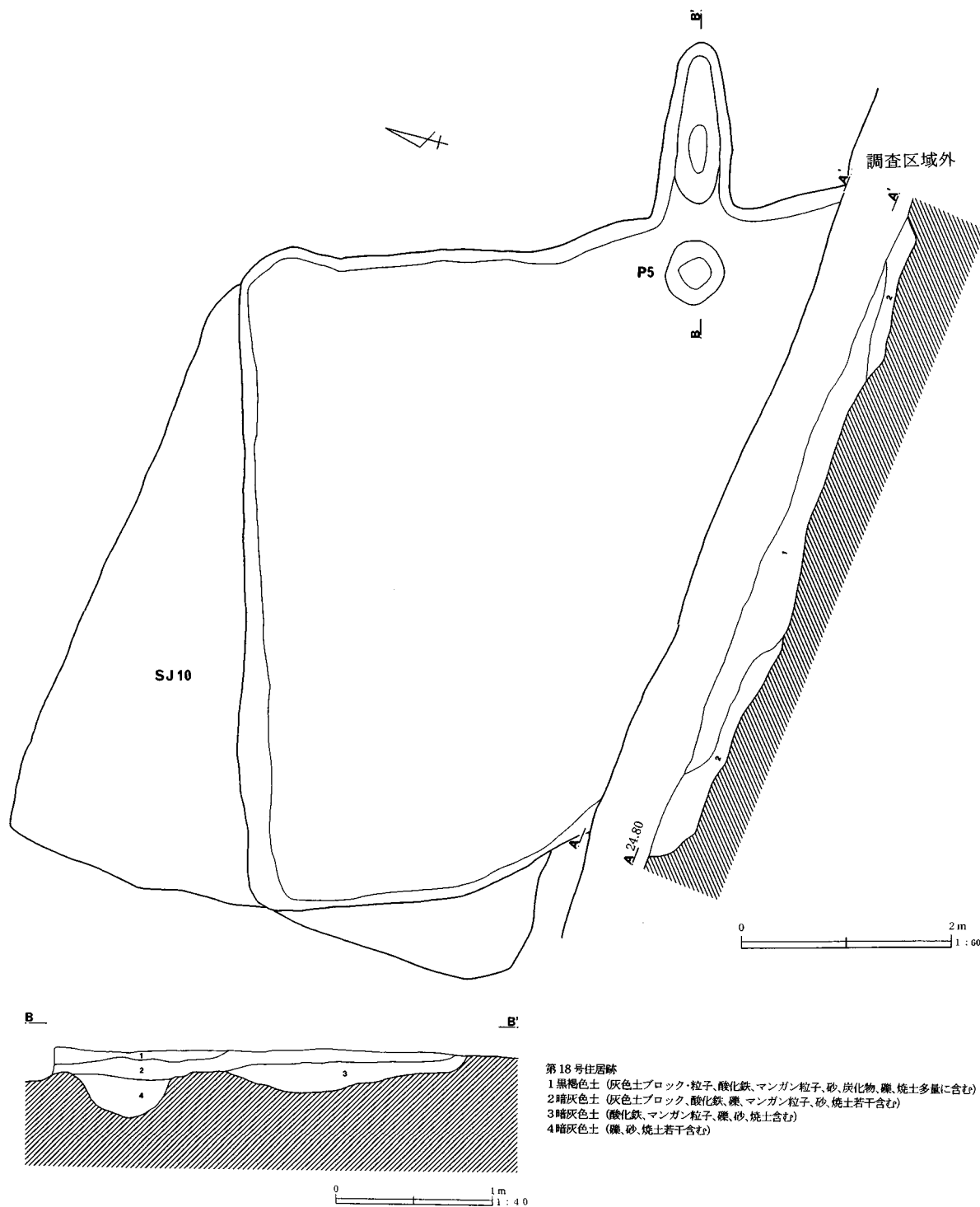
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
1	土師器坏	11.5	4.4	—	AEJ	灰褐色	B	70%	内外面赤彩。 口縁部外面赤彩。
2	土師器坏	(12.0)	—	—	AEJ	にぶい黄褐色	A	20%	
3	土師器坏	(12.0)	—	—	AEIJ	灰黄褐色	C	20%	
4	土師器坏	(12.2)	4.4	—	AEJ	にぶい黄褐色	C	60%	
5	土師器坏	(12.4)	—	—	AEJ	にぶい褐色	C	15%	
6	土師器坏	(12.2)	4.1	—	AEJ	にぶい黄褐色	D	30%	
7	土師器坏	(13.2)	—	—	AEIJ	橙色	C	20%	
8	土師器坏	(11.9)	(4.2)	—	AGJ	黒褐色	A	20%	
9	土師器坏	(12.8)	—	—	AEN	にぶい橙色	A	20%	
10	土師器坏	(12.0)	3.5	—	AEN	明赤褐色	A	30%	
11	土師器鉢	(19.1)	—	—	AJM	にぶい橙色	C	15%	
12	土師器甕	(24.5)	—	—	AEL	灰褐色	B	10%	
13	土師器甕	(24.7)	—	—	AGL	にぶい褐色	A	10%以下	
14	土師器甕	—	—	4.6	AEJMN	にぶい褐色	B	10%	
15	土師器甕	—	—	(5.2)	AEJMN	にぶい黄褐色	B	10%	
16	土師器甕	—	—	(9.0)	AEJMN	赤褐色	C	10%以下	
17	土師器甕	—	—	(9.0)	AE	黒褐色	C	10%以下	
18	土師器甕	—	—	(10.0)	AE	褐灰色	C	10%以下	
19	土師器甕	—	—	(10.7)	A	にぶい赤褐色	C	10%以下	
20	土師器甕	—	—	(9.2)	AEH	灰褐色	C	10%以下	
21	須恵器模写	(15.6)	—	—	A	灰白色	B	10%以下	
22	白土	直径1.0	厚さ0.7	重さ1.2	—	—	—	一部欠損	滑石製。
23	白土	直径1.2	厚さ0.2	重さ0.5	—	—	—	欠損	滑石製。

深さ14cm、P 3 が径44×37cm、深さ15cmである。

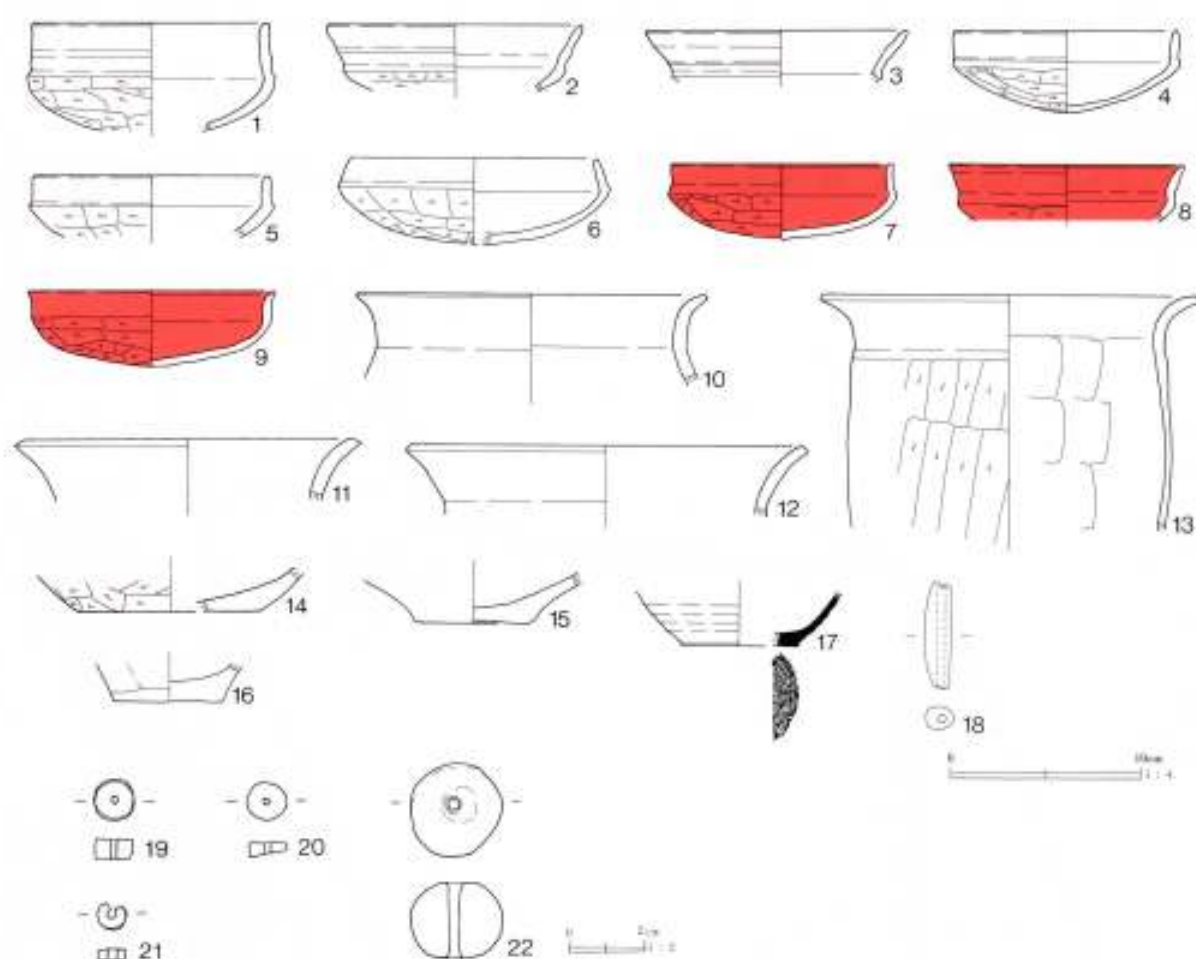
カマドは北壁の西寄りに設けられ、煙道は幅約36cmで長さ約1.3m北へ延びている。燃烧部、袖は検出できなかった。

壁溝は検出できなかった。

出土遺物は、土師器坏・甑・甕、須恵器坏などが検出され、本遺構の所属時期以外の遺物として、弥生土器壺、土師器埴等が出土した。



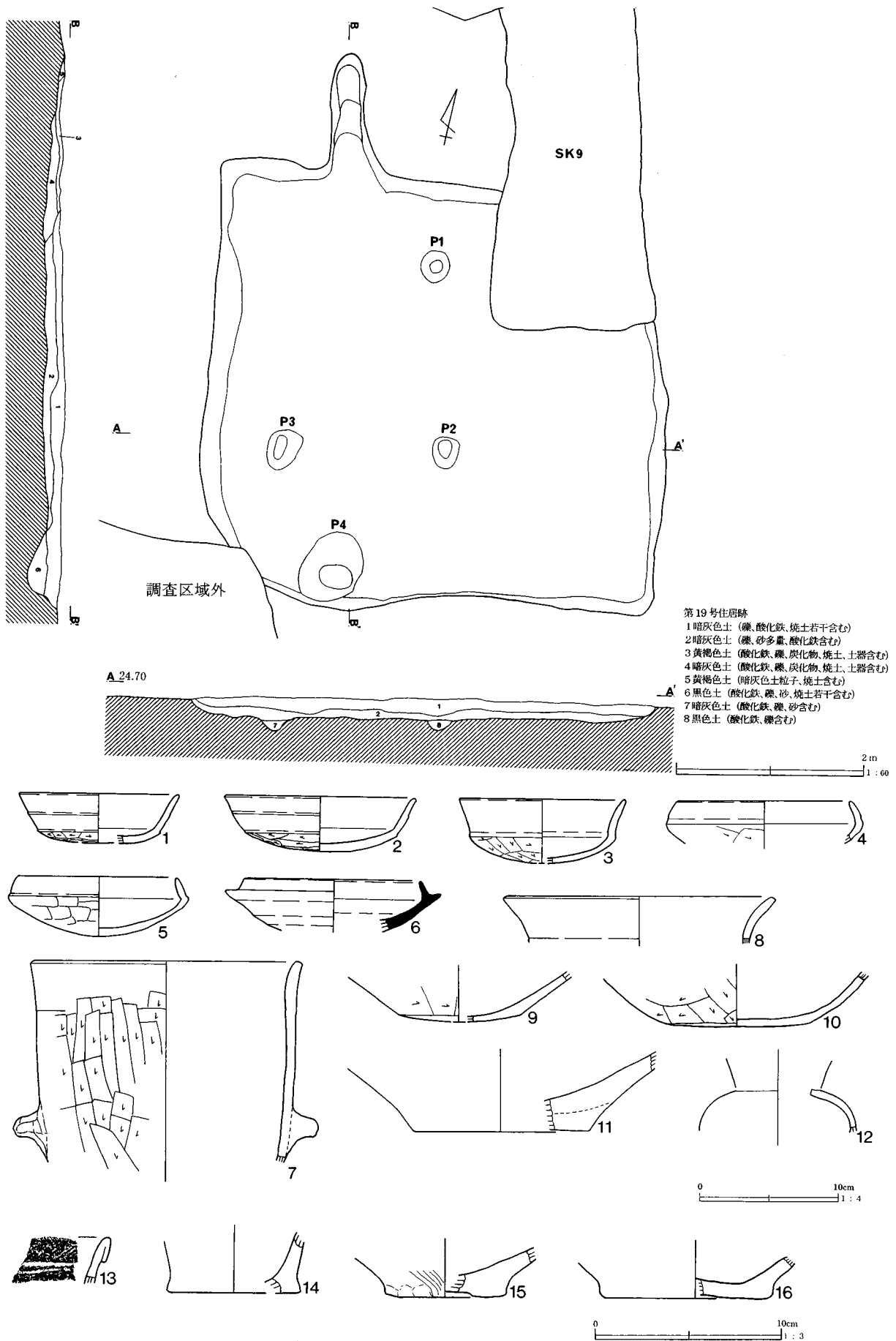
第38図 第18号住居跡



第39図 第18号住居跡出土遺物

第18表 第18号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器坏	(12.6)	—	—	AEJM	にぶい橙色	B	25%	
2	土師器坏	(13.6)	—	—	AHH	橙色	A	10%	
3	土師器坏	(13.7)	—	—	ABEH	橙色	B	10%	
4	土師器坏	(12.0)	4.3	—	AHM	橙色	B	35%	
5	土師器坏	(12.6)	—	—	AEJGM	橙色	C	15%	
6	土師器坏	(13.2)	(4.6)	—	AEM	にぶい橙色	C	40%	
7	土師器坏	11.8	4.0	—	AEMN	暗赤褐色	A	70%	内外面赤彩。
8	土師器坏	(12.5)	—	—	ABEHK	にぶい橙色	A	10%	内外面赤彩。
9	土師器坏	(13.1)	4.0	—	AECMN	橙色	A	50%	内外面赤彩。
10	土師器残	(18.6)	—	—	AEGM	浅黄褐色	C	10%以下	
11	土師器残	(18.4)	—	—	AEGM	にぶい褐色	C	10%	
12	土師器残	(21.4)	—	—	AEHJMN	にぶい褐色	B	10%以下	
13	土師器残	(20.1)	—	—	EMN	灰白色	C	10%以下	
14	土師器残	—	—	(9.7)	GHM	淡黄色	B	10%以下	
15	土師器残	—	—	(6.0)	AEMJ	褐色	A	10%以下	
16	土師器残	—	—	5.7	ABN	褐色	B	底部	
17	須恵器刺	—	—	(6.2)	A	灰白色	A	20%	同軸糸切り。
18	土 鏡	長さ5.5	幅1.5	厚さ1.2	—	—	—	一部欠損	重さ12.4g。
19	白 玉	直径1.1	厚さ0.5	重さ1.3	—	—	—	100%	滑石製。
20	白 玉	直径1.1	厚さ0.4	重さ0.7	—	—	—	欠損	滑石製。
21	白 玉	直径0.8	厚さ0.3	重さ0.2	—	—	—	100%	滑石製。
22	玉	直径2.3	厚さ2.0	重さ11.0	—	—	—	100%	土製。



第40図 第19号住居跡・出土遺物

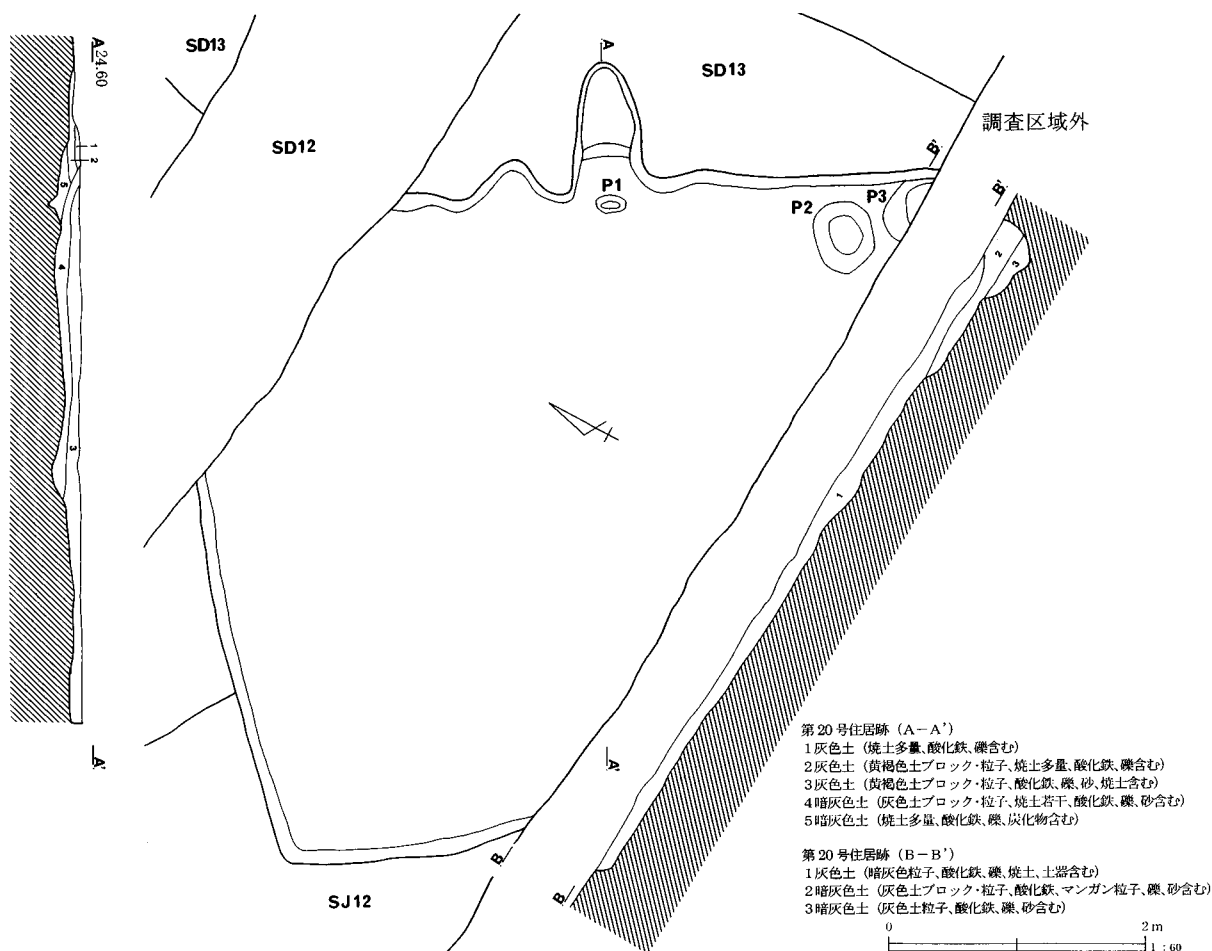
第19表 第19号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
1	土師器坏	(11.5)	—	—	AJK	にぶい褐色	B	25%	内面ミガキ。 口縁部 底部 外面刷毛目。
2	土師器坏	13.8	3.9	—	AEHJK	にぶい黄橙色	D	60%	
3	土師器坏	(12.0)	4.7	—	AEJK	にぶい黄橙色	C	45%	
4	土師器坏	(12.4)	—	—	AEHJK	灰褐色	B	10%以下	
5	土師器坏	(11.5)	(4.3)	—	ADHI	にぶい黄橙色	D	50%	
6	須恵器坏身	(12.7)	—	—	AB	灰白色	D	20%	
7	土師器甗	(19.7)	—	—	AEHN	にぶい褐色	A	25%	
8	土師器甗	(19.8)	—	—	AEIN	にぶい橙色	D	10%以下	
9	土師器甗	—	—	(8.8)	AEK	褐色	C	10%以下	
10	土師器甗	—	—	(10.6)	DGJ	にぶい黄橙色	C	10%以下	
11	土師器甗	—	—	(12.8)	AEHKN	にぶい黄橙色	B	10%以下	
12	土師器埴	—	—	—	ABHG	にぶい橙色	B	10%以下	
13	弥生土器壺	—	—	—	A	黒褐色	—	口縁部	
14	弥生土器壺	—	—	(7.2)	—	にぶい黄橙色	—	底部	
15	弥生土器壺	—	—	(6.6)	—	にぶい橙色	—	底部	
16	弥生土器壺	—	—	(8.8)	—	にぶい黄橙色	—	底部	

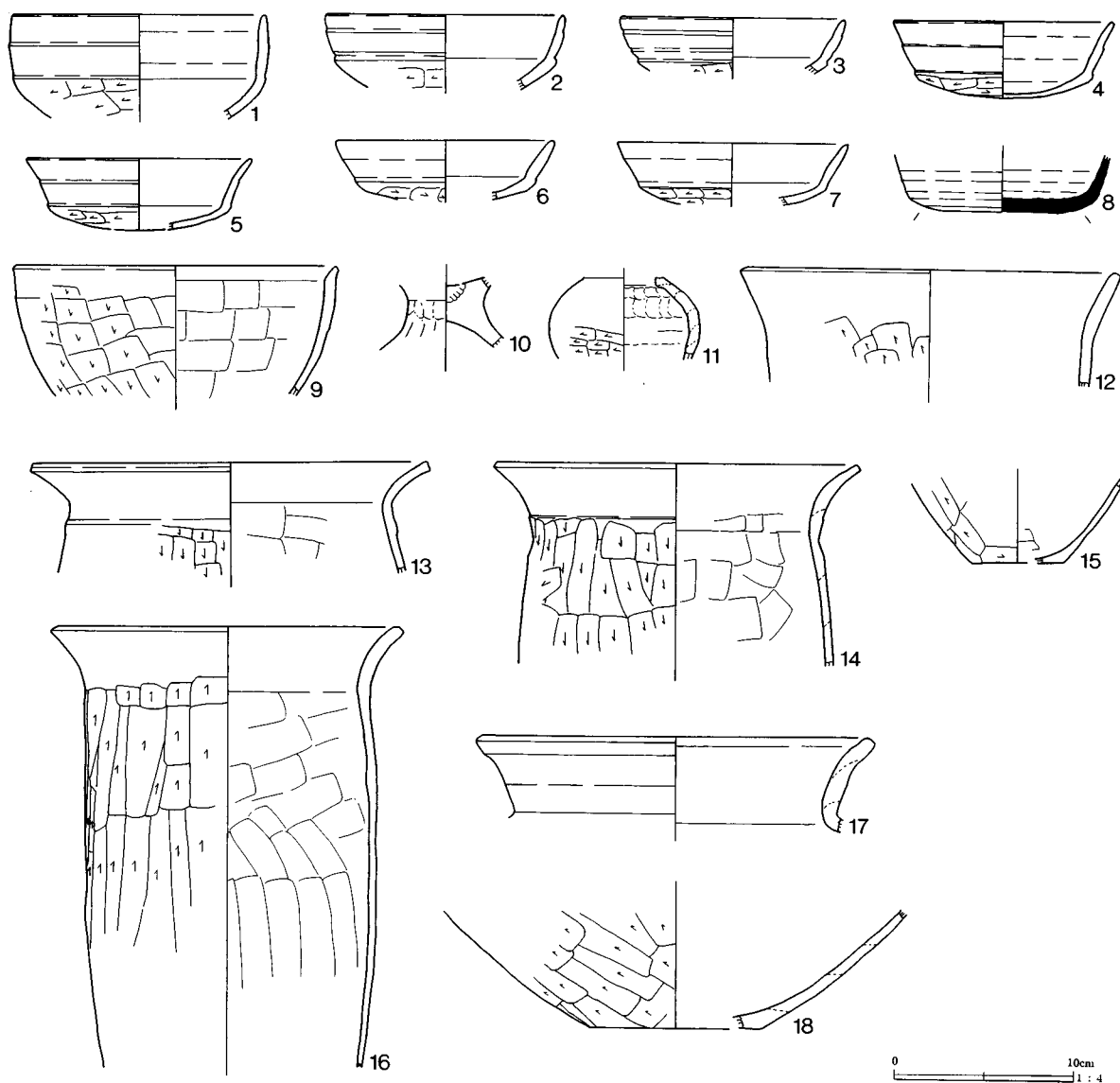
第20号住居跡 (第41・42図、第20表)

119・120-165・166グリッドに位置する。第12号住居跡を切り、第12号溝跡に切られる。また、第13号溝跡が本遺構上に所在する。南側は調査区域外となっている。

平面形は、軸長が一方方向しか測れなかったが、長さ約5.20mを測る長方形のプランであると推測される。主軸はおよそN-65°-Eを測る。



第41図 第20号住居跡



第42図 第20号住居跡出土遺物

第 20 表 第 20 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
1	土師器坏	(14.3)	—	—	ACHG	にぶい赤褐色	C	15%	右回転ヘラケズリ。 外面ナデ。 胴下半部外面剥離。
2	土師器坏	(13.4)	—	—	AHJ	橙色	B	10%	
3	土師器坏	(12.7)	—	—	ABGHJM	にぶい褐色	B	10%	
4	土師器坏	12.4	4.3	—	AEJ	橙色	B	80%	
5	土師器坏	(12.7)	(3.9)	—	AEJ	にぶい橙色	B	25%	
6	土師器坏	(12.2)	—	—	ADH	褐灰色	B	10%	
7	土師器坏	(12.9)	—	—	AEJM	橙色	D	20%	
8	須恵器坏	—	—	(8.8)	ABHIN	灰白色	C	20%	
9	土師器鉢	(18.2)	—	—	ADJN	にぶい赤褐色	B	20%	
10	土師器高坏	—	—	—	AEHIJ	浅黄橙色	C	20%	
11	土師器埴	—	—	—	ABIKM	にぶい橙色	A	20%	
12	土師器甕	(21.2)	—	—	AEHI	灰白色	C	10%以下	
13	土師器甕	(22.3)	—	—	ABEIL	明赤褐色	C	10%	
14	土師器甕	(20.6)	—	—	ABEGH	明褐灰色	B	10%	
15	土師器甕	—	—	(5.1)	AEIK	灰褐色	B	10%以下	
16	土師器甕	19.6	—	—	EGN	灰白色	B	70%	
17	土師器甕	(22.4)	—	—	AEGILM	黄灰色	B	10%以下	
18	土師器甕	—	—	(9.6)	ABDN	にぶい黄橙色	B	20%	

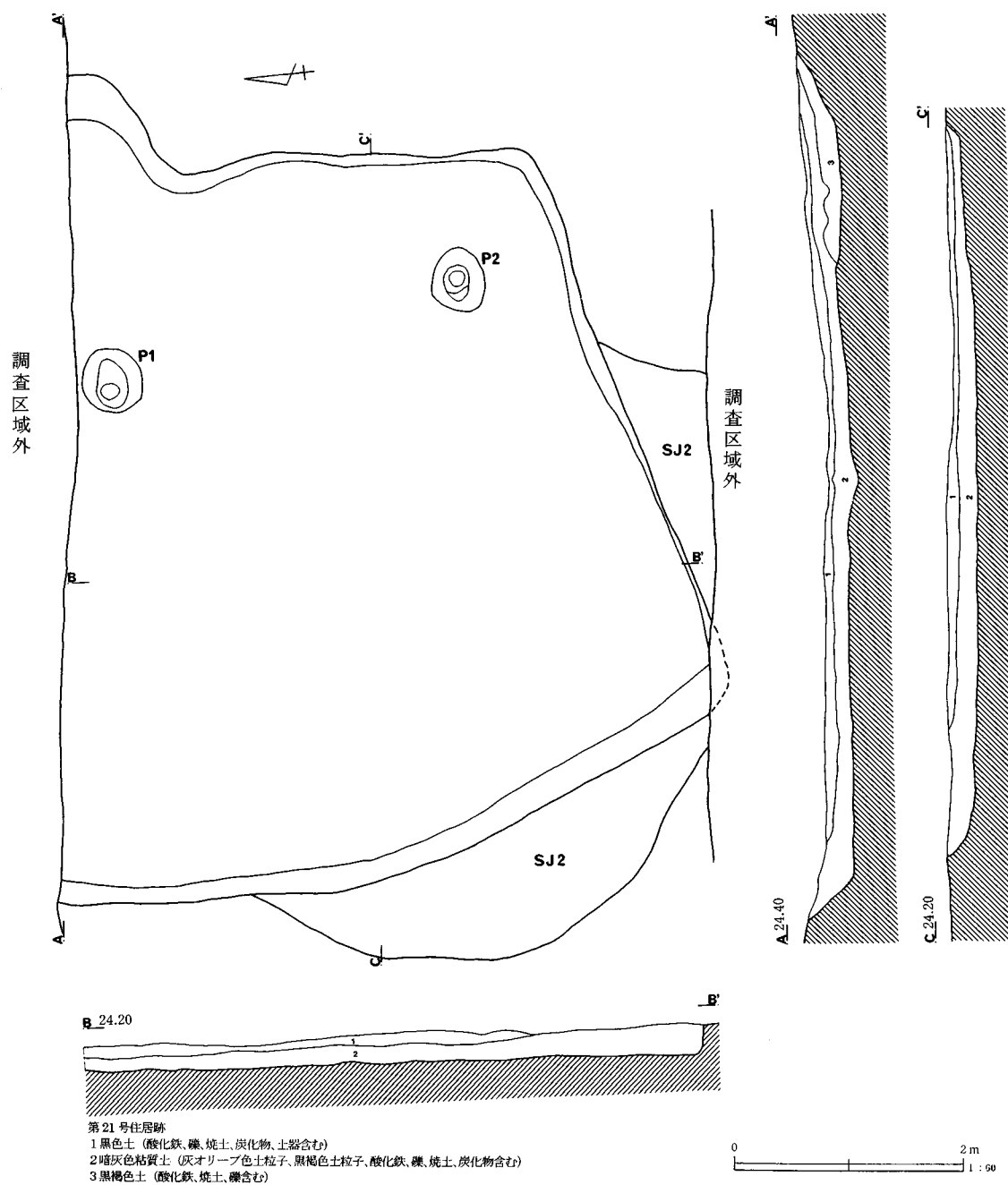
床までの深さは約16cmで、床面は起伏がある。埋土は自然堆積と思われる。

ピットが3つ検出されたが、そのうちP 2は規模径60×48cm、深さ約33cmであるが、これが柱穴であるかは不明である。

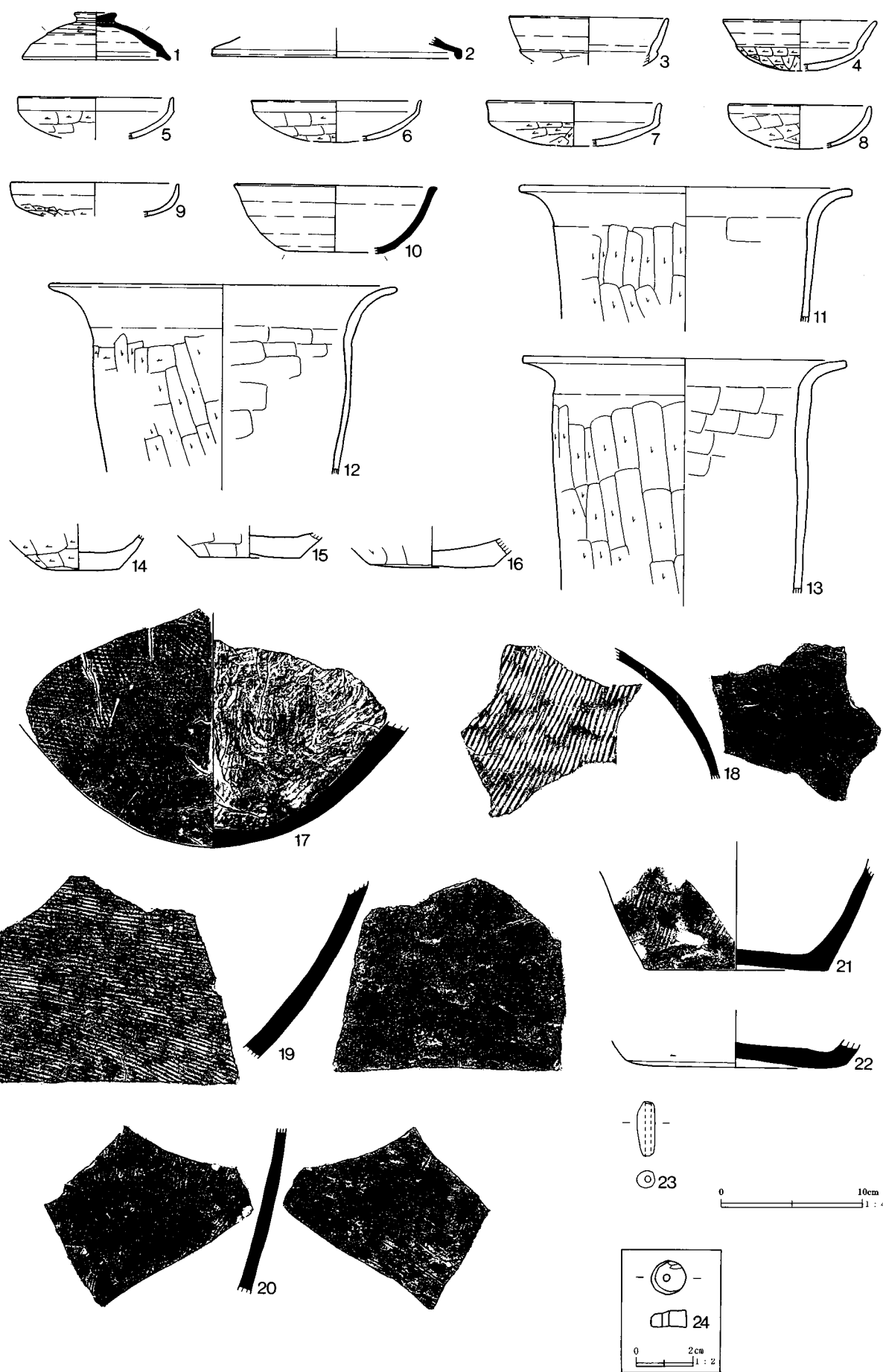
カマドは北東壁のほぼ中央付近と推定されるところに設けられていた。煙道は幅約52cmで、北東に長さ約93cm延びる。P 1は規模径26×14cm、深さ約8cmで、支脚の抜き取り痕であると推測される。燃焼部と袖は検出できなかった。

壁溝は検出されなかった。

他のピットの深さは、P 3が約17cmである。



第43図 第21号住居跡



第44図 第21号住居跡出土遺物

第21表 第21号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
1	須恵器蓋	10.6	3.3	—	AB	灰色	A	100%	南比企産。
2	須恵器蓋	(17.8)	—	—	AFHM	灰色	A	10%以下	
3	土師器坏	(11.2)	—	—	AHJ	褐灰色	A	10%	
4	土師器坏	(11.0)	(3.6)	—	BEKJ	灰黄褐色	B	30%	
5	土師器坏	(11.1)	—	—	AEHJ	橙色	A	25%	
6	土師器坏	(12.1)	(3.0)	—	AHJM	橙色	A	20%	
7	土師器坏	(12.5)	(3.2)	—	AGHJ	橙色	B	25%	
8	土師器坏	(10.2)	(3.1)	—	AHJ	橙色	B	40%	
9	土師器坏	(12.0)	—	—	AHM	橙色	A	15%	
10	須恵器坏	(14.4)	(4.6)	(7.0)	ABF	灰色	A	20%	南比企産。回転ヘラケズリ。
11	土師器甕	(23.7)	—	—	AEHN	にぶい橙色	A	20%	
12	土師器甕	(24.8)	—	—	ABJK	褐色	A	10%	
13	土師器甕	23.0	—	—	EGMN	にぶい褐色	A	40%	
14	土師器甕	—	—	5.4	AEGN	橙色	A	10%以下	
15	土師器甕	—	—	(7.2)	GMN	橙色	A	10%以下	
16	土師器甕	—	—	(8.8)	AEJN	黄灰色	B	10%以下	
17	須恵器甕	—	—	—	AN	灰色	A	10%	
18	須恵器甕	—	—	—	B	灰色	A	胴部	
19	須恵器甕	—	—	—	ABN	暗灰色	A	胴部	
20	須恵器甕	—	—	—	AN	灰色	A	胴部	外面格子叩き目。内面青海波文。 外面平行叩き。 外面平行叩き。内面あて具痕。 外面平行叩き。内面あて具痕。 内外面自然釉付着。 外面回転ヘラケズリ。底部静止ヘラケズリ。
21	須恵器甕	—	—	(13.2)	B	灰色	A	10%以下	
22	須恵器壺	—	—	(15.2)	AHM	灰色	A	10%以下	
23	土 錘	長さ3.7	幅1.4	重さ7.1	—	—	—	100%	
24	白 玉	直径1.2	厚さ0.6	重さ1.8	—	—	—	一部欠損	滑石製。

出土遺物は、カマド付近に集中して分布し比較的多く検出された。土師器坏・高坏・鉢・甑・甕等のほか、混入遺物と考えられる土師器埴が出土した。

第21号住居跡（第43・44図、第21表）

112・113—165・166グリッドに位置する。第2号住居跡を切る。北側が調査区域外となっている。

平面形は、軸長が測れる一方向で長さ6.47mを測るカマドを中心として扇状に開く長方形のプランである。主軸はおよそN—87°—Eを指す。

床までの深さは約27cmで、埋土は自然堆積と思われる。

ピットは2つ検出され、規模は、P1が径59×55cm、深さ44cm、P2が径60×51cm、深さ約36cmで、P2は柱穴にあたると推定されるが、P1は不明である。

カマドは東壁の北寄りに設けられていたと推測され、土師器甕がカマド内及び前に散らばっていた。煙道は幅約80cmで、約1m東に延びている。燃烧部、袖は検出できなかった。

壁溝は検出できなかった。

出土遺物は、カマド付近を中心に出土し、土師器坏・甕、須恵器蓋・坏・壺・甕などが検出された。また、土錘、滑石製の白玉1点が検出された。

第22号住居跡（第45図、第22表）

123・124—165グリッドを中心に位置する。南側のほとんどが調査区域外となっている。

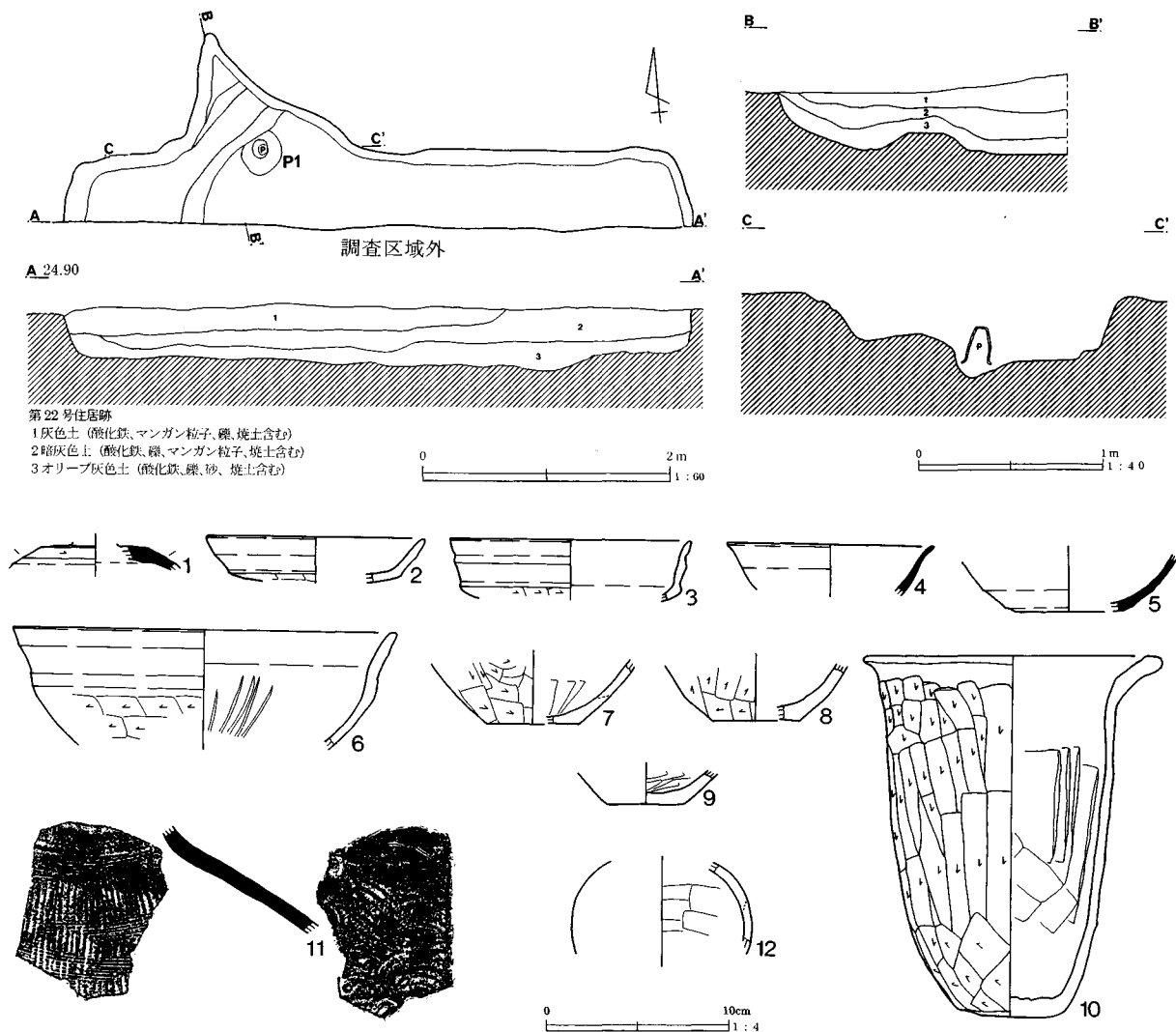
平面形は、軸長が測れる一方向で長さ5.1mの長方形のプランをしていたと推測される。主軸はおよそN—7°—Eを指す。

床までの深さは約46cmで、埋土は自然堆積と思われる。

カマドは北壁の西寄りに、主軸より約13°西に傾いて設けられていた。煙道は三角形に約1m北方向に

延びる。P 1 は規模径36cm、深さ12cm程の掘り込みで、倒立する小型の土師器甕による支脚が据えられており、燃烧部の可能性が高い。袖は検出できなかった。

柱穴、壁溝は検出できなかった。

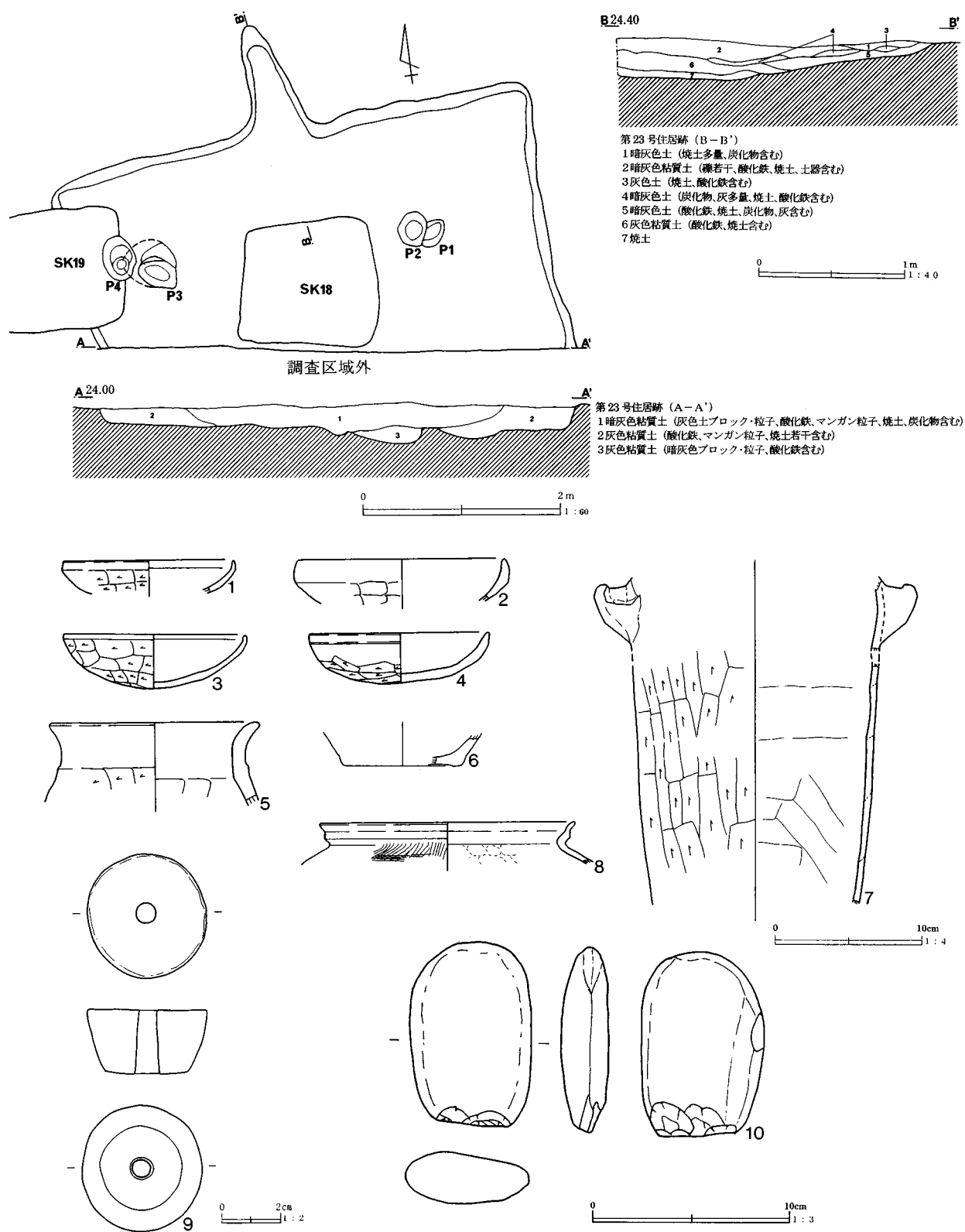


第45図 第22号住居跡・出土遺物

第22表 第22号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器蓋	—	—	—	AF	灰色	A	甲部破片	つまみ欠損。南比企産。
2	土師器坏	(12.0)	—	—	ABDH	橙色	C	10%以下	
3	土師器坏	(13.2)	—	—	ADJH	明赤褐色	C	10%以下	
4	須恵器坏	(11.4)	—	—	AH	灰色	A	10%以下	
5	須恵器坏	—	—	(5.9)	ABN	灰色	A	10%	回転糸切り。 内面放射状暗文。
6	土師器鉢	(21.1)	—	—	ABEJ	にぶい橙色	C	10%	
7	土師器甕	—	—	(5.0)	ABEH	黒褐色	B	10%以下	
8	土師器甕	—	—	(4.9)	AE	にぶい赤褐色	C	10%以下	
9	土師器甕	—	—	(4.3)	ABE	にぶい橙色	A	10%以下	カマド支脚用途。 外面平行叩き後カキ目。内面青海波文。
10	土師器甕	16.2	20.0	5.4	ABEGN	にぶい黄褐色	C	100%	
11	須恵器甕	—	—	—	ABEH	灰色	A	10%以下	
12	土師器埴	—	—	—	AEN	にぶい橙色	B	10%	

出土遺物は、検出面積が小さかったのにも関わらず、比較的量があった。土師器坏・鉢・甕、須恵器坏・甕等が検出でき、混入遺物として土師器埴が出土した。



第46図 第23号住居跡・出土遺物

第23表 第23号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
1	土師器坏	(11.6)	—	—	ABD	橙色	D	10%	
2	土師器坏	(14.0)	—	—	ADHJ	橙色	D	10%以下	
3	土師器坏	12.4	3.7	—	ABDI	橙色	D	85%	
4	土師器坏	12.4	3.4	—	ABEHJ	明赤褐色	C	90%	
5	土師器甕	(14.5)	—	—	ABEH	灰白色	D	10%以下	
6	土師器壺	—	—	(8.2)	ABDN	にぶい黄橙色	C	10%以下	
7	土師器甗	—	—	—	ABEGH	黒褐色	A	30%	
8	土師器台付甕	(17.4)	—	—	ABEI	浅黄橙色	B	10%以下	混入品。
9	紡錘車	広面径4.2	狭面径2.9	厚さ2.2	—	—	—	100%	孔径0.8cm。重さ65.1g。チャート製。
10	敲石	長さ9.2	幅6.4	厚さ2.6	—	—	—	100%	重さ240.0g。安山岩製。

第23号住居跡（第46図、第23表）

110・111-166・167グリッドに位置する。第18・19号土坑に切られる。南側が調査区域外となっている。平面形は、軸長が一方方向しか測れなかったが、長さ4.76mの正方形もしくは長方形のプランをしていたと推測される。主軸はおよそN-10°-Wを指す。

床までの深さは約46cmで、埋土は自然堆積と思われる。

柱穴の規模は、P1が径35×25cm、深さ4.5cm、P2が径38×32cm、深さ18cm、P3が径62×46cm、深さ54cm、P4が径50×34cm、深さ42cmである。P3からは、深さ46cmの所より木片が出土している。

カマドは北壁ほぼ中央に設けられていた。煙道は幅約42cmで、長さ約1.14m北に延びている。燃烧部と袖は検出できなかった。

壁溝は検出できなかった。

出土遺物は、カマド及びカマド付近を中心に出土したが、量は少なかった。土師器坏・壺・甕・甗等のほか、完形の石製紡錘車が検出できた。また、土師器台付甕の混入遺物が出土した。

第24号住居跡（第47図、第24表）

121-167・168グリッドに位置する。第7号住居跡を切り、第1号溝跡に切られる。

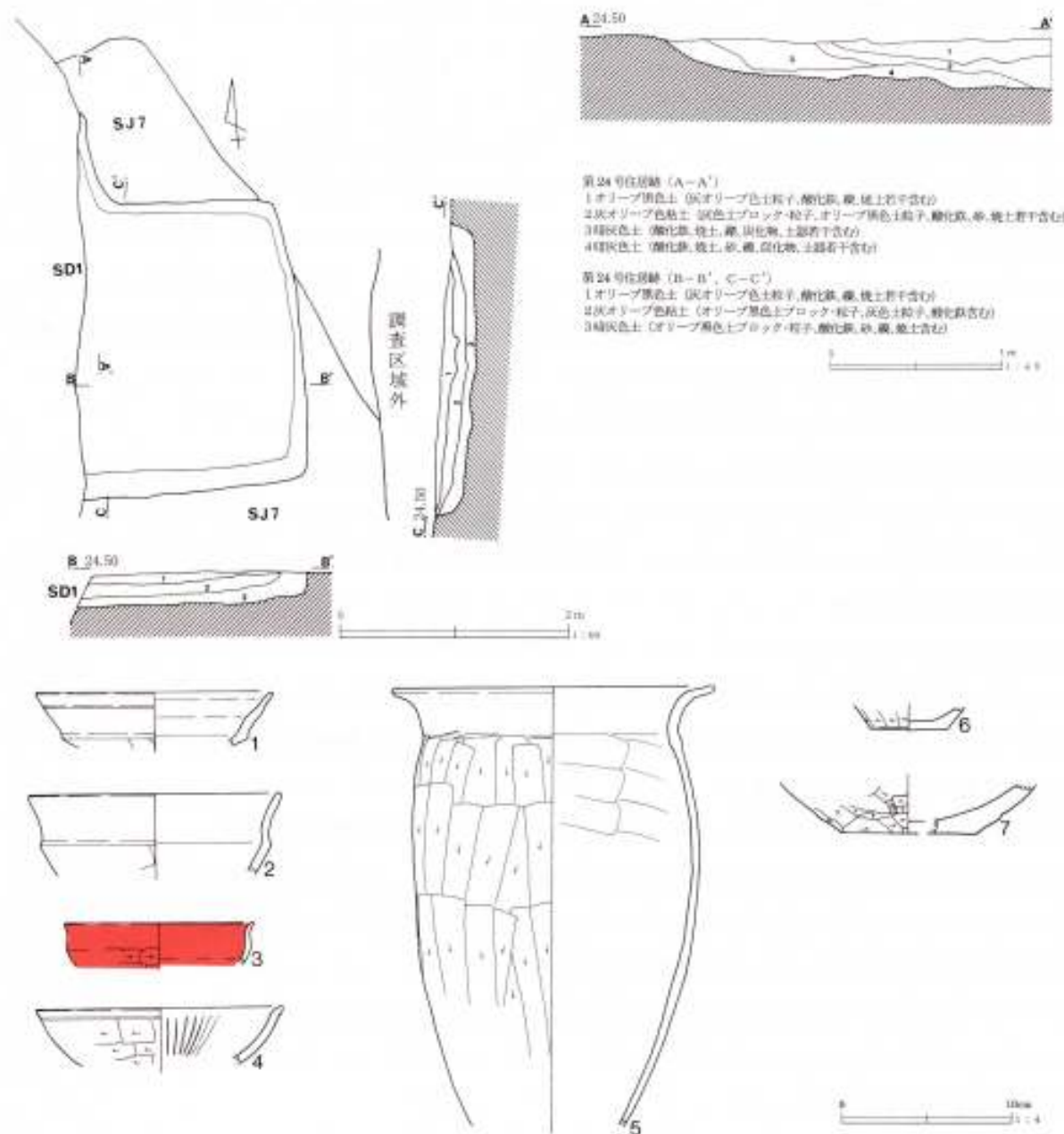
平面形は、西側半分を第1号溝跡に切られるため軸長は一方方向しか測れなかったが、長さ2.57mの小規模な正方形もしくは長方形のプランをしていたと推測される。主軸はほぼ真北を指す。

床までの深さは約28cmで、埋土は自然堆積と思われる。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられていたと思われる。煙道は長さ約84cm延びて、第1号溝跡に切られる。燃烧部、袖は検出できなかった。

柱穴、壁溝は検出できなかった。

出土遺物は、カマド袖の補強材として使われたと推測される倒立する土師器甕のほか、土師器坏等がカマド付近に少量散らばっていた。また、拳大もしくは拳大以上の川原石が埋土中に多量に含まれていた。



第47図 第24号住居跡・出土遺物

第24表 第24号住居跡出土遺物観察表

番号	形態	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器坏	(14.1)	—	—	AEHJ	にぶい褐色	B	10%以下	内外面赤彩。 内面放射状暗文。
2	土師器坏	(15.0)	—	—	AEDJ	黄灰色	A	10%以下	
3	土師器坏	(11.2)	—	—	AEHN	にぶい褐色	A	10%以下	
4	土師器坏	(14.6)	—	—	EEK	褐色	B	15%	
5	土師器壺	(18.9)	—	—	AHE	にぶい褐色	B	70%	
6	土師器壺	—	—	(4.6)	ABD	褐色	D	10%以下	
7	土師器壺	—	—	(8.0)	ABEGH	灰褐色	B	10%以下	

2 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、総数にして8棟検出した。主軸をほぼ南北にとる一群と、西に大きく傾く軸をとるものに分かれた。所属時期は、7世紀代から9世紀代のものと考えられる。検出された箇所は、調査区中央付近東と西に分かれた。

第1号掘立柱建物跡（第48図）

127・128-164グリッドを中心に位置する。北及び西側が大部分調査区域外となっている。

2つの柱穴が確認されただけであり、確認された柱穴から推測すると北及び西に展開する建物ではあるが、東西棟か南北棟かは不明である。したがって、規模及び主軸は不明であるが、2柱穴の柱間は2.8mである。

柱穴は基本的に楕円形の掘り方で、大きなもので長径146cm×深さ100cm、小さなもので長径120cm×深さ100cmほどであった。柱痕は、P2で比較的良く残っており柱材が朽ちないで残っていた。また、P1ではわずかに木片が出土し痕跡が認められた。P2の柱痕は、残存の径が26cmを測る。

出土遺物は、検出できなかった。

第2号掘立柱建物跡（第49図）

100-163・164グリッドを中心に位置する。第3号掘立柱建物跡と重複関係にあると思われるが、新旧関係は明らかにできなかった。また、建物の北及び西は調査区域外となっている。

2間×3間以上の南北棟側柱建物で、検出された部分の梁行4.8m、桁行4.8m以上、面積はおよそ23.04㎡以上を測る。柱間は梁行2.3～2.5m、桁行2.2～2.5mであった。建物の方向はN-33°-Wを示す。

柱穴は径40cm～63cmで、基本的には円形ないしは楕円形の掘り方であった。深さは浅く、深いもので40cm前後、浅いもので15cm前後であった。P2、P4、P5で若干木片を検出した。

出土遺物は、土師器坏・甕の細片が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

第3号掘立柱建物跡（第50図）

100-164グリッドを中心に位置する。第2号掘立柱建物跡及び第5号土坑と重複関係にあり、第2号掘立柱建物跡との新旧は不明であるが、第5号土坑に切られている。また、建物の西が調査区域外となっている。

西に展開する2間×2間以上の東西棟側柱建物と推定され、梁行3.6m、桁行は不明である。柱間は梁行1.95m、桁行2.05mであった。建物の方向はN-87°-Eを指す。

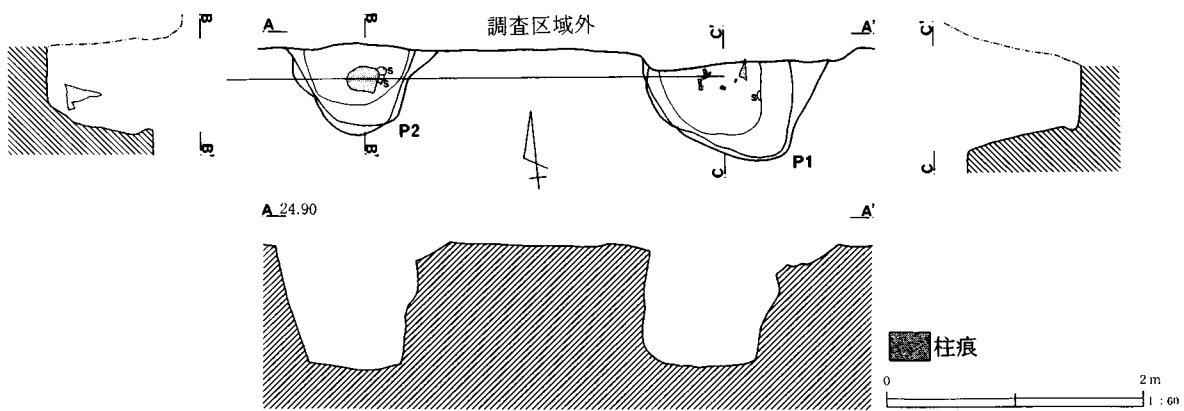
柱穴の掘り方は基本的に円形ないし楕円形を呈すると思われ、径40cm前後、深さ15cm前後～30cm前後を測る。P2において柱痕が観察でき、その痕跡から推測すると10cm前後の柱の太さが想定できる。

出土遺物は、検出できなかった。

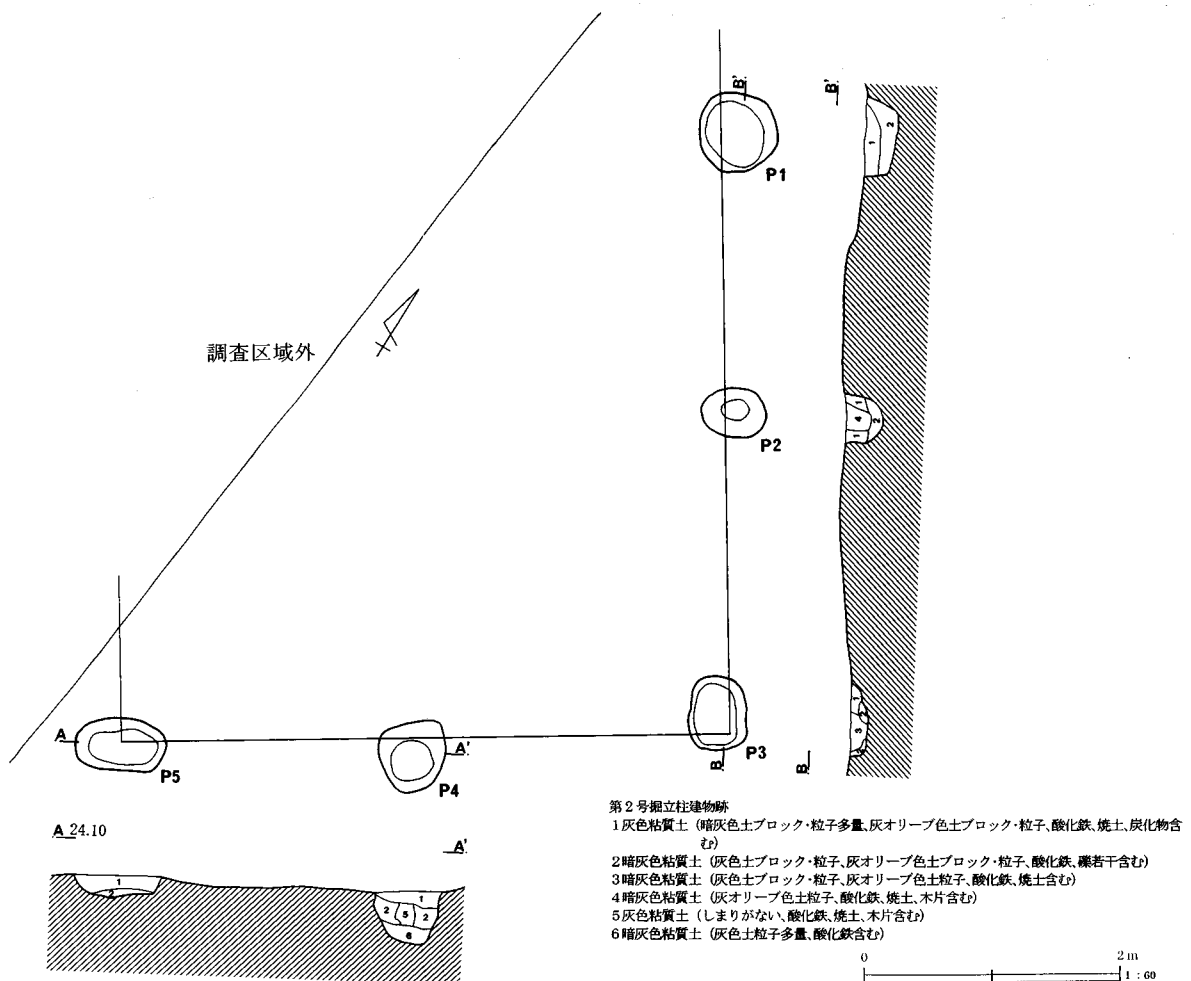
第4号掘立柱建物跡（第51図）

105・106-167グリッドに位置する。南側が調査区域外となっている。

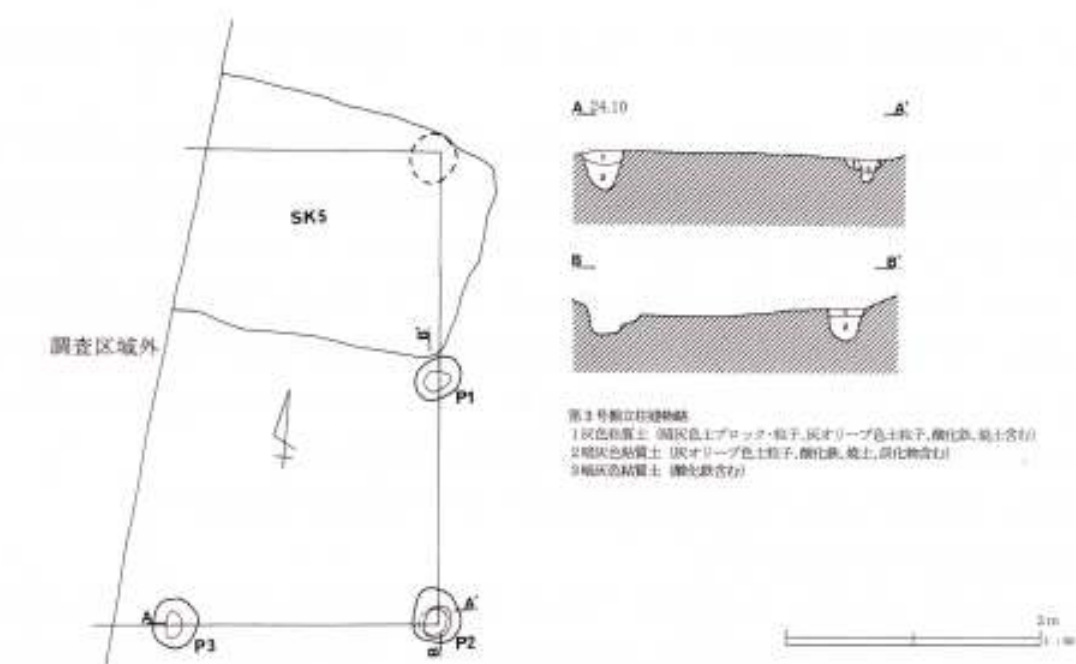
2間×2間以上の南北棟総柱建物もしくは東に底をもつ側柱建物と推定される。前者だとすると梁行5.5m、桁行は不明である。柱間は梁行2.5m～3.0m、桁行2.0m前後であった。一方、後者だとすると、身舎が梁行1間の建物となる。建物の方向はN-7°-Eを指す。



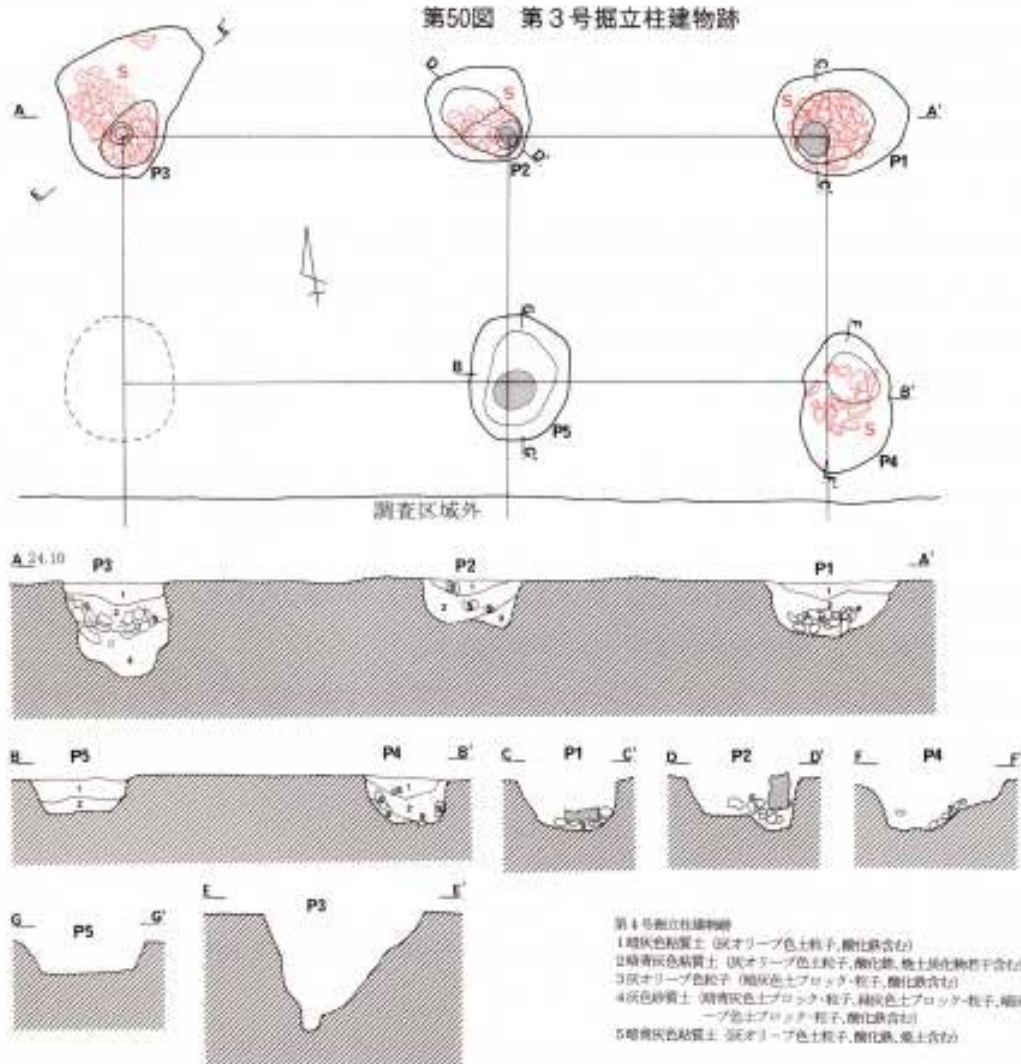
第48図 第1号掘立柱建物跡



第49図 第2号掘立柱建物跡



第50図 第3号掘立柱建物跡



第51図 第4号掘立柱建物跡

棟筋には、柱筋を揃えP 5が確認できた。これは、他の柱穴と規模が共通することから、棟持ち柱と考えられる。

柱穴の掘り方は基本的には方形であったと思われるが、調査時点では楕円形を呈するものが多かった。大きなもので長径136cm×短径104cm×深さ90cm、小さなもので長径80cm×短径76cm×深さ40cmを測る。柱痕は残りの良いものがあった。なかでもP 1、P 2の2つの柱穴については、柱材が朽ちないで残っていた。柱痕は、P 1で径27cm、P 2で径17cmを測った。また、P 5において図示したものは痕跡のみで柱材が残存していたのではない。一方、この建物は基礎固めとして栗石を使う工法が採られたことが確認でき、P 1、P 2、P 4において確実に確認できた。また、P 2では、栗石を使用したにもかかわらず、柱材の沈下が認められた。柱穴のうち西の1つが確認できなかった。

出土遺物は、土師器坏・甕などの破片が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

第5号掘立柱建物跡（第52～54図）

100・101-167・168・169グリッドに位置する。第6・7・8号掘立柱建物跡と重複関係にあり、新旧関係は本遺構が最も古く、第6号掘立柱建物跡、第7号掘立柱建物跡、第8号掘立柱建物跡の順に新しい。また、各々が建て替えの関係にあると思われる。建物の東南隅が調査区域外となっている。

1間×3間の南北棟側柱建物と推定され、梁行4.7m、桁行10.3m、面積は48.41㎡を測る。柱間は梁行4.7m、桁行2.7mと3.7～3.9mであり、桁行の柱間は建物の中央より端の方が幅広いものである。建物の方向はN-4°-Eを示す。

柱穴は重複によりほとんどのものが切られ明確ではないが、残存しているものから径80cm前後で、基本的には円形ないしは楕円形の掘り方であったと推測できる。深さは深いもので55cm前後、浅いもので25cm前後であった。柱痕は全ての柱穴において確認できなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第6号掘立柱建物跡（第52・53・55図）

100・101-167・168・169グリッドに位置する。第5・7・8号掘立柱建物跡と重複関係にある。東南隅が調査区域外となっている。

2間×3間の南北棟側柱建物で、梁行5.4m、桁行10.4m、面積は56.16㎡を測る。柱間は梁行2.7m前後、桁行3.4m前後であった。建物の方向はN-7°-Eを指す。

柱穴の掘り方は基本的には方形であったと思われるが、調査時点では楕円形を呈するものが多かった。大きなもので長径108cm×短径70cm×深さ35cm、小さなもので長径78cm×短径62cm×深さ30cmを測る。柱痕はほとんどの柱穴で残らず、唯一P 3で木片が確認できた。

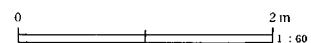
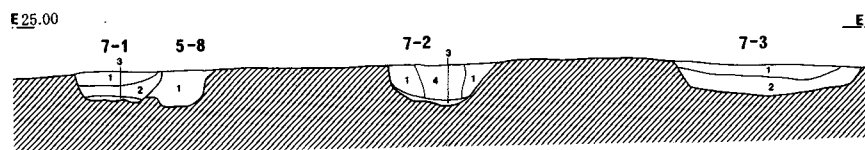
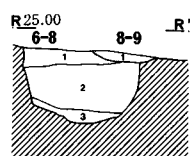
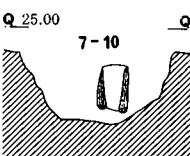
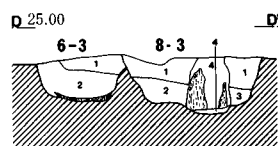
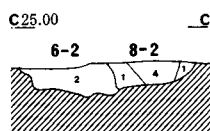
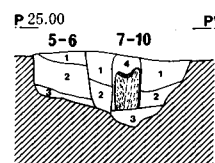
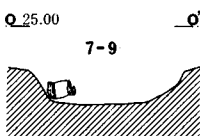
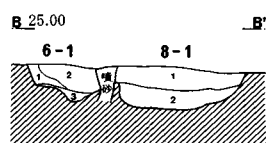
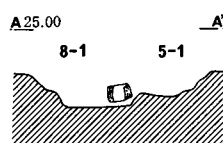
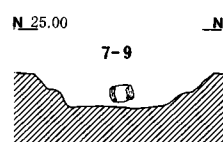
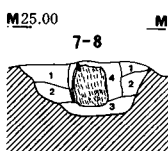
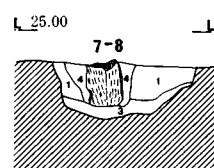
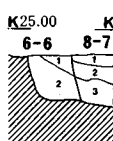
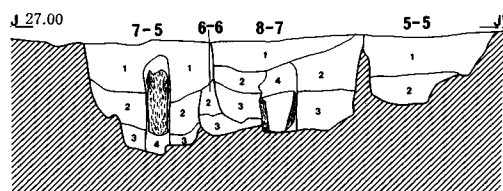
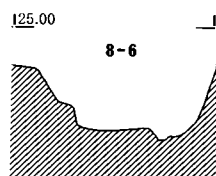
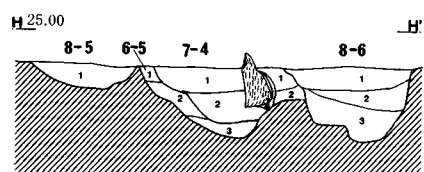
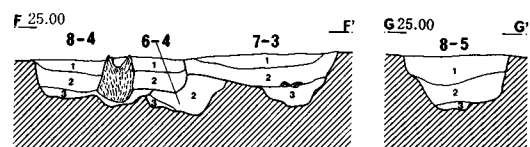
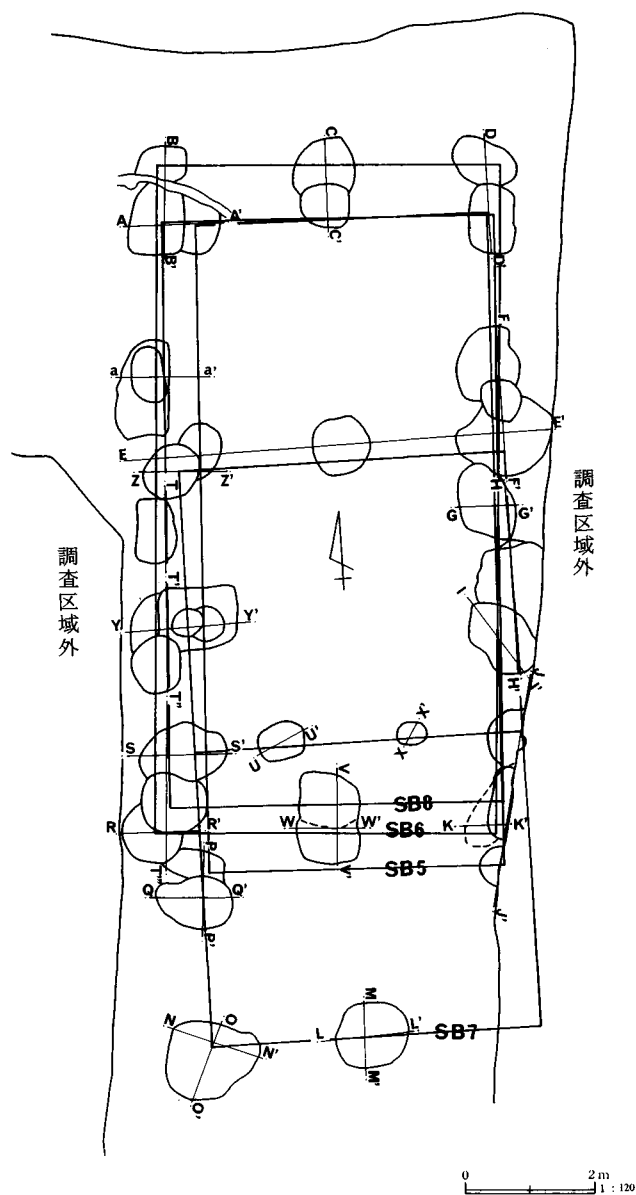
出土遺物は、検出できなかった。

第7号掘立柱建物跡（第52・53・56・58図、第25表）

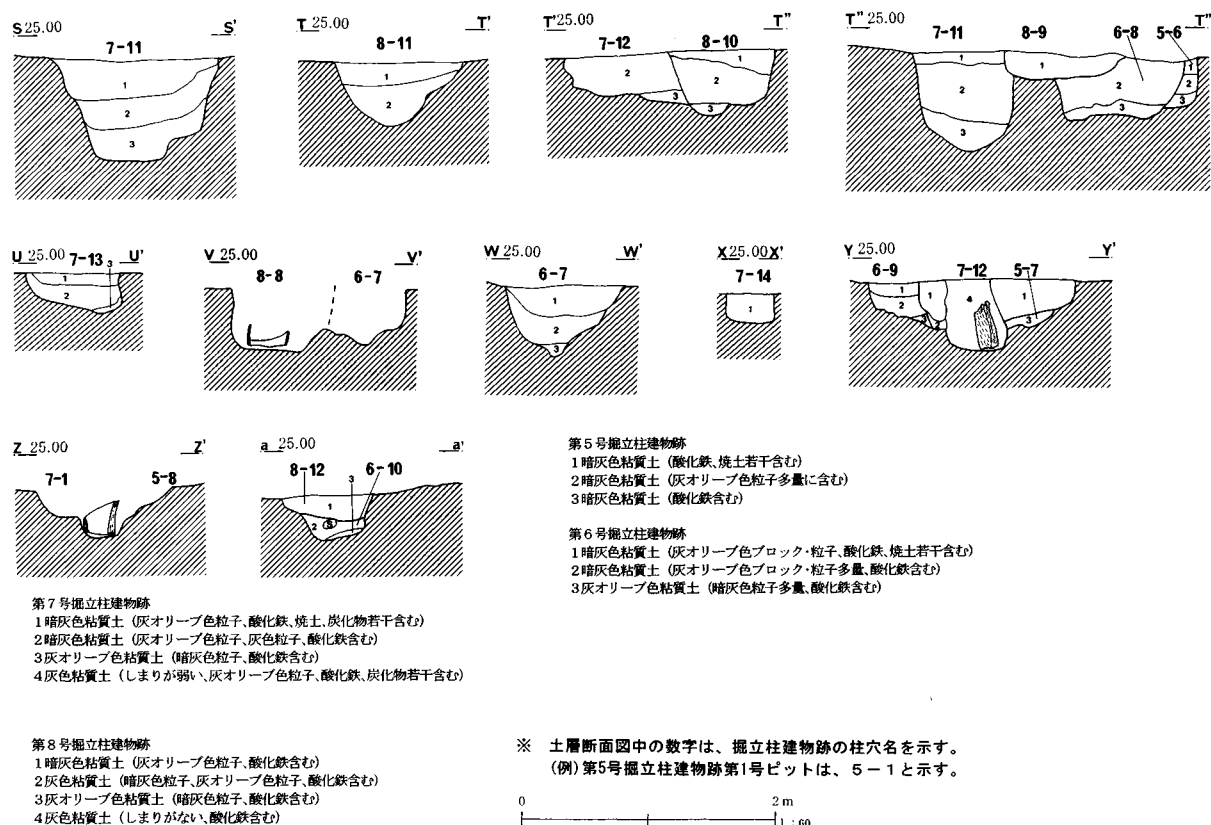
100・101-168・169グリッドを中心に位置する。第5・6・8号掘立柱建物跡と重複関係にある。東側の一部が調査区域外となっている。

2間×4間の南北棟側柱建物で、梁行5.1m、桁行9.0m、面積は45.90㎡を測る。柱間は梁行2.4m～2.5m、桁行2.3m～2.5mであった。建物の方向はN-2°-Eを指す。

建物のちょうど中央にP 13、P 14の2つの柱穴が確認できた。これらは他の柱穴と比べ小規模である



第52図 第5～8号掘立柱建物跡重複関係図・土層断面図(1)



第53図 第5～8号掘立柱建物跡土層断面図(2)

ことから、建物を南北に仕切る間仕切りの機能を持つ柱穴と思われる。

柱穴の掘り方は基本的には方形であったと思われるが、調査時点では楕円形を呈するものが多かった。大きなもので長径130cm×短径125cm×深さ44cm、小さなもので長径92cm×短径78cm×深さ24cmを測る。柱痕は残りの良いものが多く、P 1、P 3、P 4、P 5、P 8、P 9、P 10、P 12の8つの柱穴で柱材が朽ちないで残っていた。それぞれの柱材の径は、P 1が30cm、P 3が18cm、P 4が25cm、P 5が23cm、P 8が32cm、P 9が23cm、P 10が27cm、P 12が23cmであり、おおよそ25cm前後の柱材が使われていたと想定できる。また、最大残存長50cmのものも見られた。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器蓋・椀、土錘、若干の平瓦などが検出できた。

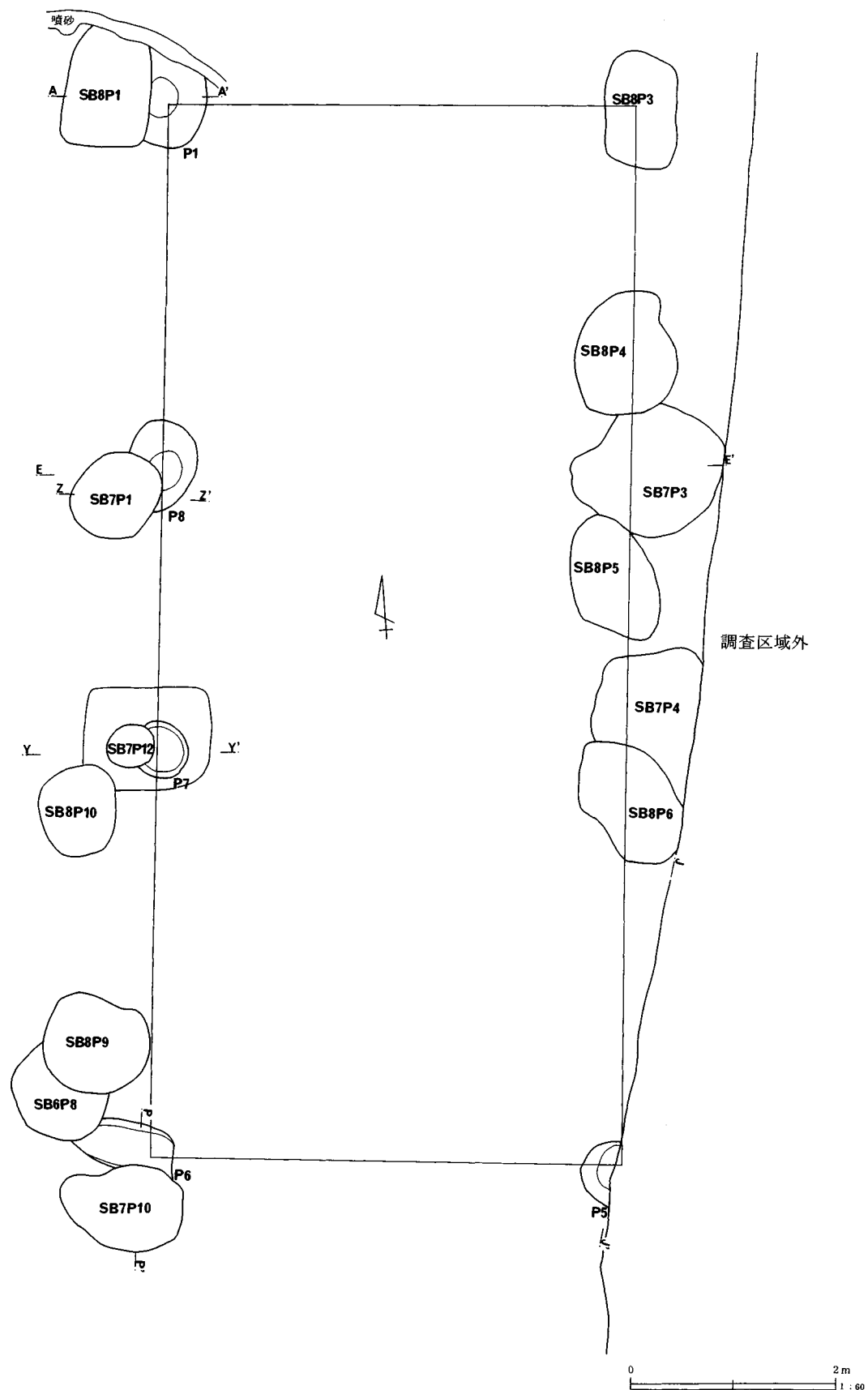
第8号掘立柱建物跡 (第52・53・57・58図、第25表)

100・101-167・168・169グリッドを中心に位置する。第5・6・7号掘立柱建物跡と重複関係にある。東側の一部が調査区域外となっている。

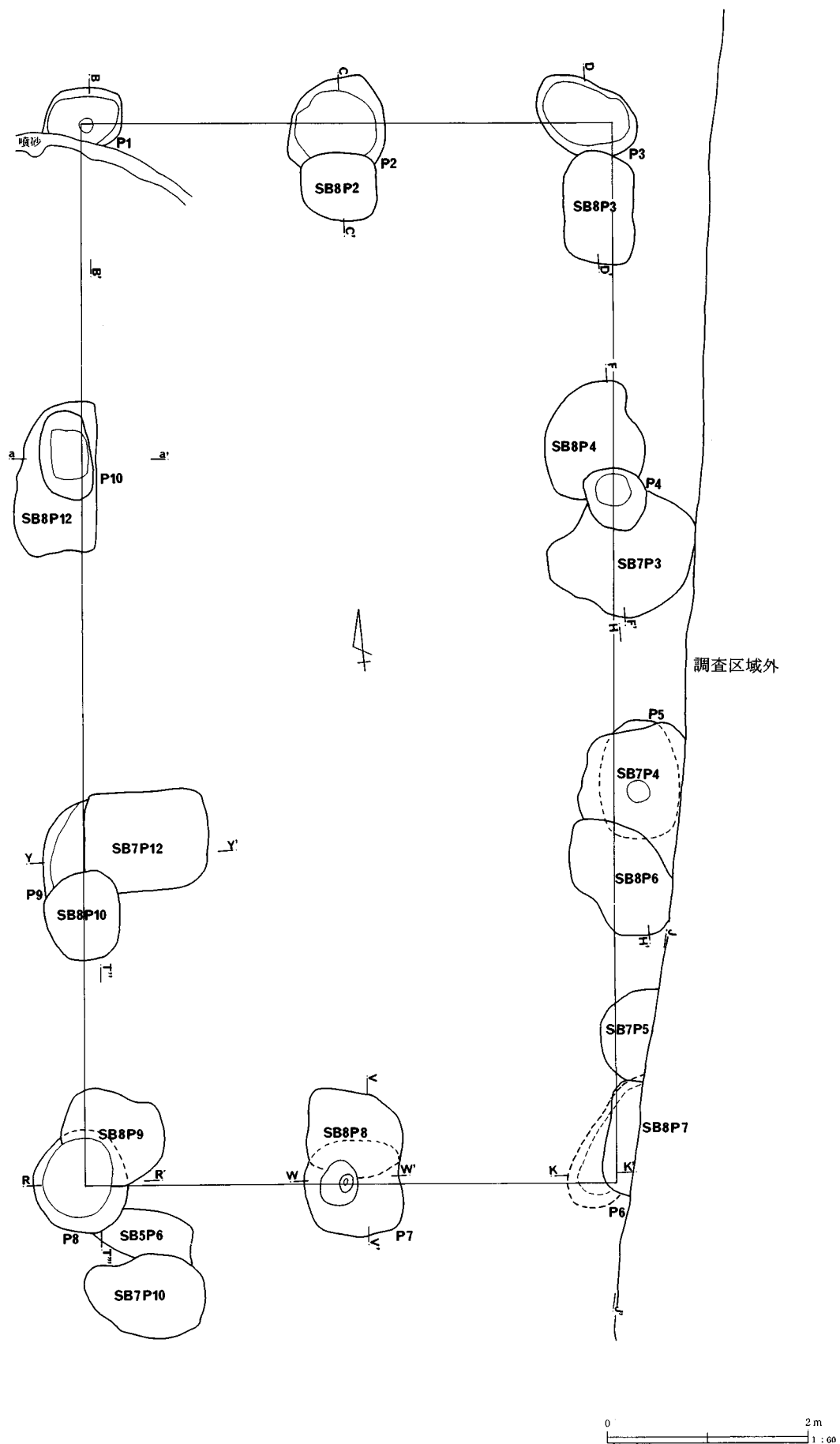
2間×4間の南北棟側柱建物で、梁行5.3m、桁行9.1m、面積は48.23㎡を測る。柱間は梁行2.4m～2.5m、桁行2.3m前後であった。建物の方向はN-3°-Eを指す。

柱穴の掘り方は基本的には方形であったと思われるが、調査時点では楕円形を呈するものが多かった。大きなもので長径120cm×短径80cm×深さ60cm、小さなもので長径75cm×短径70cm×深さ20cmを測る。柱痕は比較的残りの良いものが多く、P 1、P 3、P 4、P 7、P 8の5つの柱穴で柱材が朽ちないで残っていた。それぞれの柱材の径は、P 1が24cm、P 3が34cm、P 4が32cm、P 7が30cm、P 8が34cmであり、おおよそ30cm前後の太い柱材が使用されていたと想定できる。

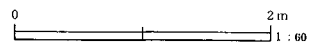
出土遺物は、土師器坏、須恵器甕、若干の平瓦などが検出できた。土師器坏はほとんどに油煙が付着しており、灯明皿として使用されていたと考えられる。



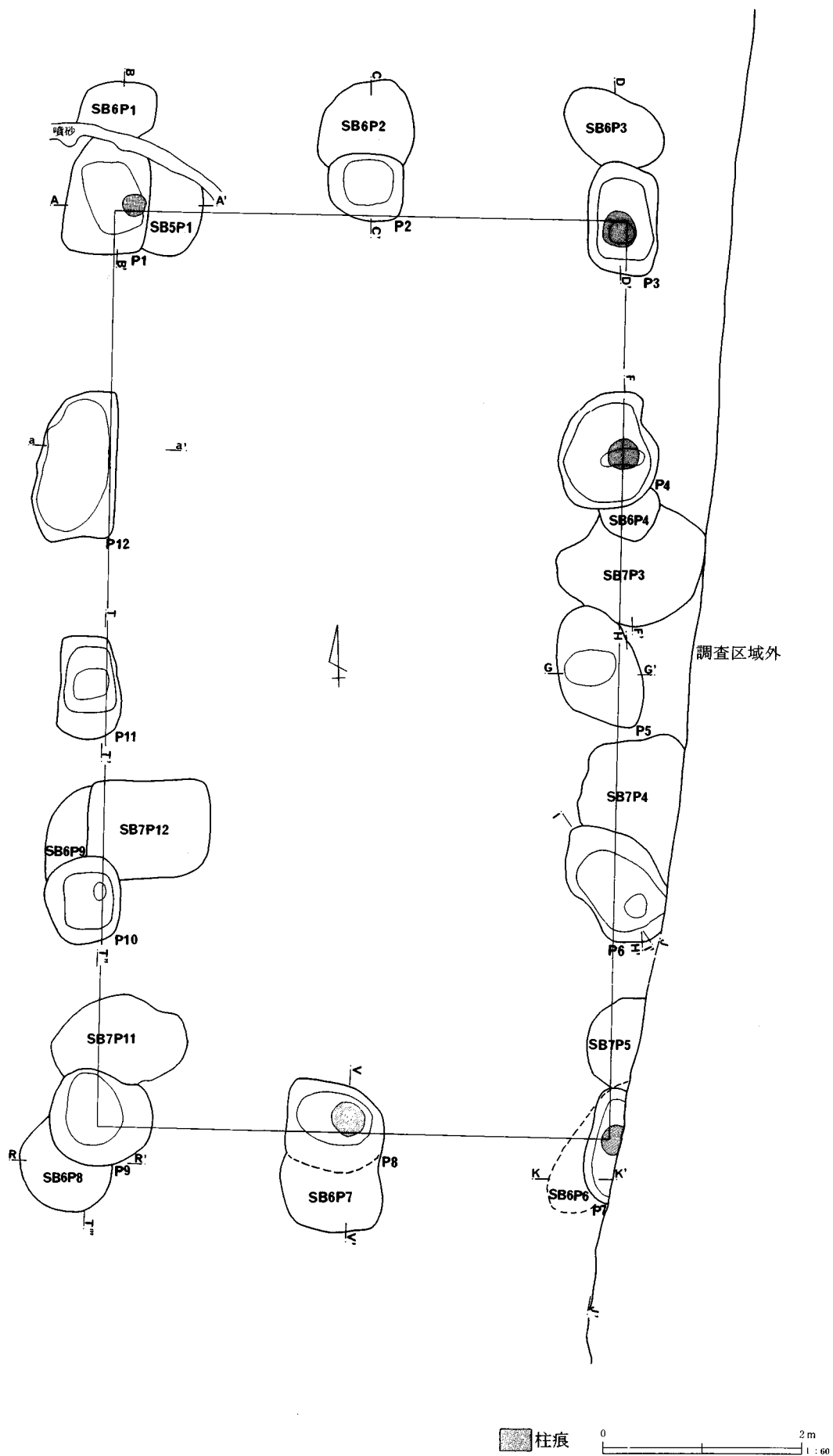
第54図 第5号掘立柱建物跡



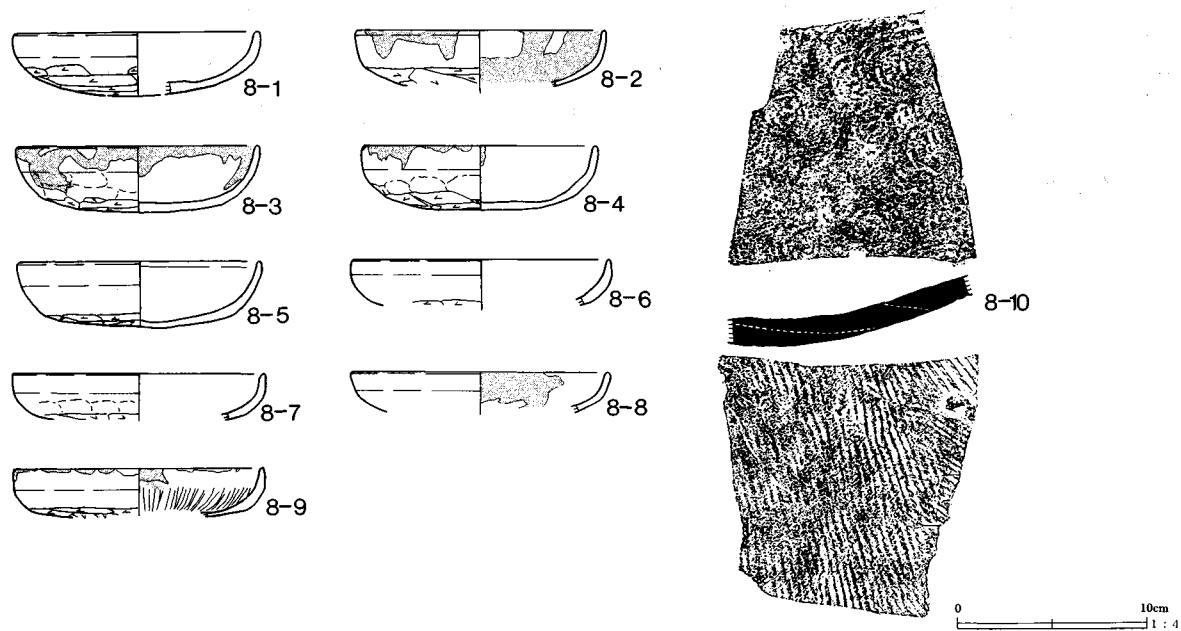
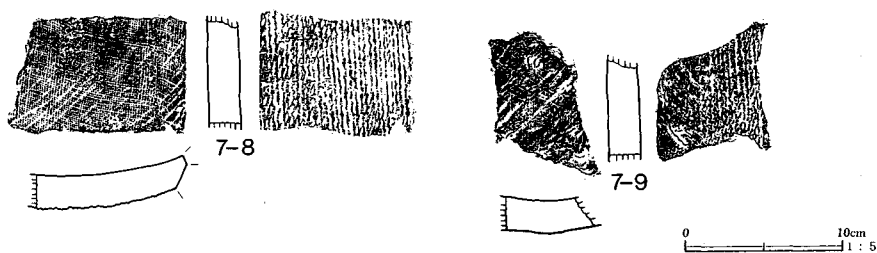
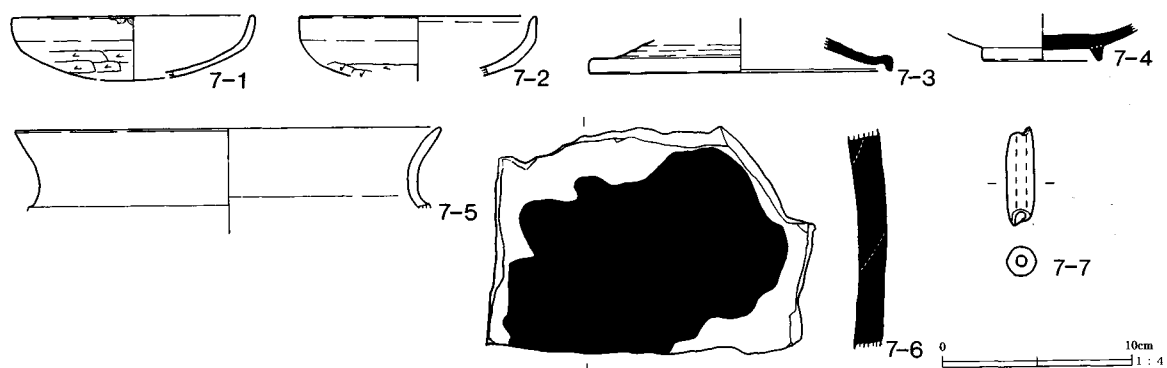
第55図 第6号掘立柱建物跡



- 67 -



第57図 第8号掘立柱建物跡



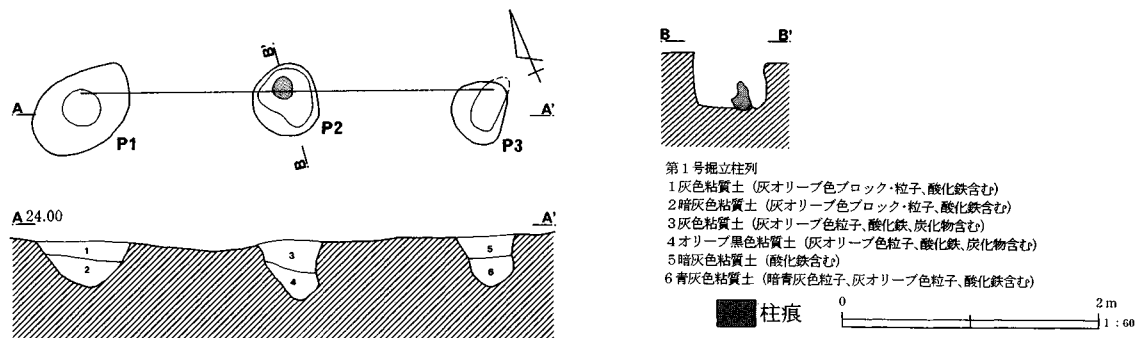
第58図 第7・8号掘立柱建物跡出土遺物

第25表 第7・8号掘立柱建物跡出土遺物観察表

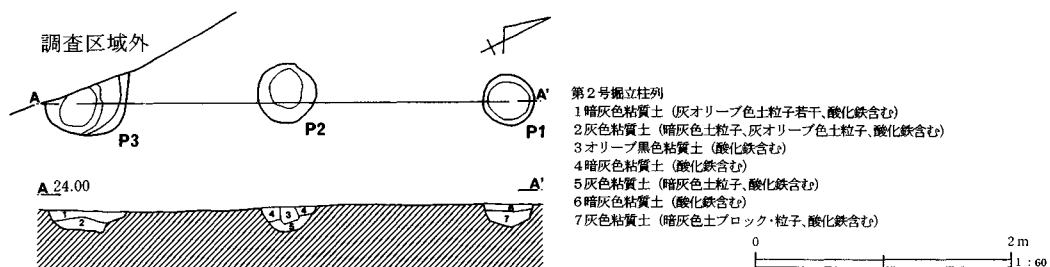
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
7-1	土師器坏	(13.0)	(3.4)	—	AEHJ	橙色	B	15%	油煙付着。灯明皿用途。P 3。
7-2	土師器坏	(12.6)	—	—	AEJK	橙色	A	20%	P 3
7-3	須恵器蓋	(16.0)	—	—	AF	灰色	A	20%	南比企産。P 11。
7-4	須恵器碗	—	—	6.3	AEJ	灰白色	C	40%	酸化焰焼成。P 11。
7-5	土師器甕	(22.6)	—	—	AEJ	にぶい黄橙色	A	10%以下	P 4。
7-6	須恵器甕	—	—	—	AN	灰色	A	胴部	外面平行叩き。内面あて具痕。墨付着。転用硯用途。P 4。
7-7	土 錘	長さ5.1	幅1.4	厚さ1.5	—	—	—	80%	重さ10.0g。P 1。
7-8	平 瓦	—	—	厚さ2.1	AFN	灰色	A	—	凹面：布目痕7×7本/cm ² 。糸切り痕。凸面：縄叩き目。技法：粘土板一枚造り（推定）。南比企産。P 1。
7-9	平 瓦	—	—	厚さ2.1	AH	暗灰色	A	—	凹面：布目痕7×7本/cm ² 。糸切り痕。凸面：縄叩き目。技法：粘土板一枚造り（推定）。P 12。
8-1	土師器坏	(13.1)	(3.3)	—	AJ	にぶい橙色	A	30%	油煙付着。灯明皿用途。P 6。
8-2	土師器坏	(13.4)	—	—	JM	にぶい橙色	A	30%	油煙付着。灯明皿用途。P 6。
8-3	土師器坏	12.9	3.4	—	AEHJM	にぶい橙色	A	90%	油煙付着。灯明皿用途。P 6。
8-4	土師器坏	12.5	13.3	—	AJ	橙色	A	80%	油煙付着。灯明皿用途。P 6。
8-5	土師器坏	13.0	3.4	—	AEHJ	橙色	B	100%	P 6。
8-6	土師器坏	(13.3)	—	—	AJ	橙色	A	15%	P 11。
8-7	土師器坏	(13.4)	—	—	EGHJ	にぶい橙色	A	25%	P 5。
8-8	土師器坏	(13.8)	—	—	AEJ	にぶい橙色	B	10%	油煙付着。灯明皿用途。P 2。
8-9	土師器坏	(13.3)	—	—	AEH	にぶい橙色	A	15%	油煙付着。灯明皿用途。内面に放射状暗文。P 6。
8-10	須恵器甕	—	—	—	AN	灰色	A	胴部	外面斜格子叩き目。内面あて具痕。P 6。
8-11	平 瓦	—	—	厚さ2.4	AN	灰白色	B	広端部側	凹面：粘土板糸切り後ナデ。凸面：縄叩き目。技法：粘土板桶巻造り。P 6。
8-12	平 瓦	—	—	厚さ1.8	AHN	灰色	B	—	凹面：布目痕7×7本/cm ² 。粘土板糸切り痕。凸面：縄叩き目。技法：粘土板桶巻造り。P 5。

3 掘立柱列

掘立柱列は、総数にして2列検出した。掘立柱建物跡として把握するには困難なもので柱筋のとおるものを呼称した。



第59図 第1号掘立柱列



第60図 第2号掘立柱列

第1号掘立柱列（第59図）

101・102-172グリッドを中心に位置する。第9号住居跡を切っている。

検出されたピットは3つで直線上に並び、軸方向はN-69°-Wを示す。柱穴間の距離は西から1.65m、1.60mを測る。柱穴は円形ないし楕円形のプランで、最大径89cm、最小径49cmで、深さは35cm～45cmである。P2において唯一柱痕が確認され、径18cmの柱材が残っていた。

出土遺物は、検出できなかった。

第2号掘立柱列（第60図）

102-172・173グリッドに位置する。南が調査区域外となっている。

検出されたピットは3つで直線上に並び、軸方向はN-27°-Eを示す。柱穴間の距離は北から1.70m、1.60mを測る。柱穴は円形のプランで、最大径70cm、最小径39cmで、深さは20cm前後の浅いものである。

西に第27号土坑が所在し、調査区域外となっているので不明であるが、この土坑が柱穴を切り、さらに西へプランが延びる掘立柱建物跡の梁行側柱穴列の可能性も捨てきれない。

出土遺物は、検出できなかった。

4 方形周溝墓

方形周溝墓は、総数にして3基検出した。時期は弥生時代中期後半から末にかけてと考えられる。3基は各々、調査区南において近接して検出された。調査範囲は狭く全貌を明らかにすることは不可能であったが、調査区脇にトレンチを入れて規模の把握に努めた。

第1号方形周溝墓（第61図、第26表）

103・104-178・179グリッドを中心に位置する。北及び西側は調査区域外となっており、全体のプランは詳細不明である。

平面形は、北東-南西方向にやや長い方形を呈し、四隅が切れるものと推定できる。主軸方向は、N-50°-Eを示す。溝外法で12.8m×14.0m、内法で9.8m×8.4mであると推定できる。調査では東溝全体と北溝の一部が検出できたに止まり、南溝は確認トレンチで推定されたもので範囲のみの確認である。

東溝の規模は、長さ8.8m、最大幅2.2m、深さ53cmで溝の底面は南に向かって傾斜していた。方台部側はゆるやかな立ち上がりであった。埋土は自然堆積と思われる。

方台部は、削平されており主体部は検出できなかった。

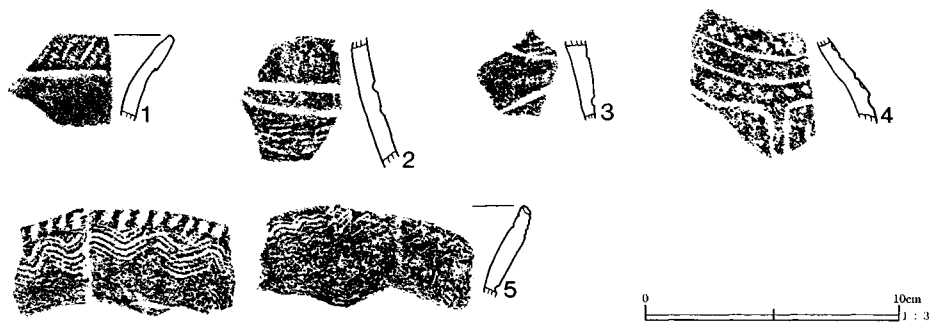
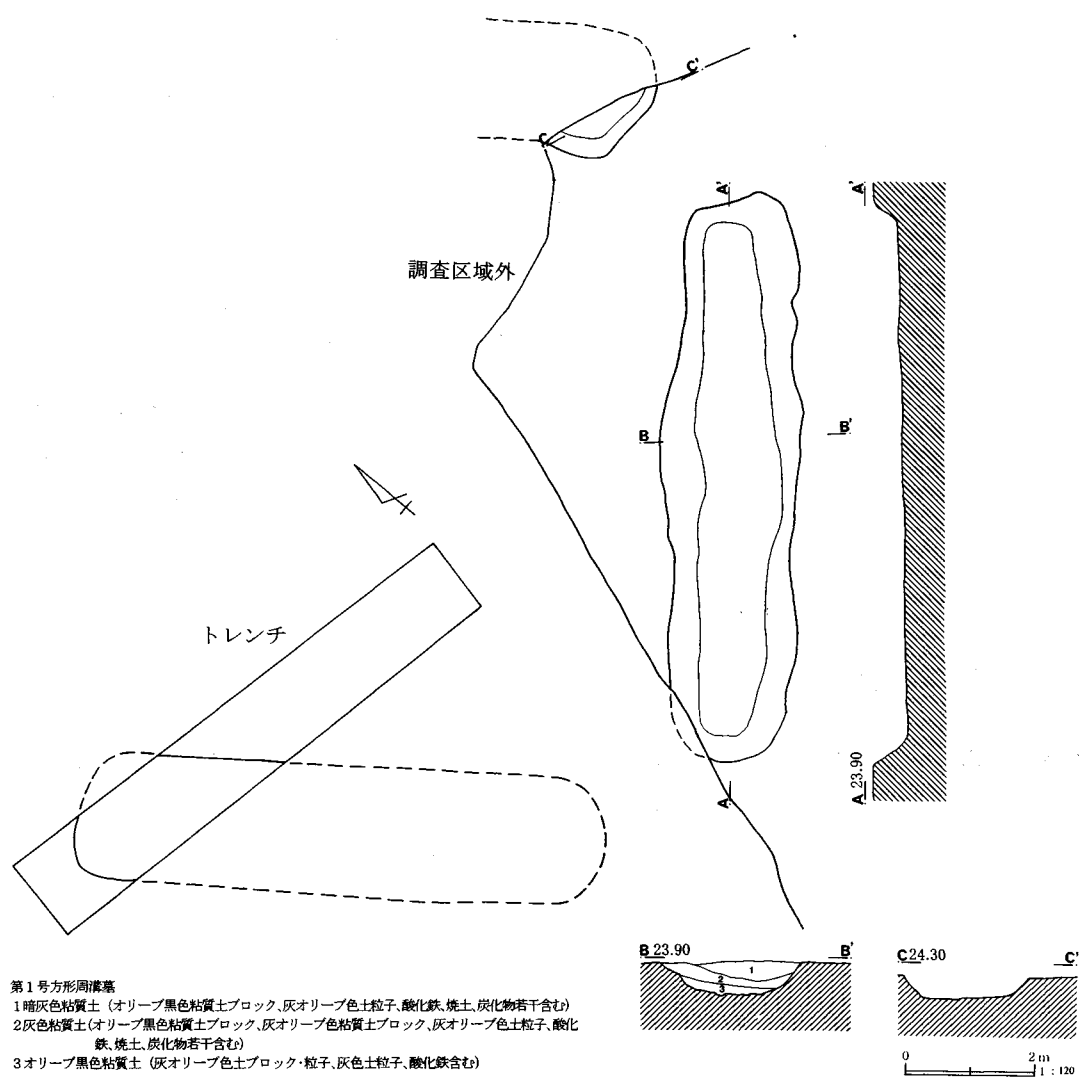
出土遺物は、主に東溝の北寄りから出土し、弥生土器壺・鉢等の破片が若干出土した。

第2号方形周溝墓（第62図、第27表）

103-180・181・182グリッドを中心に位置する。西側のほとんどが調査区域外となっており、全体のプランは不明である。

平面形は、方形を呈し四隅が切れるものと推定できる。主軸方向は、N-30°-Eを示す。推定規模で、溝外法で18.0m×16.8m、内法で12.0m×11.8mであると推定できる。調査では西溝全体と南溝の一部のみ検出できたに止まった。

西溝の規模は、長さ11.0m、最大幅2.55m、深さ80cmで溝の底面は北半分が最も深く、中央部付近で浅くなり、以南半分はフラットであった。方台部側の立ち上がりは、西溝・南溝とも急であった。埋土



第61図 第1号方形周溝墓・出土遺物

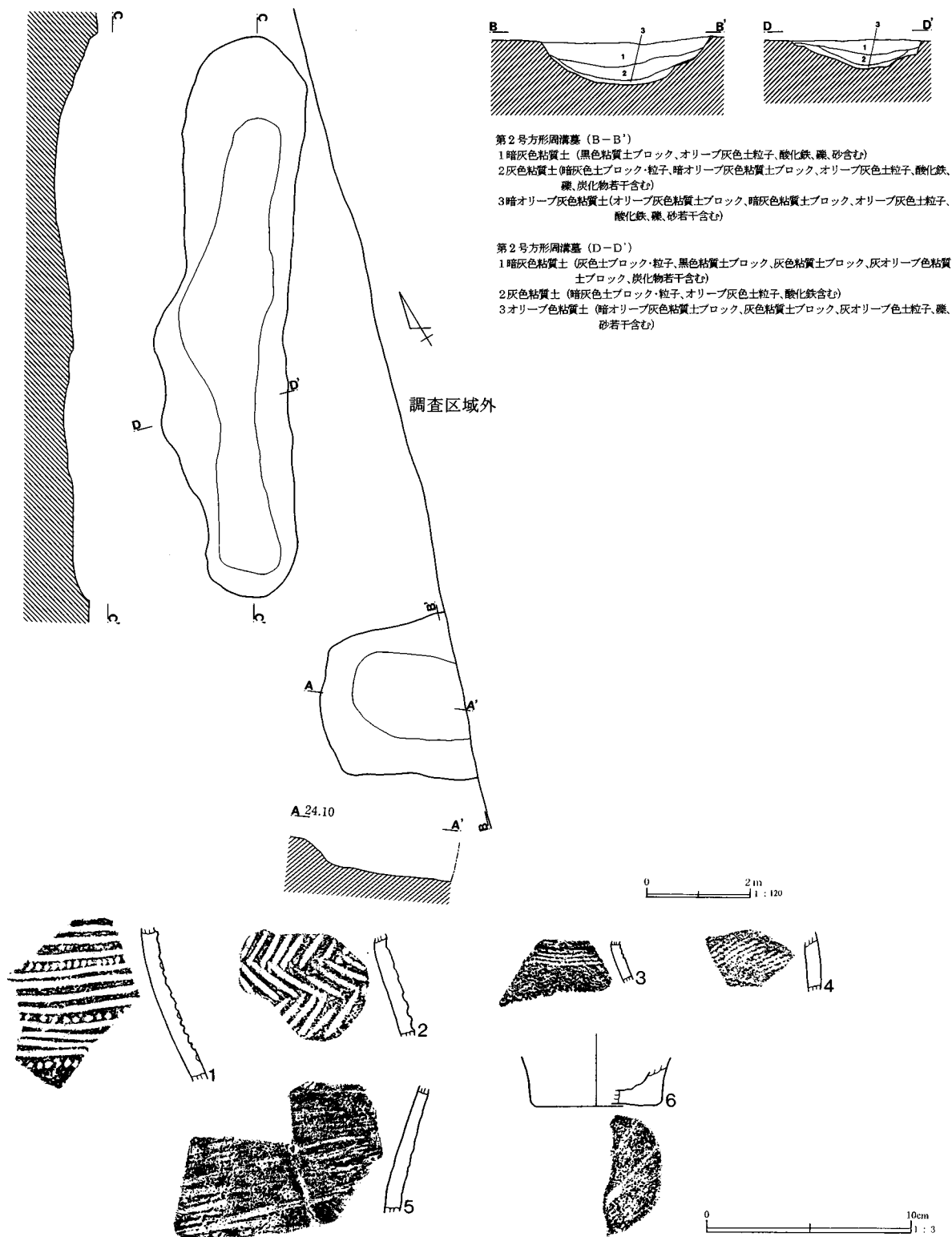
第26表 第1号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	口縁部	口縁部LR縄文。
2	弥生土器壺	—	—	—	—	褐色	—	頸部～胴部	縄文。
3	弥生土器壺	—	—	—	—	オリーブ黒色	—	胴部	LR縄文。
4	弥生土器壺	—	—	—	—	浅黄橙色	—	胴部	
5	弥生土器鉢	—	—	—	—	橙色	—	口縁部	

は自然堆積と思われる。

方台部は、削平されており主体部は検出できなかった。

出土遺物は、主に南溝の西寄りの斜面から底面にかけて出土し、弥生土器壺・甕の破片が若干出土した。また、図示不可能であったが赤彩された高坏破片も出土した。



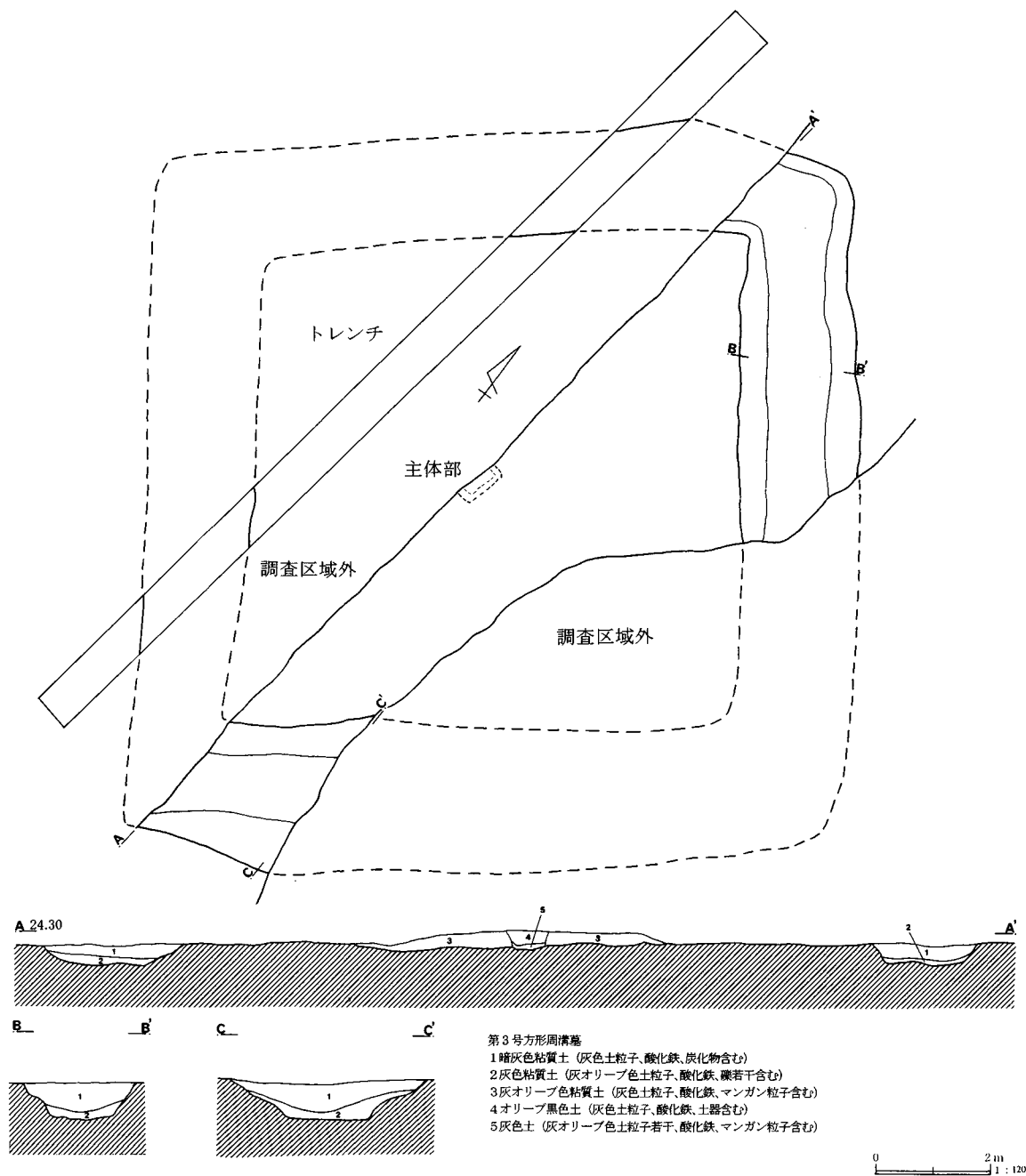
第62図 第2号方形周溝墓・出土遺物

第27表 第2号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	頸部	櫛描縹状文。 R L 縄文。 横位の条痕文？ 木葉痕。
2	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	
3	弥生土器甕	—	—	—	—	浅黄橙色	—	頸部	
4	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	
5	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	
6	弥生土器壺	—	—	(6.5)	—	明黄褐色	—	底部	

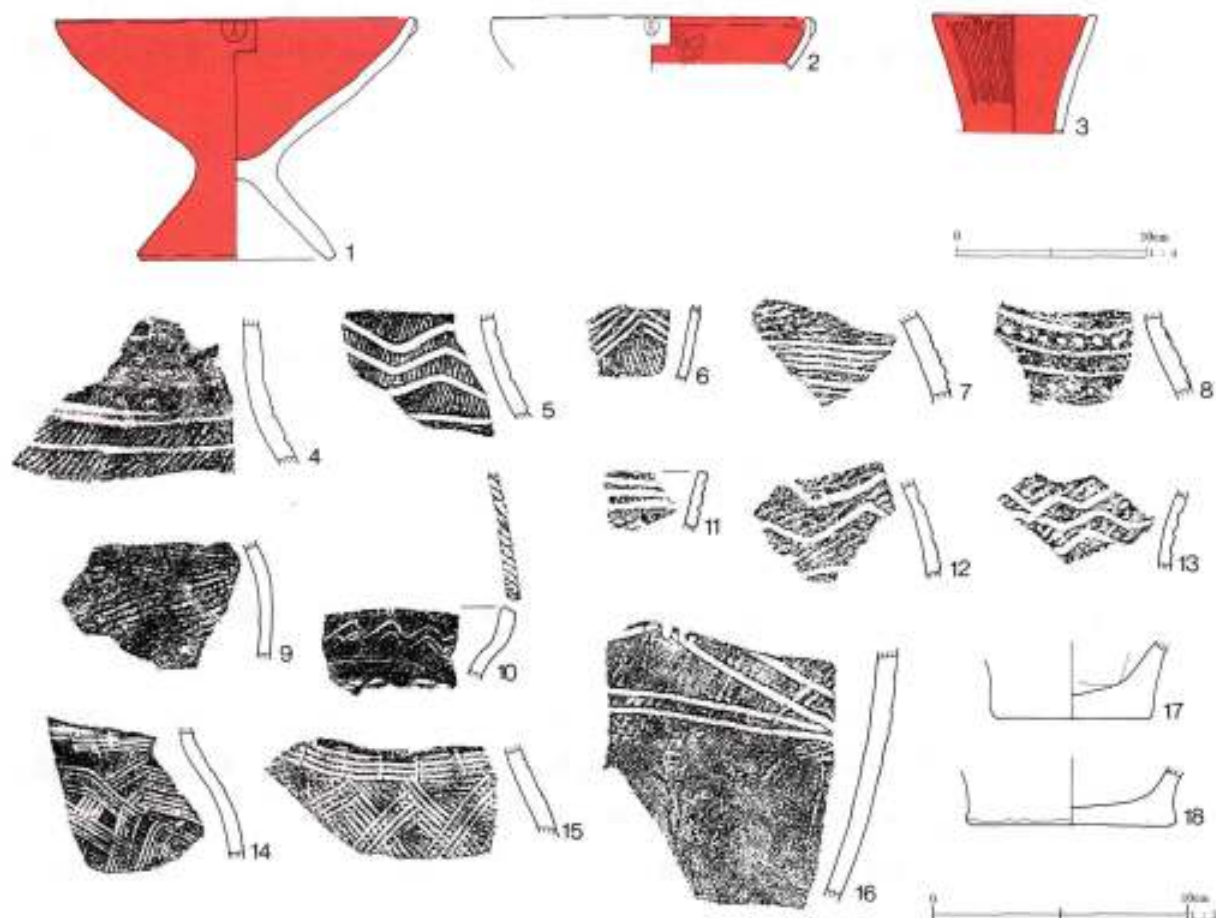
第3号方形周溝墓（第63・64図、第28表）

104・105・106ー183・184・185・186グリッドに位置する。東、西側のほとんどが調査区域外となっており、全体のプランの詳細は不明である。



第63図 第3号方形周溝墓

平面形は、ほぼ正方形を呈し全周するもので、コーナー部分の掘り込みの浅くなるタイプである。主軸方向は、N-37°-Wを示す。推定規模で、溝外法で13.2m×12.6m、内法で8.8m×8.5mであると推定できる。調査では東溝と南溝の一部のみ検出できたに止まり、北溝、南溝は確認トレンチで範囲のみ



第64図 第3号方形周溝墓・出土遺物

第28表 第3号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	残存率	備考
1	弥生土器高坏	(18.8)	12.5	10.3	AEJ	にぶい黄褐色	8	40%	赤彩剥離。
2	弥生土器高坏	(16.9)	—	—	AEI	褐色	4	10%以下	内面ミガキ後赤彩。
3	弥生土器蓋	(8.2)	—	—	EHJ	灰白色	4	10%	内外面赤彩、外面ミガキ後赤彩。
4	弥生土器蓋	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	残部	L R 縄文。
5	弥生土器蓋	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	残部	縄縄文。
6	弥生土器蓋	—	—	—	—	焼灰色	—	胴部	—
7	弥生土器蓋	—	—	—	—	灰褐色	—	胴部	R L 縄文。
8	弥生土器蓋	—	—	—	—	浅黄褐色	—	胴部	—
9	弥生土器蓋	—	—	—	—	明赤褐色	—	胴部	L R 縄文。
10	弥生土器蓋	—	—	—	—	灰褐色	—	口縁部	—
11	弥生土器蓋	—	—	—	—	灰褐色	—	口縁部	—
12	弥生土器蓋	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	地文 R L 縄文。
13	弥生土器蓋	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	地文 R L 縄文。
14	弥生土器蓋	—	—	—	—	褐色	—	胴部	櫛状縞文、交差文。
15	弥生土器蓋	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	櫛状縞文、交差文。
16	弥生土器蓋	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	—
17	弥生土器蓋	—	—	(6.2)	—	にぶい褐色	—	10%以下	—
18	弥生土器蓋	—	—	(8.4)	—	にぶい黄褐色	—	10%以下	網代文?

の確認である。

東溝の規模は、推定長12.0m、最大幅2.1m、深さ65cmで溝の底面はほぼフラットであった。南溝は、推定長12.0m、幅2.60m、深さ62cmである。方台部側の立ち上がりは、東溝・南溝とも緩やかな傾斜であった。埋土は自然堆積と思われる。

方台部は、大部分削平されていたが、断面観察から方台部中央付近に墳丘が残存しており、主体部と思われる土壌状の掘り込みが確認できた。その規模は、上幅75cm、下幅57cmであった。長さについては不明である（図示した規模は推定）。

出土遺物は、主に東溝から出土し、弥生土器壺・甕の破片が出土した。また、赤彩された高坏が主体部と考えられる土壌内の埋土（第4層）中から出土した。

5 土器棺墓

土器棺墓は、総数にして3基検出した。いずれも単棺で、時期は弥生時代中期後半と考えられる。2基は、いずれも調査区域外に接する箇所で見出され詳細は不明であるが、第3号土器棺墓は、住居内のピットに埋設された状態で検出され全体像が明らかにできた。

第1号土器棺墓（第65図、第29表）

100-167グリッドに位置する。北側は調査区域外となっており、調査区域内と跨がる形で検出した。平面形は隅丸方形と推定され、規模は推定長87cm、推定幅52cm、深さ44cmを測る。主軸方向は、N-8°-Eを示す。

表土除去の際に発見されたため詳細は不明であるが、墓壇内には、ほぼ床面にキザミ口縁の大型甕を埋設しこれを棺身とし、同一個体の壺の胴部破片2つを蓋として被せた状態で検出された。また、第65図2の個体は、埋設土器の埋土中に転落している状態が認められた。

埋設土器内の埋土中及び墓壇内の埋土中には遺物及び骨片等は確認できなかった。

第2号土器棺墓（第66図、第30表）

100・101-171グリッドに位置する。東側は調査区域外となっており、調査区域内と跨がる形で検出した。

平面形は楕円形と推定され、規模は推定径95cm×85cm、深さ25cmを測る。

表土除去の際に約半分削平してしまい詳細は不明であるが、墓壇内には、ほぼ床面に小型の甕を埋設しこれを棺身とし、上半部を欠いた壺の胴部を倒立させて蓋として覆い被せた状態で検出された。

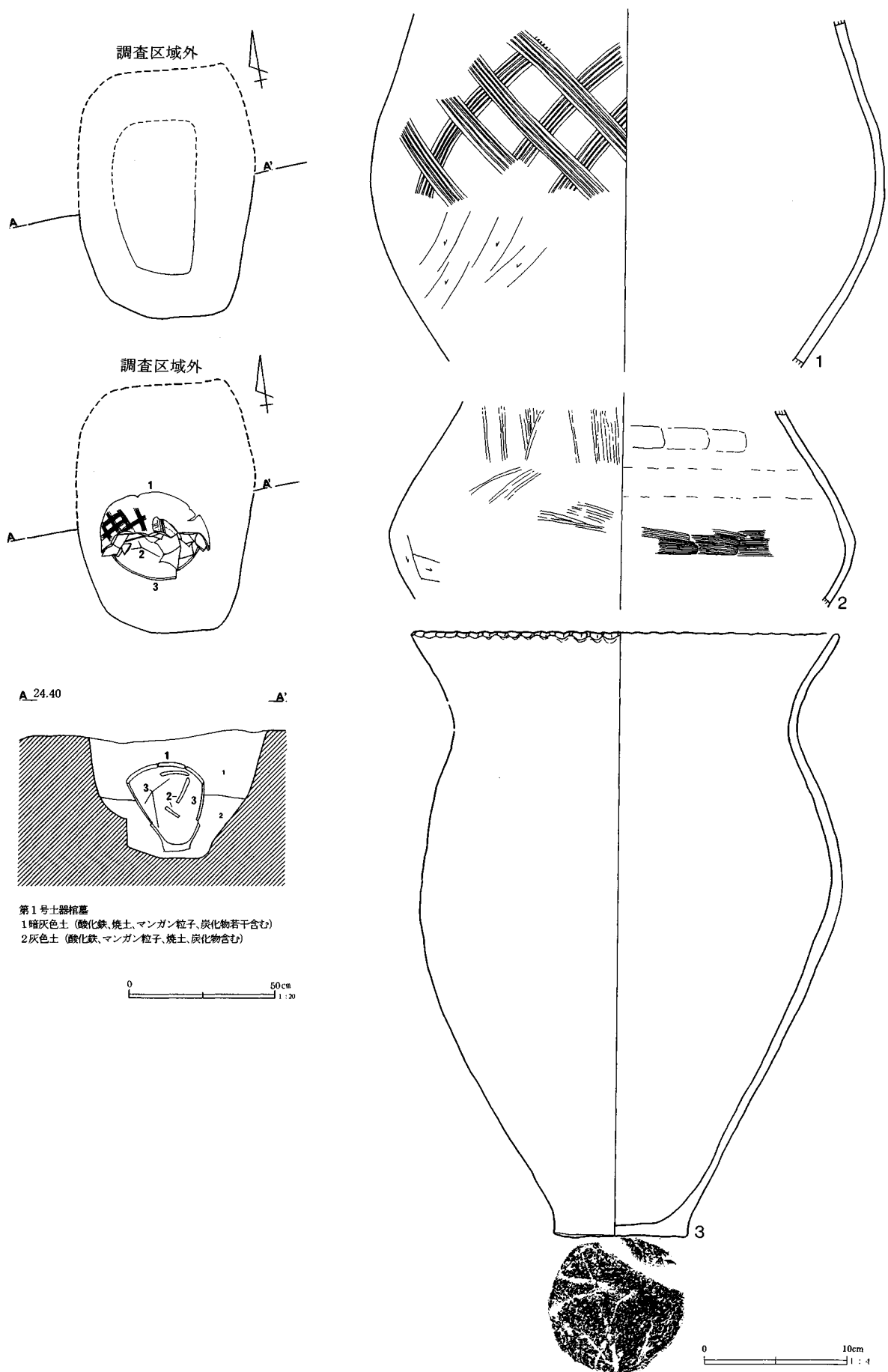
埋設土器内の埋土中及び墓壇内の埋土中には遺物及び骨片等は確認できなかった。

第3号土器棺墓（第67図、第31表）

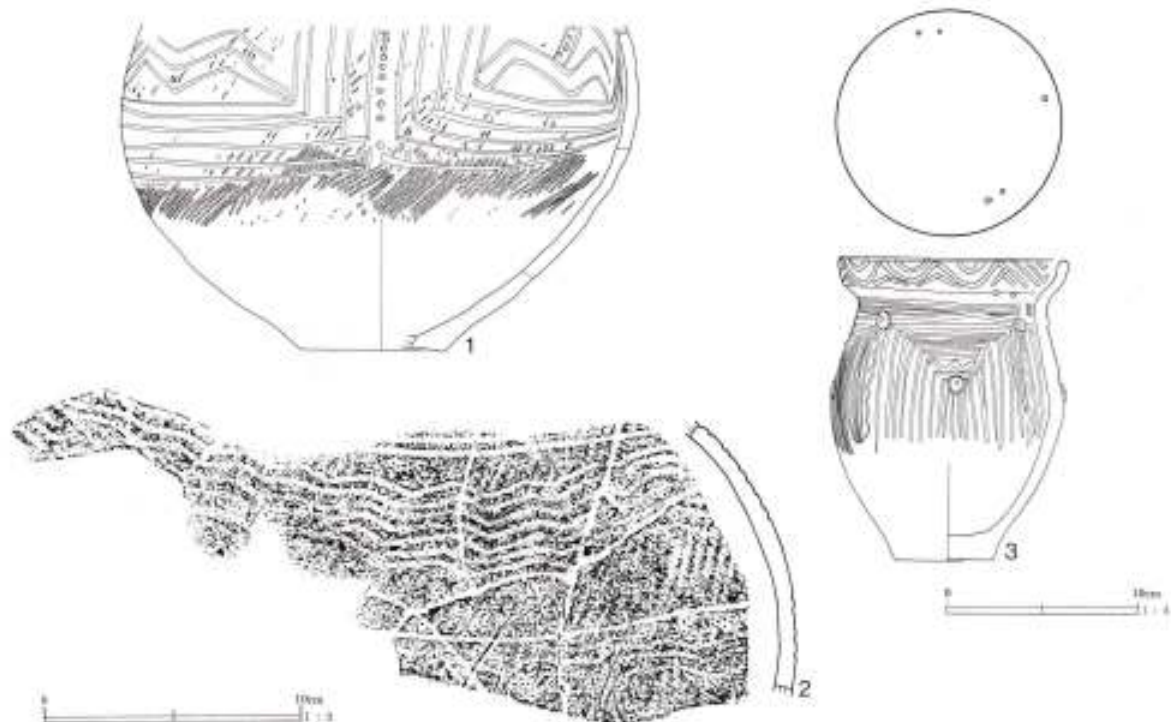
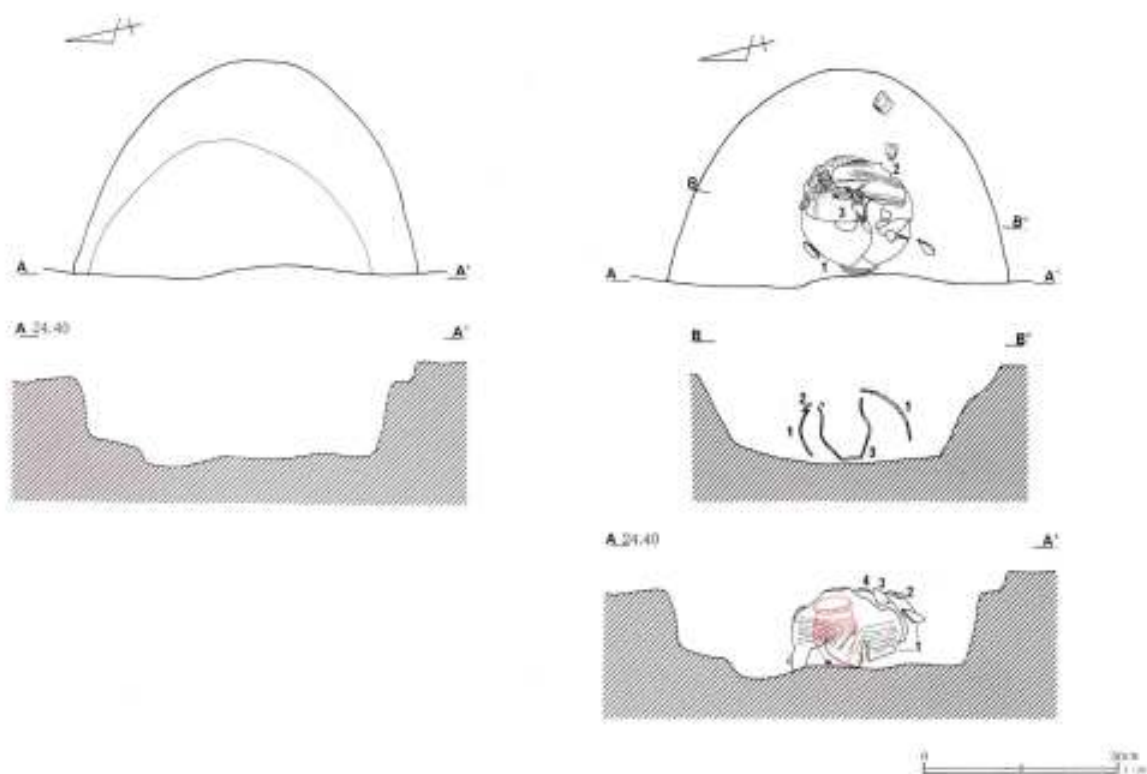
121-168グリッドに位置する。第7号住居跡内のピット中に所在する。

第29表 第1号土器棺墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器甕	—	—	—	AEIJ	にぶい橙色	B	30%	櫛描交差文。
2	弥生土器壺	—	—	—	DMN	にぶい黄橙色	A	25%	
3	弥生土器甕	30.2	42.2	9.4	ABEKM	にぶい褐色	B	70%	木葉痕。



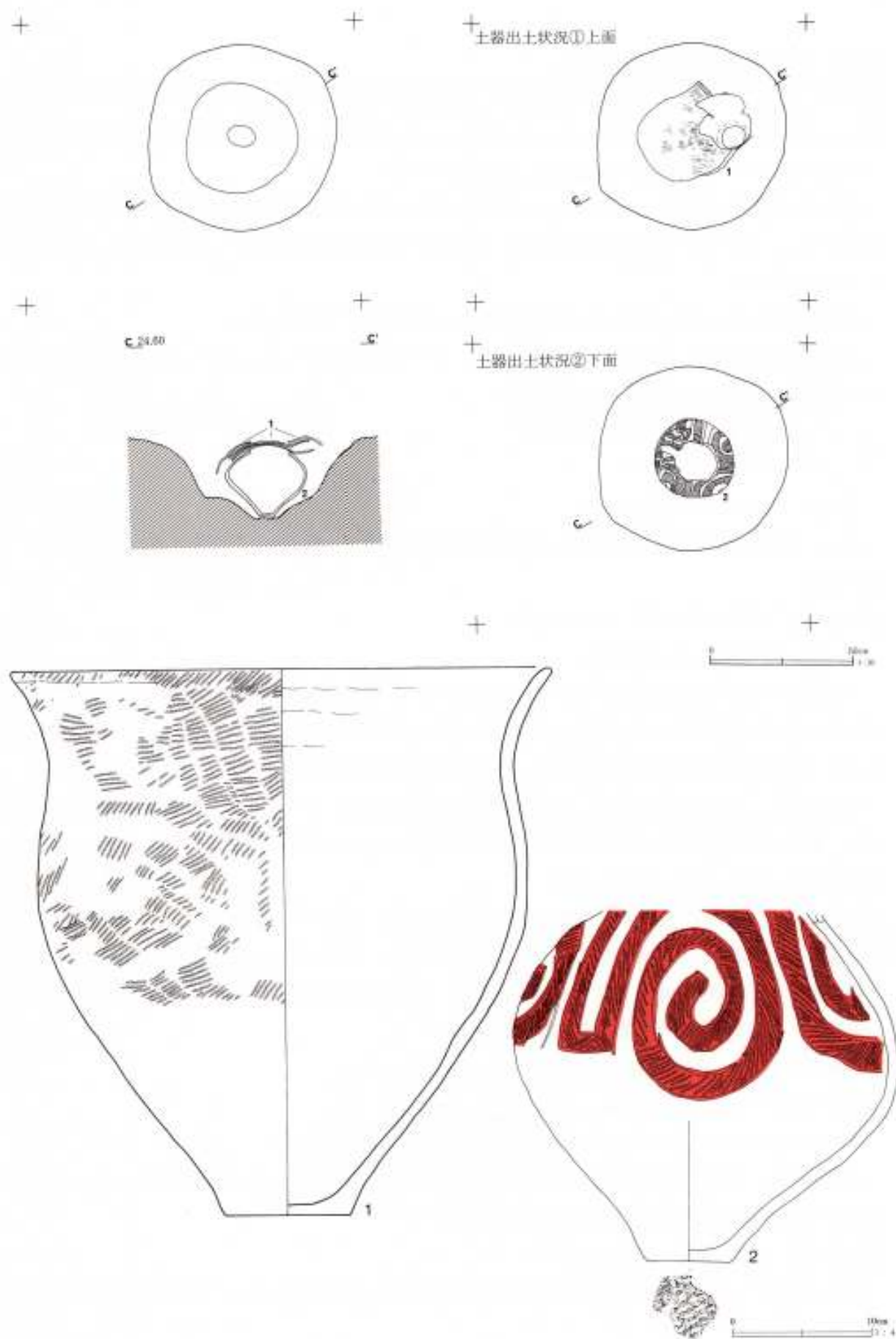
第65図 第1号土器棺墓・出土遺物



第66図 第2号土器棺墓・出土遺物

第30表 第2号土器棺墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器甕	—	—	7.6	AEW	絶沢色	C	60%	胴やや下半までLR縄文、以下ナデ。
2	弥生土器甕	—	—	—	—	黄灰色	—	胴部	地文LR縄文、1と同一部体。
3	弥生土器甕	12.0	16.1	15.1	AEW	灰褐色	A	100%	文様4単位、胴部ボタン貼付文、コノ字重ね文、 壺下蛇行文。



第67図 第3号土器棺墓・出土遺物

第31表 第3号土器棺墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
1	弥生土器甕	39.0	39.3	9.0	ADIMN	にぶい橙色	A	70%	L R 縄文。
2	弥生土器壺	—	—	6.0	AJM	赤灰色	B	80%	磨消縄文。L R 縄文施文区画内赤彩。底部粗い網代痕。

平面形は円形で、規模は径72cm×69cm、深さ29cmを測る。

第7号住居跡内南寄りの床面下にピットを掘り込み、床面に頸部より上を打ち欠いた壺を埋設しこれを棺身とし、大型の甕の胴部及び底部を蓋として被せた状態で検出された。これら土器は、住居床面より下に検出された。

墓墳内の覆土は、砂質土であり、砂の中に埋まった状態のように見えた。

埋設土器内の埋土は、約半分くらいまで埋まっていて上半は空洞であった。この埋土及び墓墳内の埋土中には遺物及び骨片等は確認できなかった。

6 土 坑

土坑は、総数にして37基検出した。

以下、事実記載が必要と考えられるもののみを記載し、全て一覧表にして掲載する（第68～76図、第32～35表）。

第3号土坑（第68・72～74図、第32・33表）

99・100－162グリッドに位置する。

平面形はやや隅丸の平行四辺形を呈する楕円形であり、長軸3.58m、短軸1.98m、深さ16cmを測る。本遺構は土坑として捉えたが、周辺を含めて土師器、須恵器が非常に多く集中して検出され、掘り込みも浅く、湿地の中に捨てられた状況といったような土器溜まり状の遺構であった。

出土遺物は、非常に多く破片にして500点を超え、土師器器台・坏・皿・甕、須恵器蓋・坏・椀・鉢・平瓶・甕といった多器種の土器が出土し、特に土師器甕の出土が特徴的であった。

第8号土坑（第68・75図、第32・34表）

128－164グリッドに位置する。西側は調査区域外となり、遺構はさらに延びると推測される。

平面形はやや変形した隅丸方形であり、検出長軸1.89m、短軸1.17m、深さ51cmを測る。

出土遺物は、本遺構の南寄りに集中して出土し、比較的良好な状態であった。土師器高坏・壺・甕等が検出され、特に壺は残存状態の良いものであった。

第17号土坑（第69・76図、第32・35表）

113－166グリッドに位置する。

平面形はほぼ円形であり、長軸1.69m、短軸1.56m、深さ11cmを測る。

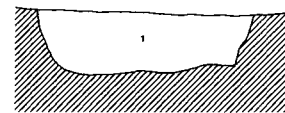
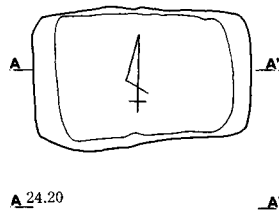
出土遺物は、上層の第1層に集中して出土し、土師器坏、須恵器坏・椀・甕等が見られた。また、須恵器の中には双耳壺と考えられるものが認められた。

第36号土坑（第71・76図、第32・35表）

121－169グリッドに位置する。第1号溝跡と第37号土坑と重複関係にあり、両方に本遺構が切られている。

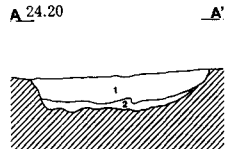
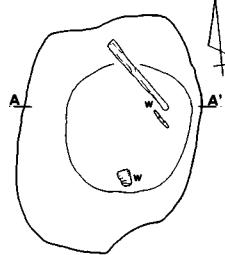
平面形は不整形であり、検出長軸3.38m、短軸2.75m、深さ12cmを測る。

第1号土坑



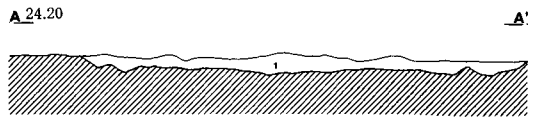
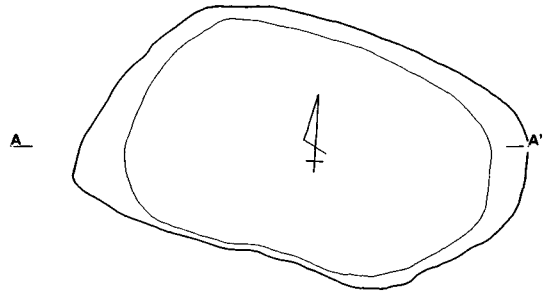
第1号土坑
1 灰色粘質土 (暗灰色粘質土ブロック、にぶい褐色土ブロック、酸化鉄、炭化物、火山灰含む)

第2号土坑



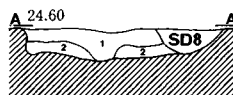
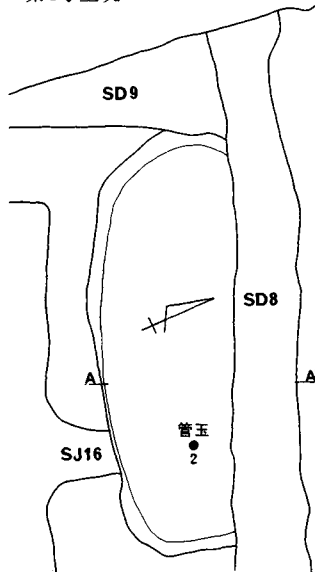
第2号土坑
1 灰色粘質土 (黒色土粒子、炭化物若干、酸化鉄、砂、火山灰含む)
2 暗オリーブ灰色粘質土 (酸化鉄、炭含む)

第3号土坑



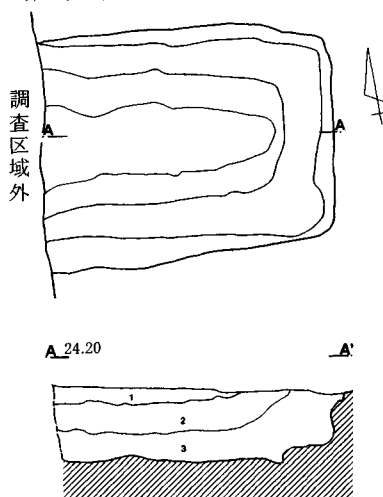
第3号土坑
1 土器多量集中土層 (暗灰色土の中に土器が多量に堆積している状態、酸化鉄含む)

第4号土坑



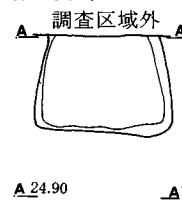
第4号土坑
1 黄灰色土 (焼土若干、酸化鉄、礫含む)
2 黒褐色土 (暗灰色砂質土ブロック、黄灰色土粒子、焼土若干、酸化鉄、礫、砂含む)

第5号土坑



第5号土坑
1 暗灰色粘質土 (暗オリーブ褐色土ブロック・粒子、酸化鉄、火山灰、炭化物含む、下部に火山灰層入る)
2 腐食植物炭化層 (暗オリーブ褐色土粒子、黄灰色土粒子、火山灰含む)
3 灰色粘質土 (暗灰色粘質土ブロック、酸化鉄、炭化物、焼土、火山灰、土器含む)

第6号土坑

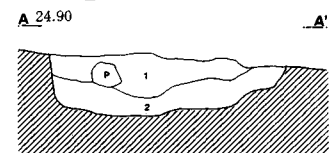
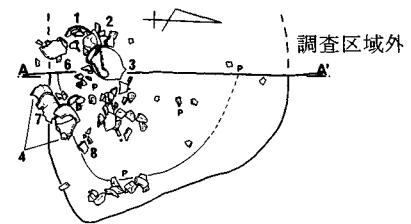


第6号土坑
1 暗灰色土 (礫多量、酸化鉄、火山灰、土器含む)

第7号土坑

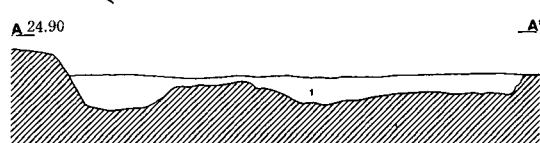
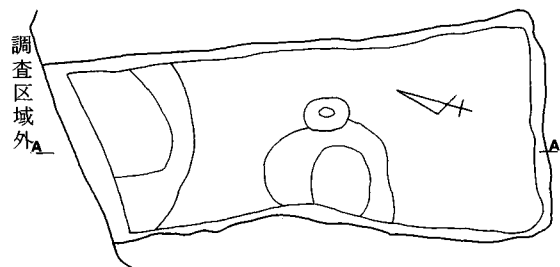


第8号土坑



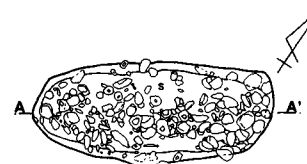
第8号土坑
1 暗灰色土 (粘性あり、酸化鉄、礫、炭化物含む)
2 黒褐色土 (酸化鉄、礫、火山灰、マンガン粒子、砂含む)

第9号土坑



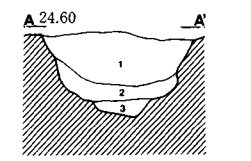
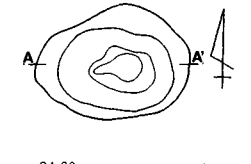
第9号土坑
1 暗灰色土 (礫、砂多量、酸化鉄、マンガン粒子、火山灰含む)

第10号土坑



第10号土坑
1 灰色土 (酸化鉄、礫、砂含む)

第11号土坑



第11号土坑
1 灰色粘質土 (火山灰若干、酸化鉄、礫、砂含む)
2 暗灰色粘質土 (下部に炭化物層入る、酸化鉄、砂、礫、炭化物、焼土、火山灰含む)
3 暗灰色粘質土 (炭化物、砂多量に含む)

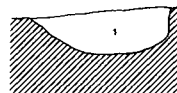


第68図 第1～11号土坑

第12号土坑

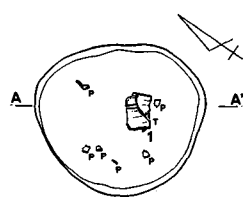
調査区域外

A 24.90

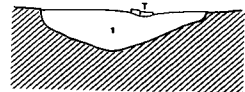


第12号土坑
1 暗灰色土 (酸化鉄、火山灰、礫、土器含む)

第14号土坑



A 24.60



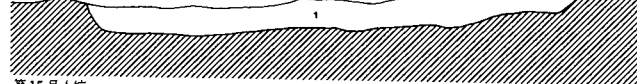
第14号土坑
1 灰色土 (酸化鉄、焼土、炭化物、土器含む)

第15号土坑

調査区域外

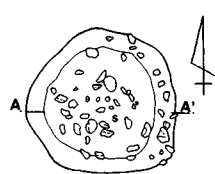
SJ12

A 24.60



第15号土坑
1 暗灰色砂 (暗灰色土粒子、酸化鉄、礫含む)

第13号土坑



A 24.90



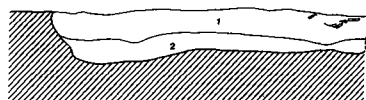
第13号土坑
1 オリーブ黒色土 (酸化鉄、マンガン粒子、火山灰、礫、砂、焼土、炭化物、土器含む)

第16号土坑

調査区域外

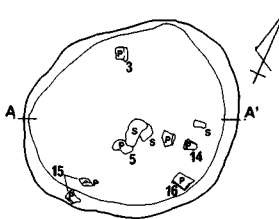


A 24.90



第16号土坑
1 暗灰色土 (灰色土ブロック、酸化鉄、砂、礫含む)
2 暗灰色砂 (暗灰色土粒子若干、礫多量、酸化鉄含む)

第17号土坑

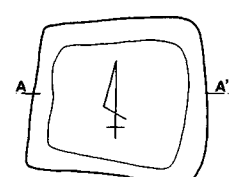


A 24.60



第17号土坑
1 灰色土 (焼土、炭化物多量、酸化鉄、礫、火山灰、土器含む)
2 暗灰色土 (暗灰色粘質土ブロック、灰色土ブロック、焼土、炭化物、酸化鉄、礫、含む)

第18号土坑

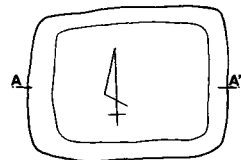


A 24.60

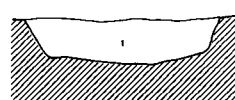


第18号土坑
1 暗灰色粘質土 (灰色土ブロック、粒子、黒褐色土粒子、黄褐色土粒子、オリーブ黄色土粒子、酸化鉄、マンガン粒子、焼土、炭化物含む)

第19号土坑

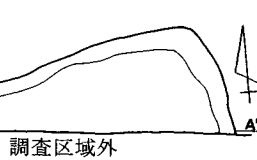


A 24.60



第19号土坑
1 灰色粘質土 (灰色土粒子、暗灰色土粒子、酸化鉄、礫、土器含む)

第20号土坑

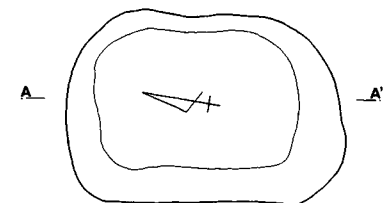


A 24.60

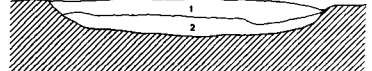


第20号土坑
1 暗灰色土 (酸化鉄、マンガン粒子、礫、焼土、炭化物含む)

第21号土坑



A 24.60



第21号土坑
1 暗灰色砂質土 (酸化鉄、礫含む)
2 暗灰色砂 (酸化鉄、礫多量に含む)

第22号土坑



A 24.60

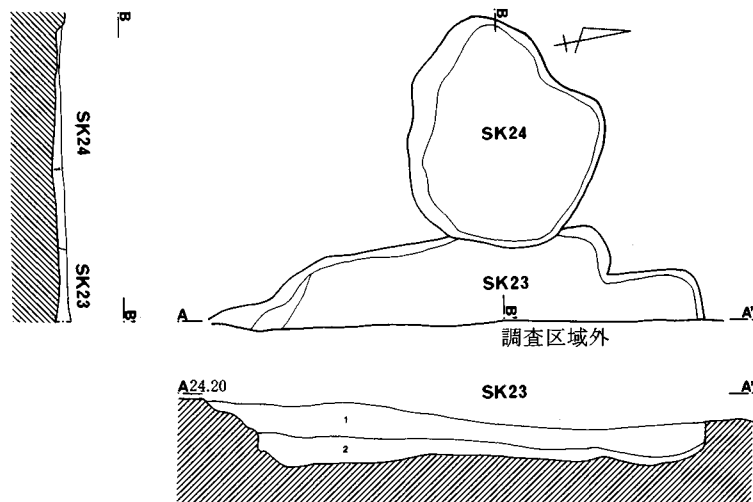


第22号土坑
1 暗灰色土 (灰色土ブロック、酸化鉄、焼土、炭化物、礫、火山灰、土器含む)

0 2m
1:60

第69図 第12~22号土坑

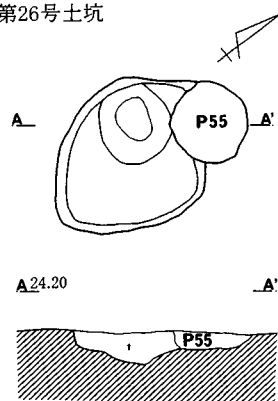
第23・24号土坑



第24号土坑

1 暗青灰色粘質土 (灰オリーブ色土粒子、酸化鉄含む)
 2 暗灰色粘質土 (灰色土ブロック・粒子、酸化鉄、炭化物含む)

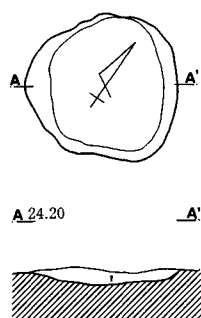
第26号土坑



第26号土坑

1 暗青灰色粘質土 (灰オリーブ色土粒子若干、酸化鉄含む)

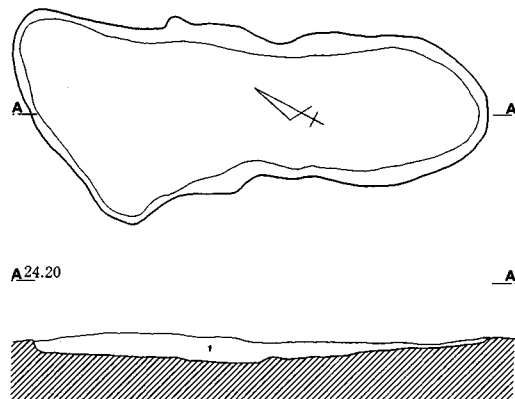
第31号土坑



第31号土坑

1 暗灰色粘質土 (灰オリーブ色土粒子、酸化鉄含む)

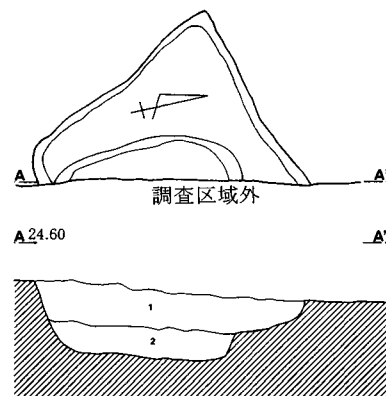
第32号土坑



第32号土坑

1 暗灰色粘質土 (灰オリーブ色土ブロック・粒子、酸化鉄、土器若干含む)

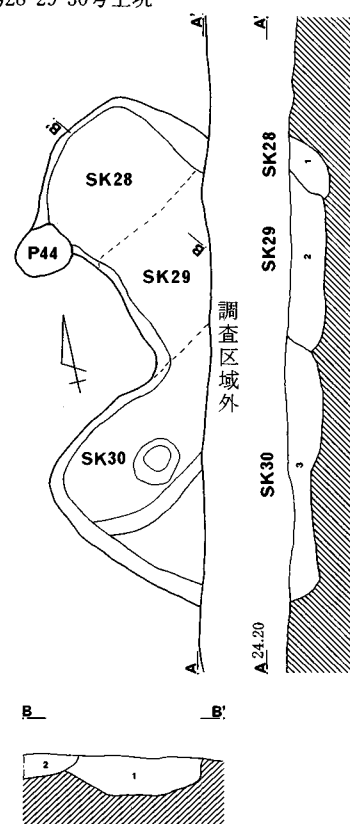
第25号土坑



第25号土坑

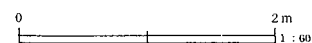
1 暗灰色土 (灰オリーブ色土粒子、焼土、炭化物若干、酸化鉄含む)
 2 暗灰色粘質土 (灰オリーブ色土ブロック・粒子、焼土、炭化物若干、酸化鉄含む)

第28・29・30号土坑



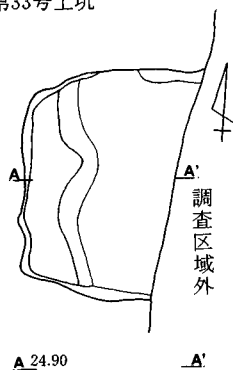
第28・29・30号土坑

1 灰色粘質土 (暗灰色粘質土ブロック、酸化鉄、炭化物含む)
 2 暗灰色粘質土 (灰色粘質土ブロック、酸化鉄、焼土、炭化物、土器含む)
 3 灰色粘質土 (灰オリーブ色土ブロック・粒子、暗灰色粘質土ブロック、酸化鉄、焼土、炭化物、土器含む)

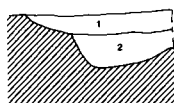


第70図 第23～32号土坑

第33号土坑



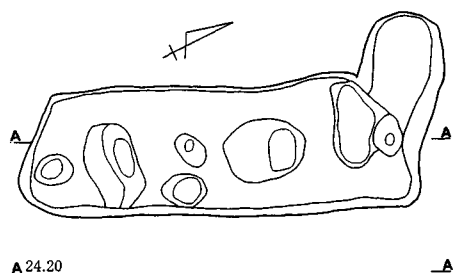
A 24.90



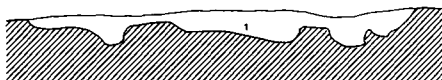
第33号土坑

- 1 暗灰色粘質土 (礫、焼土若干、酸化鉄含む)
2 オリーブ黒色粘質土 (暗灰色土ブロック・粒子
多量、酸化鉄含む)

第34号土坑



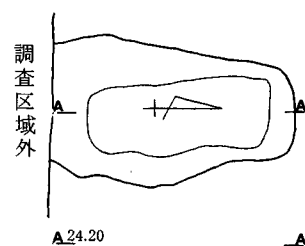
A 24.20



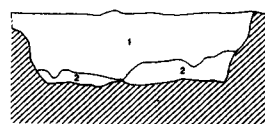
第34号土坑

- 1 灰色粘質土 (暗灰色粘質土ブロック、灰オリーブ色土粒子、酸化鉄含む)

第35号土坑



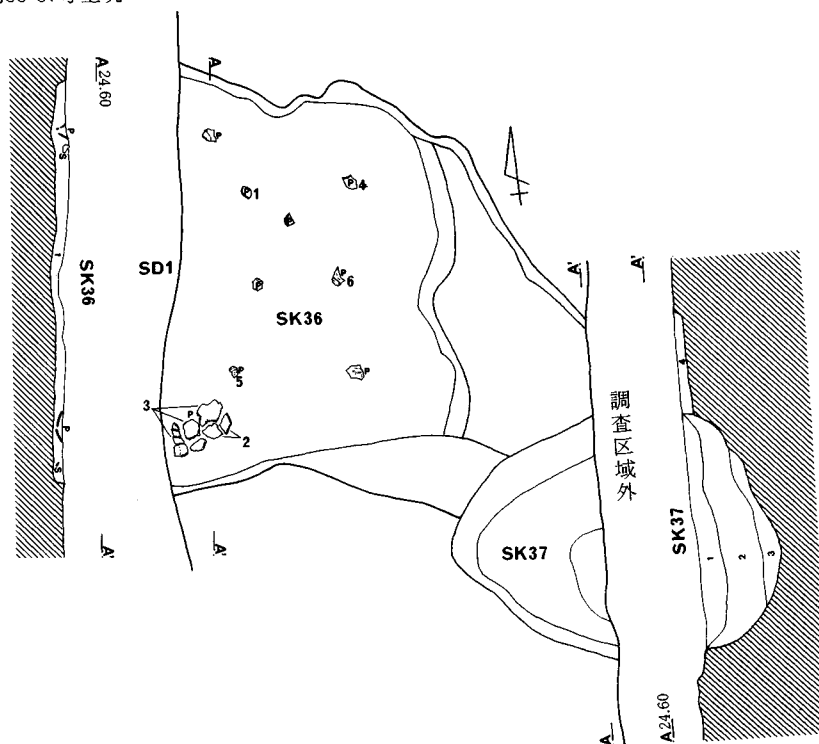
A 24.20



第35号土坑

- 1 灰色粘土 (暗灰色土ブロック・粒子、オリーブ灰色土ブロック・
粒子、灰色土ブロック・粒子、酸化鉄含む)
2 暗青灰色粘土 (暗灰色土ブロック・粒子、オリーブ灰色土ブロック・
粒子、酸化鉄含む)

第36・37号土坑



第36号土坑

- 1 暗灰色土 (酸化鉄、礫、土器含む)

第37号土坑

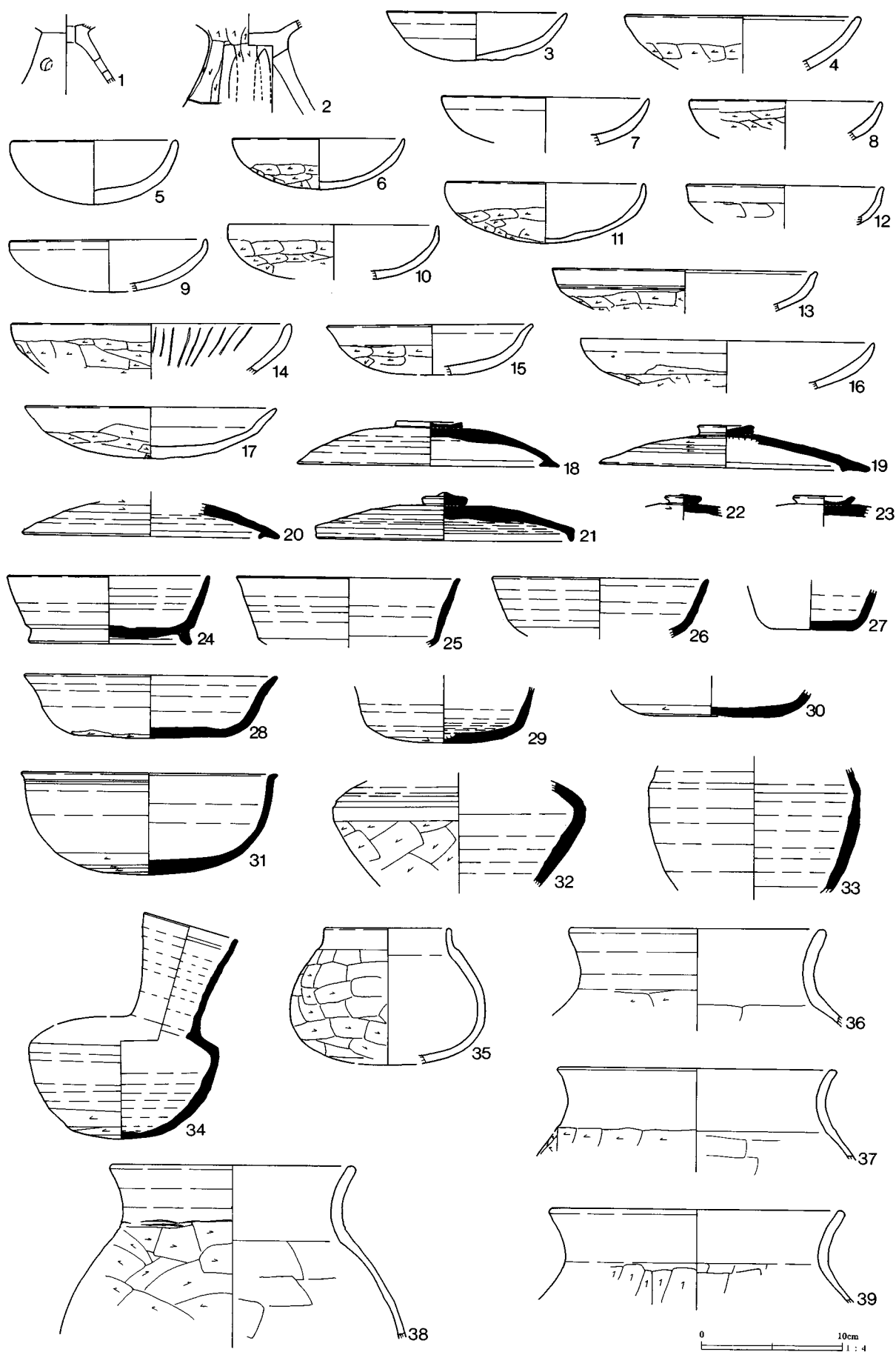
- 1 暗灰色土 (炭化物若干、酸化鉄、礫、焼土含む)
2 灰色土 (暗灰色土ブロック・粒子、酸化鉄、礫、焼土、
炭化物、土器若干含む)
3 暗灰色粘土 (酸化鉄、砂含む)

0 2m
1:60

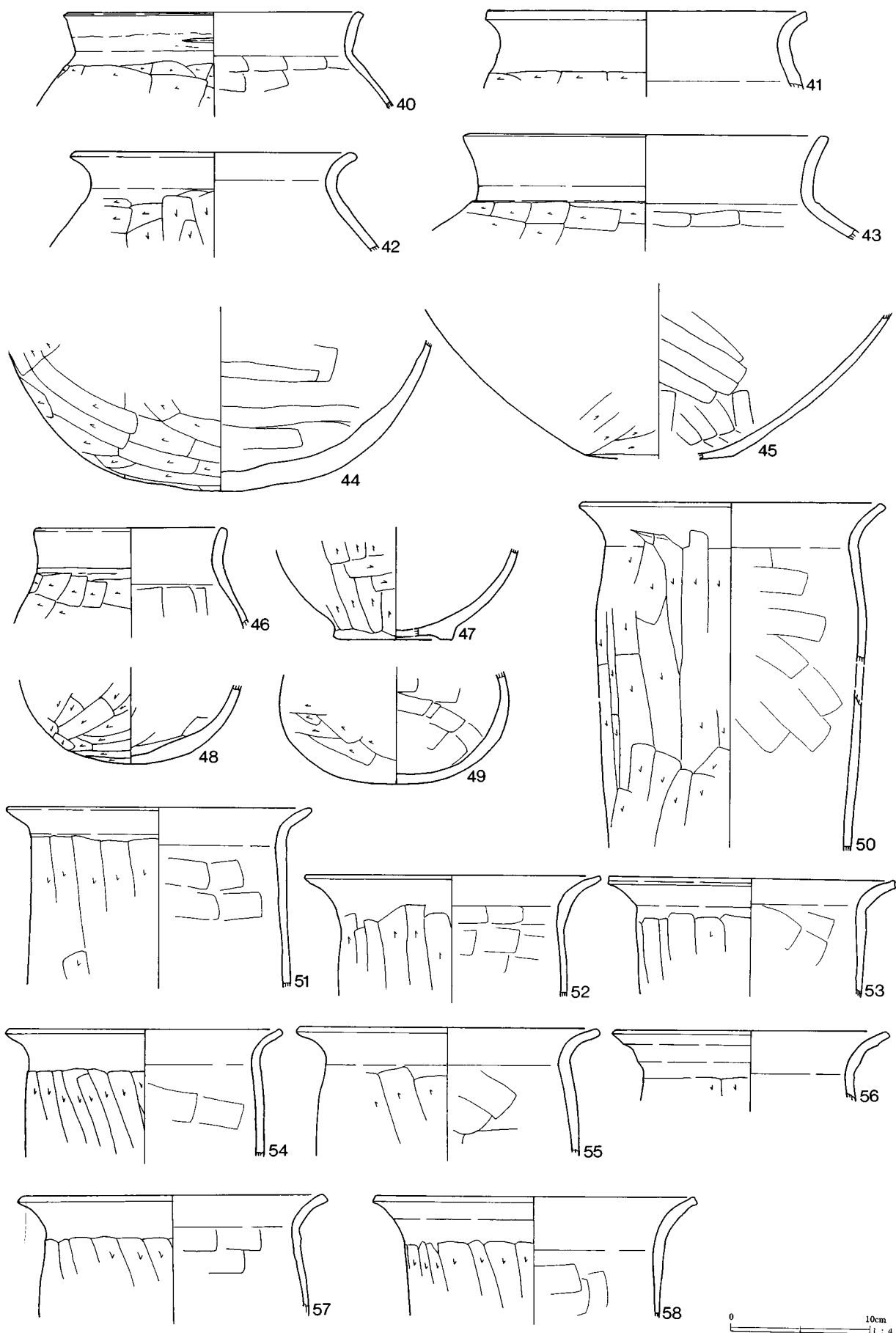
第71図 第33～37号土坑

第32表 土坑一覧表

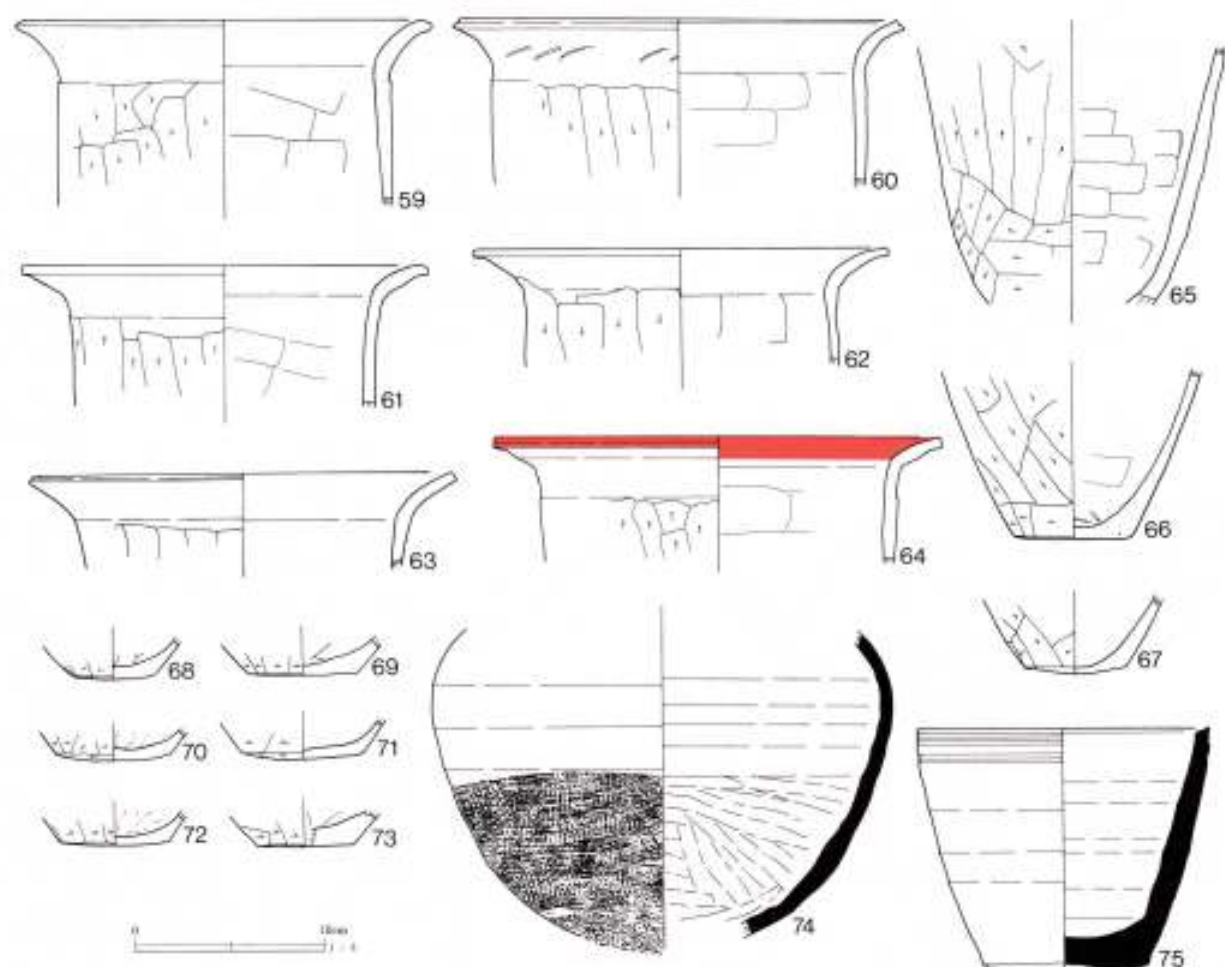
番号	位置	プラン	長軸×短軸×深さ	出土遺物	時期	重複関係	備考
1	122-157	長方形	174 × 100 × 50	土師器	不明		
2	123-157	楕円形	180 × 140 × 28	焙烙、陶器撻鉢・半胴	近世		
3	99・100-162	楕円形	358 × 198 × 16	弥生土器壺、土師器器台・高坏・皿・鉢・甗・甕、 須恵器蓋・坏・鉢・碗・平瓶・甕	古墳後期		
4	121-163	楕円形	330 × × 13	弥生土器壺・甕、土師器坏・甕、須恵器坏身、管玉	弥生後期	SJ16、SD8・9	
5	120-164	長方形	× 154 × 59	なし		SB3	
6	126・127-164	長方形	× 110 × 22	土師器高坏・坏・甕	古墳中期		
7	126-164	楕円形?	× 71 × 12	弥生土器壺、土師器壺	古墳中期		
8	128-164	隅丸方形	189 × × 51	弥生土器甕、土師器高坏・坏・壺・甕	古墳中期		
9	122-164・165	長方形	373 × 137 × 26	土師器甕	不明	SJ19	
10	123-164	楕円形	191 × 82 × 16	土師器	不明		埋土中に川原石多量。
11	122-164	楕円形	121 × 91 × 65	弥生土器甕、土師器壺・甕、馬歯、馬骨	古墳中期?		
12	128-165	楕円形	× 45 × 34	土師器鉢	古墳後期		
13	120-165	円形	119 × 114 × 15	土師器坏・甕	古墳後期	SJ20	
14	112-166	円形	135 × 120 × 32	弥生土器壺、土師器坏・台付甕・甕、平瓦	古墳後期		
15	121-166・167	楕円形	390 × × 26	弥生土器壺・甕、須恵器蓋	弥生	SJ12	
16	122-166	隅丸方形	× (144) × 40	土師器高坏・壺・甕	古墳中期		
17	113-166	円形	169 × 156 × 11	土師器坏・甕、須恵器蓋・坏・碗・鉢・双耳壺・甕	平安		
18	110-166・167	正方形	138 × 124 × 53	土師器埴・壺・甕、須恵器甕	古墳後期	SJ23	
19	111-166	長方形	159 × 121 × 33	土師器壺・甕	古墳後期	SJ23	
20	111-166	不整形	× × 38	土師器鉢・甕、須恵器壺	古墳後期		
21	121-167	隅丸方形	215 × 147 × 29	弥生土器壺、土師器甕	古墳後期		
22	121-168・169	長方形	229 × × 38	弥生土器甕、土師器坏・甕	弥生		
23	101-171	不整形	398 × × 48	弥生土器壺、土師器甕	弥生	SK24	
24	101-171	不整形	183 × 152 × 10	なし		SK23	
25	101-172	方形	× 159 × 55	土師器甕	古墳後期		
26	102-172	隅丸方形	128 × 110 × 25	弥生土器甕	古墳前期～後期	P55	
27	102-172	不整形	× × 32	土師器甕、須恵器	不明		
28	101-172・173	隅丸方形	138 × (98) × 20	なし		SK29、P44	
29	101-173	隅丸方形?	103 × (94) × 18	なし		SK28・30	
30	101-173	隅丸方形	× × 20	弥生土器壺、土師器壺・甕、須恵器坏・碗	古墳中期	SK29	
31	102-173	楕円形	120 × 114 × 12	土師器壺	古墳中期		
32	102-174	不整形	361 × 155 × 21	弥生土器壺	弥生		
33	101-175	長方形?	× 183 × 30	弥生土器壺・甕	弥生		
34	106-185	不整形	318 × 103 × 24	なし		SR3	
35	121-190	長方形	× 107 × 57	なし			
36	121-169	不整形	338 × 275 × 12	弥生土器、土師器埴・高坏・坏・壺・台付甕・甕	古墳中期	SK37	
37	121-169	楕円形	× 123 × 66	なし		SK36	



第72図 第3号土坑出土遺物(1)



第73图 第3号土坑出土遗物(2)

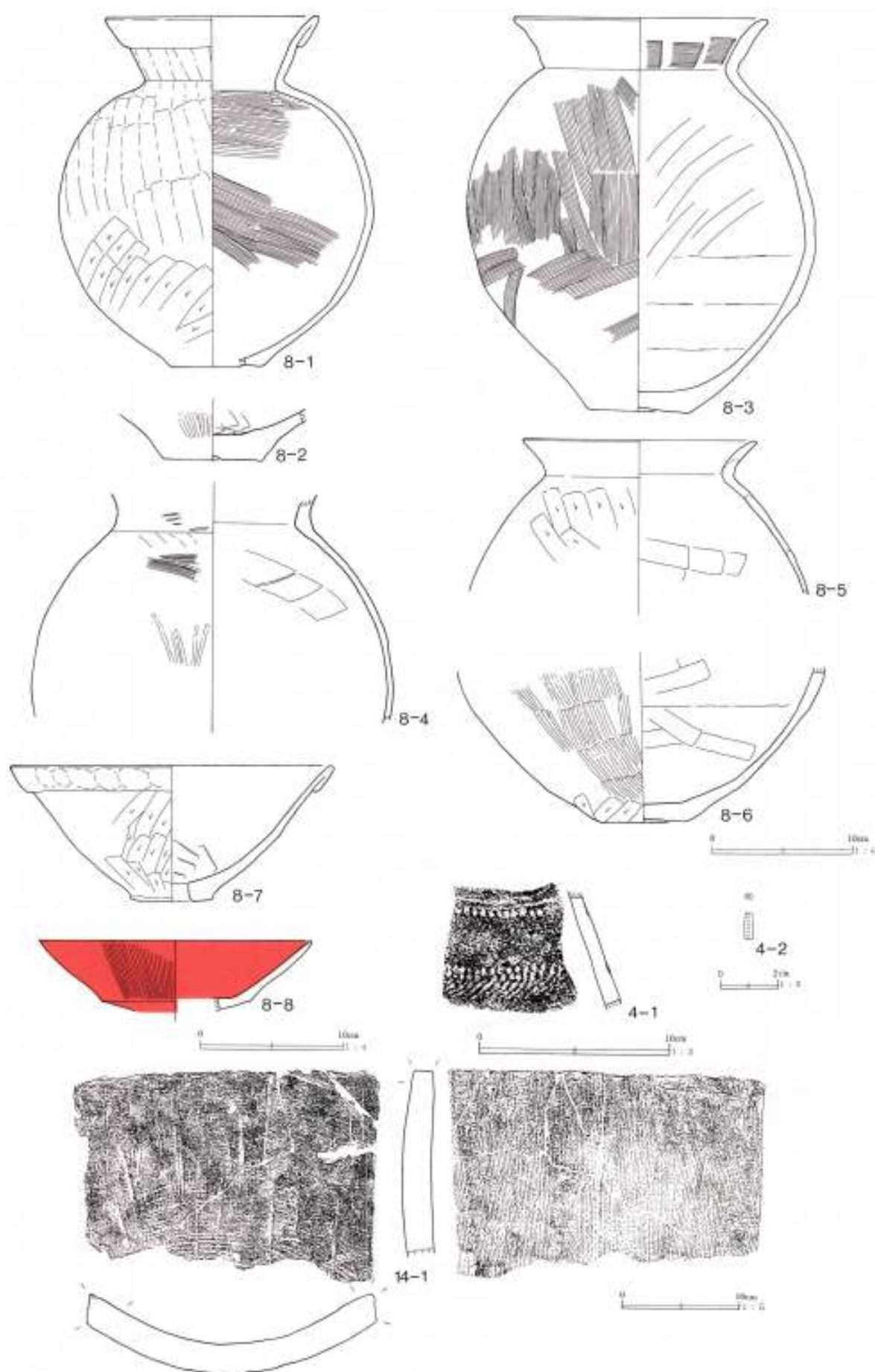


第74図 第3号土坑出土遺物(3)

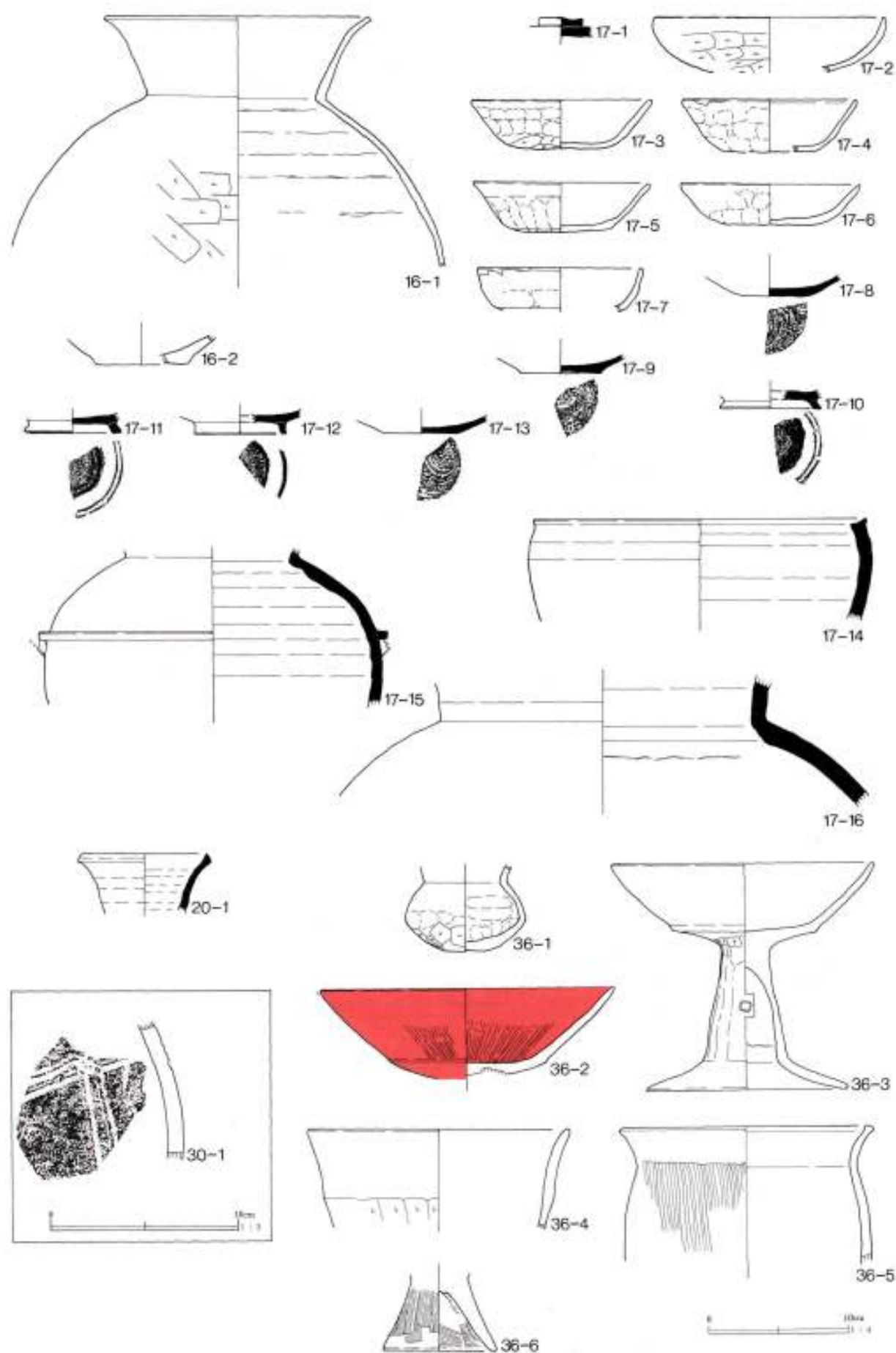
第33表 第3号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
1	土師器器台	—	—	—	AEGB	にぶい橙色	C	30%	3方向スカシ孔 (推定)。 2方向に2本対のスカシ孔。 米野底。 自然釉付着。
2	土師器器台	—	—	—	AEIM	明赤褐色	B	25%	
3	土師器器杯	13.0	3.4	—	AB1	橙色	D	70%	
4	土師器器杯	(17.0)	—	—	AEJ	橙色	B	20%	
5	土師器器杯	(12.1)	4.5	—	BGM	にぶい橙色	D	30%	
6	土師器器杯	(12.3)	3.6	—	BK	にぶい褐色	B	50%	
7	土師器器杯	(15.0)	—	—	B	褐色	D	20%	
8	土師器器杯	(13.8)	—	—	EBJ	にぶい褐色	B	15%	
9	土師器器杯	(14.2)	(3.7)	—	B	浅黄褐色	D	40%	
10	土師器器杯	(15.1)	3.8	—	ABK	褐色	C	20%	
11	土師器器杯	(14.3)	4.2	—	AJ	褐色	D	30%	
12	土師器器杯	(14.2)	—	—	BGM	褐色	D	15%	
13	土師器器杯	(19.0)	—	—	DBJ	にぶい黄褐色	C	20%	
14	土師器器杯	(20.1)	—	—	ABJ	にぶい褐色	A	20%	
15	土師器器杯	(15.0)	3.5	—	AD	浅黄褐色	D	30%	
16	土師器器皿	(21.0)	—	—	BGM	褐色	B	20%	
17	土師器器皿	(18.0)	3.6	—	ADJK	褐色	D	40%	
18	須恵器器蓋	(18.8)	3.1	—	ABN	灰色	A	40%	
19	須恵器器蓋	19.4	3.0	—	ABD	灰白色	C	60%	
20	須恵器器蓋	(18.4)	—	—	AB	灰白色	A	10%	
21	須恵器器蓋	(18.4)	3.4	—	AB	灰白色	A	30%	

22	須恵器蓋	—	—	—	AB	灰白色	A	10%以下	
23	須恵器蓋	—	—	—	AB	灰白色	B	10%以下	末野産。
24	須恵器碗	(14.5)	4.8	11.6	ABDN	灰白色	D	65%	末野産。
25	須恵器坏	(16.0)	—	(12.5)	ABLN	灰色	A	15%	末野産。
26	須恵器坏	(15.6)	—	—	AD	灰白色	A	10%	
27	須恵器坏	—	—	6.0	ALN	灰白色	D	70%	末野産。
28	須恵器坏	(18.0)	4.4	(11.6)	AGN	にぶい赤褐色	B	35%	回転ヘラケズリ。
29	須恵器坏	—	—	(8.4)	ABG	灰白色	D	40%	末野産。回転ヘラケズリ。
30	須恵器坏	—	—	(10.4)	ABLN	灰白色	D	30%	静止ヘラケズリ。
31	須恵器鉢	(18.3)	7.2	—	ABLN	灰色	A	60%	末野産。回転ヘラケズリ。
32	須恵器瓶	—	—	—	BEJ	灰白色	A	20%	
33	須恵器瓶	—	—	—	AB	灰色	A	15%	
34	須恵器平瓶	(7.0)	16.0	5.2	AB	灰白色	A	50%	自然釉付着。
35	土師器小型壺	(9.2)	(9.6)	—	AEJHM	にぶい橙色	B	40%	
36	土師器甕	(18.4)	—	—	AEHJ	にぶい橙色	B	20%	
37	土師器甕	(20.0)	—	—	AE	にぶい橙色	A	15%	
38	土師器甕	(17.6)	—	—	AEHGN	灰褐色	A	25%	
39	土師器甕	(21.1)	—	—	EGM	にぶい橙色	A	10%	
40	土師器甕	(21.6)	—	—	AEH	明褐色	A	15%	
41	土師器甕	(23.2)	—	—	ADMN	黄褐色	B	10%	
42	土師器甕	(20.6)	—	—	ABEJ	にぶい橙色	A	10%	
43	土師器甕	(26.4)	—	—	AEG	にぶい橙色	B	10%	
44	土師器甕	—	—	—	AEN	にぶい橙色	A	15%	
45	土師器甕	—	—	(10.8)	ABEM	橙色	C	15%	
46	土師器甕	(13.9)	—	—	AEIJN	にぶい橙色	B	15%	
47	土師器甕	—	—	(8.7)	ADIN	にぶい赤褐色	C	15%	
48	土師器甕	—	—	—	AEH	灰黄褐色	A	20%	
49	土師器小型壺	—	—	—	AEGH	明黄褐色	C	30%	
50	土師器甕	(21.8)	—	—	AE	にぶい黄橙色	A	40%	
51	土師器甕	(22.0)	—	—	AEH	にぶい橙色	B	20%	
52	土師器甕	(21.4)	—	—	AGIM	にぶい橙色	B	15%	
53	土師器甕	(20.8)	—	—	AEGI	橙色	C	10%	
54	土師器甕	(20.0)	—	—	AEIJM	にぶい橙色	A	15%	
55	土師器甕	(22.0)	—	—	AEM	橙色	A	10%	
56	土師器甕	(20.0)	—	—	AEH	にぶい橙色	B	15%	
57	土師器甕	(22.4)	—	—	EMN	橙色	C	20%	
58	土師器甕	(23.6)	—	—	AEM	明褐色	A	15%	
59	土師器甕	(22.0)	—	—	AE	橙色	B	10%	
60	土師器甕	(23.8)	—	—	AE	橙色	B	10%以下	
61	土師器甕	(21.6)	—	—	AEM	にぶい赤褐色	A	15%	
62	土師器甕	(22.0)	—	—	AE	にぶい橙色	A	15%	
63	土師器甕	(22.6)	—	—	AEM	にぶい橙色	A	20%	
64	土師器甕	(23.7)	—	—	AE	にぶい赤褐色	B	15%	口縁部内面、口唇部赤彩。
65	土師器甕	—	—	—	AEN	赤褐色	B	15%	
66	土師器甕	—	—	5.2	AEHN	にぶい橙色	B	15%	
67	土師器甕	—	—	(4.9)	AHJ	橙色	C	10%	
68	土師器甕	—	—	(4.0)	AEHN	明赤褐色	C	10%以下	
69	土師器甕	—	—	(5.7)	AEJ	明赤褐色	B	10%以下	
70	土師器甕	—	—	(5.8)	AEH	明赤褐色	B	10%以下	
71	土師器甕	—	—	6.3	AEJ	にぶい橙色	C	10%以下	
72	土師器甕	—	—	(6.0)	EHN	橙色	A	10%以下	
73	土師器甕	—	—	(5.0)	AEJN	橙色	B	10%以下	
74	須恵器甕	—	—	—	BGLN	灰色	A	20%	外面格子叩き目。内面ナデ。末野産。
75	須恵器鉢	(15.4)	12.6	(8.6)	ABL	灰色	A	30%	末野産。



第75图 第4·8·14号土坑出土遗物



第76図 第16・17・20・30・36号土坑出土遺物

第34表 第4・8・14号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
4-1	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	頸部～胴部	L R 縄文。
4-2	管 玉	長さ0.9	直径0.3	重さ0.1	—	—	—	欠損	碧玉製。
8-1	土師器壺	15.0	25.6	6.2	ABEHJMN	にぶい褐色	B	60%	
8-2	土師器壺	—	—	(7.0)	ADHM	にぶい褐色	A	10%以下	
8-3	土師器甕	17.8	28.1	7.1	AEMN	にぶい赤褐色	C	70%	器面剥離著しい。
8-4	土師器甕	—	—	—	AEGHMN	にぶい褐色	B	30%	器面若干剥離。
8-5	土師器甕	(16.6)	—	—	ADGHMN	橙色	D	20%	器面剥離著しい。
8-6	土師器甕	—	—	(6.0)	AGMN	にぶい褐色	B	20%	
8-7	土師器甕	(23.0)	9.6	(5.9)	AEGMN	明赤褐色	C	50%	折り返し口縁部指頭圧痕。
8-8	土師器高坏	(19.4)	—	—	AM	赤褐色	C	15%	内外面赤彩。
14-1	平 瓦	広端部幅 25.4	—	厚さ2.6	AFHN	灰色	A	広端部側	凹面：模骨痕。粘土板糸切り痕。布目痕5×5本/cm ² 。 凸面：縄叩き目。技法：粘土板桶巻造り。南比企産。

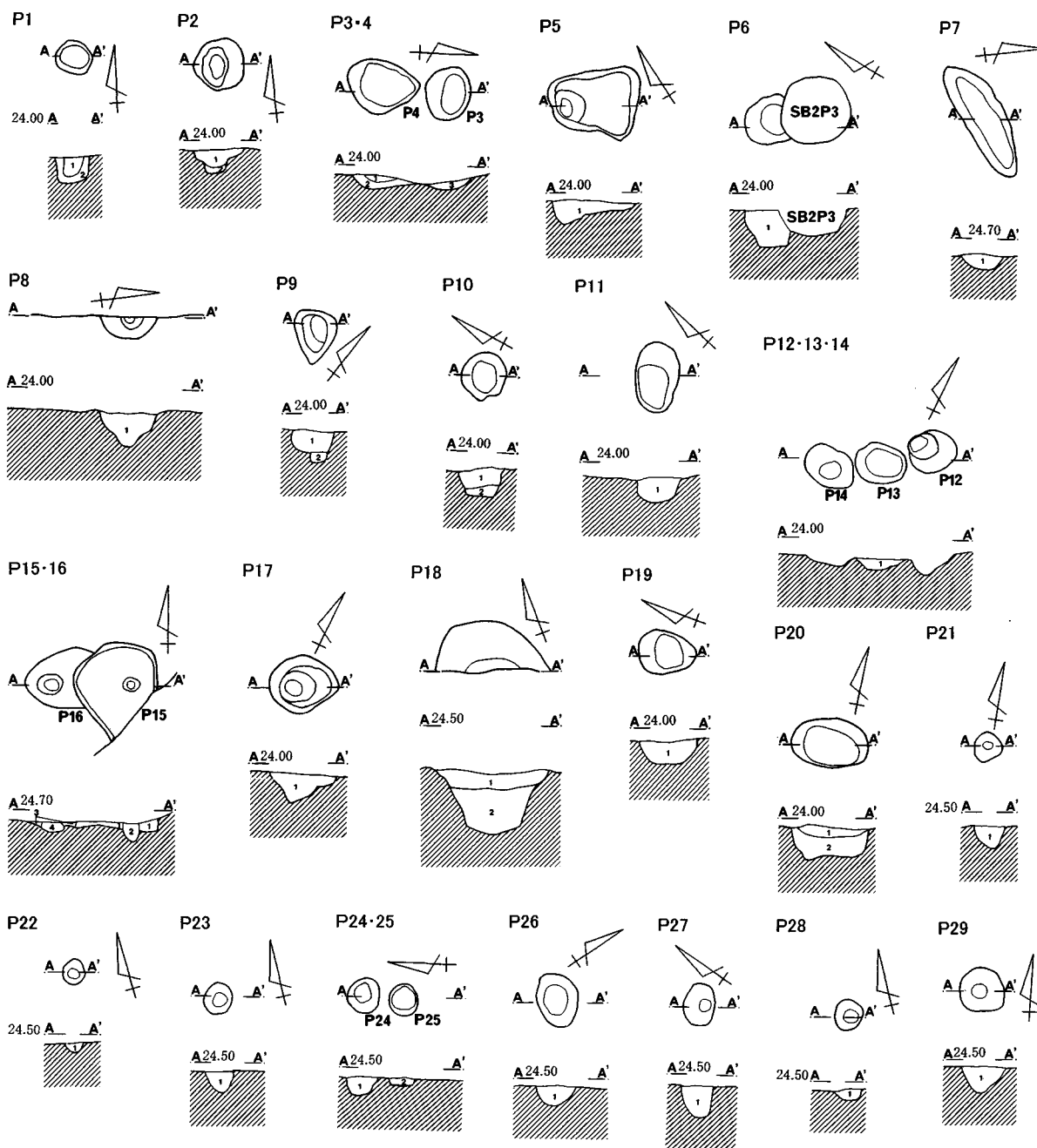
第35表 第16・17・20・30・36号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
16-1	土師器甕	(19.4)	—	—	ADHILMN	にぶい褐色	B	30%	
16-2	土師器甕	—	—	(6.7)	BHM	褐色	B	10%以下	
17-1	須恵器蓋	—	—	—	ADJL	灰白色	B	10%以下	末野産。
17-2	土師器坏	(16.8)	—	—	AGHJ	にぶい黄褐色	C	20%	
17-3	土師器坏	(13.1)	3.5	(5.6)	BEM	褐色	C	40%	
17-4	土師器坏	(12.6)	3.8	(6.8)	DE	褐色	C	20%	油煙付着。灯明皿用途。
17-5	土師器坏	(12.8)	3.5	7.0	BEM	にぶい黄褐色	C	55%	
17-6	土師器坏	(13.0)	2.9	(6.3)	AEM	にぶい黄褐色	C	60%	
17-7	土師器坏	(12.0)	—	—	AEHJ	褐色	B	15%	油煙付着。灯明皿用途。
17-8	須恵器坏	—	—	(4.4)	ABL	灰色	A	10%	末野産。回転糸切り。
17-9	須恵器坏	—	—	(5.8)	AG	青灰色	A	10%	回転糸切り。
17-10	須恵器碗	—	—	(7.4)	AB	灰白色	B	10%	回転糸切り後高台ナデツケ。
17-11	須恵器碗	—	—	(7.0)	AB	灰白色	A	10%	回転糸切り後高台ナデツケ。
17-12	須恵器碗	—	—	(6.7)	AB	灰色	A	10%	回転糸切り後高台ナデツケ。
17-13	須恵器皿	—	—	(5.3)	AB	灰色	A	25%	回転糸切り。
17-14	須恵器鉢	(24.0)	—	—	AFN	灰色	A	10%	南比企産。
17-15	須恵器双耳壺	—	—	—	ABL	灰色	A	15%	
17-16	須恵器甕	—	—	—	ABL	灰色	A	10%以下	自然釉付着。末野産。
20-1	須恵器壺	(9.6)	—	—	—	灰色	A	10%以下	自然釉付着。
30-1	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色	—	胴部	
36-1	土師器埴	—	—	2.8	AEJ	にぶい褐色	A	70%	
36-2	土師器高坏	(21.4)	—	—	AEGJN	にぶい赤褐色	C	70%	内外面ヘラミガキ後赤彩。
36-3	土師器高坏	(19.4)	16.2	14.5	AGHMN	にぶい褐色	C	70%	脚部中位に穿孔。
36-4	土師器鉢	(19.0)	—	—	AJERMN	にぶい黄褐色	B	10%	
36-5	土師器甕	(18.4)	—	—	AEM	にぶい黄褐色	B	10%	
36-6	土師器台付甕	(18.4)	—	—	EGHMN	明赤褐色	B	15%	

7 ピット

ピットは、総数にして55基検出した。遺物が検出できたピットは少なかった。

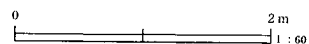
以下、全て一覧表にして掲載する（第77・78図、第36～37表）。



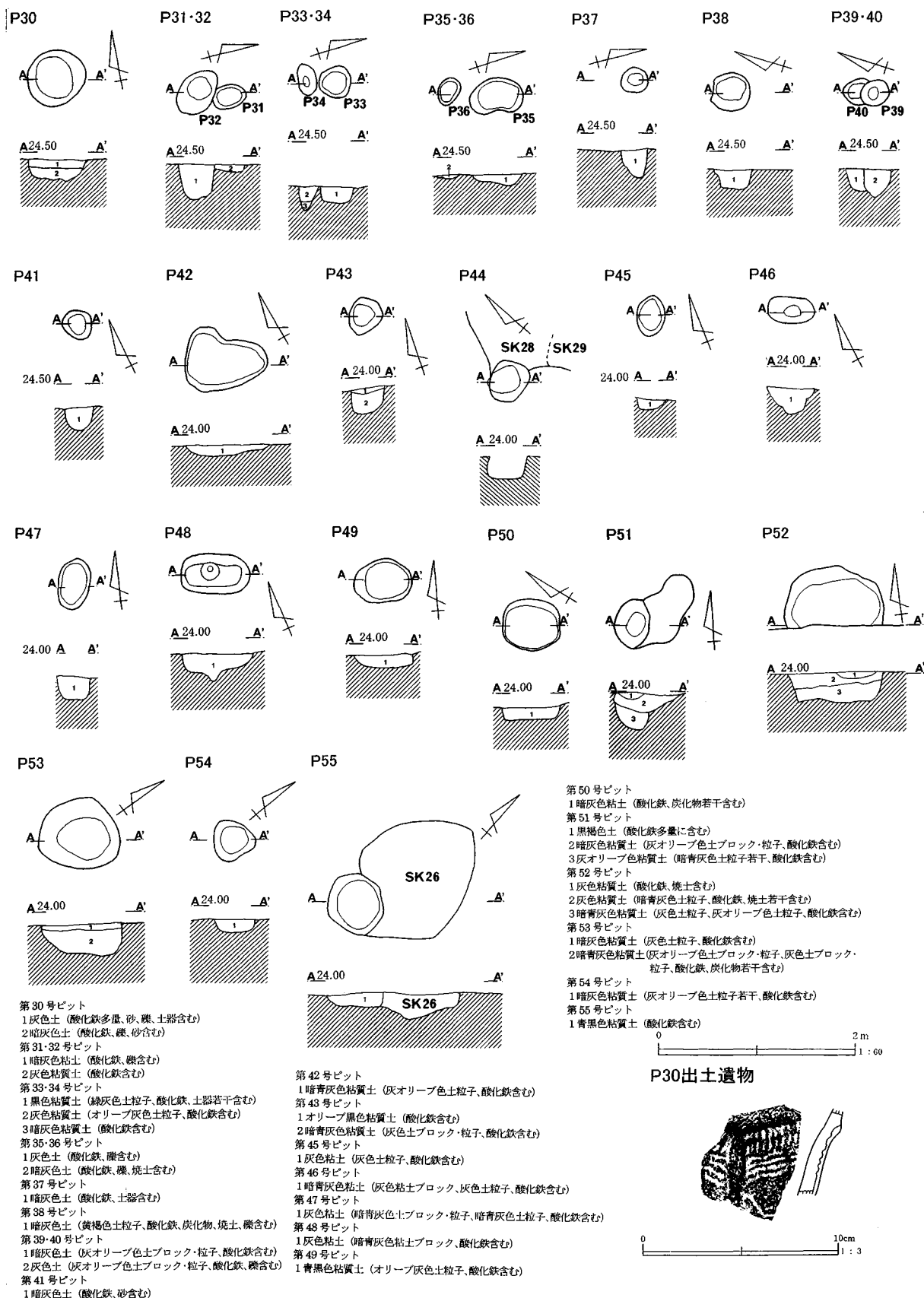
- 第1号ビット
1 灰色粘質土 (灰オリブ色土粒子、酸化鉄含む)
2 暗灰色粘質土 (灰オリブ色土粒子、酸化鉄含む)
第2号ビット
1 灰色粘質土 (酸化鉄、焼土、炭化物含む)
2 暗灰色粘質土 (酸化鉄含む)
第3・4号ビット
1 暗灰色粘質土 (酸化鉄、炭化物多量に含む)
2 暗灰色粘質土 (灰色土粒子、酸化鉄含む)
3 暗灰色粘質土 (酸化鉄多量に含む)
第5号ビット
1 暗灰色粘質土 (灰オリブ色土粒子若干、酸化鉄、焼土含む)
第6号ビット
1 灰オリブ色粘質土 (暗灰色土粒子、酸化鉄、炭化物含む)
第7号ビット
1 暗灰色土 (酸化鉄、マンガン粒子、火山灰、焼土、炭化物、礫、土器含む)
第8号ビット
1 暗灰色粘質土 (暗灰色粘質土ブロック、酸化鉄、炭化物含む)
第9号ビット
1 灰色土 (明黄褐色土粒子、マンガン粒子、酸化鉄、焼土、炭化物含む)
2 暗灰色粘質土 (酸化鉄含む)
第10号ビット
1 灰色土 (灰オリブ色土粒子、酸化鉄、焼土若干含む)
2 暗灰色粘質土 (酸化鉄含む)

- 第11号ビット
1 灰色粘質土 (酸化鉄、礫、焼土含む)
第12・13・14号ビット
1 暗青灰色粘質土 (灰オリブ色土粒子、酸化鉄含む)
第15・16号ビット
1 灰色土 (灰色土粒子若干、酸化鉄、マンガン粒子、火山灰、礫含む)
2 暗灰色土 (マンガン粒子、火山灰、礫、土器含む)
3 暗灰色土 (酸化鉄、マンガン粒子、火山灰、礫含む)
4 暗灰色土 (マンガン粒子、火山灰、礫含む)
第17号ビット
1 暗青灰色粘質土 (灰オリブ色土粒子、酸化鉄、土器含む)
第18号ビット
1 灰色土 (灰オリブ色土粒子若干、酸化鉄、マンガン粒子、焼土含む)
2 暗灰色粘質土 (暗青灰色土粒子、灰オリブ色土粒子、酸化鉄、焼土若干含む)
第19号ビット
1 灰色粘質土 (暗灰色土粒子、酸化鉄、マンガン粒子含む)
第20号ビット
1 灰色粘質土 (灰オリブ色土粒子、酸化鉄含む)
2 暗灰色粘質土 (灰オリブ色土粒子、酸化鉄、礫含む)
第21号ビット
1 暗灰色土 (砂、礫多量、酸化鉄含む)
第22号ビット
1 暗灰色土 (砂、礫多量、酸化鉄含む)

- 第23号ビット
1 暗灰色土 (酸化鉄、砂、礫含む)
第24・25号ビット
1 暗灰色土 (酸化鉄、礫、砂含む)
2 暗灰色土 (酸化鉄、礫、砂含む)
第26号ビット
1 暗灰色土 (酸化鉄、礫、砂含む)
第27号ビット
1 暗灰色土 (砂、礫多量、酸化鉄含む)
第28号ビット
1 暗灰色土 (酸化鉄、礫、砂含む)
第29号ビット
1 暗灰色土 (酸化鉄、礫、砂含む)



第77図 第1～29号ビット



第78図 第30～55号ピット、第30号ピット出土遺物

第36表 第30号ピット出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	R L 縄文。

第37表 ピット一覧表

番号	位置	プラン	長軸×短軸×深さ	出土遺物	時期	重複関係	備考	
1	111-158	円形	34 × 30 × 24	なし	古墳後期	SB 2 P 1		
2	105-159	円形	49 × 48 × 21	なし				
3	105-159	楕円形	50 × 41 × 8	なし				
4	105-159	楕円形	68 × 50 × 14	なし				
5	105-159	長方形	80 × 56 × 22	なし				
6	100-163	円形	(45) × 44 × 34	なし				
7	128-164	楕円形	118 × 38 × 14	土師器坏・甕				
8	101-164	不整形	× × 31	なし				
9	100-165	不整形	50 × 36 × 30	なし				
10	100-165	円形	50 × 36 × 8	なし				
11	100-165	楕円形	64 × 38 × 24	なし	古墳前期	P 16 P 15		
12	100-165	円形	44 × 38 × 16	なし				
13	100-165	円形	49 × 36 × 11	なし				
14	101-165	楕円形	48 × 34 × 8	なし				
15	128-165	楕円形	× 70 × 16	土師器高坏・台付甕・甕				
16	128-165	楕円形	× 44 × 9	なし				
17	107-167	円形	70 × 46 × 32	なし				
18	107-167	不整形	× × 54	なし				
19	108-166	円形	53 × 40 × 21	なし				
20	108-167	楕円形	71 × 44 × 32	なし				古墳後期
21	122-166	円形	28 × 25 × 20	なし				
22	121-167	円形	24 × 20 × 8	なし				
23	121-167	円形	30 × 26 × 19	なし				
24	122-167	円形	32 × 30 × 18	なし				
25	122-167	円形	30 × 26 × 8	土師器				
26	122-167	楕円形	50 × 38 × 18	土師器坏・甕				
27	122-167	円形	40 × 29 × 29	弥生土器				
28	122-167	円形	29 × 26 × 10	なし				
29	122-167	円形	41 × 40 × 24	土師器	古墳中期	P 32 P 31		
30	122-167	円形	61 × 58 × 24	弥生土器、土師器壺・甕				
31	121-169	円形	33 × 25 × 8	なし				
32	121-169	円形	53 × 37 × 37	弥生土器壺、土師器甕				
33	121-170	円形	34 × 32 × 18	なし				
34	121-170	円形	32 × 19 × 25	なし				
35	121-170	楕円形	56 × 34 × 12	なし				
36	121-170	円形	28 × 23 × 5	なし				
37	121-170	円形	28 × 26 × 30	土師器高坏・台付甕・甕	古墳前期	P 40 P 39		
38	121-170	円形	40 × 40 × 20	弥生土器				
39	121-170	円形	28 × 19 × 23	なし				
40	121-170	円形	(30) × 28 × 29	なし				
41	121-170	円形	31 × 31 × 24	なし				
42	101-172	楕円形	86 × 66 × 11	なし				
43	101-173	円形	39 × 35 × 27	なし				
44	101-173	円形	43 × 40 × 24	なし				SK 28
45	105-185	円形	42 × 29 × 11	なし				
46	105-186	楕円形	48 × 28 × 26	なし				
47	105-186	楕円形	53 × 31 × 25	なし				
48	105-187	楕円形	71 × 42 × 28	なし				
49	106-189	円形	61 × 46 × 14	なし				
50	111-190	円形	58 × 54 × 12	なし				
51	105-166	不整形	99 × 33 × 13	なし				
52	106-167	楕円形	100 × × 32	なし				
53	101・102-172	円形	84 × 74 × 32	なし	SK 26			
54	102-172	円形	42 × 42 × 14	なし				
55	102-172	円形	64 × 57 × 12	なし				

8 井戸跡

井戸跡は、総数にして1基検出した。

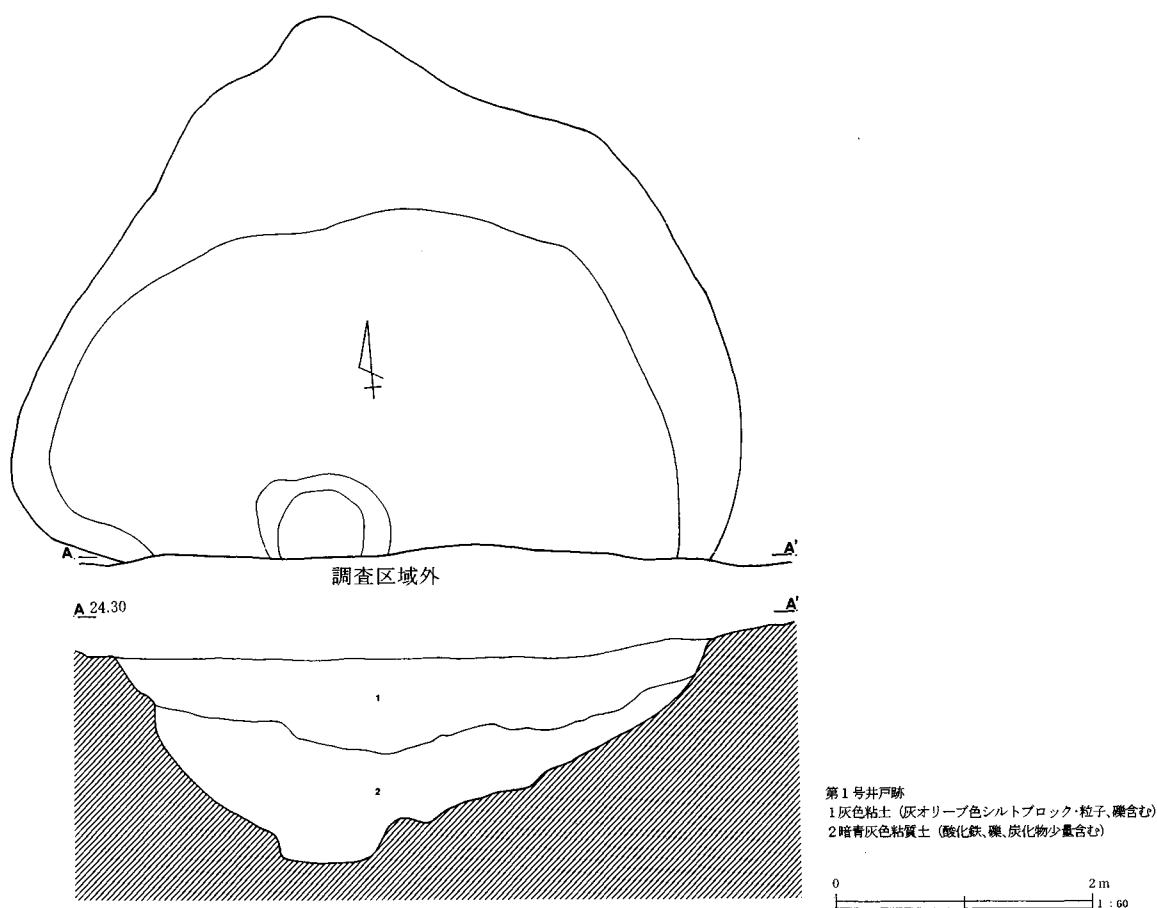
第1号井戸跡（第79図）

115-158グリッドを中心に位置する。南側は調査区域外となっている。

平面形は、検出範囲で5.66m×4.26mの方形に近い楕円形で、さらに調査区域外へと広がり短軸は、推定で5.30m程になると考えられる。確認面からの深さは1.60mを測る。断面形状はロート状で、挿鉢状の底面に一段掘り込まれたピットが存在する。

埋土は、自然堆積と考えられ、シルトや礫を多量に含んでいた。

出土遺物は若干検出できたが、図示可能な遺物はなかった。時期は、中世と考えられる。



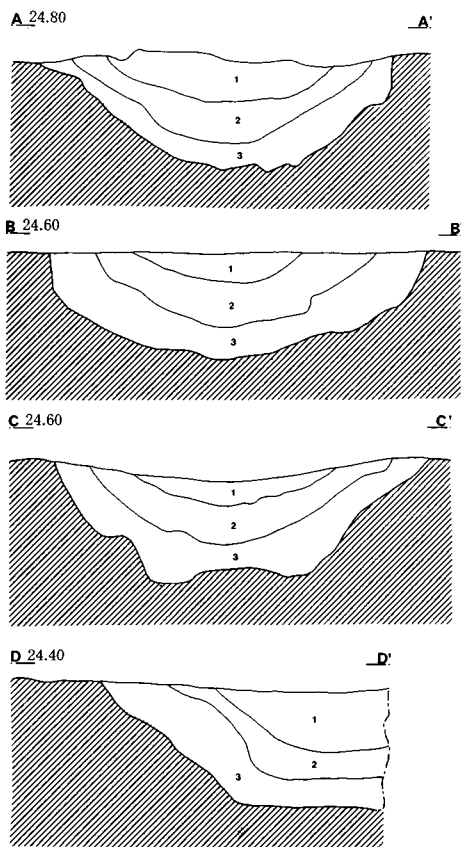
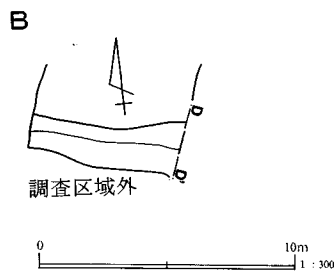
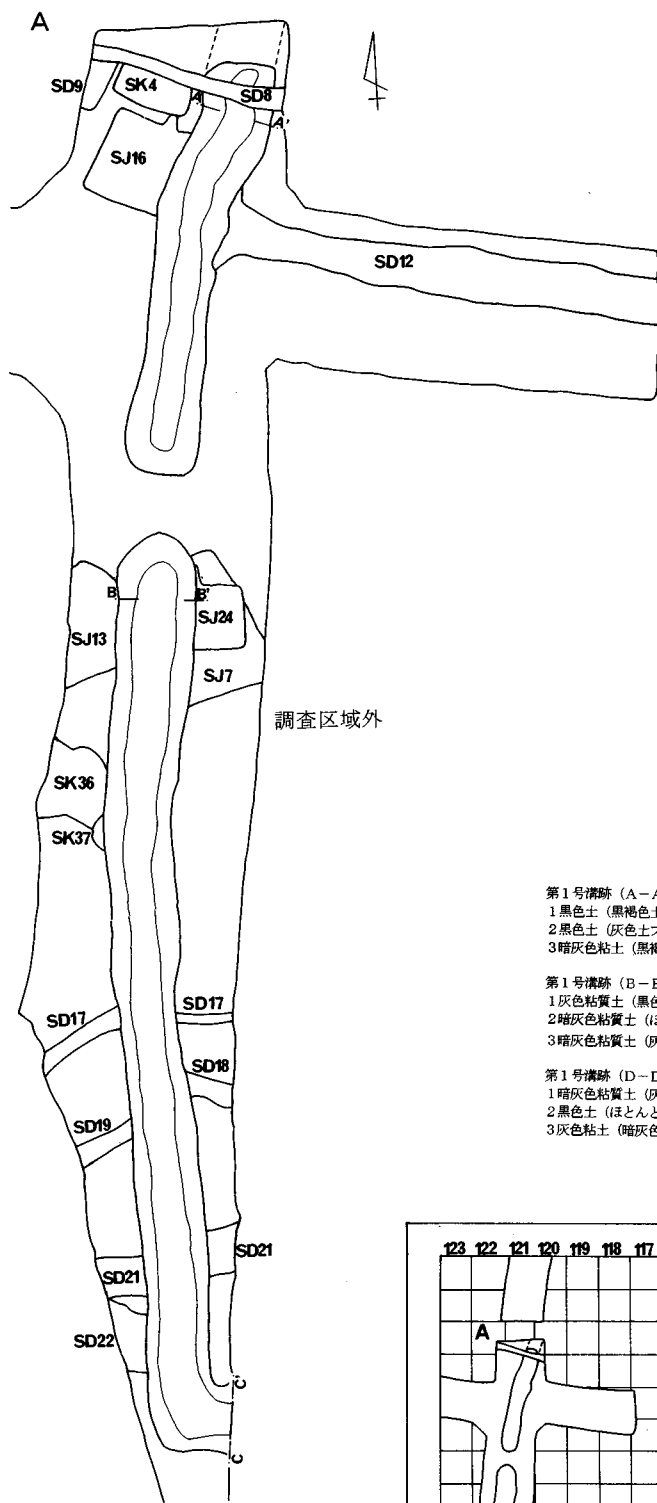
第79図 第1号井戸跡

9 溝跡

溝跡は、総数にして32条検出した。以下、詳細を記述する。

第1号溝跡（第80～83図、第38表）

120-163グリッドから121-174グリッドにかけてと102・103-175グリッドに位置する。第8・12・17・18・19・21・22号溝跡、第7・8・12・13・16・24号住居跡、第36・37号土坑などと重複する。本遺構が、第8号溝跡



第1号溝跡 (A-A')

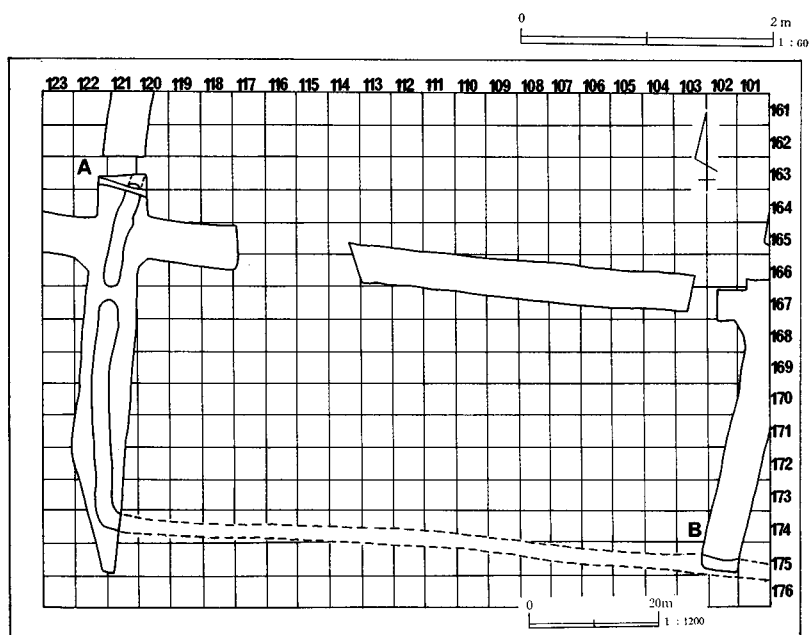
- 1 黒色土 (黒褐色土ブロック・粒子、灰色土ブロック、オリブ黒色土ブロック、酸化鉄、礫、火山灰、土器若干含む)
- 2 黒色土 (灰色土ブロック、暗灰色土ブロック、礫、火山灰、砂、土器若干含む)
- 3 暗灰色粘土 (黒褐色土ブロック、黒色土粒子、砂多量、酸化鉄、礫、火山灰、焼土、土器若干含む)

第1号溝跡 (B-B'・C-C')

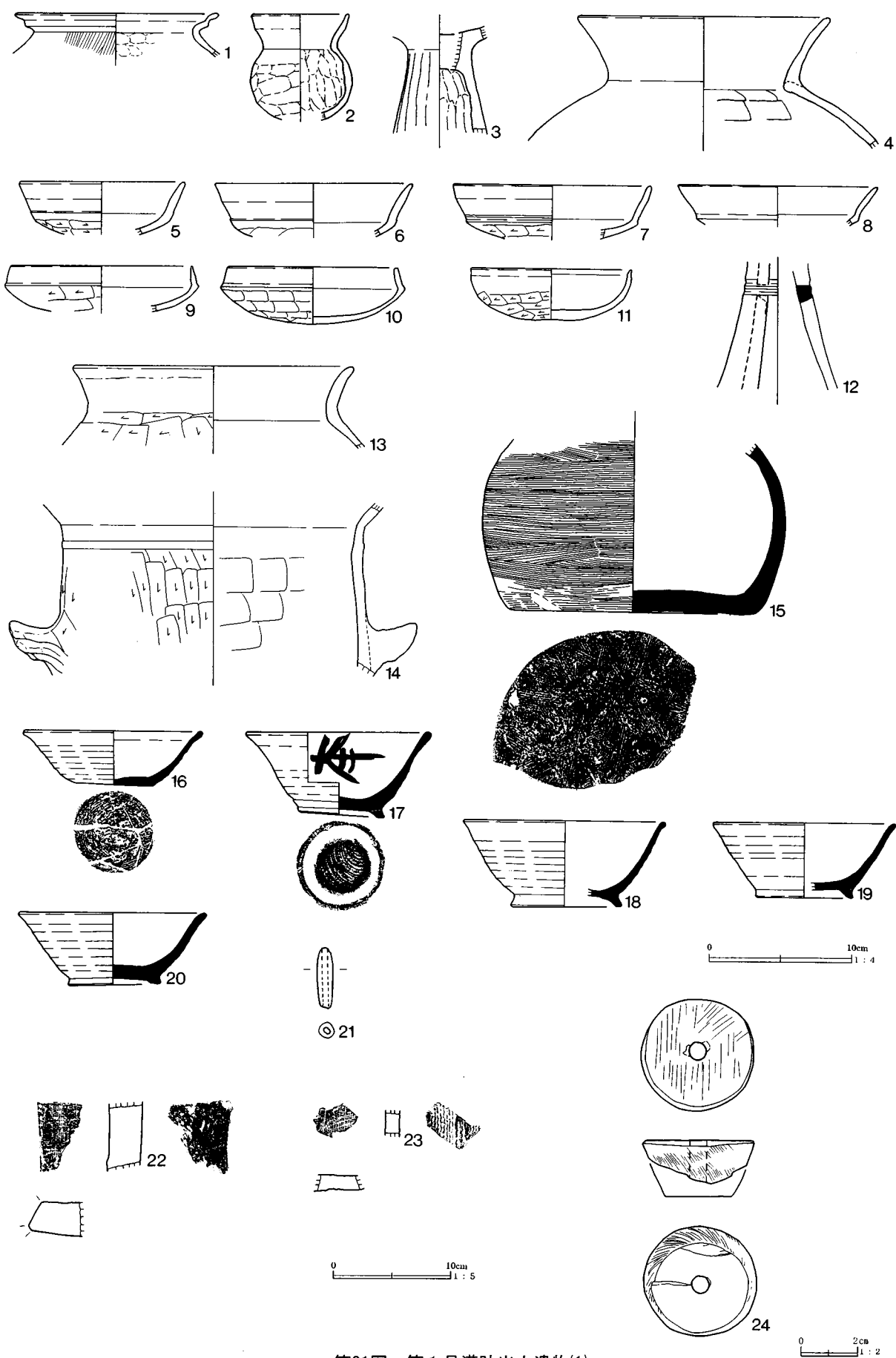
- 1 灰色粘質土 (黒色土炭化粒子、オリブ黒色土粒子、酸化鉄、礫、火山灰、土器含む)
- 2 暗灰色粘質土 (ほとんどが泥炭化している、酸化鉄、礫、火山灰含む)
- 3 暗灰色粘質土 (灰色粘質土ブロック、黒色土炭化粒子、酸化鉄、礫、砂、火山灰含む)

第1号溝跡 (D-D')

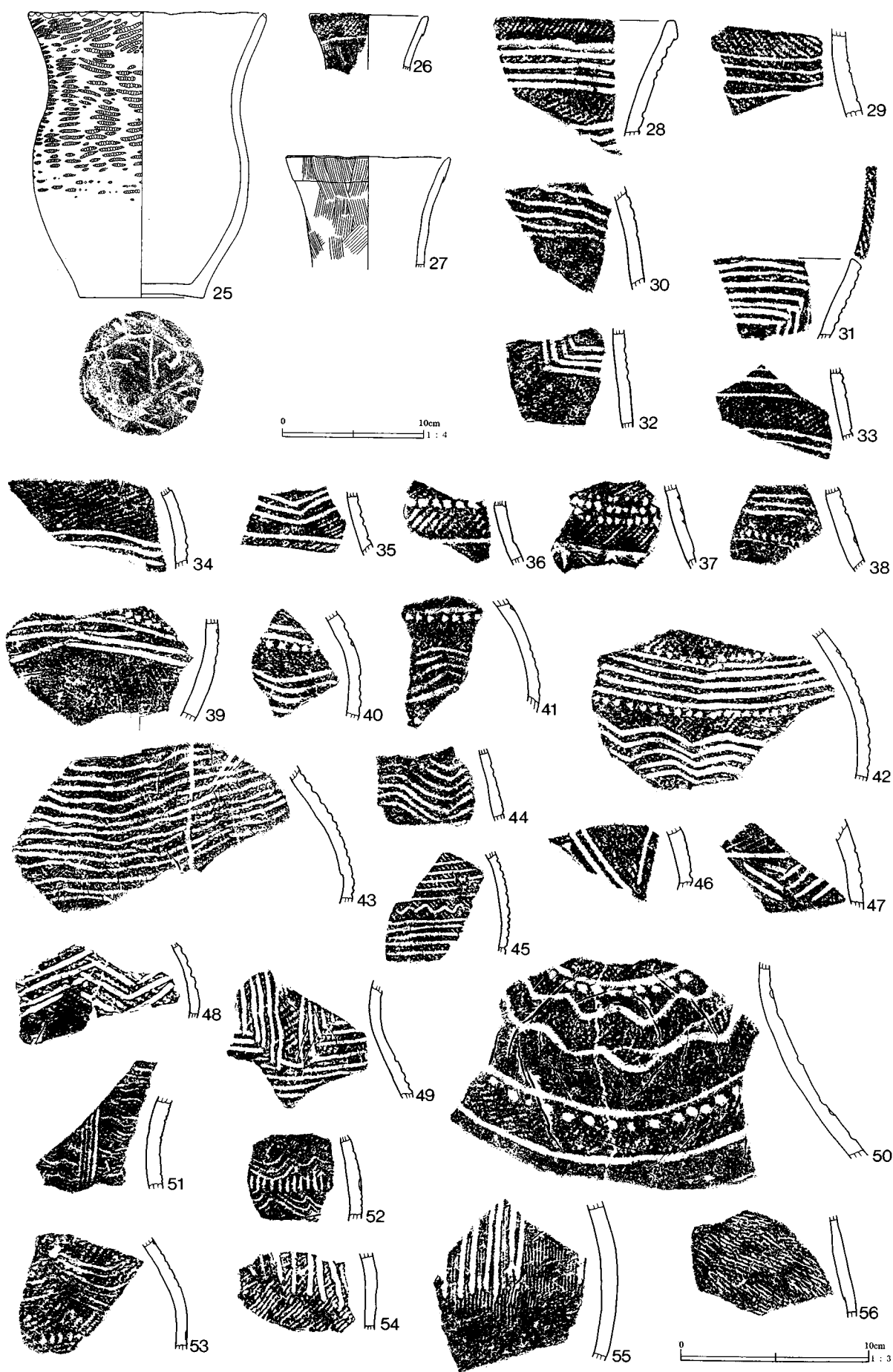
- 1 暗灰色粘質土 (灰色粘質土ブロック、マンガン粒子、焼土若干、酸化鉄含む)
- 2 黒色土 (ほとんどが泥炭化している、灰オリブ色粘土ブロック、灰色粘土ブロック、酸化鉄、火山灰含む)
- 3 灰色粘土 (暗灰色粘土ブロック、黒褐色粘土ブロック、炭化物、酸化鉄、火山灰若干含む)



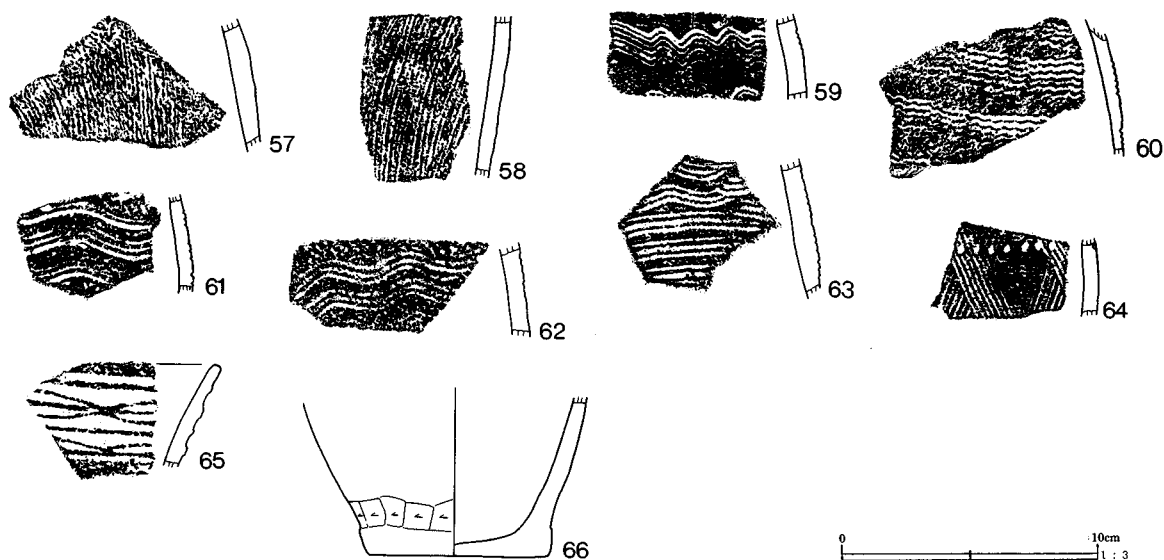
第80図 第1号溝跡



第81図 第1号溝跡出土遺物(1)



第82图 第1号沟迹出土遗物(2)



第83図 第1号溝跡出土遺物(3)

第38表 第1号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器台付甕	(14.2)	—	—	AEGM	浅黄橙色	B	10%以下	ユビナデ。 脚部外面ヘラナデ。
2	土師器埴	7.0	—	—	ABEGHM	灰黄褐色	A	40%	
3	土師器高坏	—	—	—	AEGM	灰褐色	B	30%	
4	土師器壺	(18.0)	—	—	AEJ	にぶい黄橙色	A	20%	
5	土師器坏	(11.8)	—	—	AEJ	褐灰色	B	20%	
6	土師器坏	(14.1)	—	—	ABEHI	褐灰色	C	15%	
7	土師器坏	(14.1)	—	—	AEM	赤褐色	C	15%	
8	土師器坏	(14.2)	—	—	AEM	橙色	D	10%	
9	土師器坏	(13.0)	—	—	AEM	橙色	D	20%	
10	土師器坏	(12.1)	(4.0)	—	AEJM	橙色	D	50%	
11	土師器坏	(11.5)	—	—	ADJM	橙色	B	50%	
12	須恵器高坏	—	—	—	AB	灰色	A	15%	3方向に二段スカシ。
13	土師器甕	(20.0)	—	—	AEM	にぶい橙色	B	10%	
14	土師器甕	—	—	—	AGMN	にぶい黄橙色	A	10%	
15	須恵器德利形平底壺	—	—	(17.5)	AB	灰色	A	25%	
16	須恵器坏	12.8	3.8	5.6	ABGMN	灰色	A	90%	カキ目。底部刷毛目。
17	須恵器碗	13.2	5.8	6.3	ABEGL	灰黄色	B	90%	末野産。回転糸切り。
18	須恵器碗	14.5	6.1	(8.0)	ABDLMN	灰色	A	90%	末野産。墨書「本」。回転糸切り後高台ナデツケ。
19	須恵器碗	(13.0)	5.3	(6.9)	AJLN	黒色	D	40%	末野産。回転糸切り後高台ナデツケ。
20	須恵器碗	13.4	5.2	6.6	ABGL	明青灰色	B	100%	器面剥離。末野産。回転糸切り後高台ナデツケ。
21	土鍾	長さ4.3	幅1.1	厚さ1.2	—	—	—	一部欠損	末野産。回転糸切り後高台ナデツケ。
22	平瓦	—	—	厚さ2.9	AEM	にぶい橙色	A	—	重さ5.2g。
23	平瓦	—	—	厚さ1.1	AD	灰色	A	—	凹面：布目痕6×7本/cm ² 。凸面：ナデ。技法：粘土紐桶巻造り。
24	紡錘車	広面径4.0	狭面径(2.4)	厚さ1.5	—	—	—	欠損	凹面：布目痕8×7本/cm ² 。凸面：縄叩き目。
25	弥生土器甕	16.8	20.4	8.7	AGH	褐灰色	B	100%	孔径0.6cm。重さ25.0g。滑石製。
26	弥生土器壺	(8.4)	—	—	AGJM	にぶい黄橙色	B	10%	L R縄文。木葉痕。
27	弥生土器壺	(11.6)	—	—	AM	黒色	B	10%以下	口縁部R L縄文。
28	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい褐色	—	口縁部	L R縄文。
29	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄色	—	胴部	地文R L縄文。
30	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	
31	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	口縁部	口唇部R L縄文。
32	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい橙色	—	胴部	
33	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	L R縄文。
34	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	R L縄文。

35	弥生土器壺	—	—	—	—	黒色	—	頸部	R L 縄文。
36	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	頸部	L R 縄文。
37	弥生土器壺	—	—	—	—	黒色	—	頸部	R L 縄文。
38	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	頸部	
39	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	
40	弥生土器壺	—	—	—	—	褐灰色	—	胴部	
41	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	
42	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	L R 縄文。
43	弥生土器壺	—	—	—	—	褐灰色	—	胴部	地文 R L 縄文。
44	弥生土器壺	—	—	—	—	黒色	—	胴部	
45	弥生土器壺	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	地文 L R 縄文。
46	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	R L 縄文。
47	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	
48	弥生土器壺	—	—	—	—	褐色	—	胴部	
49	弥生土器壺	—	—	—	—	褐灰色	—	頸部	地文 L R 縄文。
50	弥生土器壺	—	—	—	—	灰黄色	—	頸部～胴部	縄文。
51	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	頸部～胴部	
52	弥生土器壺	—	—	—	—	灰褐色	—	胴部	
53	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	L R 縄文。
54	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい褐色	—	胴部	地文 L R 縄文。
55	弥生土器甕	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	
56	弥生土器甕	—	—	—	—	黒色	—	胴部	R L 縄文。
57	弥生土器甕	—	—	—	—	灰褐色	—	胴部	縄文。
58	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	
59	弥生土器甕	—	—	—	—	灰褐色	—	胴部	
60	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	
61	弥生土器甕	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	
62	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	R L 縄文。
63	弥生土器甕	—	—	—	—	灰黄褐色	—	胴部	
64	弥生土器甕	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	
65	弥生土器鉢	—	—	—	—	黒色	—	口縁部	
66	弥生土器壺	—	—	(7.1)	—	にぶい橙色	—	底部	

に唯一切られ、その他の溝跡、住居跡、土坑などを切っている。

平面形状は、120-163グリッドから南へ延び、121-167グリッドでいったん2mほどブリッジ状に途切れさらに南へ延び、121-174グリッドで直角に東に向きを変え102-175グリッドへ続きさらに東へ延びると推定される。溝の内側を意識した区画溝のような形態である。

残存長は推定部分も含めて149.0m、最大幅3.1m、底面は平坦で最大幅1.6mを測る。深さは90cm前後である。断面形は、箱葉研状を呈する部分と舟底状を呈する部分がある。埋土は自然堆積と考えられ、中間層に泥炭化した層が存在し堆積の過程で長期にわたって湿地化していた時期があることが伺われた。

出土遺物は多種多様で、弥生土器壺・甕、土師器台付甕・埴・高坏・坏・甕、須恵器坏・椀・徳利形平底壺、瓦、土錘、石製紡錘車等さまざまな時期の遺物が出土した。これは、本遺構が周辺のさまざまな時期の遺構を切っているためと考えられ、本遺構の所属時期は須恵器坏・椀の示す9世紀後半代と推定される。

第2号溝跡（第84図）

116-157・158グリッドに位置する。北及び南が調査区域外となっている。

残存長7.61m、幅0.36m、断面形は箱形状で深さ32cmを測る小規模な溝である。

出土遺物は、土師器甕、須恵器坏・甕等が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

第3号溝跡（第84図）

111-158グリッドから西に延び、112-158グリッドから東へ方向を変えるコの字形の溝である。第1号住居跡と重複関係にあり、本遺構が切っていた。

長さは10.6mであった。幅は0.50mから0.73m、深さ30cmと規模の小さな溝跡である。断面形は箱形状である。

出土遺物は、検出できなかった。

第4号溝跡（第84図）

98-159・160グリッドに位置する。北及び南は調査区域外となっている。

残存長は6.84m、幅は0.67mから1.15m、深さ29cmを測る。断面形は浅い箱葉研状となっている。

出土遺物は、土師器坏・甕等が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

第5号溝跡（第84図）

97-159・160グリッドに位置する。第15号住居跡と重複関係にあり、本遺構が切っていた。北及び南は調査区域外となっている。

残存長は6.53m、幅は0.25mから0.47m、深さ40cmを測る。断面形は箱形状となっている。

出土遺物は、土師器坏・甕等が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

第6号溝跡（第84図）

120・121-160グリッドに位置する。東及び西が調査区域外になっている。

残存長は7.18m、幅は0.81mから1.24m、深さは浅く19cmを測る。底面は2段に掘り込まれている部分もあり、断面形は浅い箱葉研状を呈する。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器甕等が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

第7号溝跡（第84図）

99・100-162グリッドに位置する。東及び西は調査区域外となっている。

残存長は6.12m、幅は0.20mから0.36m、深さ12cmを測る浅い溝である。断面形は浅い箱葉研状となっている。

出土遺物は、土師器甕等が検出できたが、いずれも細片で図示可能な遺物ではなかった。

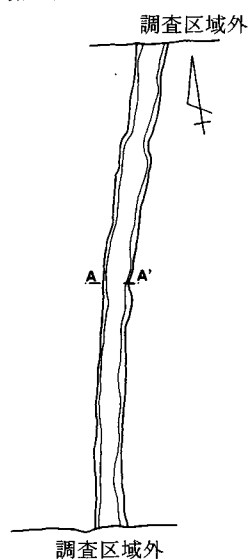
時期は、古墳時代後期と考えられる。

第8号溝跡（第84図）

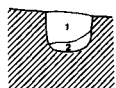
120-163グリッドから122-163グリッドにかけて位置する。第1・9号溝跡、第4号土坑と重複関係にあり、それぞれを切っている。また、東及び西は調査区域外となっている。

残存長は7.59m、幅は不規則で0.9mと幅広のところもあれば、0.4mと狭いところもある。深さは7cmから25cmを測る。断面形は、幅広のところでは舟底状、幅の狭いところで葉研状を呈する。

第2号溝跡



A 24.10 A'



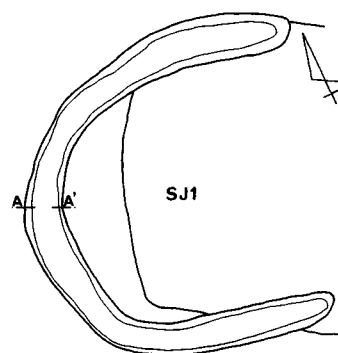
第2号溝跡

1 暗灰色粘質土 (灰土ブロック・粒子、酸化鉄含む)
2 灰色粘質土 (暗灰色土ブロック・粒子、酸化鉄含む)

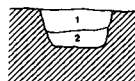
第3号溝跡

1 暗青灰色粘質土 (灰オリーブ色土粒子、酸化鉄、炭化物含む)
2 灰色粘質土 (灰オリーブ色土粒子、酸化鉄、焼土、炭化物若干含む)

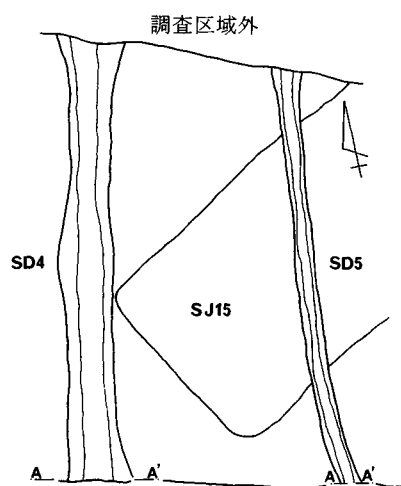
第3号溝跡



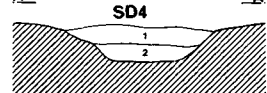
A 24.10 A'



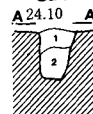
第4・5号溝跡



A 24.10 A'



SD5



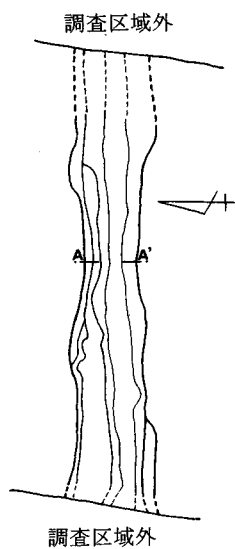
第4号溝跡

1 灰色粘質土 (酸化鉄、焼土若干含む)
2 暗灰色粘質土 (灰オリーブ色土粒子、酸化鉄、焼土、炭化物含む)

第5号溝跡

1 灰色粘質土 (暗灰色粘質土ブロック、黄褐色土粒子、酸化鉄、火山灰含む)
2 灰色粘質土 (暗灰色土ブロック・粒子、黄褐色土粒子、酸化鉄、火山灰含む)

第6号溝跡



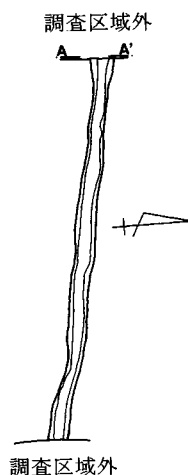
A 24.10 A'



第6号溝跡

1 暗灰色粘質土 (灰色粘質土ブロック、酸化鉄、火山灰含む)

第7号溝跡



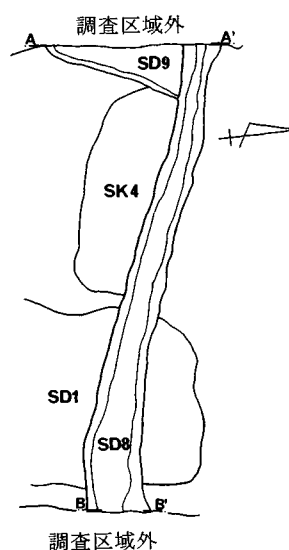
A 24.40 A'



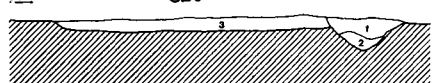
第7号溝跡

1 灰色粘質土 (暗灰色土ブロック・粒子、酸化鉄、火山灰含む)

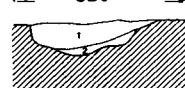
第8・9号溝跡



A 24.80 A'



B B'

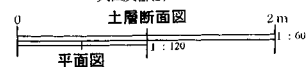


第8号溝跡 (B-B')

1 灰色土 (酸化鉄、礫、火山灰含む)
2 黄灰色土 (黒褐色土粒子、酸化鉄、礫、火山灰含む)

第8・9号溝跡 (A-A')

1 灰色土 (酸化鉄、礫、焼土、火山灰若干含む)
2 黄灰色土 (酸化鉄、礫、火山灰、土器若干含む)
3 オリーブ黒色土 (酸化鉄多量に含み明褐色がかかる、礫多量、火山灰含む)



第84図 第2～9号溝跡

出土遺物は、土師器甕、鉄釘等が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、第1号溝跡以降と考えられる。

第9号溝跡（第84図）

122-163グリッドに位置する。第8号溝跡及び第4号土坑と重複しており、第4号土坑、本遺構、第8号溝跡の順に新しい。大部分が調査区域外となっている。

残存長はわずかに2.7m、幅は不明、深さは10cm前後を測る。

出土遺物は、検出できなかった。

第10号溝跡（第85図）

125-164・165グリッドに位置する。本遺構は第11・17号住居跡の上に形成され、直接重複関係にはない。北及び南は調査区域外となっている。

残存長6.35m、幅は不規則で最大1.56m、最小0.53mである。深さは13cmから23cmを測る。断面形は、浅い舟底状を呈する。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器甕等が検出されたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

第11号溝跡（第85・87図、第39表）

123-164グリッドから123-166グリッドに位置する。北及び西が調査区域外となっている。

残存長は6.46m、幅は0.46mから0.66m、深さは非常に浅く5cm前後を測る。断面形は不整形な舟底状となっている。

出土遺物は、土師器坏・甕等の土器のほか、管玉が検出できた。

時期は、古墳時代中期と考えられる。

第12号溝跡（第85・87図、第39表）

117-165グリッドから121-165グリッドにかけて位置する。第1・13号溝跡、第20・21号住居跡と重複関係にあり、第1号溝跡に本遺構が切られ、その他の遺構を本遺構が切っていた。東は調査区域外となっている。

残存長は17.3m、幅は1.31mから2.83m、溝は東に傾斜しており、深さは西で20cmと浅く、東で46cmと深い。断面形は箱形に近い形状だが、東はやや変形した形状である。

出土遺物は、土師器高坏・坏・甕、須恵器甕等が検出でき、時期がさまざまな遺物であった。しかし、切り合いと主体となる遺物から古墳時代後期と考えたい。

第13号溝跡（第85・87図、第39表）

119-165・166グリッドに位置する。第12号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切られている。また、第20号住居跡上に位置するが直接重複関係にはない。北及び南は調査区域外となっている。

残存長は5.90m、幅2.56mから3.00m、深さは15cmを測る。底面の形状は平坦で、幅の広い箱形状の断面形状である。

出土遺物は、土師器坏・高坏・甕・甗等の破片のほか土錘が出土した。時期は、切り合い関係から判断すると、古墳時代後期となるが下の第20号住居跡も本遺構を切っている第12号溝跡も古墳時代後期であるので、非常に短期間の存在であったと判断せざるを得ない。

第14号溝跡（第85図）

112・113-165・166グリッドに位置する。第2・21号住居跡が下に所在するが、直接重複関係にない。北及び南は調査区域外となっている。

残存長は5.83m、平面形態が不規則であるので幅は0.61mから1.19mを測り、断面形も基本的には箱薬研状であるが、2段の掘り込みをもち中途にテラスが存在する部分もある。深さは、13cmから26cmを測る。

出土遺物は、土師器高坏・甕、須恵器蓋・坏・甕等が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、8世紀から9世紀と考えられる。

第15号溝跡（第85・87図、第39表）

108-166グリッドから109-167グリッドにかけて位置する。北及び南が調査区域外となっている。

残存長は6.00m、幅1.5m前後、深さは深く1.35m前後を測る。断面形状はやや崩れた薬研状を呈している。

出土遺物は、弥生土器壺、土師器高坏・坏・台付甕・甕・壺等が検出できた。

時期は、古墳時代中期と考えられる。

第16号溝跡（第85図）

107-166グリッドに位置する。北は調査区域外となっている。

南が袋状になる溝で、残存長2.91m、幅は袋状の部分で最も広く1.23m、狭い部分で0.57m、深さ30cm程を測る。断面形は、箱薬研状を呈する。

出土遺物は、土師器細片が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

第17号溝跡（第85図）

121-171グリッドから123-171グリッドにかけて位置し、ややくの字状になる溝である。第1号溝跡と重複しており、本遺構の検出中央部が切られていた。東及び西は調査区域外となっている。

残存長は5.80m、幅は第1号溝跡を挟んで西はやや幅広で0.5m、東は0.33mで、深さは10cm前後を測る。底面は平底で、断面形は箱形状となっている。

出土遺物は、弥生土器、土師器壺等が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、古墳時代中期と考えられる。

第18号溝跡（第85図）

121-172グリッドを中心に位置する。第1号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切られている。東は調査区域外である。

残存長はわずかに2.06m、幅は幅広で1.92mから2.40m、深さ67cmを測る。断面形は基本的に箱薬研状を呈するが、南の斜面途中にテラスが存在する2段の掘り方である。

出土遺物は、弥生土器、土師器細片が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

第19号溝跡（第85図）

122-172グリッドに位置する。第17号溝跡に平行する溝で、第1号溝跡と重複し、本遺構が切られている。西は調査区域外である。

残存長はわずかに2.40m、幅は0.56mから0.85m、深さ20cmから30cmを測る。断面形は崩れた箱薬研

状を呈する。

出土遺物は、弥生土器壺、土師器細片が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、弥生時代中期と考えられる。

第20号溝跡（第86図）

102-173グリッドに位置する。西は調査区域外である。

残存長は4.00m、幅は検出された中央付近で0.90mを測り、東の先端に向かってすぼまる。深さは東で1.00m、中央で57cmを測り、先端に向かって浅くなる。断面形はやや崩れた舟底状を呈する。

出土遺物は、検出できなかった。

第21号溝跡（第86図）

121・122-173グリッドに位置する。第1号溝跡と重複しており、本遺構の検出中央部が切られている。また、第22号溝跡を切っている。東及び西は調査区域外となっている。

残存長は5.40m、幅は1.44mから1.83m、深さは東で35cm、西で58cmを測る。底面は平底で、断面形は箱形状となっている。

出土遺物は、西側を中心に土師器坏・甕等が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

第22号溝跡（第86・87図、第39表）

122-173グリッドを中心に位置する。第1・21号溝跡と重複関係にあり、本遺構が各々に切られている。西は調査区域外である。

残存長はわずかに1.24m、幅は2.34mから3.00m、深さ75cmを測る。底面が広く、断面形はやや崩れた舟底状を呈する。

出土遺物は、弥生土器壺・甕、土師器坏、須恵器甕等が検出できた。

第23号溝跡（第86図）

119-188グリッドから119-190グリッドにかけて位置する。第24・25・26号溝跡と重複関係にあり、第24・25号溝跡、第26号溝跡、そして本遺構の順に新しい。ただし、第24号溝跡と第25号溝跡の新旧関係は不明である。北及び南は調査区域外となっている。

残存長は7.64m、幅は0.50mから0.85m、深さは50cm前後を測る。底面は平底で、断面形はやや箱形状を呈する。

出土遺物は、検出できなかった。

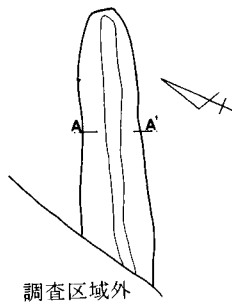
第24号溝跡（第86図）

119-188グリッドから119-190グリッドにかけて位置する。第23・26号溝跡と重複関係にあり、第23号溝跡及び第26号溝跡に切られる。本遺構の北の部分は第23号溝跡に切られ消滅する。北及び南は調査区域外となっている。

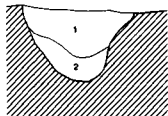
残存長は6.10m、幅は0.50m前後と推定でき、深さは50cm前後を測る。断面形は薬研状を呈する。

出土遺物は、検出できなかった。

第20号溝跡

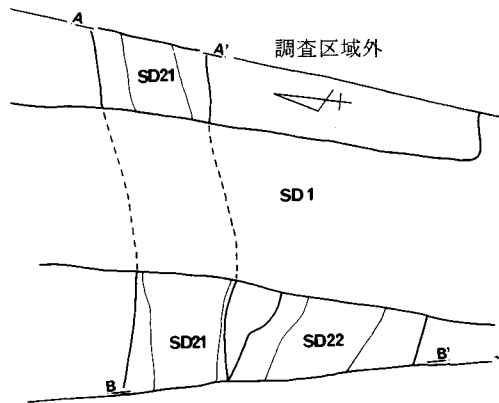


A 24.10 A'

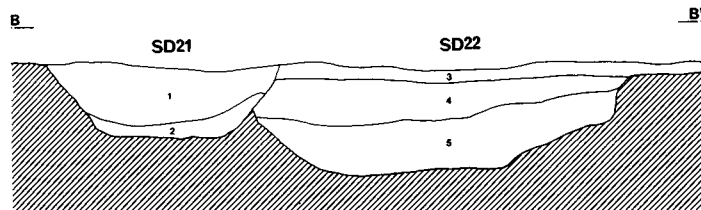
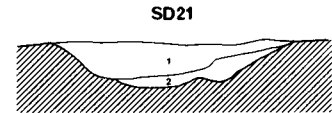


- 第20号溝跡
1 暗灰色粘質土 (灰色土粒子、酸化鉄、炭化物、焼土若干含む)
2 暗青灰色粘質土 (灰色土ブロック・粒子、暗灰色粘質土ブロック、酸化鉄含む)

第21・22号溝跡



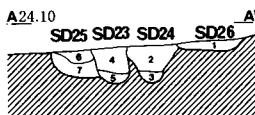
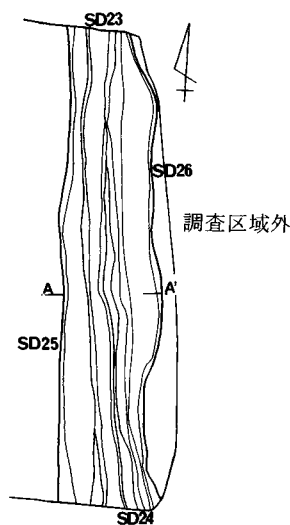
A 24.80 A'



- 第21号溝跡 (A-A')
1 オリーブ黒色粘質土 (灰オリーブ色粘質土ブロック、酸化鉄、土器若干含む)
2 暗灰色粘質土 (灰色土粒子、酸化鉄、礫、炭化物含む)

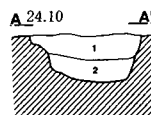
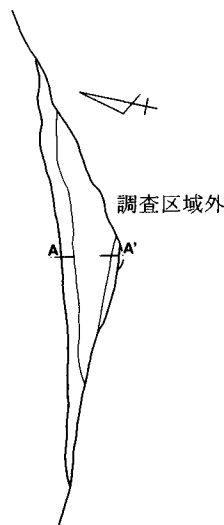
- 第21・22号溝跡 (B-B')
1 オリーブ黒色粘質土 (灰オリーブ色粘質土ブロック、酸化鉄、土器含む)
2 暗灰色粘質土 (灰色土粒子、酸化鉄、礫、焼土、炭化物含む)
3 灰色粘質土 (酸化鉄、礫含む)
4 灰色粘質土 (オリーブ黒色粘質土ブロック、灰色粘土ブロック、礫、焼土、炭化物含む)
5 暗灰色粘質土 (暗オリーブ灰色砂、灰色粘質土ブロック、酸化鉄、礫、炭化物含む)

第23～26号溝跡



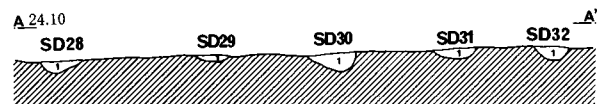
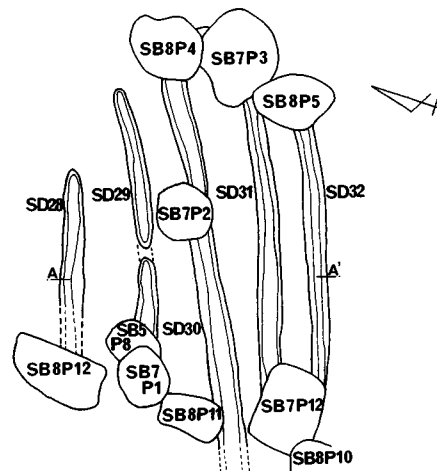
- 第23～26号溝跡
1 暗灰色粘土 (灰色土ブロック・粒子多量、酸化鉄、火山灰含む)
2 暗灰色粘土 (火山灰、酸化鉄若干含む)
3 黒色粘土 (酸化鉄若干含む)
4 灰色粘土 (黒色土粒子、灰色土粒子、火山灰若干、酸化鉄含む)
5 暗灰色粘土 (灰色土粒子、酸化鉄若干含む)
6 暗灰色粘土 (火山灰多量、酸化鉄若干含む)
7 黒色粘土 (灰色土粒子若干、酸化鉄、火山灰含む)

第27号溝跡



- 第27号溝跡
1 灰オリーブ色粘土 (暗灰色土ブロック・粒子、酸化鉄含む)
2 暗灰色粘土 (オリーブ灰色粘土ブロック、酸化鉄含む)

第28～32号溝跡



- 第28～32号溝跡
1 暗灰色粘質土 (酸化鉄含む)



第86図 第20～32号溝跡

第25号溝跡（第86図）

119-188グリッドから119-190グリッドにかけて位置する。第23号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切られる。北及び南は調査区域外となっている。

残存長は7.56m、幅は0.96m前後と推定でき、深さは50cm前後を測る。断面形はやや箱葉研状を呈する。

出土遺物は、土師器甕等が検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

第26号溝跡（第86図）

119-188グリッドから119-190グリッドにかけて位置する。第23・24号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第24号溝跡を切り、第23号溝跡に切られる。北及び南は調査区域外となっている。

残存長は7.59m、幅は0.55m前後と推定でき、深さは浅く28cm前後を測る。底面は幅広の平坦で、断面形はやや箱葉研状を呈する箱形である。

出土遺物は、検出できなかった。

なお、第23号溝跡から第26号溝跡は、これらの溝跡が浅間Bテフラが混じった土を掘り込んで作られていたことから少なくとも1108年以降の遺構である。

第27号溝跡（第86図）

107・108-190グリッドに位置する。大部分が調査区域外となっている。

溝跡は調査区域内にぎりぎり接するように検出されたため規模等の詳細は不明だが、残存長は6.88m、幅は0.88m、深さは25cmを測る。断面形はやや崩れた箱形状を呈する。

出土遺物は、検出できなかった。

第28号溝跡（第86図）

101-167グリッドに位置する。第29・30・31・32号溝跡とほぼ並行し、ともに畑の畝状遺構と考えられる。時期は、第30号溝跡から古墳時代後期の土師器が出土していることから、全てこの時期に所属すると考えられる。

第8号掘立柱建物跡第12号ピットと重複関係にあり、本遺構が切られている。

残存長は2.80m、幅は30cmから50cm、深さは8cmを測る。断面形は舟底状を呈する。

出土遺物は、検出できなかった。

第29号溝跡（第86図）

100-167グリッドから101-168グリッドに位置する。第5号掘立柱建物跡第8号ピット、第7号掘立柱建物跡第1号ピットと重複関係にあり、本遺構が切られている。

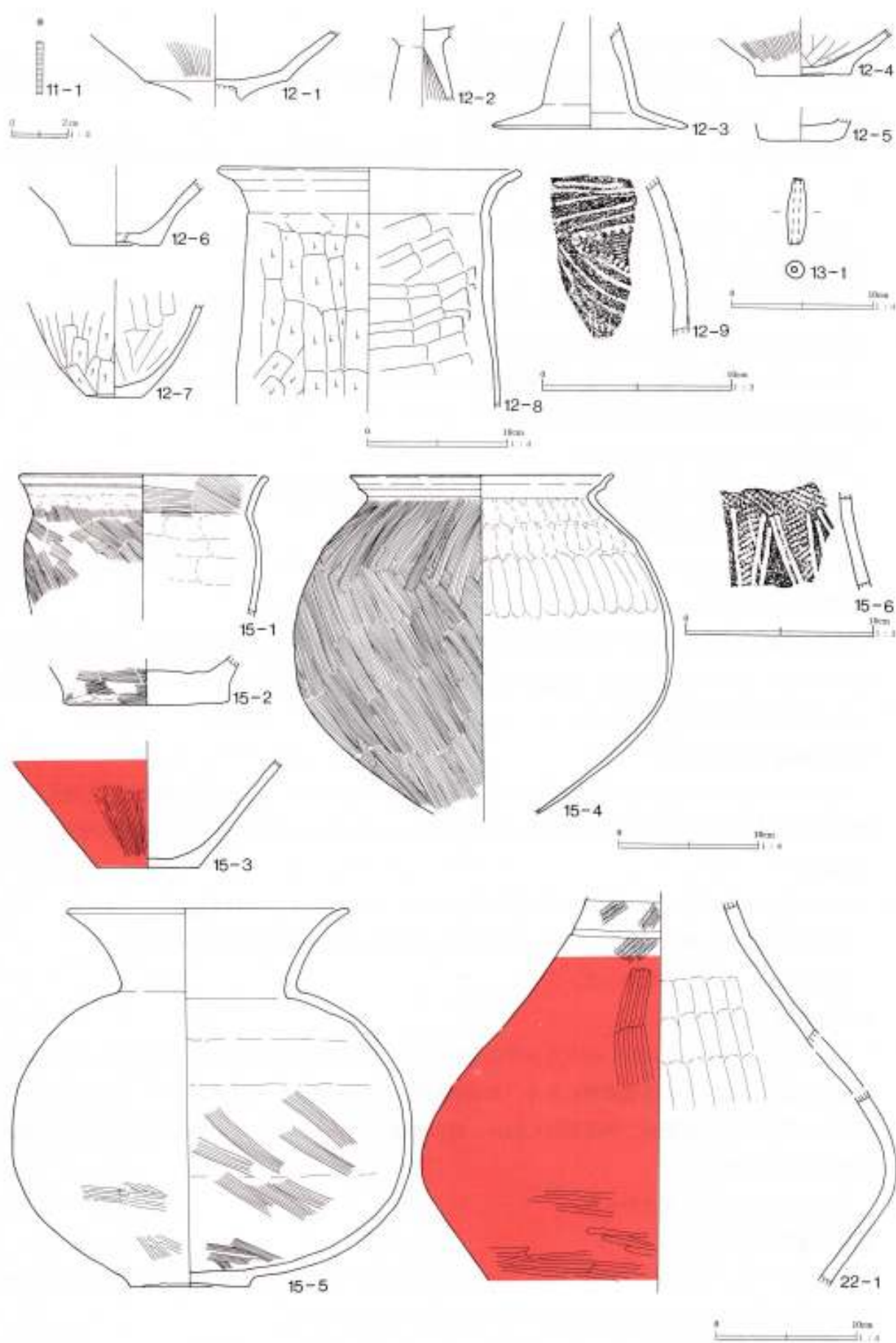
溝はいったん途切れるが、残存長は3.64m、幅は23cmから35cm、深さは4cmから14cmを測る。断面形は舟底状を呈する。

出土遺物は、検出できなかった。

第30号溝跡（第86図）

100-167グリッドから101-168グリッドに位置する。第7号掘立柱建物跡第2号ピット、第8号掘立柱建物跡第4・11号ピットと重複関係にあり、本遺構が切られている。

残存長は5.82m、幅は28cmから45cm、深さは17cmを測る。断面形は舟底状を呈する。



第87図 第11・12・13・15・22号溝跡出土遺物

第39表 第11・12・13・15・22号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
11-1	管玉	長さ1.8	直径0.3	重さ0.2	—	—	—	100%	碧玉製。 内面剥離。
12-1	土師器高坏	—	—	—	AEMN	赤色	D	35%	
12-2	土師器高坏	—	—	—	AM	赤色	D	25%	
12-3	土師器高坏	—	—	(14.0)	AEM	橙色	D	25%	
12-4	土師器甕	—	—	6.8	AGIJ	にぶい褐色	A	10%以下	
12-5	土師器壺	—	—	6.0	AJM	橙色	A	10%以下	
12-6	土師器壺	—	—	(6.5)	AEHJ	にぶい橙色	C	10%	
12-7	土師器甕	—	—	4.0	AM	にぶい黄橙色	B	15%	
12-8	土師器甕	(21.8)	—	—	AEHM	浅黄橙色	A	20%	
12-9	弥生土器壺	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	胴部	
13-1	土鍾	長さ4.6	幅1.3	厚さ1.2	—	—	—	—	
15-1	土師器甕	(18.0)	—	—	AEHN	にぶい橙色	B	30%	
15-2	土師器壺	—	—	11.9	AEHJM	にぶい赤褐色	C	10%	底部ヘラケズリ。 外面赤彩。
15-3	土師器壺	—	—	(7.3)	AEGM	にぶい黄褐色	A	15%	
15-4	土師器台付甕	(19.0)	—	—	AEGMN	黒褐色	A	40%	地文RL縄文。 LR縄文。赤彩の痕跡。
15-5	土師器壺	20.2	26.9	8.6	AEGMN	にぶい橙色	B	60%	
15-6	弥生土器壺	—	—	—	—	黄灰色	—	頸部	
22-1	弥生土器壺	—	—	—	AJM	にぶい黄褐色	B	60%	

出土遺物は、土師器甕等の破片がわずかに検出できたが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

第31号溝跡（第86図）

100・101-168グリッドに位置する。第6号掘立柱建物跡第9号ピット、第7号掘立柱建物跡第3・12号ピット、第8号掘立柱建物跡第5号ピットと重複関係にあり、本遺構が切られている。

残存長は4.30m、幅は26cmから39cm、深さは浅く7cmを測る。断面形は舟底状を呈する。

出土遺物は、検出できなかった。

第32号溝跡（第86図）

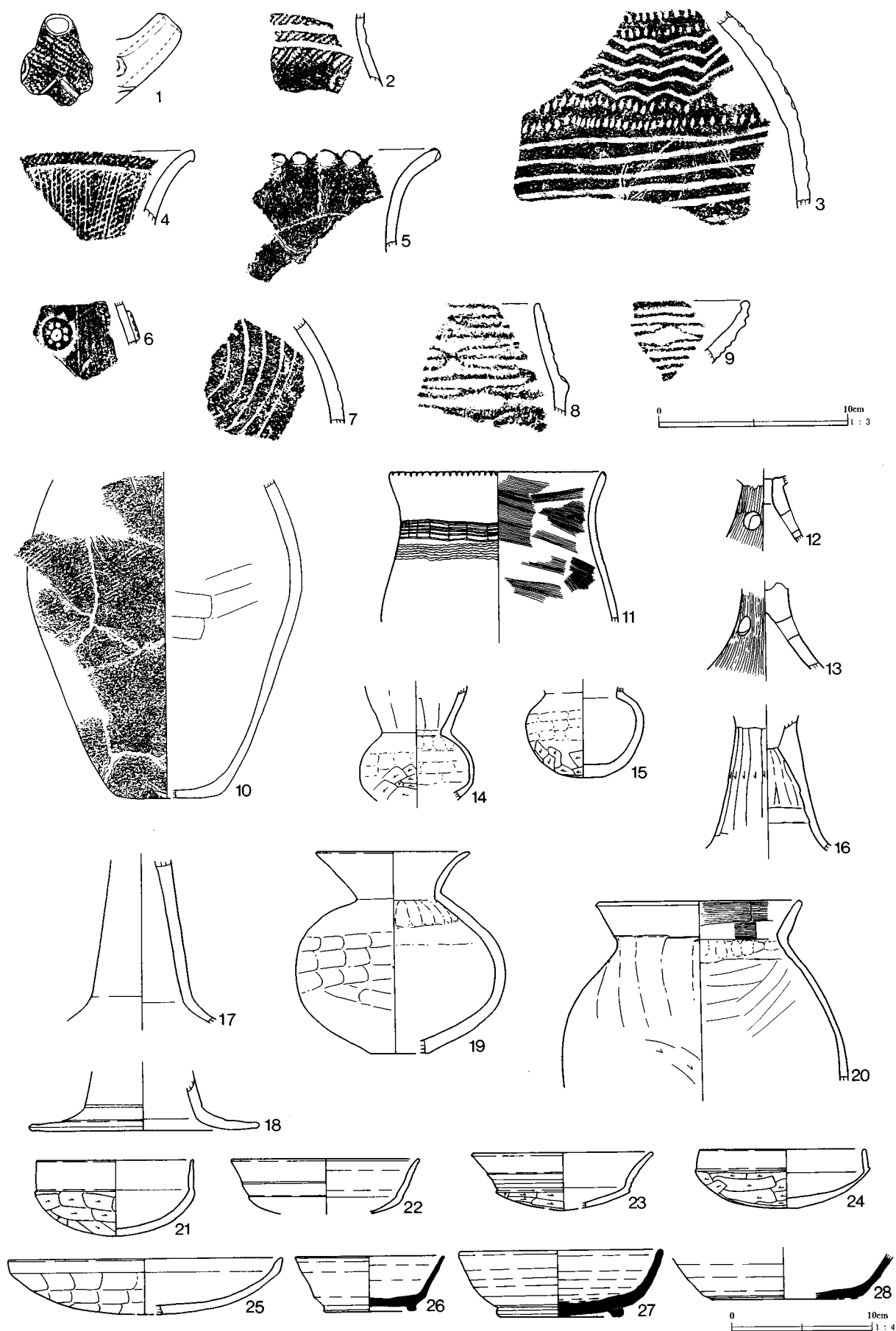
100・101-168グリッドに位置する。第7号掘立柱建物跡第12号ピット、第8号掘立柱建物跡第5・10号ピットと重複関係にあり、本遺構が切られている。

残存長は4.01m、幅は25cmから34cm、深さは10cmを測る。断面形は舟底状を呈する。

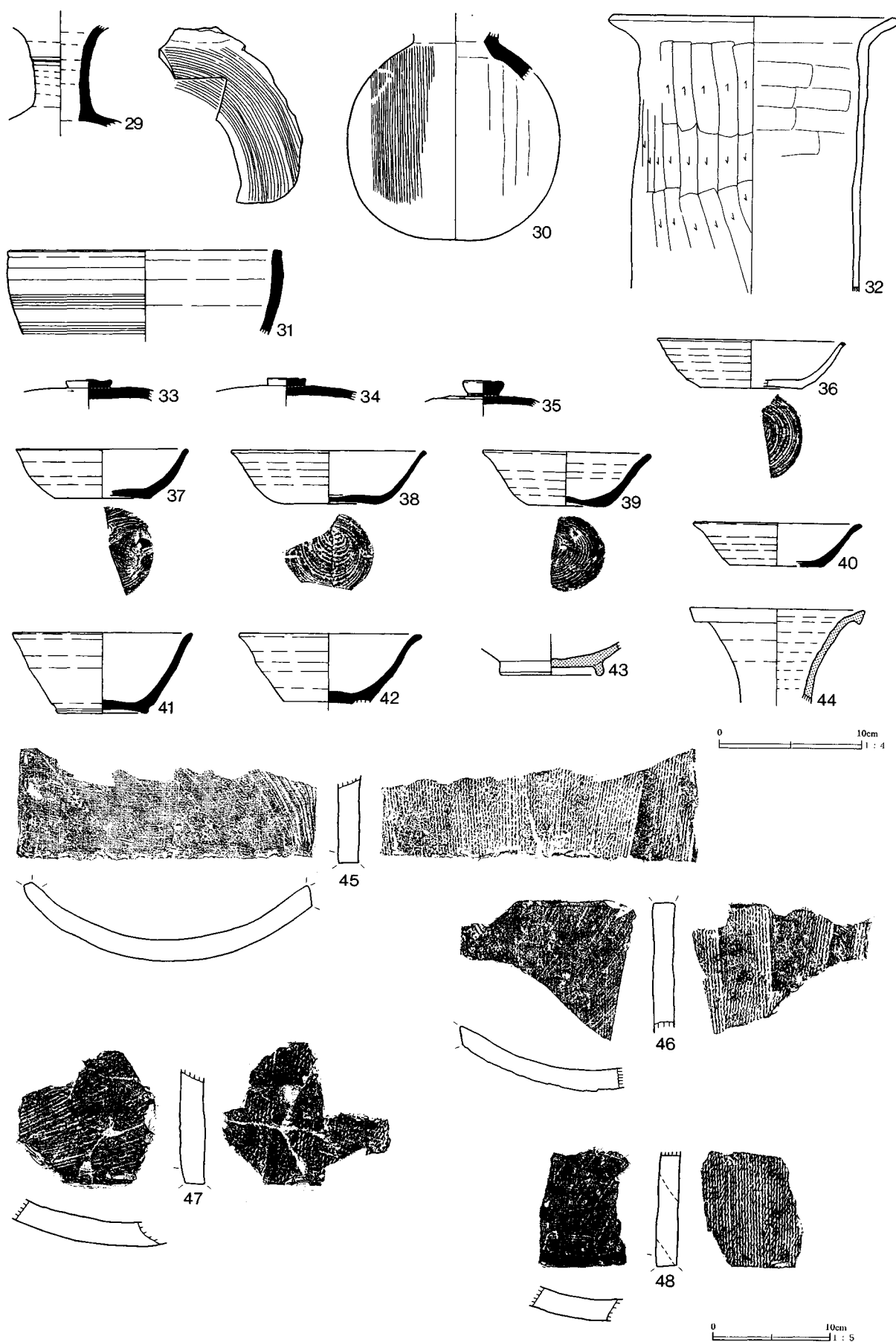
出土遺物は、検出できなかった。

10 遺構外出土遺物

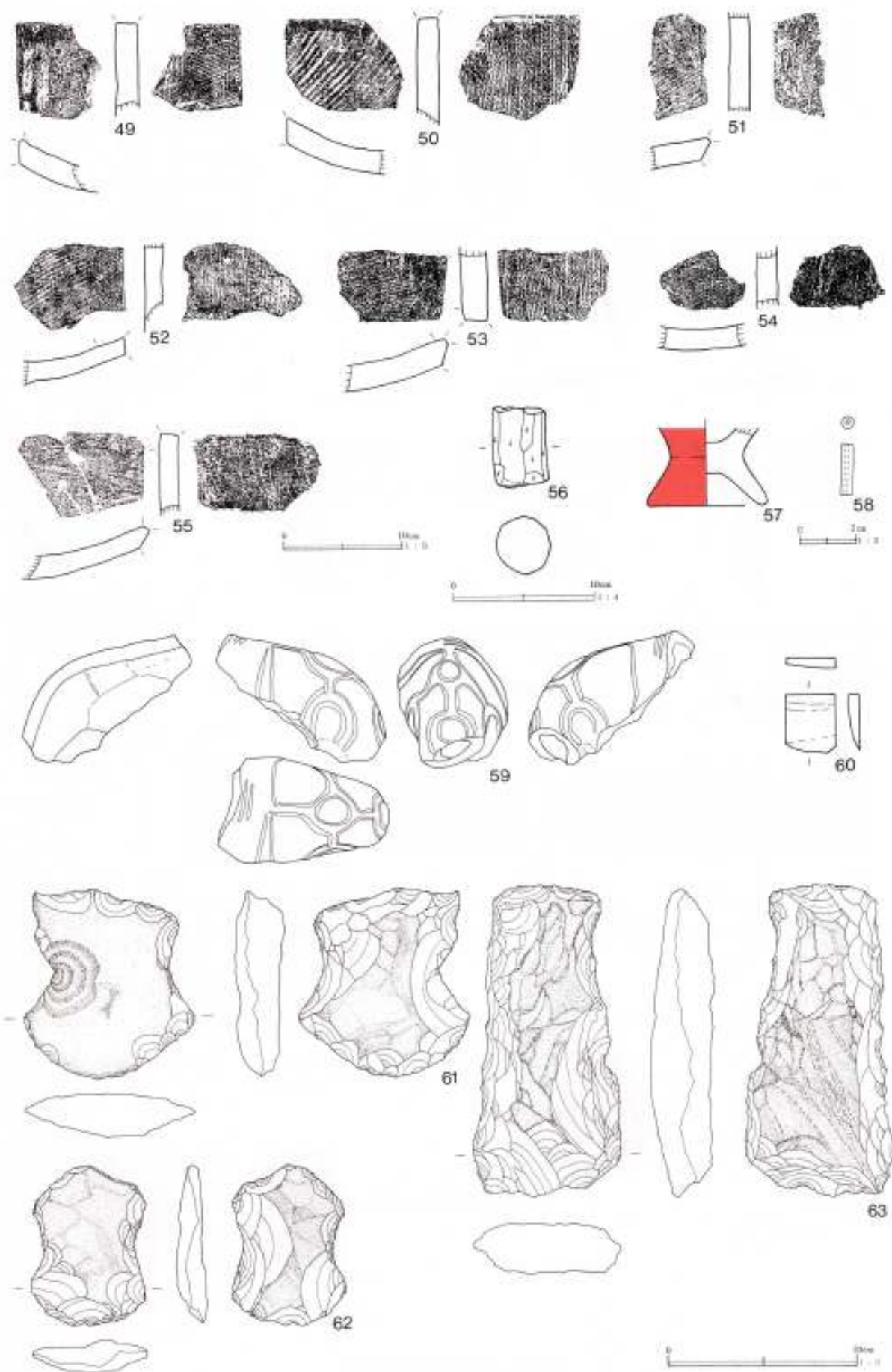
重機による表土除去の際に出土した遺物及び遺構外グリッド出土遺物を掲載する（第88～91図、第40表）。縄文時代から平安時代までの土器、石器、瓦、土製品、玉類が出土し、特に弥生時代の土偶は非常に珍しいものである。



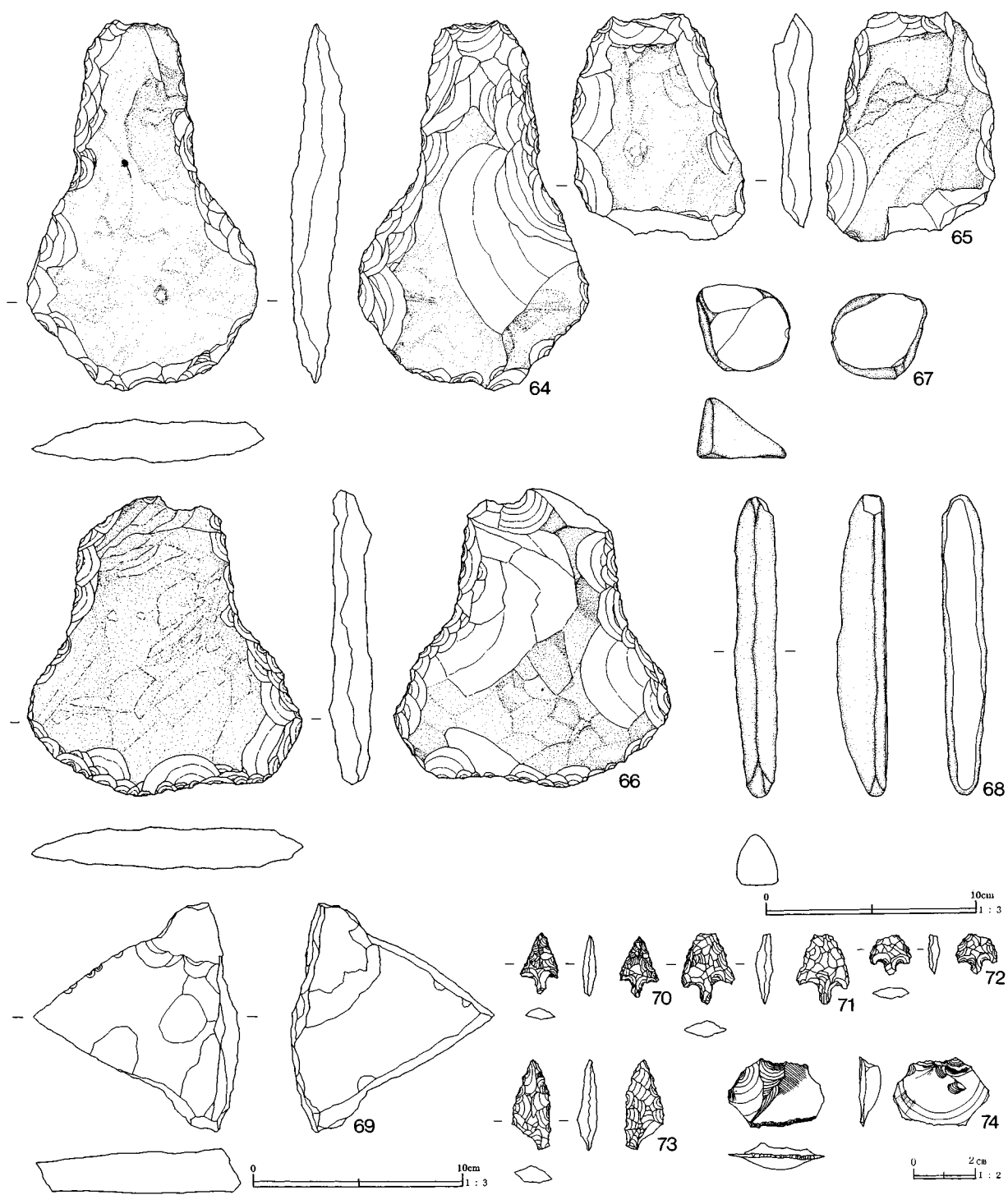
第88図 遺構外出土遺物(1)



第89図 遺構外出土遺物(2)



第90図 遺構外出土遺物(3)



第91図 遺構外出土遺物(4)

第40表 遺構外出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	縄文土器注口土器	101-169	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	注口部	L R 縄文。
2	弥生土器壺	109-166	—	—	—	—	灰黄褐色	—	頸部	地文LR縄文。ミガキ。
3	弥生土器壺	120-161	—	—	—	—	黒褐色	—	胴部	
4	弥生土器甕	第2区	—	—	—	—	暗褐色	—	口縁部	地文LR縄文。施文後条線文。
5	弥生土器甕	第2区	—	—	—	—	暗褐色	—	口縁部	
6	弥生土器壺	101-169	—	—	—	—	橙色	—	胴部	ボタン貼付文。
7	弥生土器壺	111-166	—	—	—	—	—	—	胴部	へら描渦巻文。
8	弥生土器甕	112-166	—	—	—	—	黒褐色	—	口縁部	変形工字文。
9	弥生土器鉢	114-165	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	口縁部	変形工字文。
10	弥生土器甕	121-164	—	—	7.5	AHI	にぶい黄橙色	C	35%	L R 縄文。
11	弥生土器甕	第5区	(15.7)	—	—	AGN	にぶい黄橙色	A	15%	櫛描簾状文、波状文。
12	土師器器台	113-166	—	—	—	ABEHN	にぶい黄橙色	A	—	三方向のスカシ孔。
13	土師器器台	表土除去	—	—	—	AEJ	橙色	C	35%	
14	土師器埴	表土除去	—	—	—	AEHI	にぶい黄橙色	A	25%	
15	土師器埴	120-162	—	—	3.3	ABEGHM	浅黄橙色	B	70%	
16	土師器高坏	表土除去	—	—	—	AEJ	橙色	A	15%	
17	土師器高坏	第2区	—	—	—	AEI	橙色	D	35%	
18	土師器高坏	113-165	—	—	(16.6)	AEHJ	橙色	D	10%	
19	土師器壺	120-162	11.0	14.4	(4.2)	AEGM	にぶい橙色	D	75%	
20	土師器壺	121-162	(14.9)	—	—	ACHJM	にぶい橙色	A	25%	
21	土師器坏	表土除去	(11.3)	5.5	—	AEJ	橙色	D	55%	
22	土師器坏	109-166	(13.5)	—	—	ADJ	にぶい褐色	D	20%	
23	土師器坏	109-166	(13.0)	(4.1)	—	ADHJ	黒色	A	15%	
24	土師器坏	100-163	12.0	4.3	—	AEJ	明赤褐色	B	75%	
25	土師器坏	第1区	(19.7)	(4.0)	—	AHJ	橙色	D	40%	
26	須恵器碗	113-166	(10.7)	3.9	(6.6)	ABD	灰色	A	25%	
27	須恵器碗	103-160	14.8	4.6	9.1	ABGI	灰白色	A	95%	
28	須恵器碗	100-162	—	—	(10.6)	AB	灰色	A	15%	ケズリ込み高台。
29	須恵器長頸瓶	第4区	—	—	—	AB	灰色	A	20%	
30	須恵器瓶	第4区	—	—	—	AE	灰色	C	15%	胴部にカキ目。
31	須恵器鉢	第4区	(19.5)	—	—	ABIN	灰色	A	10%以下	
32	土師器甕	107-156・158・159	20.6	—	—	AEHM	にぶい褐色	B	45%	
33	須恵器蓋	112-166	—	—	—	ADL	灰黄色	B	10%	末野産。
34	須恵器蓋	112-165	—	—	—	ALN	灰色	A	10%	末野産。
35	須恵器蓋	112-166	—	—	—	ABN	灰色	A	10%	
36	須恵器坏	112-166	(13.4)	3.3	(7.2)	ABL	黄灰色	A	25%	回転系切り。末野産。
37	須恵器坏	112-165	(12.2)	3.5	(6.7)	ADF	灰色	A	40%	回転系切り。南比企産。
38	須恵器坏	112-166	(13.9)	3.7	(7.0)	ABGL	灰白色	A	30%	回転系切り。末野産。
39	須恵器坏	113-165	(12.0)	3.8	(5.4)	ABN	灰白色	A	40%	回転系切り。末野産。
40	須恵器坏	112-165	(12.0)	3.0	(6.8)	ABN	灰色	A	15%	
41	須恵器碗	113-166	(12.8)	5.6	(6.5)	AEIL	にぶい褐色	D	15%	回転系切り後高台ナデツケ。 酸化焰焼成。末野産。
42	須恵器碗	113-165	—	—	—	ABIL	灰色	B	60%	高台剥落。末野産。
43	灰釉陶器碗	第6区	—	—	(7.5)	B	灰白色	A	20%	回転系切り後高台ナデツケ。
44	灰釉陶器長頸瓶	113-165	(12.5)	—	—	AB	灰白色	A	10%	
45	平瓦	113-166	狭端部幅 25.7	—	厚さ1.9	AEG	灰色	A	狭端部側	凹面：布目痕8×7本/cm ² 。凸面：縄叩き目。粘土板系切り痕。技法：粘土板一枚造り。
46	平瓦	113-166	—	—	厚さ1.8	ABDHN	灰色	A	狭端部側	凹面：布目痕7×8本/cm ² 。粘土板系切り痕。横骨痕。凸面：縄叩き目。技法：粘土板桶巻造り。
47	平瓦	第4区	—	—	厚さ2.2	ABM	暗灰色	C	—	凹面：布目痕6×7本/cm ² 。粘土板系切り痕。凸面：縄叩き目。技法：粘土板一枚造り(推定)。

48	平瓦	第4区	—	—	厚さ1.8	AHN	暗灰色	A	—	凹面：布目痕6×7本/cm ² 。凸面：縄叩き目。技法：粘土紐桶巻造り。
49	平瓦	113-165	—	—	厚さ1.9	AEN	灰色	A	広端部側	凹面：布目痕7×7本/cm ² 。凸面：縄叩き目。粘土板糸切り痕。技法：粘土板一枚造り（推定）。
50	瓦	第5区	—	—	厚さ2.0	AEJN	オリーブ黒色	A	広端部側	凹面：布目痕6×6本/cm ² 。粘土板糸切り痕。凸面：縄叩き目。技法：粘土板一枚造り（推定）。
51	平瓦	第1区	—	—	厚さ1.8	AGHJN	黄灰色	C	—	凹面：7×7本/cm ² 。粘土板糸切り痕。凸面：縄叩き目。技法：粘土板一枚造り（推定）。
52	平瓦	第5区	—	—	厚さ1.5	ABHN	青灰色	A	—	凹面：布目痕7×7本/cm ² 。粘土板糸切り痕。凸面：縄叩き目。技法：粘土板一枚造り。
53	平瓦	第1区	—	—	厚さ2.3	ABN	灰白色	A	—	凹面：布目痕6×6本/cm ² 。粘土板糸切り痕。凸面：縄叩き目。技法：粘土板桶巻造り（推定）。
54	平瓦	113-166	—	—	厚さ1.8	AN	灰色	A	—	凹面：布目痕7×5本/cm ² 。粘土板糸切り痕。凸面：ナデ。技法：粘土板一枚造り。
55	平瓦	112-166	—	—	厚さ1.7	AB	灰色	A	広端部側	凹面：布目痕6×6本/cm ² 。布とじ目痕。凸面：ナデ。技法：粘土板一枚造り。
56	土製支脚	第4区	長さ5.5	幅3.7	厚さ4.0	AB	にぶい黄橙色	C	一方端欠損	端部がややガラス化。
57	ニホア土器高坏	表土除去	—	—	4.3	ABE	浅黄橙色	A	60%	外面赤彩の痕跡。
58	管玉	110-159	長さ1.8	直径0.4	重さ0.6	—	—	—	100%	碧玉製。
59	土偶	121-147	—	—	—	ABEHM	にぶい黄橙色	C	左背～腕部	中空。粘土輪積み成形。沈線による模様。円を中心としたモチーフ。
60	砥石	110-166	長さ3.2	幅2.7	厚さ0.6	—	—	—	100%	重さ5.7g。砂岩製。
61	打製石斧	120-161	長さ10.0	幅9.0	厚さ2.3	—	—	—	一方端欠損	重さ270g。分胴形。頁岩製。
62	打製石斧	113-166	長さ8.3	幅6.1	厚さ1.2	—	—	—	100%	重さ105g。分胴形。頁岩製。
63	打製石斧	110-158	長さ16.4	幅7.7	厚さ3.0	—	—	—	100%	重さ200g。短冊形。頁岩製。
64	打製石斧	108-159	長さ17.7	幅11.1	厚さ2.0	—	—	—	100%	重さ490g。撥形。ホルンフェルス製。
65	打製石斧	表土除去	長さ10.5	幅8.2	厚さ1.6	—	—	—	下半欠損	重さ580g。撥形。頁岩製。
66	打製石斧	108-159	長さ14.1	幅13.2	厚さ2.1	—	—	—	上部欠損	重さ490g。撥形。頁岩製。
67	砥石	121-168	長さ4.1	幅4.2	厚さ2.8	—	—	—	100%	重さ50g。4面研磨。砂岩製。
68	砥石	110-166	長さ14.4	幅2.3	厚さ2.4	—	—	—	100%	重さ100g。1面研磨。砂岩製。
69	台石	121-168	長さ11.0	幅9.6	厚さ2.1	—	—	—	欠損	重さ255g。頁岩製。
70	石鏃	126-165	長さ2.0	幅1.2	厚さ0.4	—	—	—	100%	重さ0.6g。凹基有茎鏃。チャート製。
71	石鏃	127-165	長さ2.3	幅1.7	厚さ0.5	—	—	—	先端欠損	重さ1.5g。凹基有茎鏃。チャート製。
72	石鏃	126-165	長さ1.3	幅1.3	厚さ0.3	—	—	—	先端欠損	重さ0.5g。凹基有茎鏃。チャート製。
73	石鏃	126-165	長さ2.9	幅1.3	厚さ0.5	—	—	—	基部欠損	重さ1.6g。凹基無茎鏃。チャート製。
74	搔器	127-164	長さ2.2	幅3.1	厚さ0.7	—	—	—	100%	重さ3.5g。黒曜石製。

V 調査のまとめ

前中西遺跡についての小結

(1) はじめに

前中西遺跡の調査は、調査原因が違うものの今回の報告を含めて平成13年度までに6回を数える。その内今回の報告は1・2回目の調査にあたる。しかし、前中西遺跡全体の中で見れば、これまで発掘調査されたのはごく一部分になると言わざるを得ない。

本遺跡は、今後、区画整理事業に伴い調査される以外に、さまざまな原因で調査されることが予想されるが、その結果さらに遺跡の全貌が少しずつ明らかにされていくと考える。前中西遺跡全体の総括については今後に委ねるとして、この章ではごく大まかにまとめておきたいと思う。それでは今回報告の概要は後に述べるとして、まずはじめに第3次調査からその概要を順にまとめていきたいと思う。

(2) 第3次調査

第3次調査地点は、遺跡範囲の南端地点の調査であった。調査原因は民間の共同住宅建設に伴う取り付け道路工事であった。調査主体は、熊谷市前中西遺跡調査会であった。

検出された遺構の時期は、古墳時代後期を中心に古墳時代前期から後期のものであった。主な遺構としては、竪穴遺構6基、土坑6基、溝跡1条等であった。竪穴遺構は、方形のプランを主体にし、いずれも7世紀代に収まる遺構で、第2号竪穴遺構から第5号竪穴遺構は互いに重複関係にあった。これらは、多量の遺物を出土した遺構であった。土師器坏を主体にした土器、線刻のある石製紡錘車や須恵器甕破片を面取りした転用硯等の特殊遺物も検出された。また、1条確認された溝跡からは、古墳時代前期から後期にわたる土師器甕を主体にして坏・高坏、須恵器横瓶・甗などが多量に検出された。この溝跡は、北西から南東に走る幅約2m弱の規模であった。

本調査地点は、本報告済みである。

(3) 第4次調査

第4次調査地点は、遺跡範囲の東南端付近地点の調査であった。調査原因は土地区画整理事業に伴う街路築造工事であった。調査主体は、熊谷市教育委員会であった。

検出された遺構の時期は、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世等であった。

主な遺構としては、古墳時代後期の住居跡1軒、奈良・平安時代の住居跡10軒、中世の溝跡2条等であるが、遺構の確認面が多数面あることが確認され、下層の面からは、縄文時代晩期、弥生時代中期の土器片が検出できた。奈良・平安時代の住居跡は、9世紀初頭頃までに収まると考えられる。

遺跡は東西に長い自然堤防上に立地しているが、本調査区はこの自然堤防地形のはずれに位置し、また、遺構の密度から見ても遺跡の中心からかなり外れた位置であると考えられる。

(4) 第5次調査

第5次調査地点は、遺跡範囲の東端付近、第4次調査地点の北側地点の調査であった。調査原因はやはり土地区画整理事業に伴う街路築造工事であった。調査主体は、熊谷市教育委員会であった。

検出された遺構の時期は、弥生時代中期、古墳時代後期、奈良・平安時代を中心に、中世等であった。

主な遺構としては、弥生時代については、本報告と同様に方形周溝墓と土器棺墓の両墓制が確認された。方形周溝墓4基、土器棺墓3基であり、互いに隣接する。古墳時代後期については住居跡がわずかに2軒、そして、奈良・平安時代は住居跡が8軒等であった。また、溝跡が多数検出され、そのうち弥生時代中・後期から平安時代までの遺物を出土した溝跡が8条、古墳時代後期から平安時代の遺物を出土した溝跡が、総数にして41条検出された。さらに、中世に関しては、井戸跡が11基確認され特徴的であった。

この地点の地形を見ると、南に河川と考えられる溝跡が確認され、第4次調査地点と地形を別にする自然堤防上に立地することが分かった。この自然堤防が東西に延びており、本報告の第1・2次調査地点の自然堤防につながり一体化する地形なのか。ちなみに、互いはおよそ350mの距離にある。

(5) 第6次調査

第6次調査地点は、遺跡範囲の北西、第1・2次調査の北側地点の調査であった。調査原因はやはり土地区画整理事業に伴う街路築造工事であった。調査主体は、熊谷市教育委員会であった。

検出された遺構の時期は、弥生時代中期後半、古墳時代後期を中心に、平安時代、中世までであった。主な遺構としては、弥生時代中期後半の住居跡6軒、方形周溝墓3基、古墳時代後期の住居跡16軒等であった。弥生時代に関しては、本報告と同様中期後半の墓域のほか集落の存在も確認でき、本報告の墓域はそれと同時期の集落が本報告調査区内で確認できなく、これ以降の弥生時代中期末から後期の時期と考えられ、本報告墓域の集落域がこの第6次調査地点地区に存在した可能性を示唆すると考えられる。

また、地形を見ると、第1・2次調査地点との境には湿地化した低地が広がり、泥炭化した土が堆積していた。この湿地化した箇所は、現小河川の位置にも符合する。さらに、第6次調査地点の地形は、この湿地を挟んで別の自然堤防であることが推測される。以上、これまでの調査地点の状況から、本遺跡内には、東西に延びる長い自然堤防が何本も存在し、遺構はこの自然堤防上に立地し、さらにこの自然堤防はいくつもの河川によって形成され、この河川の位置は現地形に見る河川や道路の形状に一致しているものと思われる。

(6) 第1・2次調査

1 概要

今回報告の第1・2次調査地点で検出された遺構は、住居跡24軒、掘立柱建物跡8棟、掘立柱列2列、方形周溝墓3基、土器棺墓3基、土坑37基、ピット55基、井戸跡1基、溝跡32条で、弥生時代中期後半から古墳時代、奈良時代を中心にして、平安時代そして一部中世、近世にまで及ぶ集落跡及び墓地跡である。

今回の調査で特筆すべき点は、4点ほどある。まず第1点は、弥生時代中期後半の墓域の状況が分かったことである。それは、同時期の方形周溝墓と土器棺墓という墓制が隣接して発見されたことである。すなわち、方形周溝墓という外来の墓制が導入される中で、中期中葉の再葬墓の系譜を引く墓制である土器棺墓が採用されている点である。方形周溝墓は、四隅の切れるタイプから四隅がブリッジ状に浅く掘り残され全周するタイプが存在する。そして、土器棺墓は、単独で存在する2基と住居の床にピットを掘り込んで作られた1基が存在し、本遺跡から約2km北に離れた北島遺跡で最近発見された住居内の土器棺墓の時期に続く時期にあたると考えられる。

第2点は、弥生時代の住居跡は、中期の最終末ないしは後期のものと判断され、近隣の弥生時代の集落の様相と絡めて見ると、本遺跡から約1.8km東に離れた池上遺跡、次に北島遺跡と続く後の時期に本遺跡の集落を位置づけることができる。

第3点は、この地域にはあまり見られなかった古墳時代中期の集落の様相が確認できたことである。

当該期の住居跡が4軒比較的まとまった位置から検出された。また、当該期の土器をまとめて出土する土坑も存在し、土器資料について言えば、高坪を中心に量的・質的に充実したものとなったと思う。

最後に第4点であるが、8世紀代を中心とした時期の大型掘立柱建物跡の存在である。時期を決定できる遺物が少ないので軸方向や切り合いから判断せざるを得ないが、第5号掘立柱建物跡から第8号掘立柱建物跡は同じ位置に何度も建て替えられた建物と判断できた。時期決定で確実な建物は、第7・8号掘立柱建物跡に限られ、第7号掘立柱建物跡を8世紀中頃、第8号掘立柱建物跡を8世紀後半から末のものと判断したい。そして、切り合い関係から第5号掘立柱建物跡、第6号掘立柱建物跡、第7号掘立柱建物跡、第8号掘立柱建物跡と変遷していったことが分かった。規模や形態から変遷を見ると、1間×3間の小規模な建物から始まり、大型の2間×3間の建物に建て替えられ、そしてやや規模を小さくするが中央に間仕切りをもったと推定される2間×4間の建物に建て替えられ、最後にやや規模の大きな2間×4間の建物で終わるといった形になる。この形態の変化が何を意味するかは判断に難しいが、いずれの建物も若干の位置の違いだけで同じ場所に建て替えられていることから、この場所が特別の意味をもつことが容易に見て取れる。一方、約20m西にこれらの掘立柱建物跡と軸を同じくする第4号掘立柱建物跡が存在する。この建物は、大部分調査区域外に存在するため全貌は明らかではないが、調査区域内では総柱の建物または東に庇をもつ建物と推定される。出土遺物は図示可能な遺物ではなかったが、これらの破片から7世紀後半から8世紀初頭の時期が考えられる。検出された柱穴の多くに基礎地形として栗石が用いられており、第5～8号掘立柱建物跡とは別の性格を与えられた建物とも判断できる。さらに、時期的な点を見ると、第4号掘立柱建物跡と第5号掘立柱建物跡の梁行のラインが一致する点から同時期の建物とも判断できる。

以上の点を総合的に判断すると、第4号掘立柱建物跡と第5号掘立柱建物跡が7世紀後半から8世紀初頭に建てられ、次に8世紀前半代に第5号掘立柱建物跡が第6号掘立柱建物跡に建て替えられ、そして8世紀中頃に第7号掘立柱建物跡、そして8世紀後半でも末に第8号掘立柱建物跡と建て替えられたという変遷であったことが推測できる。

以上が、本報告における遺跡における遺構の特徴的な事項である。

2 土 偶

また、遺物としては、弥生時代の土偶（第90図59）が検出されたことが特徴の1つである。これは、残念ながら遺構に伴うものではなくグリッド遺物であったが、池上遺跡の環濠から出土した中期の土偶例の近くにあり、貴重な発見となった。

本遺跡土偶は、左肩から腕部の破片である。内面の痕跡から粘土輪積み法によって製作された中空の土偶である。胎土は礫等の含有物が少ないもので、色調はにぶい黄橙色を呈していた。焼成は、あまり良いものではなく、長年にわたる摩滅により文様が見づらい部分があった。文様は、全て沈線によって表現され、施文方向は、上から下へ、左から右へが基本となっているようである。モチーフは、円を中

心としたもので、その円を中心に放射状に線が延びていき他の円を中心とした文様に接続していくものである。つまり肩上部の円から腕上部の円へと、また、脇部の正・背面の円（下部は全周しない）へと接続していくといったようである。頸部に近い部分では体の前後方向に平行した沈線の文様となっている。構図的には、正・背面ともほぼ同じである。

本例は、池上遺跡例ほど残りは良くないが、今後弥生土偶を考えていく上で貴重な資料を提供したと言える。

3 須恵器徳利形平底壺

もう一つ遺物として特筆したいものは、第1号溝跡から検出した須恵器徳利形平底壺（第81図15）と思われる土器である。私は、諏訪木遺跡の調査報告書の中でこの須恵器を取り上げて若干記述したことがあるが、今回の報告で1例また資料が増えたことになる。本例は上半部が欠損しており不明であるが、今まで出土の関東例とやや異なり器高が低く、底径の大きい扁平なものと推測される。胴部の調整はカキ目のみで、特徴的なことは底部にも胴部で使った同じ工具で交差する刷毛目状の調整痕があることである。底部は、ほんのわずかに上げ底となっている。上半部の調整や文様は不明であるので、櫛描波状文が巡るのかどうか等は分からないが、形態的特徴から判断すれば、田口一郎氏の分類（参考・引用文献参照）の1類、すなわち短胴で最大径が中位にあるものに該当すると考えられる。一方、調整や文様を見てみると、第2類や第3類に見られるカキ目を中心にしたものである。

いずれにしても、本遺跡から約1km東の距離の諏訪木遺跡例を含めて当地域に徳利形平底壺の発見例が増えてきていることは注目されるのではないだろうか。

以上が、本報告を含めて過去に実施された調査の概要及び今回の報告にあたって特筆すべき点を取り上げたものである。今後、本報告以降の調査地点の報告がまとまるにしたがい前中西遺跡の性格がより明らかになることを期待してまとめに代えたいと思う。

引用・参考文献

- 【熊谷市史】前編 熊谷市 1963
- 【新編 埼玉県史】資料編1 1980
- 【新編 埼玉県史】資料編2 1982
- 【新編 埼玉県史】資料編3 1984
- 大里郡市文化財担当者会「大里地域の遺跡Ⅰ」『埼玉考古』第29号 埼玉考古学会 1992
- 大里郡市文化財担当者会「大里地域の遺跡Ⅱ」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会 1993
- 小久保徹他『三尻天王・三尻林（1）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 高山清司「三ヶ尻上古遺跡」『埼玉県土器集成』4 埼玉考古学会 1976
- 鈴木敏昭『横間栗遺跡』熊谷市教育委員会 1999
- 木戸春夫『根絡・横間栗・関下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第153集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995
- 中島 宏他『池守・池上』埼玉県教育委員会 1984
- 鈴木孝之『北島遺跡』Ⅳ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第195集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998
- 吉田 稔他『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 滝瀬芳之他『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 田部井功『弥藤吾新田遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第29集 埼玉県遺跡調査会 1976
- 寺社下博他『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』熊谷市教育委員会 1979

寺社下博他『天神遺跡』 熊谷市教育委員会 1988
 寺社下博『中条遺跡群Ⅲ 権現山古墳・常光院東遺跡』 熊谷市教育委員会 1982
 滝瀬芳之『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990
 増田逸朗他『横塚山古墳』 埼玉県遺跡調査会 1971
 寺社下博『中条遺跡群』 熊谷市教育委員会 1984
 寺社下博「三尻中学校遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和55年度 埼玉県教育委員会 1982
 寺社下博『中条遺跡群・中島遺跡』 熊谷市教育委員会 1980
 金子正之『三尻遺跡群 黒沢館・樋ノ上遺跡』 熊谷市教育委員会 1985
 小川良祐他『樋の上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第59集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986
 坂野和信他『樋の上／皇山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第205集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998
 金子正之『三尻遺跡群 上辻・下辻遺跡』 熊谷市教育委員会 1982
 金子正之『三尻遺跡群 上辻・下辻遺跡』 熊谷市教育委員会 1984
 中村倉司『下辻遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第69集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987
 寺社下博『めづか』 熊谷市教育委員会 1983
 利根川章彦他『新ヶ谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第9集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982
 中島洋一『酒巻古墳群』行田市文化財調査報告書第20集 行田市教育委員会 1988
 寺社下博「熊谷市籠原裏遺跡の調査」『第20回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他 1987
 寺社下 博『一本木前遺跡』 熊谷市教育委員会 2000
 寺社下 博『一本木前遺跡Ⅱ』 熊谷市教育委員会 2001
 吉野 健『西別府廃寺』 熊谷市教育委員会 1992
 吉野 健『西別府廃寺 (第2次)』 熊谷市教育委員会 1994
 吉野 健・松田 哲『西別府祭祀遺跡』 熊谷市教育委員会 2000
 浅野晴樹『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989
 中村倉司『北島遺跡』Ⅱ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第88集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989
 大谷 徹『北島遺跡』Ⅲ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991
 吉野 健『諏訪木遺跡』 熊谷市遺跡調査会 2001
 『埼玉の館城跡』 埼玉県教育委員会 1968
 『埼玉の中世城館跡』 埼玉県教育委員会 1988
 吉野 健『前中西遺跡』 熊谷市前中西遺跡調査会 1999
 吉田 稔「埼玉県熊谷市北島遺跡の弥生時代中期集落」『考古学ジャーナル』466 2000
 田口一郎「平底短頸瓶覚書―東国の渡来文化研究Ⅰ」『群馬考古学手帳』5 群馬土器観会 1995

写真図版



前中西遺跡全景（第2～5区）



前中西遺跡全景（第4・6～8区）



第1号住居跡、第3号溝跡



第2・21号住居跡



第3・4号住居跡



第5号住居跡



第6号住居跡



第7号住居跡



第8号住居跡



第9号住居跡



第9号住居跡遺物・炭化材出土状況



第9号住居跡土器出土状況



第10・18号住居跡



第10号住居跡高坏出土状況



第10号住居跡剣形滑石製模造品出土状況



第11・17号住居跡



第13号住居跡



第12号住居跡



第12号住居跡土器出土状況



第15号住居跡



第16号住居跡



第19号住居跡、第9号土坑



第20号住居跡



第22号住居跡



第23号住居跡、第18号土坑



第24号住居跡



第1号掘立柱建物跡



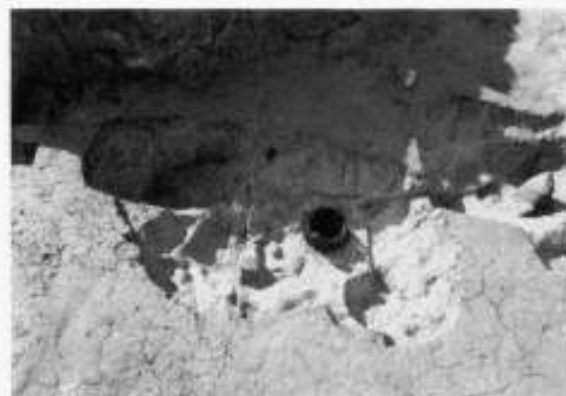
第2・3号掘立柱建物跡、第5号土坑



第4号掘立柱建物跡



第4号掘立柱建物跡ピット1柱痕・栗石出土状況



第7号掘立柱建物跡ピット1柱痕出土状況



第7号掘立柱建物跡ピット2柱痕出土状況



第7号掘立柱建物跡ピット10柱痕出土状況



第5～8号掘立柱建物跡



第7号掘立柱建物跡ピット3、第8号掘立柱建物跡
ピット4柱痕出土状況



第7号掘立柱建物跡ピット4柱痕、第8号掘立柱建物跡
ピット6土器・瓦出土状況



第1号掘立柱列



第2号掘立柱列



第1号方形周溝墓（手前）、第2号方形周溝墓（奥）



第3号方形周溝墓



第1号土器棺墓土器出土状況



第2号土器棺墓土器出土状況



第3号土器棺墓土器（上）出土状况



第3号土器棺墓土器（下）出土状况



第3号土坑土器出土状况



第4号土坑



第6号土坑



第8・12号土坑



第8号土坑土器出土状况



第15号土坑



第16号土坑



第22号土坑



第25号土坑



第32号土坑



第33号土坑



第35号土坑



第36·37号土坑



第36号土坑土器出土状况



第1号井戸跡



第1号溝跡（北）



第1号溝跡（南）



第1号溝跡墨書土器出土状況



第1号溝跡土器出土状況



第4・5号溝跡



第2号溝跡



第6号溝跡



第8・9号溝跡



第10号溝跡



第11号溝跡



第12・13号溝跡



第14号溝跡



第15号溝跡



第17号沟跡



第18号沟跡



第20号沟跡、第31号土坑



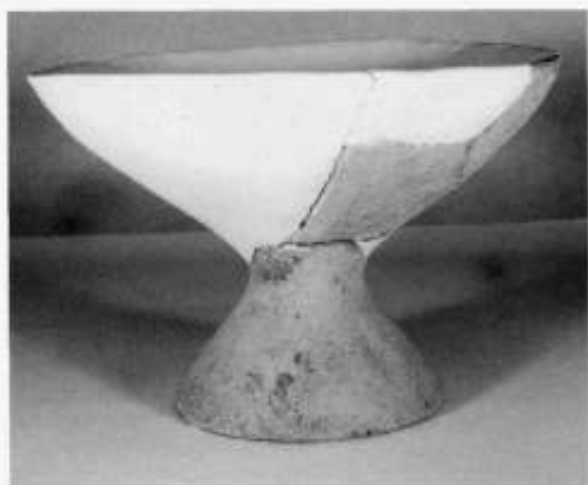
第21・22号沟跡



第28~32号沟跡



第23~26号沟跡



第3号方形周溝墓1 (第64图)



第5号住居跡1 (第13图)



第5号住居跡2 (第13图)



第3号住居跡16 (第11图)



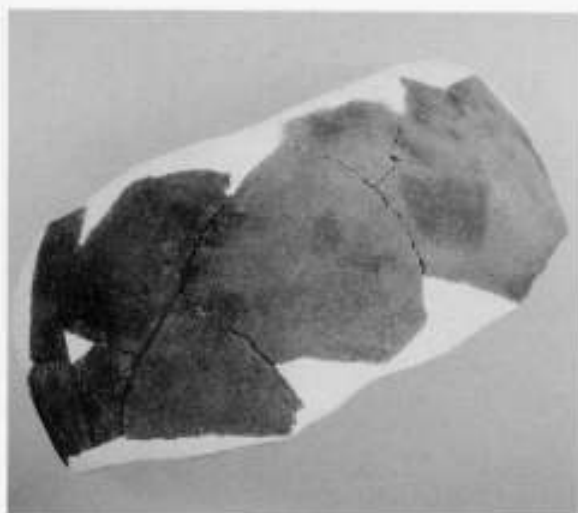
第3号住居跡14 (第11图)



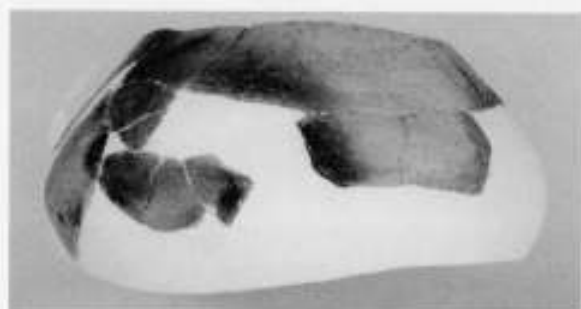
第3号住居跡15 (第11图)



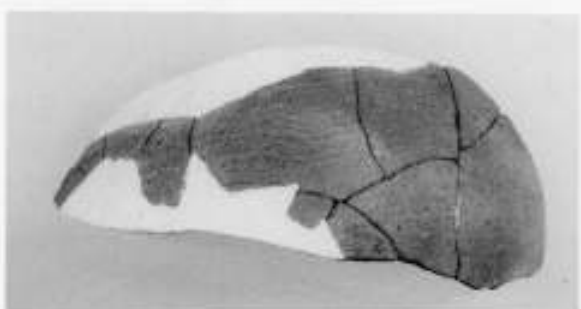
第3号住居跡13 (第11図)



第1号土器棺墓1 (第65図)



第1号土器棺墓2 (第65図)



第2号土器棺墓2 (第66図)



第2号土器棺墓1 (第66図)



第3号土器棺墓2 (第67図)



第1号住居跡5 (第7図)



第3号住居跡17 (第11図)



第5号住居跡6 (第14図)



第8号住居跡3 (第17図)



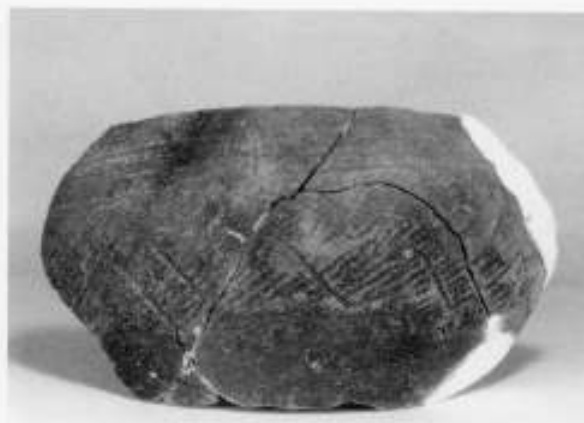
第9号住居跡1 (第22図)



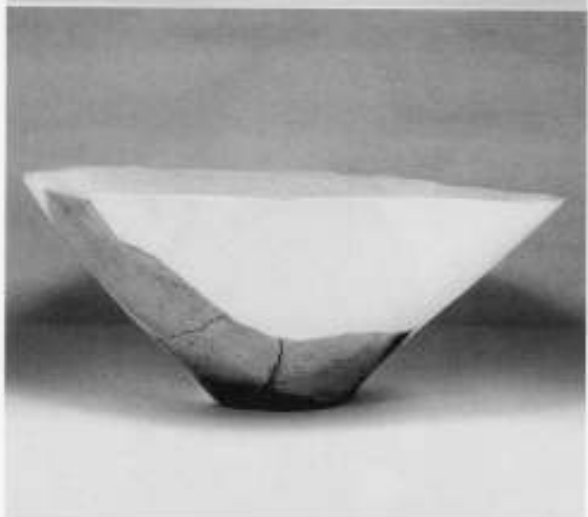
第9号住居跡2 (第22図)



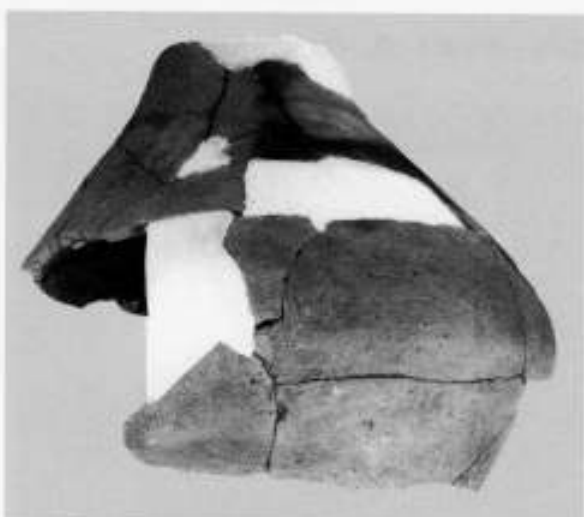
第9号住居跡3 (第22図)



第10号住居跡34 (第25図)



第9号住居跡6 (第22図)



第22号溝跡1 (第87図)



遺構外出土遺物10 (第88図)



第1号土器棺墓3 (第65図)



第2号土器棺墓3 (第66図)



第3号土器棺墓1 (第67図)



第1号住居跡4 (第7図)



第3号住居跡20 (第11図)



第3号住居跡21 (第11図)



第3号住居跡22 (第11図)



第5号住居跡5 (第14図)



第6号住居跡3 (第15図)



第8号住居跡4 (第17図)



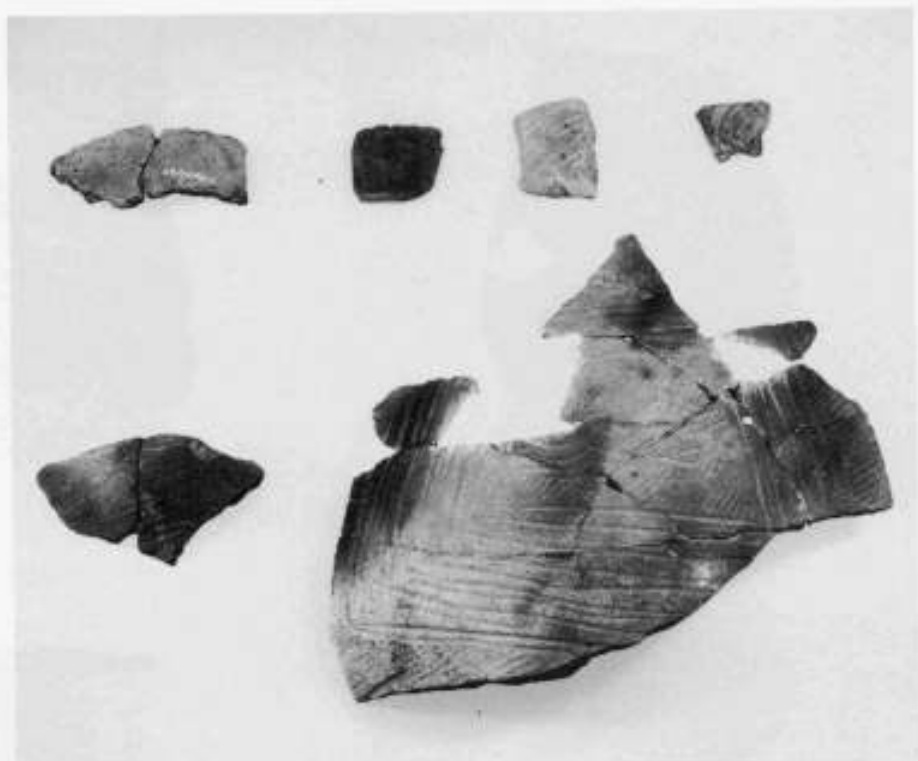
第9号住居跡8 (第22図)



第1号溝跡25 (第82図)



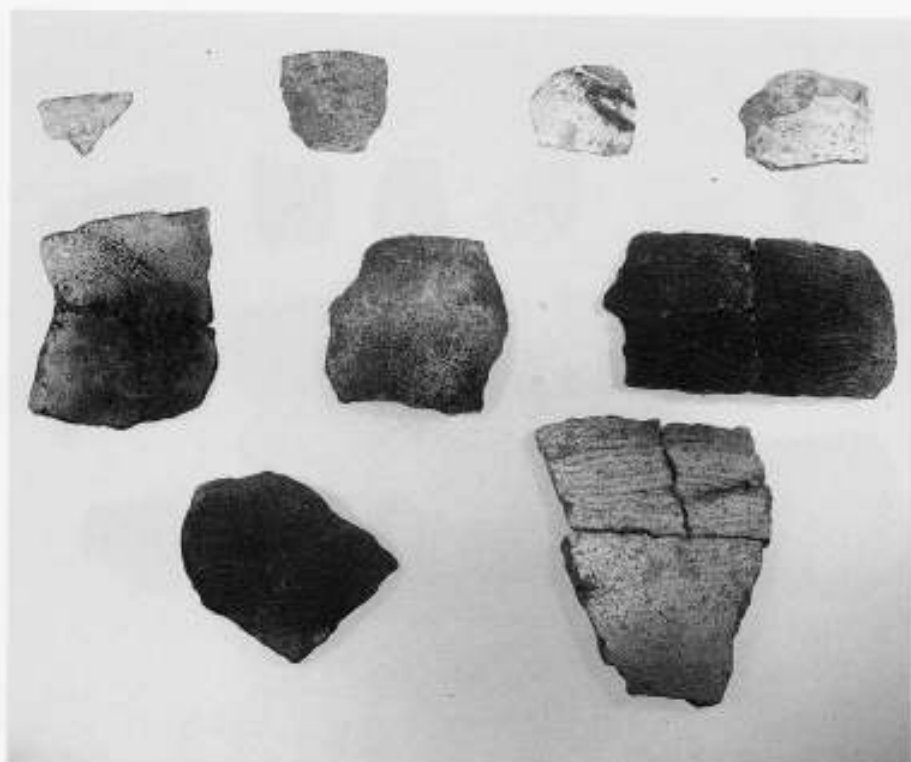
第7号住居跡18 (第16図)



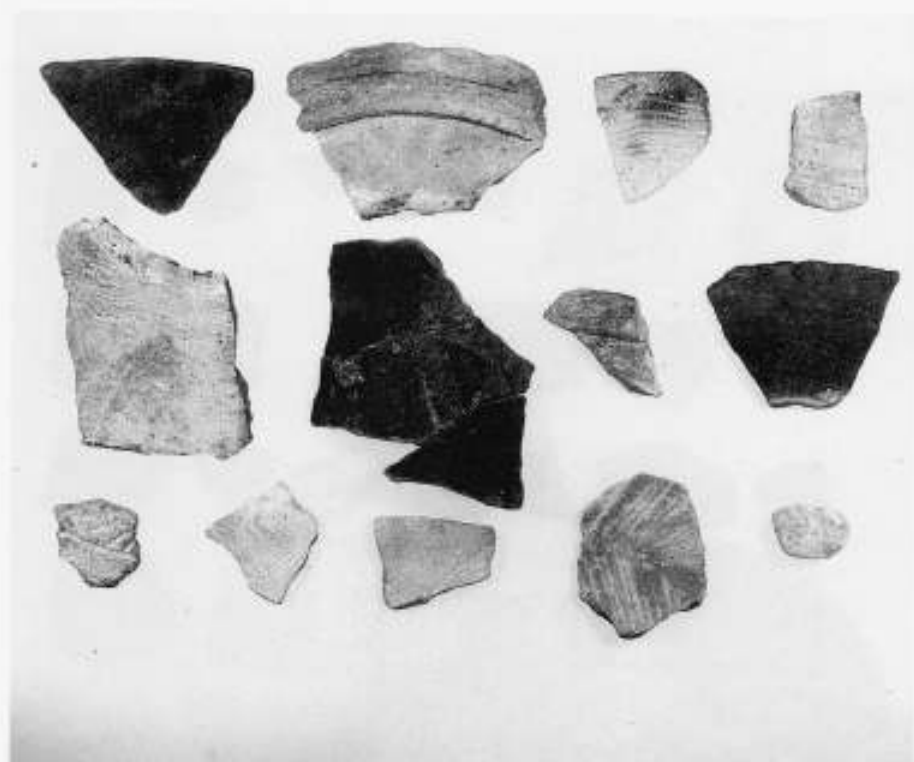
第1号住居跡2・6～10（第7図）



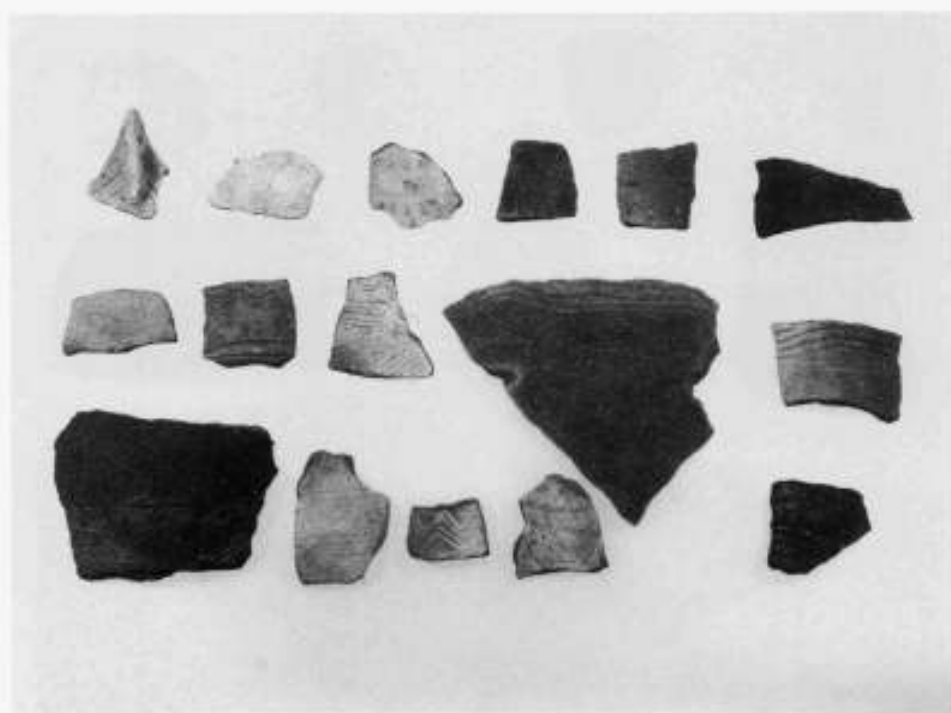
第2号住居跡1～11・13（第9図）



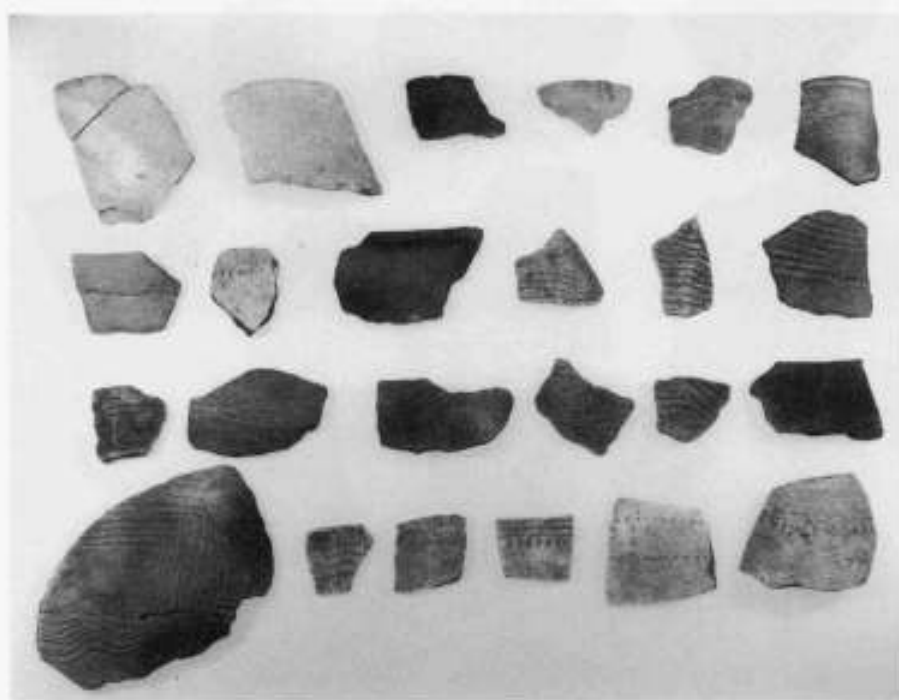
第3号住居跡1～9 (第10図)



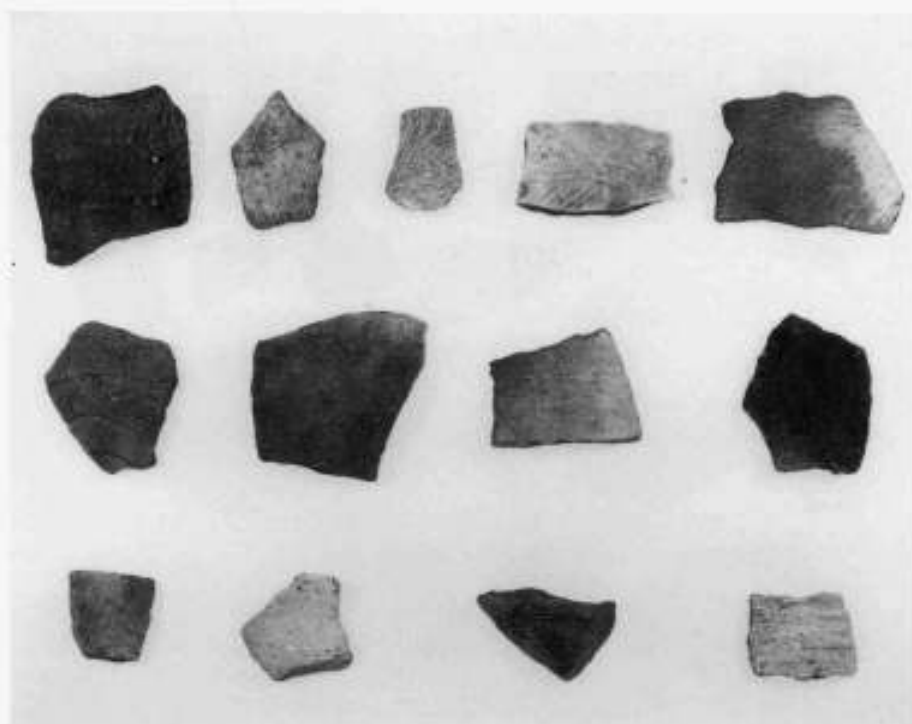
第6号住居跡2・5～15・19 (第15図)



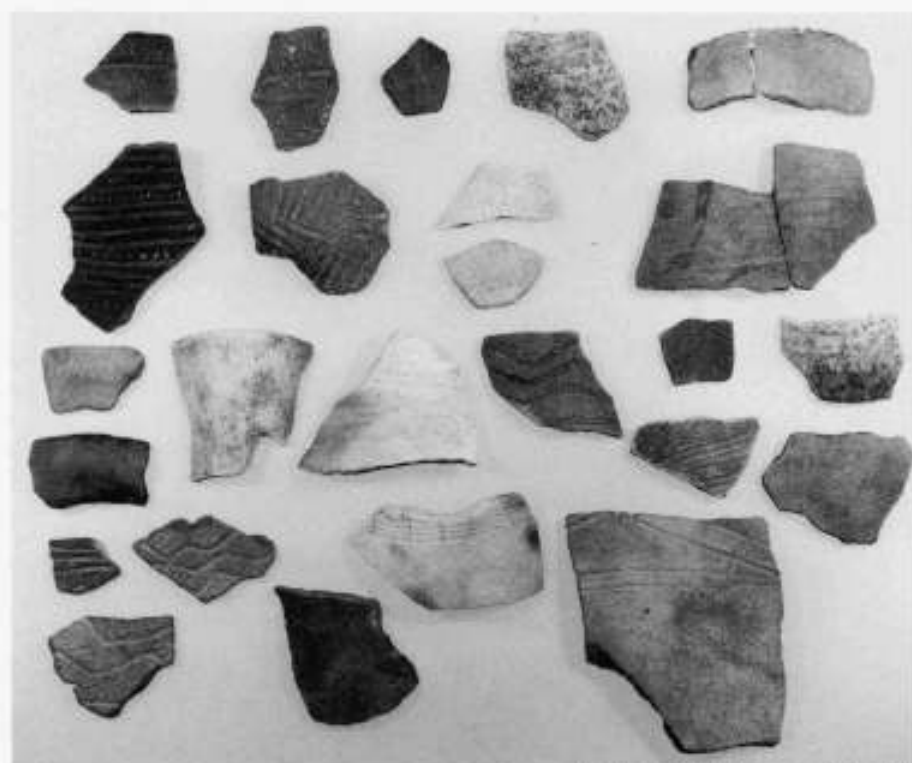
第7号住居跡1～16（第16図）



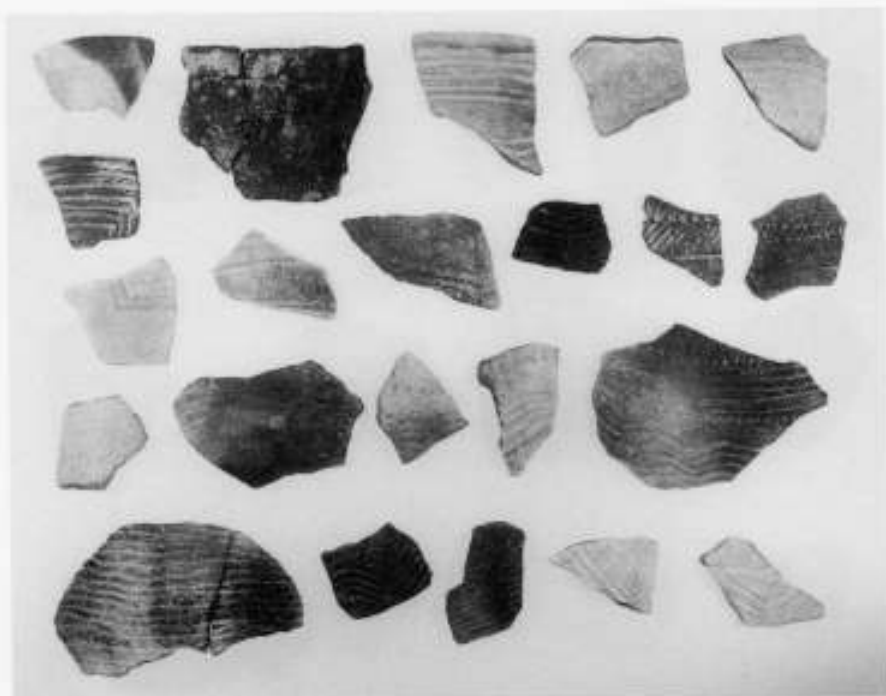
第8号住居跡1・2・5～26（第17・18図）



第8号住居跡27~39 (第18図)



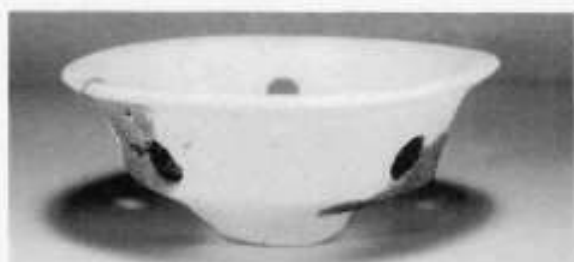
第1号方形周溝墓1~5 (第61図)
第2号方形周溝墓1~6 (第62図)
第3号方形周溝墓2~16 (第64図)



第1号溝跡26～47 (第82図)



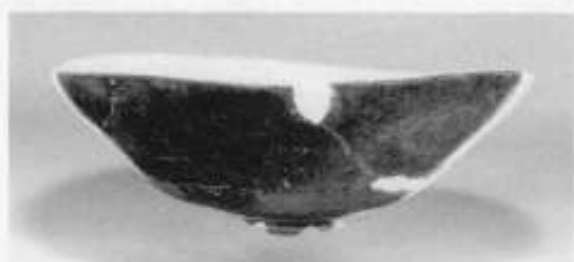
第1号溝跡48～65 (第82・83図)



第10号住居跡2 (第25図)



第10号住居跡3 (第25図)



第10号住居跡6 (第25図)



第10号住居跡8 (第25図)



第10号住居跡9 (第25図)



第10号住居跡13 (第25図)



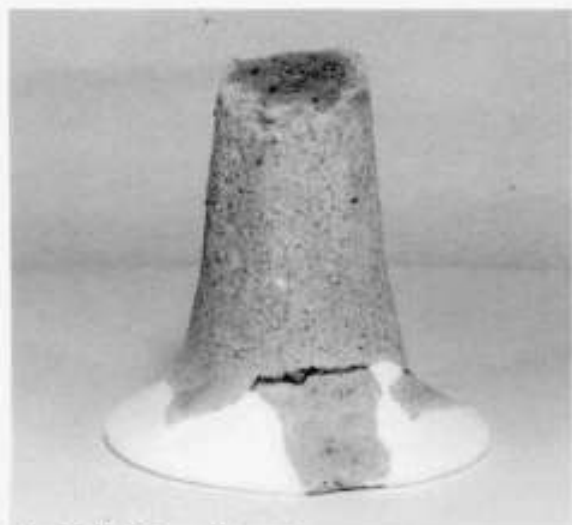
第11号住居跡2 (第27図)



第12号住居跡4 (第29図)



第12号住居跡5 (第29図)



第12号住居跡13 (第29図)



第36号土坑3 (第76図)



第36号土坑2 (第76図)



第12号住居跡2 (第29図)



第12号住居跡1 (第29図)



遺構外出土遺物15 (第88図)



第13号住居跡1 (第32図)



第36号土坑1 (第76図)



第1号溝跡2 (第81図)



第12号住居跡20 (第29図)



第12号住居跡21 (第29図)



第8号土坑1 (第75図)



第16号土坑1 (第76図)



第15号溝跡5 (第87図)



遺構外出土遺物19 (第88図)



遺構外出土遺物20 (第88図)



第8号土坑3 (第75図)



第15号溝跡4 (第87図)



第8号土坑7 (第75図)



第3号土坑2 (第72图)



第17号住居跡1 (第37图)



第17号住居跡4 (第37图)



第19号住居跡2 (第40图)



第19号住居跡3 (第40图)



第20号住居跡4 (第42图)



第18号住居跡1 (第39图)



第18号住居跡4 (第39图)



第18号住居跡6 (第39图)



第18号住居跡7 (第39图)



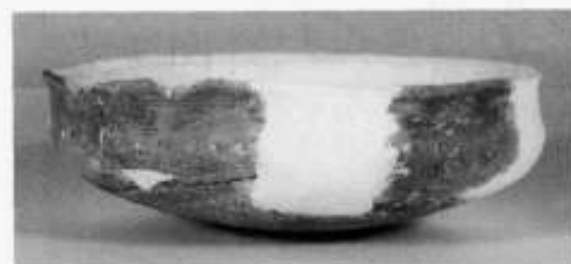
第19号住居跡5 (第40図)



第1号溝跡10 (第81図)



遺構外出土遺物24 (第88図)



第18号住居跡9 (第39図)



第23号住居跡3 (第46図)



第23号住居跡4 (第46図)



第3号土坑3 (第72図)



第3号土坑5 (第72図)



第3号土坑6 (第72図)



第3号土坑11 (第72図)



第1号溝跡11 (第81図)



遺構外出土遺物25 (第88図)



第21号住居跡1 (第44図)



第3号土坑18 (第72図)



第3号土坑19 (第72図)



第3号土坑21 (第72図)



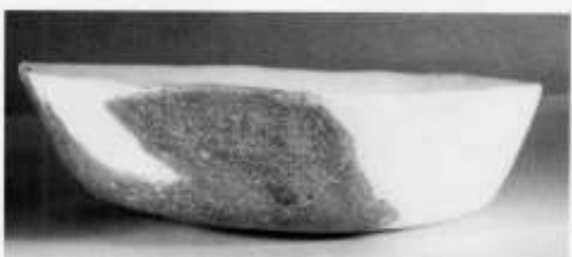
第19号住居跡6 (第40図)



第21号住居跡10 (第44図)



第3号土坑27 (第72図)



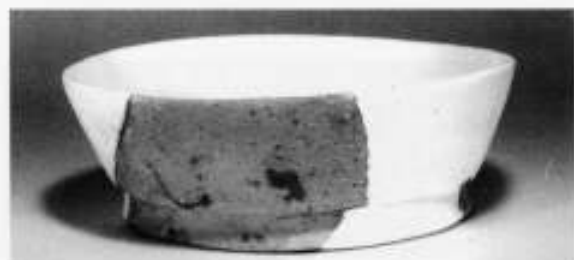
第3号土坑28 (第72図)



第3号土坑29 (第72図)



第3号土坑31 (第72図)



第3号土坑24 (第72図)



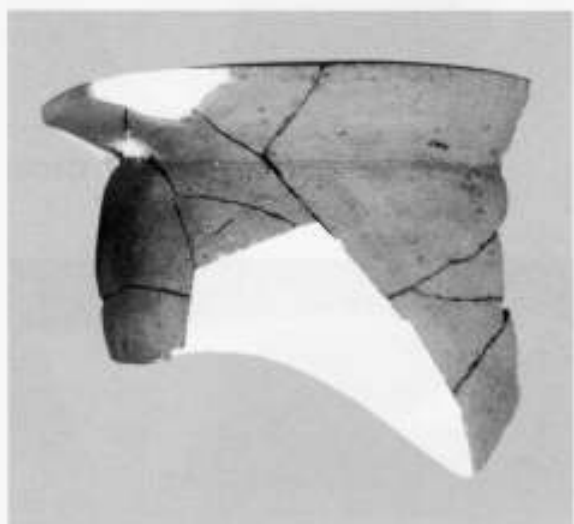
遺構外出土遺物27 (第88図)



第3号土坑35 (第72図)



第19号住居跡7 (第40図)



第14号住居跡4 (第32図)



第14号住居跡5 (第32図)



第20号住居跡16 (第42図)



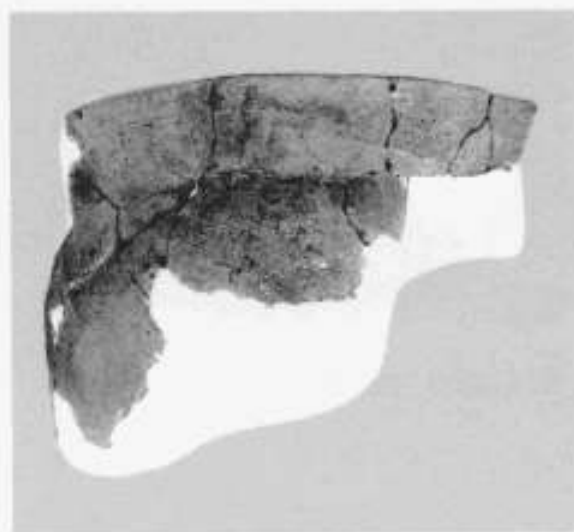
第21号住居跡13 (第44図)



第22号住居跡10 (第45図)



第24号住居跡5 (第47図)



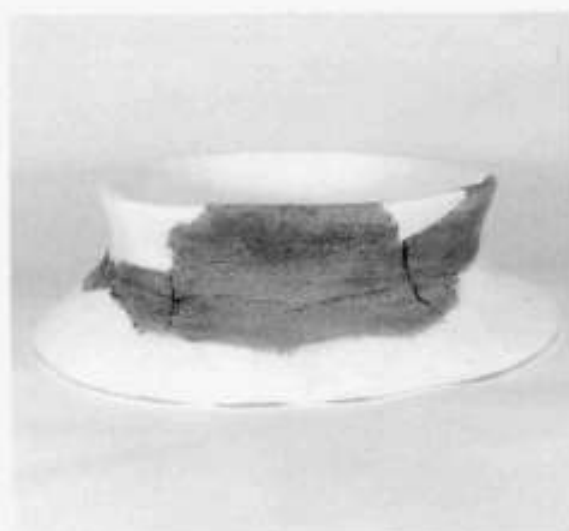
第15号溝跡1 (第87図)



遺構外出土遺物32 (第89図)



第3号土坑51 (第73図)



第3号土坑36 (第72図)



第3号土坑34 (第72図)



遺構外出土遺物29 (第89図)



遺構外出土遺物30 (第89図)



第1号溝跡15 (第81図)



第3号土坑75 (第74图)



第17号土坑15 (第76图)



第8号掘立柱建物跡3 (第58图)



第8号掘立柱建物跡4 (第58图)



第8号掘立柱建物跡5 (第58图)



第17号土坑3 (第76图)



第17号土坑5 (第76图)



遺構外出土遺物37 (第89图)



第1号溝跡16 (第81図)



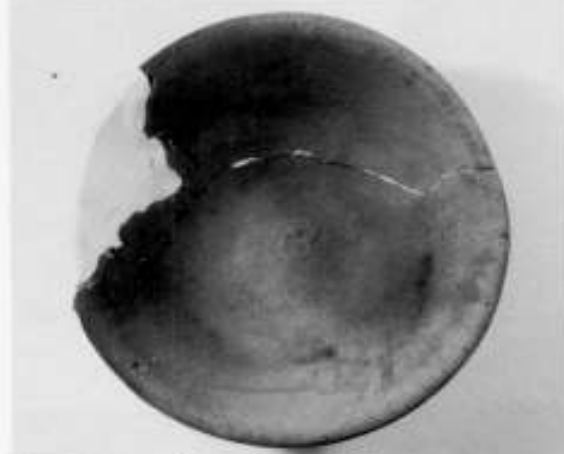
第1号溝跡18 (第81図)



第1号溝跡19 (第81図)



第1号溝跡17 (第81図)



第1号溝跡20 (第81図)



遺構外出土遺物38 (第89図)



遺構外出土遺物39 (第89図)



遺構外出土遺物42 (第89図)



遺構外出土遺物56 (第90図)



第18号住居跡18 (第39図)



第21号住居跡23 (第44图)



第7号掘立柱建物跡7 (第58图)



第1号溝跡21 (第81图)



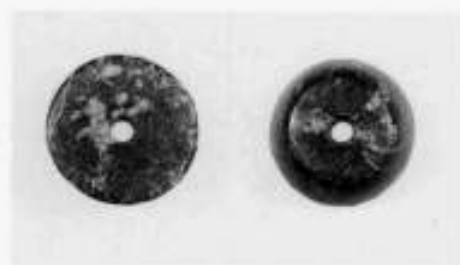
第13号溝跡1 (第87图)



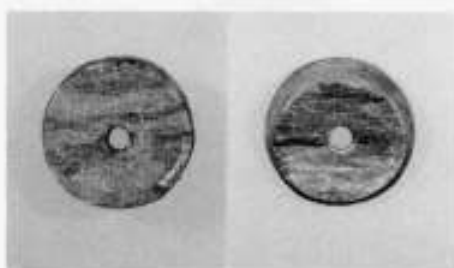
第3号住居跡25 (第11图)



第9号住居跡10 (第22图)



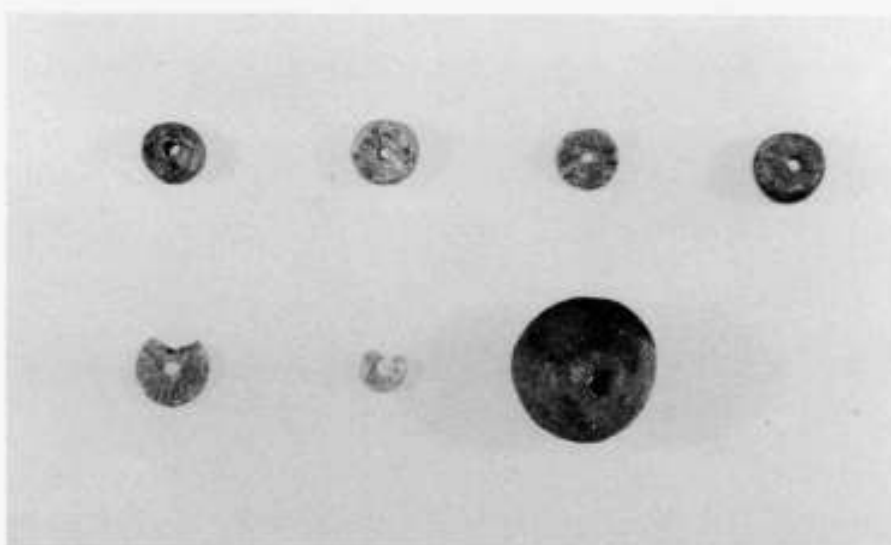
第23号住居跡9 (第46图)



第1号溝跡24 (第81图)



第13号住居跡9 (第31图)



第17号住居跡22・23 (第37图)
第18号住居跡19~22 (第39图)
第21号住居跡24 (第44图)



第10号住居跡45 (第26图)



第12号住居跡35 (第30图)



第4号土坑2 (第75図)



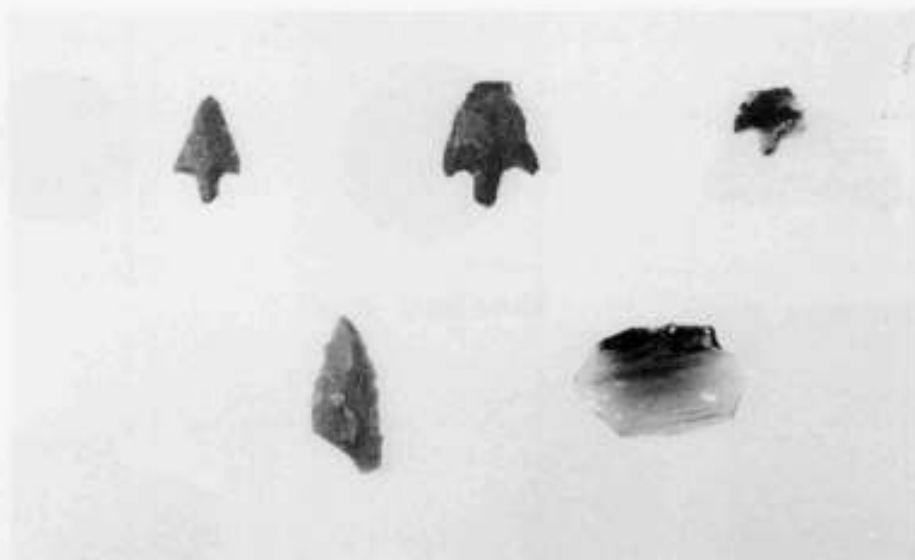
第11号溝跡1 (第87図)



遺構外出土遺物58 (第90図)



第10号住居跡44 (第26図)



遺構外出土遺物70～74 (第91図)



第3号住居跡23 (第11図)、第7号住居跡19 (第16図)



遺構外出土遺物61～69 (第90・91図)



第5号住居跡7～10 (第14図)



第3号住居跡24 (第11図)



第1号住居跡11 (第7図)



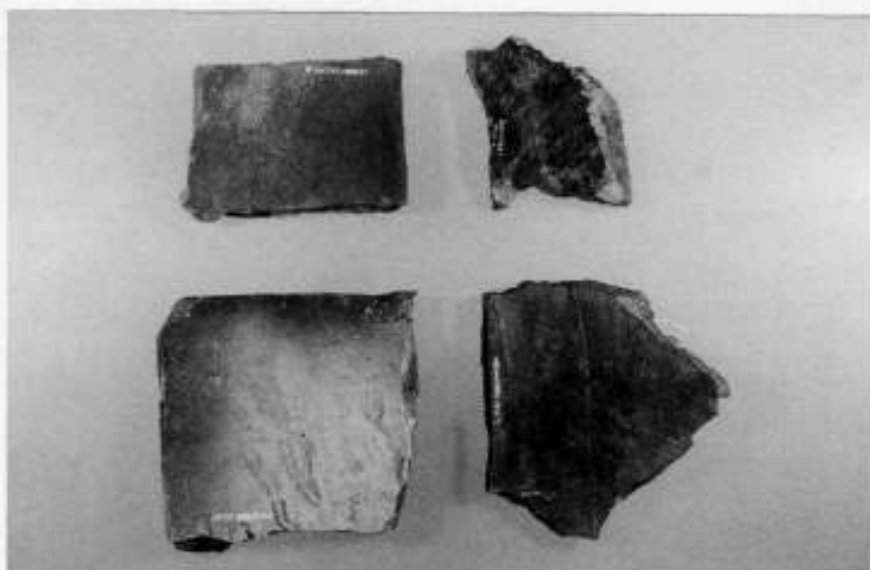
遺構外出土遺物60 (第90図)



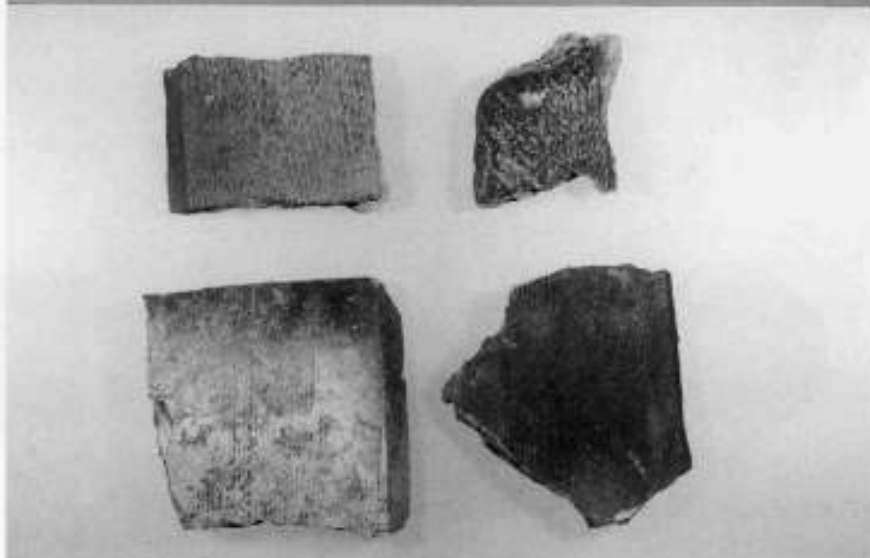
遺構外出土遺物57 (第90図)



第14号土坑1凹面(上)・凸面(下)(第75図)



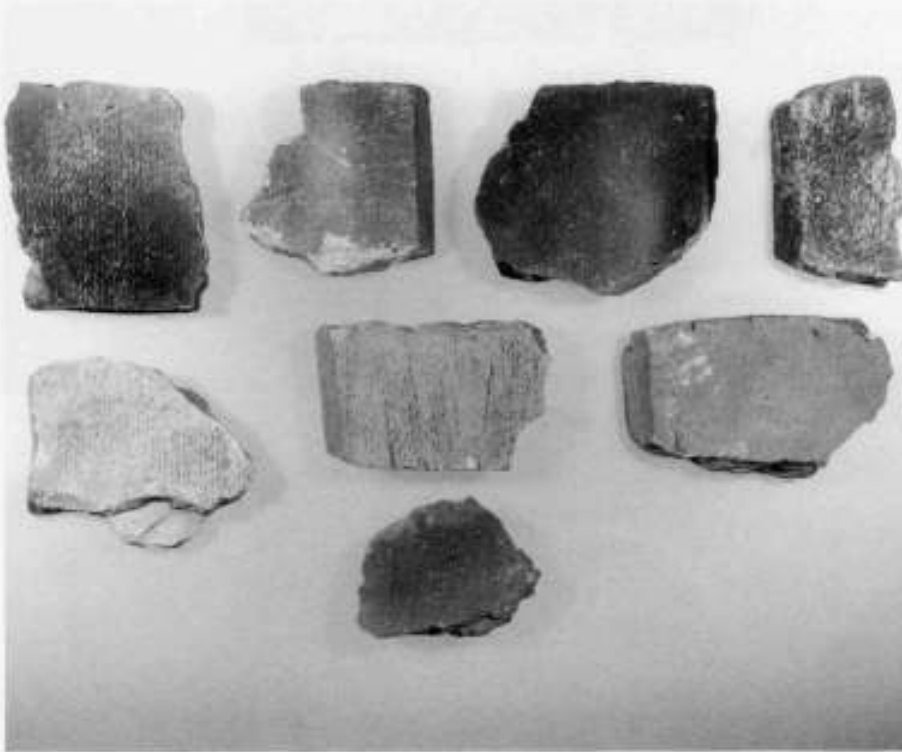
第7号掘立柱建物跡8・9凹面(第58図)
第8号掘立柱建物跡11・12凹面(第58図)



第7号掘立柱建物跡8・9凸面(第58図)
第8号掘立柱建物跡11・12凸面(第58図)



遺構外出土遺物凹面48 (第89図) ・49~55 (第90図)



遺構外出土遺物凸面48 (第89図) ・49~55 (第90図)



遺構外出土遺物45～47凹面（第89図）



遺構外出土遺物45～47凸面（第89図）



遺構外出土遺物59（第90図）



第1号掘立柱建物跡ビット1柱痕



第7号掘立柱建物跡ビット4柱痕



第7号掘立柱建物跡ビット5柱痕



第7号掘立柱建物跡ビット10柱痕



第8号掘立柱建物跡ビット1柱痕



第8号掘立柱建物跡ビット4柱痕

報告書抄録

ふりがな		まえなかにしいせき に						
書名		前中西遺跡Ⅱ						
副書名		平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書						
編著者名		吉野 健						
編集機関		埼玉県熊谷市教育委員会						
所在地		〒360-8601 埼玉県熊谷市宮町二丁目47番地1 TEL 048-524-1111						
発行年月日		西暦2002(平成14)年2月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まえなかにしいせき 前中西遺跡	さいたまけんくまがやしなかにし 埼玉県熊谷市中西 よんちようめ 四丁目2515番地1 他	11202	107	36°8'41"	139°24'09"	19960917 ~19970331 19971104 ~19980331	4,441.5	土地区画 整理事業 街路工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
前中西遺跡	集落跡 墓地跡	弥生時代	住居跡9 方形周溝墓3 土器棺墓3 土坑6		土器 石器 管玉 土偶 土製品		方形周溝墓と土 器棺墓の2種類 の墓制が検出さ れた。	
		古墳時代	住居跡15 掘立柱建物跡1 土坑18 溝跡14 ピット5		土師器 須恵器 ミニチュア土器 石製模造品 鉄製品 玉類 砥石 紡錘車		大型掘立柱建物 跡存在していた。	
		奈良時代	掘立柱建物跡7		土師器 須恵器 瓦			
		平安時代	溝跡2 土坑1		土師器 須恵器 灰釉陶器 瓦 土製品 鉄製品 紡錘車			
		中世	井戸跡1		陶器			
		近世	土坑1		陶器			
		時期不明	掘立柱列2 土坑11 溝跡16 ピット50					

平成 13 年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

前 中 西 遺 跡 II

平成 14 年 2 月 28 日発行

発 行／埼玉県熊谷市教育委員会

印 刷／関 印 刷 株 式 会 社



さくらのまち“熊谷”